

ヴァルキリープロファ
イル 神に挑む者

ばんどう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元銀河連邦軍人のオリ主が、地上界ミッドガルド（VP1）で神界に召し上げられるはずの勇者たちを助け、神々の反感を買ったりラグナロクに参戦していく話。

旅のお伴はロジャーとルシオ（SO3）。chapter2よりシルメリア、リセリア加入。

※独自設定・独自解釈あり

（例：VPルシオの性格改変。VP咎ウィルフレドはCエンド仕様。VP2エインフェリア・アナトミアキャラはおまけ程度でほぼ独自設定など）

旧題：神に挑む者、天を穿て

※VPIのキャラによっては原作通りエインフェリア化します。エインフェリア化するか生存するか、下記リンクに掲載中。必要な方はご覧ください。

<https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kid=242913&uid=59583>

目次

chapter 1

1. コリアンドル村編 冥界からの復

讐者

1

2. コリアンドル村編(完) 招聘の鐘

24

3. アルトリア編 蒼穹の戦乙女

50

4. アルトリア編 孤高の傭兵

86

5. アルトリア編(完) 運命を変える

者

135

6. ラッセン編 貴族と奴隷

180

7. ラッセン編(完) 女神の忠告

201

8. カミール村編(完) 神に挑む者

231

chapter 2

9. ブラムス城編 浅葱の戦乙女

284

10. アークダイン編 ひとと神の葛

藤

305

11. アークダイン編(完) 第二級神

フレイ

334

12. 神界転送 ラウリイ①

369

chapter 1

1. コリアンドル村編 冥界からの復讐者

——消える。

なにもかも、はかなく揺らめき、空間に溶け消えていく。

「フェイト……、本当は……こんな姿になってもまだ、お前やクリフに、一緒に帰ろうと言われて嬉しかったんだ……ありがとう」

少し前まで銀河連邦軍人だった『彼』は、久しぶりに『ひと』の言葉を発した。『彼』の目の前にいる青髪の青年と同じ、十九歳。金髪碧眼。四百年前の英雄SO2の主人公たちの血脈に連なる者として周囲にもてはやされ、幼いころから武術・剣術・紋章術まじゅつを極める義務を負ってきた『彼』は心底ほっとした顔だった。

神が創った無窮の暗黒空間のなか、足許から消えいく自分をかえりみる暇はない。視線はただ前に。こちらを見て凍り付いている青髪の青年フエイトにおのれの意志を託す。それだけがかすかに残った自我の、最期の望みだ。

「……………おまえなら……………みんな……………を、……………まも……………」

話の途中から欠けていった唇でどうにか笑った顔を、目の前の青年はどう見たのか。

創造主に創り出された隔離空間のなかで、アレンは肉体もろとも消滅した。

エクスキューション
神の代行者。

創造主たちはバグフィックスプログラムと呼ぶ、ゲームデータ世界を管理・修正する歯車の一端が、アレンの正体だSO3では四次元（fourth dimension、略してFD）の人間が主人公たちの住む世界をシミュレーションゲームとして製作したことが発覚する。神、創造主とは四次元世界にあるゲーム会社のオーナーのこと。毎度おなじみ裏ダンジョンではその四次元世界すらも創られたものというマトリョーシカ方式。進み過ぎた文明プログラムを破壊し、再構成を促すプログラム。かつて銀河連邦軍人としてひとびとを護ってきたアレンという『個』はまたたく間にすりつぶされ、存在すらも許されなかった。

そんな無力な『個』が最期に意志を託した青年を中心に、勇者たちの働きによって世界は救われた。銀河の大半の勢力が失われたこの大惨事は、のちに『FD事変』と呼ばれ、ひとびとに恐怖の記憶として刻まれている。

そのFD事変から二年余りが過ぎたころ。

「やっぱり間違いないええ！ 指輪が光ってるじゃんよアレン兄ちゃん！」

遺跡内部の薄暗く狭い祭壇の間で、黒髪の少年・ロジャーが高らかに叫んだ。今年で

十四歳になる彼の背丈は昔と変わらず、ヒューマンの腰の高さもない。メノディクス族というタヌキを祖にもつ亜人の少年は、あどけない丸顔を好奇の色で輝かせて、ぴよんぴよんと跳ね回りながらアレンを見上げてきた。

唸るように低く息を吐くアレンもまた、金髪の奥にある切れ長の目を細めて、自分の右人差し指にはめた指輪を見つめている。

「エレナ女史からいただいたこの『星界の指輪』、FD世界のエネルギーに反応するとは聞いているがまさかまた光るとはな」

消滅したはずの自分がこうして生きていることを含めて、いま世界には不可思議なことが起きている。

アレンの瞳と同じ色の蒼い宝石は、元創造主側の世界の住人のエレナから贈られたものだ。解析不能のオーパーツをアレンたちが持つているスキャナーより高い次元で見抜く力がある。詳しい使い方はアレンもまだ測りあぐねているが、これまで創造主たちと戦ったあとの一年間だけ、この宝石は明滅を繰り返してきた。

指輪の製作者、エレナは語る。『この世界は創造主の手を離れ、新たな理を得たワ次元そのものに干渉できる『特殊紋章（VPという失伝魔法っぽいもの）』を遺伝子操作により埋め込まれたSO3主人公フエイト、ひとりめのヒロイン・マリア、ふたりめのヒロイン・ソフィアの力が合わさって四次元世界から完全に切り離された独立した新世界が

創造された。だからいま、その反動で世界は元の状態に戻ろうとする力が働いている。次元は乱れやすく、本来ならば有り得ない現象が起きてくるはずよ、世界が新しい状態に慣れるまでね』

彼女の説明を裏付けるようにFD事変後の最初の一年は目まぐるしい事件にいくつも見舞われた。だが最近はずかなものだったのだ。

アレンが奇妙な夢を見てこのモーゼル古代遺跡を訪れるまでの、いままでは。

「まずいぞアレン兄ちゃん！　こんなことがフェイト兄ちゃんに知れたら『まだそんな指輪持ってたのか!?　絶対いわくつきだから早く捨てるってあんなに言ったら!』ってどやすに決まってるんだ！　さすがのオイラもあのマシンガントークにはついてけねえぞ?。」

アレンがかすかに肩を揺らして笑う。視線をロジャーから祭壇奥の壁に移すと、その表情に覇気が宿った。本来は煉瓦造りの古めかしい石壁が、いまは水面を張ったように波打ち、光る渦へと変わっているのだ。

「懐かしいな……。モーゼル古代遺跡から創造主ルンファアのいる隔離空間に向かう次元の扉。これを俺が、まさか『ひと』としてくぐれる時がくるとは」

「ちよっ!?　ちよ、ちよちよちよ!　待てよアレン兄ちゃん!　こいつあみんなに言うべきじゃんよっ?　また変な空間とこに連れてかれてモンスターばっかのダンジョンとか

化け物サンタが出てくる洞窟とか女の子が世界をぶっ壊しにくる悪夢が起きるかもしれないねえぜ！」

「その小さい女の子が世界を破壊する悪夢については、みながいたところでノックス団長と一緒に戦ってくれるくらいだろう。ほかはひとを盾に、我先に逃げんとする輩だからな……。特にフェイト、やつは許さん」

「……………うふっ♪」

急に黙り込んだロジャーが、頬に手をそえて、くねくねと体を揺らしている。

アレンが話の終わりを察してロジャーをふり返った。

「心配ない。加勢が必要なら戻ってくる。どのみち偵察は必要だ」

「アレン兄ちゃん……」

「確証はないが、この扉の向こう側から『助けて』と声が聞こえるんだ。いまにも消えそうな、小さな声だな。俺はもう連邦軍人じゃないが、だれかが困っているなら助けたい。」

——もし、二日経つても戻らなければみんなにも伝えてくれ。頼む、ロジャー」

アレンが言い終えるなり軍靴を鳴らして光の壁のなかへと消えていく。ロジャーは見送ったあとで、あわわわわわ、と叫びながら両手をふりまわし一路、故郷サーフェリオへと駆けていった。

夜の森は、少女たちが踏みしめる草の音とうごめく生き物たちの気配に満ちている。「わたし、やっぱり家に帰りたい」

蒼銀の髪を持つ少女、プラチナは吐く息が白くこもるのを無垢に見つめた。寒村で生まれ育ち、時に外で眠ることもある彼女にとつて、ひとびとの畏怖いぶを集める夜の森は静かで物悲しい場所だ。いまは分厚い雪に覆われることもなく、飢えさえ凌げば凍死のおそれはない。

「だめだー」

普段めつたに怒らない幼馴染のルシオが、さつとふり返ってくる。彼の茶色がかった金髪が勢いで跳ねた。

プラチナは珍しい蒼銀色の瞳をばちばちとまたたかせ、あどけない丸い顔をかすかにかしげた。

「どうして？　まだお母様に聞いたわけじゃないもの。身売りのことも、ルシオの勘違いかもしれないでしょ？　きつといまごろ心配してるわ。……………ルシオ？」

いつも目を合わせてくるルシオが、うつむいたまま動かない。金色のつむじを見つめていたプラチナがルシオの顔を覗き込むと、ルシオは短い息を吐いたあと言った。

「黒い服を着た、うさんくさい奴らを見ただろ？　俺の家にも来たことがあるんだ。次

の日、妹がいなくなつてた。父ちゃんも母ちゃんも、なにも教えてくれない」

「えっ？ 私に病気で不幸があつたつて聞いたわ」

「消えちまう病気なんてあるのか？ 俺の家には医者に診せる金なんてないぞ！ 俺

は、お前と離れたくないんだ……！」

言葉の途中でルシオの声は震えていた。青瞳から涙がこぼれ、彼は服の袖で乱暴に拭う。声をかけようとしたプラチナの表情もくもる。目の前の少年は意地つ張りな反面、嘘をつかない。

「ルシオ……。どこか遠くに、連れて行つてくれる？ ルシオが一緒ならどこだっていいから」

プラチナが微笑むと、うつむいていたルシオが顔を上げた。絶望と哀愁の混じつた青瞳に光がともつていく。見つめてくる少年に、プラチナがうなずき返す。頬をほころばせるルシオがそれまで着ていた薄汚れた上着ベストを、プラチナの肩にかけてきた。プラチナは小さな白い手でルシオの手を握つた。

——二人、寄り添いながら森の奥へ奥へとずいぶん歩いたところ。

月の光が完全に遮られた木々の合間から、霧が出てきた。

「……はどろろ……？」

「わからないわ」

左右は高い木々の陰で吸い込まれるような闇と化し、すこし先の景色すら霧と風に阻まれて見通すことは出来ない。

一步先を行くルシオの掌が、一層強くプラチナの指を握りしめてきた。遠く聞こえていた獣の声はいつの間にか消え、ただ低くうねる風の音が辺りを震わせる。

——う、ううううう……っ！

ふと、ルシオが足を止めた。ほのかな生臭さが鼻先をかすめた。ルシオの表情が強張っている。どこか一点を見つめる彼の視線の先を追うと、霧の向こうにいくつもの人影が見えた。

「まずいつー！」

手を引かれて、プラチナも茂みのなかに身をひそめる。ルシオは人影を眺めたまま、もつとかがめ、とプラチナの頭に押さえてきた。

不思議な夜だった。夏とは言え、冷え込む夜に、生温かい風が吹きつけている。風のうねりはさらに強さを増し、肌にはりつく空気のかなかに錆鉄と腐肉のすえた臭いが徐々に立ち込めてきた。

「なんだ……。なんなんだよ、あれはっ！」

ルシオが息を呑む。生温かい風がさらに強くなっている。ルシオの視線は奥の人垣に貼りついたまま。引きつった彼の横顔に鼓動が早まるのを感じながらプラチナも

また森の異変から人垣へと意識を向けた。

——ううううううっ！

ひっ、とプラチナの喉が鳴る。風に思われた唸り声は、人垣が発していたのだ。

それもよく見れば、生きたひではない。

男たちは青白く伸びた両腕をだらりと地面に垂らし、一步踏むたびにいまにも倒れそうなほど体を揺らして、ゆっくりと向かってくる。ボロボロの青いズボンはどころどころに血がにじみ、歩くたびすわらぬ首が揺れ上向く彼らの顔には眼球がなかった。落ち窪んだ真つ黒な眼窩に赤い光の球が浮かんでいるのだ。

「っ、あ、ああ……っ！」

この群れ——ざつと三十はある。プラチナはあまりの衝撃に、ふつと身体が浮き上がるような感覚に襲われた。視界が急に暗くなる。

少女はドツと物音を立てて、地面に倒れていた。

「プラチナっ!？」

ルシオが慌ててプラチナを揺さぶる。反応がない。だがか細く、その胸は上下している。

「ちくしよお……っ！」

ルシオが唇を噛み、化け物の群れを睨む。意識を失ったプラチナを担いで逃げるのは

あまりに非現実的な選択だ。霧が濃く、森の地形もよくわからない。

化け物たちはもうすぐそこまできている。

気付かれ、襲われてはひとたまりもない。

（このまま隠れていればやり過ぎせるのか？ くそつ、一体どうすりゃいいんだ、くそつ！ くそつ！）

焦りが思考をさまざまな方向に散らしている。プラチナを抱きしめる。絶対に、この娘にだけは触れさせると、涙が溢れてくるのを感じながら強く思った。

「ついに見つけたぞ……」

霧の向こうから男の声がした。

化け物の群れの奥からだ。よく通る、若い男の声。

ルシオが目凝らすと、霧の奥から人影がゆつくりと浮かび上がってきた。不思議なことに、黒い泥からひとが形作られるのを観た気がした。

銀髪の男だった。声の印象どおり若い。ぼさぼさの銀髪は腰まで垂れ、肩で二つに結っている。長い前髪から覗く瞳は蒼い。象牙色の肌は藍色の安っぽい鎧に覆われ、両腕に銀の籠手をはめている。中肉中背。背には剣が二振り。差しかたも特徴的だ。一振りは肩から対角状に、もう一振りは抜き放ちやすいよう腰の位置で横たえて差している。

藍の鎧から、赤のマントが風にたなびく。

男の後ろには、付き従うように若い女がついていた。

男は、はつきりとルシオたちのいる方を見て、言った。

「お前の言ったとおりだな、エーリス」

「お褒めにあずかり光栄です、——ウイルフレド様」

エーリスと呼ばれた女は、ぷつくりとした唇を左右にひろげて、しとやかに言った。紫がかつた黒髪を腰下まで伸ばした、物静かな雰囲気の女だ。彼女の足首に届く濃紺のワンピースのスカート部には青い花卉と金の蔓が大ぶりに描かれている。

ルシオが普段目にする機会のない、上流階級の人間の装いだつた。

ウイルフレドと呼ばれた銀髪の男が、こちらを睨み、吐き捨てる。

「戦乙女……まさか人間になつているとはな。汚らわしいものだ。死神が、人間の姿を気取るか……っ！」

「えっ？」

強い嫌悪のこもつた罵声は、ルシオの腕で気を失っているプラチナに向けられている。

ウイルフレドが腰の剣を抜く。霧のなかで、剣尖が鈍く光つた。

「……八つ裂きにしてやる。亡者どもよ！ その爪で、小娘の躰を引き裂いてやれ！」

——ウ、オオオオオオオ！——

幾多もの歓声が、地面を揺らす。骨格を感じさせない男たちは、また体を大きく揺らしながら近づいてくる。

ルシオの周りは、気付けば化け物たちに囲まれていた。

「しまった！」

逃げ場がない。あつたとしても、プラチナを抱えて逃げ切れるかは微妙だ。獣臭い息が鼻をつく。震える体を叱咤し、ともかく走り出す方角を選んだ。

「虫けらが」

冷たい声が背にかかる。ルシオは目を見開いた。金縛りにあつて動けない。心臓の音がうるさく耳をつんざいてくる。

（プラチナ、プラチナ、プラチナ、プラチナ……っ！）

腕のなかの少女の重みだけが、ルシオの正気をつなぎとめている。

「フツツ、ウィルフレド様。……どうやら、そう簡単には参りません」

「フン、あんな小虫などに、俺の邪魔ができると言うのか？」

「いいえ。ただ——そちらの方は、私たちを止めるおつもりでしょうか？」

エーリスが問いかけてくる。ルシオはなんのことかわからず、視線をさまよわせた。そのとき、ルシオの目の前に立ちはだかった化け物の一体に銀色の一線が走るや、その

躰からだがゆっくりと左右に分かれて倒れていった。剣閃。ルシオが理解するまえに、かしん、と小さな金属音が鳴る。

異臭立ち込めるこの場を戒めるような、澄んだ鐸鳴りの音だった。

「やはり扉ゲートをぬけて正解だったな」

ルシオが顔を上げると、金髪の青年が目のまえにいた。手に、身の丈よりも長い刀をたずさえている。

金髪の青年・アレンはルシオと目が合うと、蒼瞳をおだやかに細めて微笑んだ。

「もう心配ない。きみたちを助けにきた」

ルシオはきよとんとまたいた。——助かった。金髪の青年の顔を見て無条件に直感した。

「た、……」

——大人は信用しない。両親すら妹を売った。無事生きたいと望むなら、大人など信じていいわけがない。貧村が育んだルシオの生存術だ。

それなのに。

ルシオは舌がもつれるもどかしさをこらえながら、叫んでいた。

「助けてくれっ！ 頼む！」

「任せておけ」

アレンが即答しルシオとプラチナを背に、立つ。町の兵士たちがみせる仰々しきはない。音もなく傍にきていた彼は、とくに構えらしい構えも取らずウイルフレドを睨んだ。

ウイルフレドがうろんげに鼻筋にしわを寄せた。

「そういうことか。……フン。人間ごときが、我ら不死者の邪魔ができるとでも思っているのか？」

聞き慣れぬ単語に、アレンが眉をひそめる。

「フシシヤ？」

「やれ」

返ってきたのは、ウイルフレドの冷たい号令だ。

周りの亡者たちが一斉に吠え、白く伸びた腕をぐにやりとふり上げる。瞬間。小さく折り畳まれた亡者の身体が、引き絞った弓のごとく弾み全方向から鋭く跳び込んできた。

「っ！」

ルシオがプラチナを抱きしめる。反射的に目をつむった。

しばらくして聞こえてきたのは、また鏗鳴りの音だ。

少なすぎる物音にルシオは耳がおかしくなったかと思いに思いつつも目を開けた。

直後、鈍い落下音がした。ルシオたちから数十歩離れた先で寸断された異形の躰からだがほうぼうに転がっていった。

「この兼定カタナの間合いより内側に踏み込めると思ったのか？」

アレンが片眉をあげる。

ウイルフレドの顔がはつきりと歪んだ。

「人間風情が、俺の復讐を阻もうなどと思いがつた真似を」

「プラチナがだれかに恨まれるようなこと、するもんか！」

ルシオはとつさに叫んでいた。アレンがわずかにふり返ってくる。その視線の先は、気絶したプラチナだ。ルシオの腕のなかで銀髪の少女は瞼を閉ざしたままだ。軽く顎引くアレンとは対照的に、ウイルフレドは冷笑をルシオに浴びせてくる。

「とんだ戯言だな。そいつは俺の父親を、俺の母の心を壊した。俺からすべてを奪った者。……だから今度は俺がすべて奪う。まずはその身をズタズタに引き裂いて、『死なぬ』というのなら冥界の女王、ヘルに魂を喰らわすまで。——それでもなお、死なずに済むのか楽しみだ……。なあ、戦乙女？」

ウイルフレドが低くのを鳴らす。暴発寸前の大砲を無理やり押し込めているような、不穏な笑みだった。時折、引きつった甲高い笑声が混じる、うつむいたウイルフレドの顔の陰から、青いはずの瞳が赤く光っているのが見えた。

——こいつは、不死者だ。

ルシオはやつと理解した。いままで言葉を話すウイルフレドをどこか人間と思いついでいた。だが事実を受け入れた途端に肌が粟立ち、唇が震える。早まる鼓動がルシオの思い込みを剥がしていく。この霧は黄泉のもの。つまりこの男に捕まったが最期、永遠の死の苦しみがその先に待っている。

——う、そだろ……プラチナがこんな奴に、なんで……、戦乙女？ どういうことだ、わけがわからないっ……！

「お前の相手は、俺だ」

アレンの静かな声が、ルシオの思考を断ち切った。

ウイルフレドが鼻で笑っている。

「ならば貴様から死んでいけ！」

ウイルフレドが地を蹴る。乾いた落ち葉は音を立てず、深い泥を蹴った水の音がした。激しい剣戟音がルシオのすぐ傍で鳴る。火花。ウイルフレドが腹から吼え、斬り立てていく。アレンはルシオの目の前を取った位置から一步も動かない。刀を中段に据えたまま、攻めくる剣を、淡々と受け流す。一見、アレンは派手に動いていないのに、その周りを見る間に剣戟の火花で埋め尽くされていく。

——すっ……げ……！

現実感のない光景だった。

剣戟音が重なり、ルシオの腹にも響く。ウイルフレドは、大樹すら両断する威力の剣で襲い掛かっているのだ。その証に、アレンの刀の間合いの一寸外の地面はえぐれ、遠く離れた木々がウイルフレドの斬線に触れるや次々と倒れていく。

——俺は、夢でも見てるのか……？

思わず頬をつねった。遠くで、細く息を呑む音がした。

戦いを見守っていた従者の女、エーリスだ。

「まさか、ウイルフレド様を人間風情がこうまで寄せ付けないとは……」

細い指を口許にあて、エーリスの紫瞳が見開かれる。

苛烈に攻め立てるウイルフレドも、いったん飛びのき、もったいぶった動きで剣を大きくふりかぶってから鋭く打ち込んだ。

——これも、防がれる。

単純な力比べ、鏑迫り合いに持ち込んでも、アレンは涼しい顔だ。人外の膂力りよりよくをもちもしていない。ウイルフレドが鼻筋に深いしわを刻み、低く言った。

「不死者であるこの俺にここまでついてくるとは。……貴様、人間ではないな？」

「……お前の執着は、どうやら『人間』にも向いているな。人外と成り果ててなお、お前の剣には未練が染み付いている」

「知った口をつ！ 虫けらあつ！」

ウイルフレドが力任せに鏢迫りを薙ぎ払った。そのときだ。アレンが深く踏み込み、電光石火の速さで抜き打った。ウイルフレドと飛び交っている。腰を低く落としたアレンは、しばらく刀をふり切った態勢で止まっていた。アレンが剣尖を下げる。ゆつくりとウイルフレドをふり返っていった。

ウイルフレドはアレンに背を向けたままだ。ひどく億劫そうにふり返ろうとしては立ち止まり、頬をびくびくと震わせながらアレンを睨む。

「ゴフツッ！」

胸を袈裟懸けに斬られ、ウイルフレドが吐血する。血しぶきが盛大に散った。屈んだ瘦軀そうくがいまにも膝から崩れ落ちかけている、不死者でなければ即死の傷だった。剣術で、まったく勝負になっていない。

とどめを刺さんと向かいくるアレンに、ウイルフレドは胸の傷を抑えながら、血走った目で叫んだ。

「付けあがるなよ虫けらが！ この俺の力が『足りぬ』というなら贄にえを喰らうまでだ！」

「なに？」

ウイルフレドが腰に提さげた布袋から取り出してきたのは、赤黒い光を放つ白い羽根だった。人間の血と冥界の瘴気を幾重にも浴びた、まがまがしい光。

その羽根を高々と掲げ、ウイルフレドは叫んだ。

「血塗られた神の羽よ……。その力、我に示せ！」

羽根が光を増す。聞き慣れない不思議な音が場を占めるそのとき、アレンの右人差し指にはまった指輪もまた、強烈に輝き始めた。

「っ！ これは——！」

アレンが指輪の光を遮ろうととつさに左手でかばう。だが、指輪は静まらない。アレンが低くうめき、膝を折った。

（まずい、これは——セフィラに触れたときと同じ——……っ）

暴力的な紋章力の奔流。

アレンの瞳孔が完全に見開かれ、脳に直接、見知らぬ場所の光景が流れてくる。

寒村。

雪。

平原、城、荒野。

そして戦場——純白の翼を広げた、青い鎧をまとった天使。

天使の前には、鎧をまとった男たちが立っている。

——我が主、戦乙女のために！ 行くぞ、ウイル！

次々になだれ込んでくる映像のなかで、ある壮年の男の声がひととき大きく聞こえ

た。

——俺には、もう戻る道はないんだよ！ 父さんっ！

ばつんっ、という何かがぶつかる音がして、目まぐるしく動く映像がようやく止まった。いま視^みえるのは、ある部屋での男女のやりとりだ。四十がらみの女性が木椅子に腰かけ、うつろに微笑みながら、ドアから入ってきた青年に話しかけている。

「あら、あなた……。ウフフ……。もう帰ってきたの？」

銀髪の青年の顔が、悲しみと絶望で震えるのがわかった。

戦争で父を失った彼の家は、彼がまだ幼く、母にも稼ぐ手立てがなかったために貧しく追い込まれていった。

——お兄ちゃん！ 遊びに連れて行って！

明朗快活な妹は、次第に困窮する生活のなかでゆるゆると飢えて死んでいった。ウィルフレドの目の前で。

娘を餓死させてしまった母は心を壊し、成長した青年がいくら自分は息子だと言って聞かせても、二度と彼をウィルフレドと呼ぶことはない。——平和だった昔のようには、二度と。

——そして

なにも知らなかったウィルフレドが、

——嫌だッ！ 死にたくない！ こんなところで死にたくない！

冥界の住人にそののかされ、父の仇討のためにと持たされた『女神の羽』で最初に殺した、一番大切だった親友の断末魔が——彼の心を完全に打ち砕く。

「うおおおおおおああああああっっ！」

ウイルフレドの絶叫が、アレンの意識を現実に戻した。

「貴様つ、よくも！ よくも人間だったころの、神の道具にすぎぬ矮小な虫けらの存在を、思い出させたなあああああっっ！」

ウイルフレドの赤い瞳から、血の涙が流れている。顔は憤怒に塗り固められ、彼がまとう冥界の瘴気が爆発的に膨らんでいく。

アレンは息を呑み、背後のルシオに言った。

「もう少し、さがれるか？ できれば、あの岩のところまで」

「ア、アンタ……あんなの、どうにかなるのか……っ」

涙混じりに問いかけるルシオに、アレンが微笑んだ。

「心配ない」

ルシオから目の前のウイルフレドに視線を移し、言い放つ。

「奴は、俺が斬る」

「ひいひいひい！」

「ぎゃああああっ！」

ふいにつんざく悲鳴が飛び込んできた。ルシオが声のほうを見る。恰幅のいい男たちがいた。あ、と思わず声が出る。——人買い。昼間、プラチナの家に来た男たちだ。

彼らは宙に浮いていた。赤黒い光の羽根が、彼らの頭上にある。羽根は己を天頂として球状の光の袋をつくり、そのなかに男たちを囚えているのだ。ウイルフレドが低く激しく呻きながら、全身の瘴気をさらに沸き立たせる。彼は瘴気の闇に沈みながら、アレンを見て、にいーつと笑った。

ウイルフレドが前に突き出した手を、握る。

瞬間。

袋状に広がっていた羽根の光が男たちを飲み込んだまま急速に縮み、強烈な幾重もの断末魔をあたりにまき散らしながら、ついには一滴の赤い雫となつてウイルフレドの剣にぼたりと落ちていった。刃が水面のように波紋をひろげ、雫が隅々にまでしみわたつていくと、ウイルフレドの剣がどす黒く輝き、ウイルフレド自身もまた、強烈な力を得てうつとりと顔を天に向け、歓喜の声を上げた。

「さあ、お前を八つ裂きにしたうえで、そこにいる戦乙女を斬り裂き、証明してやる！
この俺が、神をも上回る存在だとな！」

2. コリアンドル村編（完） 招聘の鐘

乳白色の雲海が、宮殿の群れに垂れこめていいる。白とも黄金ともつかないきらめきを放つ宮殿は、どれも古色蒼然として象牙細工の美しさを秘めている。

なかでも、雲海から突き出す大山脈よりさらに高くそびえる巨大宮殿の尖塔は、まるで天空に散ったほかの島々を見下ろすように鎮座していた。

豊かな自然を抱える天空の島々。その島のひとつにスズランの草原が広がっている。スズランの白く丸い小さな花弁は風にあおられ、サラサラと揺れながら時には散り、頑強な岩を、精緻な橋を駆け抜けていつせいに舞い上がっていった。

「なんといいことだ……」

その神界の草原から下界を見下ろす、浅黒い肌をした少年神は眉をひそめた。

「冥界の者が時もわきまえずに下界に出しゃばるとは。……だが招聘しょうへいの鐘は間もなく奏でられる。いま主神オージェインの目に触れるのは得策ではない、か」

少年神がほっそりとした顎に長い指をそえ、声を落とす。翡翠色の瞳が見据える先は、長い刀を握った異界の人間だ。

「——これは……、いったいなんだ？」

終末の時は近い。

些細な存在に運命さだめのうねりが流れを変えるはずなどないが、神のなかでも珍しく、慎重な性質を持つ彼は下界——地上界ミッドガルドへと一度降りる意志を固めた。

安穩と笑いあう神々に背を向けて。

「さあ、もがき苦しみ、死んでゆけっ！」

ウィルフレドが高速で突きこんでくる。左。アレンが躰からだを退き、見切る。避けた瞬間、ウィルフレドが残像を残しながら、さらに追い打った。

「やばいっ！」

岩まで逃れたルシオが身をかがめる。ウィルフレドはこれまで人の姿をしていた。だが、そのまとう瘴気アレンが強くなりすぎ、いまその姿は完全な闇の獣と化している。赤い瞳をたぎらせ、人間に襲い掛かる。

甲高い剣戟音が絶え間なく響いた。斬線が宙に網の目のごとく疾はしる。アレンが鋭く吼えた。これまでと違い、膂力りよりよくでウィルフレドに押し負けている。だが技はアレンに分がある。ウィルフレドの剣撃をすべて跳ね返し、アレンが剛刀をふりきる。ひときわ、大きな音が鳴った。ウィルフレドが四つん這いで地面を強く搔き、後ろに退けられる。

「——ほう？」

感心したように、ウィルフレドが眉をあげた。さきほどまでの切羽詰まった様子はない。

ウィルフレドが左手をかかげる。指先に光が集い、光は矢となって鋭く空を走った。矢が三本に分かれ、上、中、下段から不規則な弧を描きながらアレンに迫る。アレンが一の矢を右に避け、二の矢をひるがえつて薙ぎ払う。三の矢は刃を立て正面から受け斬った。

三の矢は、アレンの太刀に触れただけで真つ二つに切り裂かれ、宙に掻き消えていく。冗談のようなアレンの刀の切れ味を見ても、ウィルフレドは驚かない。鋭く、切り込んでいる。獣の追撃は止んでいない。鋭いステップインでアレンの左側に潜り込むと剣を持たない左手で四発の拳を繰り出す。拳が音速の壁を超えてポツと空気が破れる分厚い音がした。

肉のぶつかる音ははじける。アレンがそのうちの一撃を右手でつかみ、止める。ウィルフレドが蹴りこむ。拳を離し、素早く下がるアレン。アレンが立っていた空間をウィルフレドの足が払った。今度は逆の足で中段に鋭い蹴打が放たれる。アレンが左の膝蹴りで止める。その頭部へ鋭いハイキックが迫る。

(——これも見切るか。……なにっ?)

ウィルフレドの目の前に、巨大な炎が襲い掛かった。拳。ウィルフレドが認識したとき、強烈な炎をまとったアレンの拳が、ウィルフレドの顔面をとらえた。

派手な爆発音とともに、ウィルフレドが吹き飛ばされる。地面に倒れるその寸前で、ウィルフレドはくるりと軀からだをひるがえし、左手について体勢を立て直す。アレンは追撃せず、まだ元の位置に立ったままだった。

アレンが、眉をひそめた。

「いまの動き……、お前のものじゃないな。技に違和感がある」

アレンの慎重な問いに、ウィルフレドが高らかに笑った。

「そうだ。これはこの俺の糧となった仲間と呼ばれた者たちの技！ やつらは感謝すべきだろう？ この俺とともに戦乙女を殺せる力となるんだからなっ！」

ウィルフレドのつんざく笑い声が森に響く。

アレンの脳裏に浮かんだのは、ウィルフレドが使用した不気味な羽根——ウィルフレドは『神の羽』と呼んだもの——だ。そしてエレナからもらった指輪が見せた、おそらく人間だったころのウィルフレドの記憶。

「人間を贄とし、贄となった者の技を盗み取る……？」

アレンが仮説をたどるように、エーリスを見た。静かにたたずむ妖女は黒いコルセツトの前で両手を重ね、紫色の唇を左右に広げる。

「私はただ、ウィルフレド様の手伝いをしただけですよ。選んだのは、ウィルフレド様です」

「……そうやって弱った人間を追い込み、人外に墮とすのが貴様の役割か。そして——」
アレンがウィルフレドを見る。その蒼瞳がわずかに揺らいでいた。

「お前はこれまで辿った道を否定できずに、恨むしかないのか。神を」

「貴様の言葉は、癩にさわる。……だが、たやすく葬るにはまだ……。まだ、贖が足りない……」

びくんつ、びくんつとウィルフレドの躰からだが不気味に脈打つ。深い霧のなか、赤い瞳だけが変わらず煌々こうこうと輝き、ひときわ目立っている。

「神を恨む気持ちだけは、俺にも理解できる。……ただ俺の幸運は、絶望に誘う者よりさきに託せる希望と出会っていたことか」

アレンの独り言は、だれの耳にも届くことはなかった。

まばたきひとつ落としたアレンの瞳に、鋭い気がこもる。もはや同情も憐れみもない。

両者、強烈に吼えるや全力で打ち込み、中央でぶつかり合った。ウィルフレドが上段から斬りかかる。アレンもまた深く踏み込み、電光石火の速さで抜き打っていた。

飛び交う両者。

ウイルフレドの胸から袈裟懸けに血がしぶいた。だが、ウイルフレドは素知らぬ顔で突進する。狙いは岩陰、ルシオと——プラチナだ。

「無駄なことをっ！」

アレンが吐き捨てる。岩陰まであと少しと迫ったそのとき、霧深い空のなたから星のきらめきが地上に突き刺さった。天空の星から野太い矢が落ち、ウイルフレドの背を貫いたのだ。重い轟音が空気を、地面をふるわす。「スターライト」というアレンの世界の古い紋章術だ。

「亡者どもおっ！」

星の矢で地面に張り付けられたウイルフレドが怒鳴る。霧のなかから、泡立つ音が無数に湧き起こった。泡の数だけ、半死体の男たちが一斉にせりだしてくる。

「二太刀で仕留められないなら、粉みじんにしてくれる！」

アレンが吼え、剛刀をふり下ろした。剛刀の剣尖から巨大な疾風が湧き起こり、生まれた端から亡者たちを切り捨てていく。鬼気迫るアレンの太刀がさらに連続斬で追い打ちをかけた。細切れとなる亡者たちのなかで唯一、ウイルフレドだけが太刀風の嵐からどうにか逃げおおせている。不死者の強韌性・不死身性をもつても、アレンの間合いより裡には進めない。

とはいえアレンもまた、ウイルフレドを斃す攻勢には至っていなかった。

エーリスがしつとりと笑い声を立てた。

「ウィルフレド様の力は無限大……。戦えば戦うほど強くなる。それを超えることができるかしら？ フフツ、見物ですね」

「せいぜい高みの見物をしている。この次は、貴様だ」

「威勢のよろしいこと。ですが、こういうのはいかがです」

アレンが問う間もなく、エーリスがドレスの裾をちよこんとつまみ、膝を折って一礼した。頭にのった白いカチューシャを見せつけるように深く頭を垂れてからエーリスが顔を上げる。彼女の紫瞳が妖しく輝く。反応したのは、アレンの指輪だ。金属がこすれるような甲高い音を立て、指輪が蒼くきらめきだした。

「なにつー！」

アレンがとつきに左手で右人差し指を握る。外さんとするときにはすでに、また映像がアレンの脳に叩き込まれていた。

「くつ、ぐ——つー！」

「賢者の石……貴方がお召しになるのはまだ早かったようですね」
そのオモチャ

くすくすと笑うエーリスの声はもはやアレンに届かない。

視えるのは——

凍った川、

くたびれた女性、

古びた水車、

鋭い風の音、

一面に咲くスズランの草原——そしてどこか遠い、はるか彼方にそびえ立つ巨大な鐘楼。

さまざまな場所の環境音がけたたましく重なり、聞こえてくる。不快な騒々しさに瞞を強くつむつた。

「もうすべて、忘れて、しまい、たい……」

少女の疲れ果てた声がなかでも響いてくる。次元の扉を越えるまえに聞いた、何者かの声に似ている。

だがそれよりも——

「戦いの、邪魔だあつ！」

紋章力ちちからの一方的な流れをねじ切らんと、アレンが指輪を投げ捨てる。強烈な衝突音がアレンの鼓膜に響いた。脳裏の映像が途絶える。視界に火花が走り、立っているのも難しい。それでもすぐにアレンが確認するのは岩陰の二人だ。プラチナを横たえさせ、ルシオがそのまえに両腕を広げ、立ちはだかっている。そこに銀髪の黒い塊が襲い掛かる。ぼんやり視える輪郭と、それぞれの人物の髪色でアレンは状況を瞬時に把握した。

「兼定ああああ！」

アレンの剣尖が、まばゆく黄金に輝く。全身から蒼炎が噴きあがり、ふり上げた剣尖に集う。

エーリスが目を丸くした。

「この人間……っ」

アレンが、鋭く刃をふり下ろす。斬線が銀弧を描き走る。と同時に、剣尖に集った蒼炎が巨大な龍と化し、ウィルフレドの躰からだを横から搔かつ攫さらった。

「ぐああっ！」

悲鳴をあげたのはウィルフレドではなかった。ルシオだ。アレンが即座に駆け寄る。ルシオの左腕から血が流れている。二の腕を噛まれたのだ。

「ヒーリング！」

即詠唱で放たれる回復紋章術まじゅつが、ルシオの傷を見る間にふさいでいく。

「無事かつ！ ほかに怪我は？」

「え？ あ、いや……さっきのかすり傷だけだ」

鬼気迫る勢いで問われ、ルシオが戸惑いながらも答えた。ルシオは自分の左腕を不思議そうに眺める。傷が跡形もない。

アレンは「そうか」とだけ答え、おのれが放った龍に引き倒されているウィルフレド

をふり返った。

「……やってくれたな」

アレンの蒼瞳に凍った殺意が宿る。アレンは左手で握った刀を横たえると剣尖に右手を添え、裂帛の気合を放った。

「覇アツ！」

瞬間、空気が変わった。アレンの全身から炎が噴き、天に向かって走る。

甲高く、尖った鳥の鳴き声が鋭く空気を震わせた。天に伸びた炎は十字に形を変え、そこから生まれてきたのは巨大な朱雀だ。森を閉ざしていた冥^{ニブルヘイム}界の霧を晴らし尽くす、強烈な炎の獣だった。

その天空から下界を見下ろす神獣が、アレンの背に現れ、付き従っている。

「この力……、神……?」

エーリスが神獣にあっけにとられている間も、ウイルフレドは地面に伏したままだった。左半身を龍に焼かれ、重傷なものもあるがそれだけではない。

「ぐ、う、オツ……!」

ウイルフレドの目の前に、赤黒い羽根が浮かんでいた。ルシオの血を吸った神の羽。それが、ばくんつ、ばくんつと不気味な音を派手に奏でながら明滅している。

ウイルフレドが呻きながらもその羽根ににじり寄り、つかんで、おのれの剣に押し付

ける。

「ウイルフレド様、いかがなさいました？」

エーリスの声は届いていない。

ウイルフレドがつかんだ羽根は、音もなく剣に吸い込まれていった。ちゃぽん、と水音が反響するとともに、ウイルフレドの刃に波紋が広がっていく。

変化は劇的だった。

鏢元の刀身から血が勢いよく噴き出す。ウイルフレドの白刃は一瞬で真っ赤に染まった。それでも出血し続ける刃は、よく見れば血ではなく炎であることがわかる。粘り気のある液体に似た禍々しい炎は、剣を片刃の反りがついたものへと変化させた。

「フ、フフフフッ！ ク、ハハハハハッ！」

ウイルフレドの白眼もまた血走り、肌が土気色に衰えていく。死人の肌色だ。大木が軋きしんだような音がして、ウイルフレドの口許に獐猛な牙が生える。

ウイルフレドから放たれる霧がさらに濃く、周囲をかすませる。相対する朱雀の、強烈な陽光をさえぎらんとする冥界の霧。

「これだ、この力こそが俺が求めていた力ッ！ みなぎり、あふれてくるっ……！！ さあ、弱者よ。似合いの終焉を迎えるがいい！」

様相を一変させた両者が、同時に地を蹴る。黒い瘴気をまとうウイルフレドがただ突

き進むだけで木々がなぎ倒れていく。岩を、地面を、木々をめぐり上げながら、不死者の剣がアレンに迫る。

アレンは反して、高速で滑空する。全身からあふれる火の粉が、アレンの通ったあとをさらって舞う。両者がぶつかる。強烈な爆発音で森が揺れた。連続斬の応酬。ぶつかるたびに雷が起きるも両者意に介さず、何度も何度もぶつかり合う。

ひととき巨大な爆音があがったとき、アレンが黄金に輝く剛刀をふり下ろしていた。「な、二つ……?」

受け太刀したまま、ウィルフレドは凍った顔でアレンを見上げていた。炎を噴き上げる禍々しい剣が、なかほどから折られ、ウィルフレドの顔の正中にも一線、黄金の斬線が刻み込まれている。

「おれは……、斬獲せし者の剣ヲ……ッ、戦乙女を、ココロ、すつるぎヲー」

言葉の続きがつむがれるまえに、アレンの剛刀が無尽に走る。ウィルフレドの全身に黄金の斬線が網の目のごとくが刻まれる。その自分自身の^{からだ}躰をみつめて、ウィルフレドは困ったようにエーリスを見た。

「えー、リす……」

「はい、ウィルフレド様。ご心配にはおよびませんよ」

エーリスが微笑みながら光のなかに溶け消えていくウィルフレドに手を差し伸べ、指

先から放った冥界の霧でウィルフレドの躰からだを包むと自分のたもとに召喚して、抱きしめた。

（まあ、なんと嘆かわしい。浄化の光……。人間ごとき下等で矮小な生き物が、私のオモチャを壊そうだなんて。おこがましいこと）

エーリスの紫瞳が輝く。彼女の周りの霧が濃さを増し、光の粒子と化すウィルフレドを包み込んでいく。

「さあ、ウィルフレド様、もつと憎んでください。この世のすべてを。戦乙女を。あのような生き物が絶望に染まる悲劇トコロを私に観せてください」

「……………レ、ハ……………ふクシゆうを……………っ！」

「そう。その調子。ウィルフレド様。私を喰らい、すべてを闇へと……………」

ウィルフレドが震える両手でエーリスの細い肩をつかむ。エーリスの黒髪が豊かな胸のまえにこぼれ、その白い首筋があらわになった。ウィルフレドが柔肌にかぶりつく。

「……………な、っ……………！」

ルシオがうろたえた。女のひとが喰われている。しかもその女は、自分を喰う男の頭をおだやかに撫で、アレンを見て微笑んでいる。

エーリスの躰からだはやがて紫暗色の粒子と化し、ウィルフレドの肉体に吸い込まれていっ

た。

「うううううう……！」

ウィルフレドの背に、見たこともない化け物の影が現れる。アレンの朱雀にも匹敵する大きさの化け物は、ひとに近い姿だった。金色の四角い顔の中心に、巨大な蒼石があり、ひとの目を縦にしたような形で埋め込まれている。顔の左右から金色の山羊角が下向きに弧を描いて生え、その肌すべてに鋭いとげを持っている。太い首。胴は人間の女の豊かな胸とくびれた腰に似た曲線を描き、それより下半身は丸々と肥えたトカゲのしっぽを思わせた。曲線を縁取るごっこつとした体躯の両側から短い腕が生え、曲刀を幾重も溶け合わせた爪のみが進化した巨大な両手が、からだ躰の三分の一ほどの大きさもあつた。化け物の背中からはウィルフレドが手にした剣と同じ、粘ついた炎が六対、翼のように広がっている。

「……闇に墮としてなお、冥界の玩具だと？」

アレンが低く声を落とす。

異形を背負うウィルフレドが、ぎらつく赤瞳を見開いた。

「いまさら命乞いをして遅いぞ！ 虫けらあつ！」

「ウィルフレド、と言ったか。お前の剣に染み付いた未練の正体、俺にもようやく理解できたぞ。お前のなかに残ったひとの心の欠片。いくら消そうとしても消しきれない欠

片が、いまなおお前の裡うちで現実を見ているんだ」

「黙れっ！ 俺の未練は戦乙女をいまだ殺していないことだけだ。貴様を片付け、そこのおぞましくも人間の真似をした小娘を八つ裂きにしてくれる！」

「だったら『戦乙女を殺す』と心に決めたお前は、なぜ他人の力を借りねば全力を賭したその先、おのれの底力ほんりきを發揮できない」

アレンの言葉を打ち消すように、ウイルフレドが剣を薙ぎ払った。背負う異形も魔手を交差させる。瞬間。強烈な突風と氷塊の嵐がアレンを襲った。

(無詠唱でこゝも紋章術を駆使するか)

集中豪雨の勢いをもった氷塊。さらに突風が氷雨の軌道を読ませない。瞬時に繰り出される紋章術まほうの強さが桁違いだった。

氷塊が降れるその瞬間、アレンの周囲に斬撃の檻が網の目のごとく走った。一步も動かず、視線すらも動かさず、アレンが左手一本で無造作に握った長刀で無数の氷塊を真つ向から叩き切る。斬つたあとで、アレンが踏み込んだ。瞬時、間合いに入ったアレンをウイルフレドが見上げている。

轟ゴオつ、と鋭い空間を切り裂く音ともに黄金の刃がふり落ちる。雷が空を割る。刀はウイルフレドの左手の剣に止められた。ウイルフレドがニヤリと口端をつり上げる。止めた体勢からウイルフレドがさらに横殴りに剣を払いあげる。異形の臂力が、アレン

を軽く吹き飛ばした。風船のごとく空に跳ねあがったアレンが宙で躰からだをひねり着地する。ウィルフレドが狂ったように切りたてた。背の異形、冥狼ガルムの竜巻と氷塊の嵐がさらにその一撃一撃を加勢する。

「覇アツ！」

アレンが裂帛の気合を放つと冥狼の氷と風が、炎の壁を前に跡形もなく消し飛んだ。ウィルフレドの剣とアレンの剛刀がぶつかり合う。連続斬同士の戦い。変わらず技はアレン、力はウィルフレドに分がある。

すさまじい爆音が響き渡った。アレンが後方に飛ばされる。手数は五分。だが威力で、押し負けたのだ。アレンの口許に笑みが浮かんだ。

「どうだ！ ぐちやぐちや御託を並べたとて、これが彼我の実力差だあつ！」

ウィルフレドが瞬時に距離を詰める。右手の剣を一閃する。耳を衝く金属音。止められた、とウィルフレドが直感したとき、アレンと目が合った。さきほどのウィルフレド同様、左手だけで握った刀で、ウィルフレドの剣を完璧に受け止めている。

「そんなに見たいか。兼定このカタナの実力を」

「ほぎけつ！」

ウィルフレドが右手の剣で切りつける。アレンが剣尖を軽く跳ね上げた。いとも簡単に受け太刀がほどけ、捉えたはずのアレンが、その前髪を揺らしただけにとどまる。

また、見切られている。

「うおおああつー！」

小馬鹿にされたと踏んだウイルフレドがさらに苛烈に攻め立てる。幾度目かの高速連斬の応酬。アレンは、おのれの身の丈よりも長い剛刀の柄を両手で握りこんだ。

ウイルフレドが左剣を薙ぐ。剛刀の柄頭が、左剣の剣尖を撃ち落とす。追いつがる右剣がアレンの心臓に突きこまれる。一寸、届かない。アレンが左にかわした拍子で、剛刀を袈裟懸けに打ち込んでくる。左剣で止めた——はずだった。

だが左剣の刃はなかほどまで斬られ——ウイルフレドごと断たんとする。ウイルフレドが鋭く吼え、右剣も交差させて受け、アレンを押し切る。退がったアレンが、一転、苛烈に攻めてきた。ウイルフレドはその斬戟に真つ向から切り返す。だがこれまでのように正面からぶつかり合えない。剛刀の、切れ味がおかしいほど増している。左剣で、剛刀の払いあげを流しながら右剣で突く。これは敵の横薙ぎを相殺した。ついでふり落ちる凶悪な剛刀を、両手の剣を交差させ、今度はがっちり受け止める。

睨み合うアレンとウイルフレド。

互いに、その場から剣を繰り出し合う。

「——心の痛みを知れ！ ヴェンジエンス・エッジ！」

「そうだ、お前の底力、もっと見せてみる！」

無心に、ただおのれに勝つために剣をふるう不死者をさらに奮い立たせるように、アレンとアレンの背にある朱雀がまた炎の勢いを増し、りよりよく膂力を上げていく。

ウィルフレドの全身を覆う黒い霧も強さを増した。両者のすさまじい斬撃が、周りの木々を、地面をズタズタに切り裂いていく。

砲撃が轟く音が空間を震わせる。

両者、剣撃を交えていた中心地から後方へ吹き飛んでいた。同時に着地。

「——弱者に似合いの結末を用意してやる。死ねえっ！」

「戦いの場で操り糸を断てないかぎり、いや断たないお前に、究めた一撃を放つことはできない」

——ウィルフレド様、さあ、すべてを聞へと——

「うおおおおあああああああ！」

ウィルフレドが両剣を交差させ、渾身の一撃を放つ。アレンの首を、完全にとらえた。(でかい口を叩いてこんなものか……。弱者め！)

ウィルフレドに笑みが満ちる。そのとき、声が出た。ひどく落ち着いた男の声が。

「冥途の土産にみていけ。これが俺と兼定の極めた一撃だ」

ウィルフレドは黄金の光のなかで、朱雀が猛々しく鳴く姿を観た。そのまえてふり上げられた剣尖の、あまりに見事な金の輝きに、しばらく見惚れていたのかもしれない。

ウィルフレドが光の粒子となって空間に散っていく。

さきほどまでの喧騒が嘘のように静まり返り、岩から顔を出したルシオが慎重に周囲を見渡しながら尋ねた。

「おわった、のか……?」

ルシオが問うも、アレンはふり返らなかつた。代わりにルシオとプラチナの周りに、ドーム状の光の壁が起きている。絶対物理防御と絶対魔法防御を掛け合わせ、改造したアレン独自の紋章術だ。外から攻撃が入らない代わりに、内側から外に働きかけることもできない。

「さて、始めようか」

アレンの言葉に答えるように、星空は曇り、かげり始めた。赤黒く染まった空で、ウィルフレドの背負っていた影が実体化していく。ひとに似た禍々しい巨大な異形、ガラム。四角い顔の中央にはまった、ひとの目を縦にした形の蒼石が、ぎよろりと動いてアレンを見下ろした。

「ああ、なんて愚かで下等で矮小な生き物なのか。私とウィルフレド様の契約を壊そうなどと、思い上がりもはなはだしい。ウィルフレド様は私に使われていればいいのです。そして私はウィルフレド様に付き従う。私が飽きて捨てるまで、永遠に」

悪意で塗り固められた言葉の粒は、アレンの逆鱗をあますことなく撫でた。それが異

形の狙いであることも理解できるアレンは、こらえきれない笑みをこぼした。

「そうか。俺は上等で偉大な生き物とやらを、これから斬れると思うとぞくぞくするが。意見が分かれたな」

「人間にしては少々胆力がある程度で、そこまで凶に乗ってしまわれるとは困ったものです。仕方がありません。冥界の闇の深さを教えてさしあげます。せいぜい悲劇シヨウを盛り上げてください」

ガラムが、巨大な棘におおわれた手を無造作に払う。瞬間。強烈なトルネードが連続的に起き、天まで木々を土埃を巻き上げながら方々からアレンを襲った。ウィルフレドの影でいたときは比べ物にならない破壊力。雨のごとく降る氷塊は、一つの氷塊がひと一人分をゆうに呑み込む巨大さである。

それがアレンの四方八方から放たれ、アレンとアレンの赤い朱雀を一瞬で呑み込む。周辺の森林——だった荒野は、ふたたび霧に包まれ、ブリザードの奥から朱雀の断末魔が聞こえてきた。

「ふふふ、御馳走さまです……。堪能させていただきました」

ガラムは冷めた目でそのさまを見ていた。ウィルフレドに余計な影響を与えた罪で、じわじわとなぶり殺すつもりが、つい力を込めすぎてしまったようだ。

(ウィルフレド様の記憶……、また少々書き換えてさしあげねば)

冥界に戻ってから算段を立てていたそのとき、死んだはずの朱雀と、目が合った。まぶしい太陽のごとき黄金の朱雀と、黄金の光を放つ剛刀の刃がガルムの脳天からしつぽの先までを、真つ二つに切り裂いている。

「なっ、に……！　馬鹿なっ」

いま起きていることが信じられず、ガルムはアレンを見る。全身が黄金に輝くアレンが、ガルムを見上げて言ってきた。

「俺は貴様が絶望しようがしまいがどうでもいい。ただ貴様は『斬る』。言つたはずだ」「ウイルフレド様と戦っていたときに全力ではなかつ——！」

ガルムが気づいたときには、異形の巨体は正中からアレンが刻んだ斬線に沿ってゆつくりと左右に分かれ、光の粒子となつて地上から消え失せんとしていた。

「お、のれ……！　く、ふふ、また、お会いしまシヨウ。次は確実に、冥府にお迎えいたします。フ、フフ、フフフフ……！」

怨嗟の言葉を残し、ガルムが霧散する。

一帯を覆っていた霧が晴れていく。

アレンの姿もまた、輝かしい黄金の光はゆつくりとなりを潜め、黄金色の朱雀が空に消えるや、周辺一帯には静けさが満ちていった。

アレンが剛刀を納める。嘘のように静かになった荒野のなかで、鏗鳴り音が響いた。

ルシオをふり返ってくる。

「ほかに怪我はないか？ そちらの子は？」

「俺は……、大丈夫だ。プラチナも。それより今度こそ終わった、のか？」

静けさを取り戻した——もはや森ともいえぬ荒野を見渡して、ルシオがおぼろげな顔で問う。ルシオのこれまでの常識ではありえないことが次々と起こりすぎて、頭がぼんやりとさえた。

アレンはさきほど投げ捨てた指輪を地面から拾いあげると、右人差し指にはめながらうなずいた。

「ああ。もう心配ない」

アレンの言葉で、ルシオの胸をざわつかせていたフワフワとした感覚が、落ち着いていく。ようやく、深呼吸できる。数時間ぶりに吸う空気を、ルシオはうまいと感じた

「……ルシオ。俺はルシオだ。あんた、あらためて名前を覚えてくれないか？」

「アレンだ。ルシオ。それで、その子はまだ目覚めないのか？」

アレンが心配そうにプラチナの顔をのぞき込む。ルシオもハツと我に返った。

「そうだ、プラチナ！ しっかりしろ、プラチナ！」

痛くない程度にプラチナの頬をぺちぺちと叩く。

「ん……………」

プラチナの臉が震え、身じろぎしてきた。「ルシ、オ……？」とさらに彼女がか細くつぶやくのを聞いて、アレンが安堵の息を吐く。

「どうやら大丈夫そうだな」

「けど、これからどこに行けばいいんだか」

プラチナのの前では決して吐けなかった弱音を、ルシオは自然と口にしてている。

アレンが服の内ポケットから四角い物体を取り出す。四角いものはアレンが指先でなにやら触ると空中に光の板を出し、ピピつ、というルシオが聞いたこともない軽快な音を奏でた。

「ここから街までは少し遠いようだ。よければ、一緒に行こう」

アレンの提案にルシオの顔がほころんだ。

そのときだ。

「驚いたな。ホムンクルスでもハーフェルフでもないのに、神の器、か……。しかも器のもとには我らが主神をも上回っている、か？」

なにもない、ルシオたち以外にだれもないはずの荒野に、褐色の肌をした黒髪の少年が立っていた。ルシオと変わらぬ年恰好だが、ひよろりとした痩身で、着ている赤い服にも見覚えがない。

「神だど？」

問い返すアレンもまた異常を感じているのか、警戒した様子で黒髪の少年を見ていた。

黒髪の少年は歳に似合わぬ優美な微笑みを浮かべている。

「フフツ、きみにはまだちよつと早かったかな」

彼が空を見上げた。細長い雲が大きな満月にかかっている。月がいつもより大きく見えること以外は、ルシオにはわからない。

少年に視線を戻すと、そつと差し出した右手の先に、光の渦ができていた。光の渦はアレンの足許にも生じ、小さなつむじ風を巻き起こしている。

「……そうだな。あともう少ししたら、くるといい」

「待て、お前は何者だ」

「それも、あとでわかるさ」

アレンがこちらを見、なにか言ったようだったが、光の渦は強さを増し、彼の言葉ごとひと一人分の空間を呑み込んでいった。残されたルシオが左右を見渡す。黒髪の少年ももういなかった。

「どうなつてんだ……、いったい」

「ん……、ルシオ……どうしたの？」

「プラチナ！ 目が覚めたのか！」

ルシオが驚いているのを、プラチナは不思議そうに見上げていた。

荒野と化した森を二人はまた、とことこと歩き始める。細くうねった獣道は、やがて山肌一面を覆うスズランの草原へと続いていた。

天空の遙か彼方。

神界にそびえたつ鐘楼で、始まりの鐘が、高らかに鳴り響いた。

少年の悲鳴が、人知れず月夜をにぎわせる。大きな運命のうねりが動き出していた。

—— 神界戦争まで、残り 192 period ——

3. アルトリア編 蒼穹の戦乙女

「オラアッー！」

男の鋭い気合声が森のざわめきを切り裂いていく。空を占める巨大な魔鳥が、ついに地上に叩き落された瞬間だ。周囲から歓声が湧く。三メートルを超える男の大剣が、落ちた魔鳥の胸を容赦なく突き破ると、甲高い断末魔が響き渡った。

魔鳥にやられた傭兵たちが散り散りに隊の後ろに逃げていく。代わりに、押し出てるのは大剣をかついだ男を筆頭とした、銀甲冑を着込んだアルトリア騎士団だ。

「アリユーズさん、加勢します！」

騎士団を率いる金髪の青年が、槍斧を手に男の隣に躍り出る。

男はすでに次の魔鳥に向かっていった。周囲が見上げるほどの巨漢であるのに動きは俊敏だ。銀甲冑の騎士団のなかで、肩当てと籠手以外なにも着けない男の軽装は大剣の存在感もあつて戦場でひとときワカリスマ性を誇っていた。当初優勢だった魔鳥の群れが男を中心とした騎士たちの攻勢で崩れていくのも時間の問題である。

王都近郊に突如現れた魔鳥の群れは、日没後、ようやく討伐された。

ハルヒユイア

からからと車輪が回る。揺れる荷馬車の窓に男は肘をつき、もう片方の手にもった専門書を延々と読みふけていた。西側最大の軍事国ヴィルノアから大陸中央の小国アルトリアまでの大街道。その路面は目的地に近づくほど日に日に悪くなり、揺れも増しているというのに男は気にする様子もない。

(熱心な学者さんだ……)

御者が関心のため息を吐いた。鏡越しに客席を見る。依頼された当初はこんな若い男がひとりで馬車を貸切るなどと眉をひそめたが、御者が知らないだけで名のある学者なのかもしれない。

「しかし、いまアルトリアに行くなんて変わってるね。学者さん」

好奇心と暇つぶしに客席の男に声をかけてみる。反応がない。御者が首を傾げてふり返ったとき、ちょうど男が手許の本を閉じてこちらを見上げてくるタイミングだった。灰色がかった栗色の前髪がさらりと頬の左右に流れる。丸メガネの奥から切れ長の瞳がこちらを覗いてきた。端正な男だった。

「簡単な薬の調合を依頼されたのですが、その成果を一応、この目で見届けなくてはと思いますしてね」

「魔術師さまかい？」

「ええ。これでもフレンスブルグ魔術学院の出身です」

「あの名門のつ……!」

御者が驚きのあまり言葉を失う。そのさまに満足したのか、男はすでに車窓の景色に気を移していた。

(十年前の内戦で疲弊した小国……。すぐに潰れるものと思っていたが、存外食い下が
るものだな。ロンベルトの配下をくだったか)

男はジャケットの内ポケットにしまった寶石を無意識に握りしめる。得体のしれない黒髪の少年から譲り受けたこの石の価値を、多くの者は理解できない。だが男は、価値を正しく見極められる稀有な人間だった。

(まあ、そうでもなければ私の手を必要とはしまい。国の趨勢などどうでもいいが研究の糧とさせてもらおう)

薄い唇をひろげて、男は流れいく景色を見る。遠目でも王都のまばらな街並みが見えてきた。山中に囲まれた小さな王国は背面に大きな湖を抱え、自然の恵みによつて栄えた。

伝統あるアルトリア城には、いま灰色の薄雲がかつた空が広がっている。

「姫さま、どちらにおいでですか？ 姫さまあつ」

「日没までになんとしてでも捜し出せ！ ジェラードにもしものことがあれば、貴様、わかっておるじやろうな」

「はいっはいっ、すぐにお連れいたします陛下。いましばらくお待ちくださいませ」

去つていく国王の背を見送つたあと侍女が若草色のドレスの裾を躍らせながら、城内の扉をあちこちせわしく開けては姫さま、姫さまと呼びかける。そのさまを見咎めたアルトリアの重鎮、ロンベルトは鼠顔の細い眉をひそめて侍女を呼び止めた。

「どうしたのだ、騒々しい」

「口、ロンベルトさまっ」

侍女が悲鳴を呑むように息を詰め、両手でさつと口を覆う。顔色を失う侍女にロンベルトは手のひらを見せ、話の続きを促した。

「そ、それが……お稽古の時間だというのに、ジェラード姫さまがお部屋にいらつしやらないのです」

「また無精されているのか、あのお転婆姫は」

ロンベルトがため息混じりに語気を強めると、侍女がかしこまって頭を下げた。ロンベルトのふくよかな四角い顔が気難しい表情になる。後ろに撫でつけた髪は歳を重ねるごとに黒から灰色に変わった。だが銀縁眼鏡の奥にある、いまも変わらぬ黒瞳が侍女を鋭く睨みつけた。

「わかった。私からも騎士団に声をかけておく。あの方はいずれ民の指導者となられる御身、陛下も心配されている。夜までに必ずお見つけするのだ。よいな」

「はいっ、ありがとうございます！ ロンベルトさま！」

侍女が深々と頭を下げ、また城内をあちこち行つては姫さま、姫さまと声をかけ始める。

ロンベルトは腕を組んで押し黙った。日暮れまであと数時間。くだんの高飛車なお転婆姫がふたたび城内で侍女の前に姿を現すことはなかった。

「胃薬を買ってくるから、大人しくしている。二人とも」

身支度を整え、宿のドアノブに手をかけながらアレンが後ろをふり返る。歳は二十前後。カーキ色のジャケットに黒のシャツ、白のスボンという——この大陸ではあまり見かけない出で立ちだ。彼は淡い金髪をなびかせ、深い蒼瞳で室内を見渡した。アルトリア王都北側にある安宿の一室に寝台が三つ並び、うち二台のふくらみから今日は元気がなさそうな狸と猫の尻尾がゆらゆらと揺れ、返事をするように布団のなかに引っ込んでいく。

そのさまを苦笑混じりに見つめて、アレンが二メートル強の白筒を背に担ぐやふり返

らずに部屋を出た。

「くっそお………。なんでだ〜！ 兄ちゃんだつて、あの凄まじい量を食べたハズなのにい………」

「は、は……ん！ バカ、ダヌキめ！ アレン、さ、は……俺たち……とは、ひと味、もふた味も違えんだよ！ ……バカ！ ぐううっ………」

「んだと！ このアホ……っ、ぐ！ 力むと腹が………」

布団のなかに丸まって、狸を祖にもつメノデイクス族の少年、ロジャーは低くうめいて腹を抱えた。いつもゆつたりめの緑シャツに、カーキ色のだぼだぼのオーバーオールを着ているため、丸々と見えるロジャーの体型がいまや療養用として着せられた宿のパジャマのせいでポリウムダウンし、しよぼくれている表情も合わさつてまさに「子狸」のちんまりさである。

いつもかぶっている一角白眼モンスター顔の顔をあしらったヘルメットは外しておけと言われ、丸い茶色の頭から大きな狸の耳が元気なくひよこひよこ揺れる。

隣でうめいている悪友のルシオ——こちらは猫を祖にもつフェルプル族だ——もほっそりした^{からだ}躰をたたく布団から出てくる気配はない。

昨日は宿のトイレをどちらが使用するかで揉めたが、今日はその元気もない。

原因はわかっている。昨日の、「なんろうはんてん」でわがまま娘と揉めた一件のせい

だ。いま思い出しても食い意地を張りすぎたとロジャーはしみじみ後悔する。

——オイラ肉！ アレン兄ちゃん、肉頼もうぜ！

——あ、俺も！ 腹が減つちやつて……うまそうなやつお願いします！ アレンさ

ん！

目を閉じると、昨日の昼下がりが瞼の裏によりみがえってくる。ロジャーはうんうんうなりながらも、昨日のことを思い出していた。

………

………

王都の西側に、朱色の柱が目を惹く倭国料理店がある。石造りの外壁が主流の大陸建築とは異なる木造二階建ての店だ。さびれた都でも異国気分を手軽に味わえるため、おもに富裕層の一部がターゲットだ。珍妙で奇天烈、玄妙な味わいを楽しむならここに行け、と食通が口をそろえる評判の店だった。

薄紅色の羽織を着た倭国人と思しきウエイトレスに招かれ、アレンたちが円卓を囲んだのは店の端だ。入口からは遠く、店内が見渡せる位置。軍人だった習慣からもつと落ち着く席に案内されたアレンは、背の高い木椅子の座り心地にもうなずきながら高級紙の菜譜メニューを繰った。

「オイラ肉！ アレン兄ちゃん、肉頼もうぜ！」

「あ、俺も！ 腹が減っちゃって……うまそうなやつお願いします！ アレンさん」

円卓の左右から、ロジャーとルシオが元気に言ってくる。アレンは「わかった」と短く答えると、倭語で書かれた菜谱を翻訳機メニユイにかけ、ウエイトレスへのオーダーを終えた。「しっかし、アレン兄ちゃん。これからどうすんだ？ 【びるのあ】ってどこまでここから結構あるんだろ？」

ロジャーが、初めての異国料理に目を輝かせながらも、皿が出てくるまでの間に尋ねてくる。

アレンは難しい顔だった。

「午前中、ざっと調べたかぎりだが。この惑星の文明レベルは十四世紀程度。俺たちが目指すヴィルノアは大陸の西側にあつて、このアルトリアという国は大陸中央にあるんだ。周辺は山に囲まれ、海路は期待できない。港までどのルートを使つても距離があるから山を越えることになりそうだ。貴金属の換金は済ませてきた。あとは高速馬車でもあればいいんだが、馬の手配だな」

アレンの左側に座つた、大きなつり目の少年ルシオはアレンの言葉にうなずきつつも、バンダナの左右からこぼれる黒い猫耳を垂らした。

「けど、せつかくソフィアさんに協力してもらつて扉ゲイトをくぐり直したつてのに全然違う場所、しかも五年も経つちまつてるなんて。アレンさんの話だと夜の森道を歩いてた

子ども二人つて、よっぽど切羽詰まっていたんですね？」

「ああ、無事だといいいが。状況は極めて厳しい。せめて小型艇に乗ってこられれば一日と経たずにヴィルノアに入れるんだが」

「まあ、焦つてもしよーがねえじゃんよアレン兄ちゃん。なるようにしかなんねえ！」

元も子もないロジャーの正論に、アレンは苦笑を返した。あのとき森で出会った金髪の少年ルシオと街に向かうために解析器スキャナーを使ったが、そのとき表示されたのが宇宙暦七七四年一〇二〇。ミッドガルドの惑星暦では一二四一年だった。

ところがアレンが謎の黒髪の少年に元いた世界に戻され、フェイトたちと一悶着を終えたあとでやってきた世界ミッドガルドの惑星暦は一二四六年。宇宙暦は七七四年のまま、この惑星での時間のみが過ぎている。

（星界の指輪が探知したFD世界のエネルギーが関わっているのか、それともそれに似たなにか、か？）

いまは少しでも情報が必要だった。昼食にこの店を選んだのも腹を満たすためともう一つ、利用客だ。ヴィルノアに最速でたどり着く術、もしくは情報を富裕客から収集する算段だった。

しかし昼食の時間帯を外したのか、店内はまばらで、アレンたち以外に卓を囲んでいるのは一組しかない。店の中心卓についた大柄の傭兵アーリユーゼだ。アルトリ

アにつくなりルシオとロジャーとはぐれてアレンが困っていると、声をかけてきた男だった。

アレンよりも頭一つ分背が高く――二メートルはありそうな大柄の男だ。背に三メートルほどの幅広の剣を差し、引き締まった体躯たいくに青い肩当てとガントレット、膝当てのみの質素な防具姿である。金はなさそうだが動きに無駄がない。正規兵ではなく傭兵だ。まるで虎を思わせる迫力ある顔立ちの男で、額から左顎にかけて大きな刀傷が残っており、その彼とは対照的なのが、向かいに座っている、大きな白い帽子をかぶった女の子である。

アレンは卓越しに、アリュージェのなんとも言えない困惑と仏頂面がない交ぜになった顔を眺めた。

（傭兵なら大陸横断の術にも詳しいか……？　だがあの装備は遠方向けじゃない。街の顔ぶれも覚えているとなると、やはりおもな収入源はこの国内の防衛か）

兵士の信頼を得るには、おのれの実力を見せるのがもつとも手っ取り早い。

アリュージェは初対面で白筒に入れた兼定カクダナに気づいた男でもあった。

街に顔が利くのならば、馬車の手配に協力が得られるかもしれない。

「係の者を呼べ！」

鋭い女性の声に、アレンの思考が現実に引き戻される。アリュージェの連れの少女が、

血相を変えて立ち上がった。

「は？」

呼び止められたウエイトレスと少女の向かいにいるアリユーゼが、そろって目を丸くしている。

「係りの者を呼べと言っておろう！」

少女がかまわず怒鳴りたて、ウエイトレスはそそくさと店の奥に引つ込んでいった。

「おろうって……、王様じゃないんだから……」

アリユーゼが声をしぼるようにつぶやいて、テーブルに突つ伏す。

少女は赤い顔で立ったままだ。室内でも大きな青いリボンあしらった白い帽子をかぶっており、紺色のドレスは遠目でも仕立てのよさがうかがえる上等な身なりだった。傭兵アリユーゼの依頼人にしては、ずいぶんと若い。いま少女が掛けている大きな丸眼鏡も、掛けなおす頻度が高く、普段から使い慣れているものではなさそうだ。奇妙な取り合わせだ、とアレンは思った。

「なにかご不満でも？」

ほどなく少女に呼び出されて、店の奥から料理長と思しき男がやってきた。気難しそ

うな職人肌の男で、王都内でよく見る上下分かれた服装ではなく、白い羽織ものを着ている。鋭く小さな瞳が、じろりと少女を見た。

少女は臆せず、男を見るなり怒鳴りつけた。

「不満もクソもあるか！ なんだこの肉は？ 生であろう！」

「お客様……。それは倭国料理の一つでお刺身と行って……」

不審そうに眉を寄せる料理長に最後まで言わせず、少女がテーブルの上に置かれた椀を指さす。

「なんだこの濁ったスープは！ おまけに臭い！ 腐っているぞ！」

「お客様……。それは倭国料理の一つで、お味噌汁と行って……」

やはりそれも最後まで言わせず、少女はテーブルを叩いて、居並ぶ皿のなかでも、一際大きい皿を指差した。

「なんだこれは！ これは怪物であろう！ ここではクラーケンの子を食わせるのか？」

「お客様……。それはタコと聞いて……」

「ここはゲテモノ屋か？」

「とんでもございません」

気色ばむ少女に動じず、料理長がきつぱりと答えた。

異様な沈黙が店内に満ちる。

アリユーゼはテーブルに突っ伏したまま、頭を抱えてぴくりとも動かない。

「……妾はこんな屈辱を受けたのは初めてじゃ」

少女が拳を震わせて料理長を睨みつける。そのときだった。アレンのいる円卓が、ぱんつ、と大きな音を立て、みればロジャーが立ち上がって少女を睨んでいた。

「やいやい！ このワガママ娘！」

いうなり、円卓を囲む木椅子からひらりと飛び降りて、ロジャーが全身で怒りを表すように、びよんびよんと二度ほど跳ねるや少女に駆け寄っていく。

「黙って大人しく聞いてりゃ、さつきから一口も食わずにケチ付けやがって！ 食い物を粗末にすんのは、人を騙す次にやっちゃいけないことなんだぞ！ 父ちゃんも言うてんだ！ メラ間違いいえじゃんか！」

「な、なんじゃお前は!! 小汚い小僧が、偉そうに——」

言いかけた所で、少女がぎよつと目を見開いた。

自分の腰にも満たない、小さな少年。彼女が度肝をぬかれた視線の先では、ロジャー自慢のタヌキの尻尾がふさふさと揺れていた。

「し、し………っ?!」

少女が息を呑む。驚き過ぎて、尻尾という言葉が発せられない。代わりにアリユーゼ

が、驚いた顔でロジャーを見た。

「お前……、一体……！」

この国では、どうやら亜人は珍しいらしい。

面食らっている二人を置いて、ロジャーが嬉しそうに胸を張り、両腕を組んだ。

「オイラ？ オイラは、ロジャー！ ロジャーはまだ！ 団長なんだぞ、偉いんだぞ！」

「バカダヌキ！ 浮いてんのが分かんねえのか！ この大馬鹿！」

アレンの円卓から、またひとり、少年が飛び出していく。ロジャーの悪友、ルシオだ。黒猫のしっぽと耳をもつ細身の少年が、少女たちの傍までいくと、少女はロジャー同様、人ならざるしっぽと耳をもったルシオを見て、顎が外れんばかりにぼかんと口を開けていた。

「し、っぽ……、みみ……」

ロジャーとルシオが、不思議そうに首をかしげる。

「どうした？ 姉ちゃん、どっか気分でも悪いのか？」

「医者呼んだ方がいいか？ バカダヌキにバカ伝染されると、もう治んねえぜ。アンタ

「んだとお！ このアホネコ！」

「やんのか、バカダヌキ！」

二人の少年が額のくつつく至近距離で互いに睨み合う。

アレンが溜息を吐いて立ち上がった。様子見はここが限界のようだ。
「二人とも」

アリュューゼと連れれの少女がこちらを見る。二人の視線がアレンの耳と背後に向いている気がした。おそらく亜人か確認したのだろう。獣の特徴がアレンにはないのを確かめてから、アリュューゼがにやりと口端を広げた。

「よお」

「どうも。さきほどぶりですね」

何事もなく答えるアレンに、アリュューゼが鼻を鳴らす。

「なんだ。やり合うってのはその場きりの話かと思つたが……。まだ闘志は衰えてないようだな」

態度に反して、アレンの目には今にも白筒から得物を抜きそうな気迫がある。アリュューゼが揶揄やうすると、アレンは視線をアリュューゼから向かいに座っている少女に向けた。

「それで、そつちは？」

触れてほしくない所を――。

とアリュューゼが胸中でつぶやいたのが表情から読みとれた。

「ええい。喉が渴かわいた！」

アリユーゼが答える前に、少女がテーブルのグラスをにぎるや一気にあおる。細い喉がごくごく動いたのもわずな間で

「げほっげほっ!？」

少女が目を白黒させながら、上体を折って激しく咳き込んだ。

「げほっ、げほっ……なんだこの水は!?! 毒を盛って殺すつもりか!?! こんなことをして……どうなるか……」

少女の顔がみるみる紅潮していく。彼女の愛らしい丸顔が振り子のように揺れ、そして――

「万死に、値、するぞおっ!」

全身の力が抜け落ちたように、彼女はぼたりと倒れていった。

「お、おい!?! 姉ちゃん!」

「大丈夫かよ!?! アンタ!」

巫人の少年二人に続いて、アレンも少女の傍に寄る。アリユーゼが呆れた表情で、ちらりと連れが流し込んだコップを見やった。

「それ、酒……」

どこか他人事のようにつぶやくアリユーゼは、もしかすると少女の行動が予測できず圧倒されたのかもしれない。アレンは少女の額の上に手をかざすと、解毒の紋章術を唱

えた。青白い光が、すう、と少女の全身に降り注いでいく。

「急激にアルコールを摂取して、意識が混濁しています。毒性は抜いたので心配ありませんが、しばらくはこのままで」

アレンは説明しながら、ゆっくりと少女を横たえる。少女は眠ってしまったようだ。アリユーゼがため息を吐いて、

「世話をかけたな」

と謝ってくる。アレンが「いえ」と苦笑する間に、アリユーゼは少女、アンジエラを背負って席を立った。

「悪いが、勝負は……またお預けだ」

「お大事に」

「ああ」

のそのそと初めて会ったときの迫力はどこへやら、アリユーゼがややしょぼくれた背中を店を出ていく。そのときだった。

「お会計をお願いいたします」

ウェイトレスが差し出した紙片を見て、アリユーゼが目を見開いた。度肝を抜いたのは、その金額。いつもアリユーゼが通う酒場なら、三度は気持ちよくなれる超高額だ。

「っ、っっ」

険しく表情をしかめながらも、アリユーゼの頬に汗が伝う。

「なあ、兄ちゃん」

アリユーゼが懐から財布を取り出したあたりで、背中中で、ロジャーが猫なで声を上げた。

「この料理……、食っちゃダメかあ？」

一口もつけずに並べられた中心卓の倭国料理。ロジャーが物欲しげに見つめているのを見て、アリユーゼは小さく肩をすくめた。

「好きにしろ。どうせ捨てた金だ」

アリユーゼは乾いた失笑を残して店を出ていった。ロジャーが、あんがとな！ と、店の外まで聞こえる声で礼を言ったが、アリユーゼに答える元気は残っていなかった。

結局、倭国料理店で酒に酔いつぶれたアンジェラを自宅まで運ぶ羽目になったアリユーゼはため息を吐いていた。

「それで、結局は内容は聞けず仕舞いだったの？」

「……まあな」

弟のロイに問われ、アリユーゼは椅子に腰掛ける。呑気なアンジェラの寝顔を眺めながら倭国料理店での顛末が脳裏をよぎった。

まったく、とんだ災難である。

軽くなった財布が、ポケットの中で存在を主張している気さえする。

「う、うくん……」

ベッドに眠った少女が、寝苦しそうに眉間にしわを寄せ、寝返りを打った。

「いい気なもんだぜ」

アリユーゼは溜息を吐くと、台所で水でも呑もうと席を立った。

そのときだ。

彼女の目許を覆っていた、やけに似合わない丸眼鏡と帽子がずり落ちた。輝くような白皙の美貌が、アリユーゼの眼に入る。

アリユーゼは思わず目を瞠った。あまりの事態に、一瞬思考が凍る。

「じえ、ジェラード、王女!」

「一体どういうことなの?」

同じく、驚いた様子のロイが、訝しげに眉を寄せて問うてくる。アリユーゼは首を振った。

「さあな。変装してまで俺に仕事を依頼する理由なんて、わからねえよ」

率直な感想だった。

だが、目の前で眠る王女は、間違いないアルトリア王女であり——謁見の間での、あ

の勝ち気そうな風貌がアリユーゼの脳裡に蘇る。

一体どういうことなのか。

問い正そうにも、ジェラードが目覚める気配は一向になく。

ロイもしばらく部屋で様子を見ていたものの、結局、首を捻りながら居間へと引き揚げていった。

「……さま」

「ん？ 寝言か」

ふと寝息を立てていた王女が、なに言かつぶやいた。それが言葉のように聞こえて、アリユーゼは耳をそばだてる。

「お父、さま……」

「……………」

王女の眉間に寄ったしわを見据えて、アリユーゼは表情を改めた。

お父様——アルトリア国王の顔を、なんとはなしに思い出す。

アリユーゼのような傭兵の身分が王族の目にかかる機会などめつたにない。あるとすれば、この間の魔鳥討伐の褒賞式だ。

討伐隊のだれよりも魔鳥ハルシユウダを多く仕留めたアリユーゼは、はじめてみたアルトリア王の顔を、なんとも精彩に欠いた、ぱつとしない男だと思った。弱小国の主に相応しい、冴

えない男。金貨袋とともに、「王は分け隔てなく広い心で」下位身分の傭兵に褒賞の銅像を下賜かされた。そのときの王は口ではほめそやしながらもまったく温度を感じさせない目でアリユーゼを見下みくだしたのだ。

国内に侵入した蛮族を騎士団だけで退けることもできぬ、この国の王である。

——ハハハ、悲しいな。王よ。俺はこんな茶番に付き合うほど暇じゃあない！

アリユーゼはもらったばかりの銅像を王の目のまえで叩き切ると、王間を去った。華美な宝飾に包まれた王の間は、貧困にあえぐアルトリア王都とは無縁のきらびやかさだった。

「侮辱した、アリユーゼ、万死に値、する、ぞ」

ふと、目のまえで眠る王女が、唸りながらベッドのなかで身を小さくする。

アリユーゼは目を丸めた。数秒、押し黙る。言われた意味を理解するのに時間はそうかからない。あのとときの褒賞式。たしか王女は、愚王のとなり立っていた……。

「そうか、そうだったな」

一向に繋がらなかった点と点が、ピン、と一本の線になった気がした。

アリユーゼはつぶやきながら、王女の眠るベッドに歩み寄り、腰掛けた。

あの愚王に対し、アリユーゼは間違ったことは言っていない、と確信している。だが王女子ともの前で親を侮辱してしまった——そのことについては、あらためて謝らなければな

らない。

しばらくしてアンジェラは酔いから目覚めると、慌てて周囲を見渡した。

「ここは？ もう夕方ではないか！」

窓から見える外の様子に蒼白になった彼女は、眼鏡をかけ直して身支度を整えるやろくにこちらも見ず「依頼はまた明日でも」と言い残して早々とアリューゼの家から去っていった。

翌朝、アンジェラよりもさきにアリューゼ家の戸を叩いたのは、いつものギルドの使者だった。陰気な女はアリューゼの腕を見込んで、荷馬車をヴィルノアまで運んでほしいと依頼してきた。

アリューゼは、その依頼を受けることにした。

「はい、胃薬だよ。お大事にね」

「ありがとうございます」

薬屋の店主に頭をさげてアレンが店を出ようとしたとき、ちょうど王城から騎馬兵たちが、凄まじい速度で街路を駆けていった。

アレンが首をかしげる。深いため息が店の奥から聞こえ、ふりかえると薬屋の店主が

寂しそうにつぶやいた。

「またヴィルノアが攻めてきているのかもしれないね。……十年前まではよかつたんだ。あの内戦があるまで、アルトリアには優秀なひとがいっぱいいた。だけど当時の第一王子と第二王子が王位継承権をめぐる争つちまつて、優秀なひとがいっぱい死んだ。戦乙女に召されたひとどつて何人かいたそうだよ。それが、いまの陛下は税を湯水のように使つちまつて、もう傭兵に頼るしかない情勢だろう？　だけど陛下はまだアルトリアは強いままだとお思いで、ぜいたくすることしか考えないんだ。ロイエンバルグさまがいまもご存命であつたなら……」

独り言のように続く店主の言葉を聞きながら、アレンは騎士団が駆け抜けた街路を見た。さきほどの騎兵の装備、どちらかという戦地に行くというより速度を優先していた。なにか事件があつたのだろう。

（事件……）

ふと思いだしたのは、昨日倭国料理店で出会つた男のことだ。左目に刀傷を負つた軽鎧とも呼べぬ装備をした男、アリュージェ。

アレンはハツと瞬き、視線を伏せて小さく苦笑した。

「……悪い癖だな」

血が疼く。金髪の少年ルシオのことも気がかりだが、あのアリュージェという男の、強

い眼差しと視線が合ったそのときから。

自分の身長より長い相棒の入った筒を、強く握り締めた。湧き立つような衝動を抑えるが、意に反して口許に浮かんだのは好戦的な笑みだ。

きびすを返す。

馬の速さについていくのは、なかなか骨の折れる。数時間程度なら問題ないが日をまたぐと少々厳しい。だが幸いと、彼には小型解析器クォットスキヤナーによつて騎士団の座標を特定する術がある。

だから――。

「行くか」

アレンはつぶやくなり、アルトリア街路を風のように疾駆した。

――まったくロンベルトさまさまだぜ！

アリュージェとともに移送の依頼を受けた傭兵は、吐き捨てるように言いながら、両腕を頭の後ろで組んでいた。荷物の中身がわかるまえ、アリュージェはバドラックというやけ面の壮年傭兵とともに呑気に荷台を引いていたのだ。

ロンベルト――。

アルトリアの重臣の名前を聞いて、アリユーゼは、はた、と瞬いた。

「ロンベルト？ アルトリアの重臣の？ あの女が依頼主じゃないのか？」

女はギルドの人間だ。見れば分かった。

しかし、ロンベルトと聞いてアリユーゼが連想したのは——青いリボンをあしらった白い帽子の少女。高貴な身分の者たちだ。

関連性のない二つの事象に、バドラックは戸惑うこともなく、にやりと笑った。

「なんだ、そんなことも——」

初めてアリユーゼが反応を返したことに満足し、バドラックが答えようとしたそのときだった。

ふと、彼の耳に異音が届いたのだ。

馬車を止めてみる。

「——おい相棒。後ろからなにか迫ってくるぜ」

「なんだと？」

言われて、アリユーゼも耳をそばだてた。

——確かに。

なにかが——それも複数の蹄ひづめの音が、猛スピードでこちらに向かつてくる。

バドラックは荷台から覗きこむようにして、後ろの様子を見やった。

「ありや、騎兵だぜ！ しかもあんなに！」

「騎兵？」

首を傾げるアリユーゼに対して、バドラックはなにかしらの危機を感じたようだった。

慌てて手綱を叩くが、あつという間に騎兵に追いつかれる。

そのときになって初めて、アリユーゼはアルトリア騎兵の銀甲冑を見つけた。

——なにかを追っている様子だったが、それがまさか俺たちだったとは……。

いまにして思えば、このとき、疑問を抱くべきだったのだろう。

自分の愚鈍さと、

周りの目まぐるしい状況の変化に。

「アルトリア国王の命だ。至急、荷物を確認させてもらおう」

「おい、待てよー！」

一団を先導していた部隊長は、荷馬車を囲むやバドラックの制止も聞かずに部下の兵を動かした。ほかの兵士がアリユーゼたちを押し退けるようにして木箱の周囲に集まり、鎖を取り外しにかかる。

まったくアリユーゼたちに見向きもしない。

「逃げるぞー！」

その隙に、アリユーゼは駆けた。馬車の手綱をさっさと放り投げ、素早く街道の端——森のなかへと駆けこんでいく。

だが、アリユーゼよりも先に騎兵に気付いたはずのバドラックが、なぜかもたついていた。

「おい、なんだちよつと……」

ハイエナ感覚を持つ男が、齒切れ悪く騎兵の様子をうかがっている。

ちよどアリユーゼたちが引いていた馬車の積み荷——木箱の錠が壊され、外側の鎖が引き千切るように外されたところだった。

兵士の手が、木箱の蓋に手がかかる。

「いましたー！」

「あつー！」

バドラックの驚きが、耳をつく。

アリユーゼは息を呑んだ。驚きが、声にならない。

ただ息を呑んで目を睜みはった。

開け放たれた木箱から、兵士が抱きかかえるようにして取り出したのは、ひとりの人間。

少女だった。

飴細工あめのような見事な金髪がだらりと零れ、きつく閉じた瞼は開く様子がない。

アリユーゼの位置から少女の姿は見えづらいが、そのあどけない横顔を、彼が見紛みまごうハズもなかった。

荷から出てきたのは。

——青いリボンの帽子と似合わない眼鏡。

あの、お転婆王女。

——愚鈍な父を殊勝にも慕う、誇り高きアルトリアの娘。

ジェラードだった。

……………

「こりや夜を待つて逃げるしかねえぞ」

バドラックの声を頭の端で聞き流して、アリユーゼは事態を整理していた。幸い、騎兵は王女の対応に追われ、アリユーゼたちを捕縛するに至っていない。

ひとまず身を隠すことには成功したが、安心など出来るはずもなかった。

——なぜだ。

アリユーゼは混乱する頭を静めるように、自分に問いかけた。

——なぜ、あのおてんば姫が馬車の荷として運ばれていたのか。

「……………」

「しかしロンベルトの野郎、しくじりやがって！」

ふとバドラックが洩らした言葉に、アリュージェはカツと頭に血が上るのを感じた。

「てめえ！ 知ってたのか！」

背中の大剣に手をかける。

バドラックが慌てて首をふった。

「な、中身は知らねエ。だが依頼主はいつもロンベルトだったんだ」

いつも——。

不穏なバドラックの言葉に、アリュージェの眼光が鋭くなる。

「あの騎兵たちはロンベルトのことは知ってるのか？」

「は？ んなわけねエだろうが。ロンベルトはなあ、ヴィルノアのスパイなのさ」

「なんだと？」

思いもよらぬ発言にアリュージェが絶句するなか、バドラックが肩をすくめた。

「中身が分かれば訳はねエ。王女を誘拐したら、アルトリアはヴィルノアの好き放題だ

ろうさ」

そうバドラックが安穩と言い捨てる。

そこまで分かっているが——。

アリユーゼは拳を握り締めた。

荷から降ろされたジェラードの——ぐったりとした姿が脳裡のうりに浮かぶ。

性根の腐ったこいつを殺してやりたかったが、それよりも今、俺は——

——はあ、アリユーゼ……

苦しい、助けて……

助けて！

「うわああああ！」

「ぎゃああああ！」

突如、男の悲鳴が聞こえ、バドラックとアリユーゼは来た道を引き返した。

「なんだ？」

茂みに隠れながら、街道を見やる。

一体の魔物がいた。

赤く頑強そうな表皮の——筋骨隆々な二足歩行の魔物。魔物はすでにアルトリア騎兵数人を屠ほぶつたらしく、鋭い爪におびただしい血がこびりついていた。

「おいおい、なんだありやア！」

「た、助けて……」

唯一生き残ったアルトリア騎兵が、必死に地面を這いながら近づいてくる。その騎兵に、アリユーゼが問いかけた。

「おい、いったいなにがあつたんだ？ ジェラードは？」

「あ、姫の意識がなかったから、隊長が、ロンベルト様から預かつた薬を飲ませたら……」

「あれが、お姫様だつてののか!？」

バドラックの驚きはもつともだつた。

可憐な王女の面影が、この魔物にはまるでない。

ロンベルトは二重の手を打っていたのだ。

誘拐の発覚を予見し、王女搜索部隊に薬を持たせ――

俺たちがヴィルノアにたどり着けばなんの問題もなく、仮に発見されたとしても騎兵は薬を使うだろう。

王女の意識がないのは、最初から分かっているのだ。

効果は見てのとおり。

王女は魔物と化し、真相を知る者は残らず死ぬ。

たぶん王女すらも。

「あれは、グールパウダーを飲まされたに違いねエぞ」

確信を持つて言うバドラックに、アリユーゼが眉をひそめた。

「グールパウダー？」

「ああ。人間を魔物にしちまう薬。ネクロマンサーの常套手段だぜ」

「ロンベルトが、ネクロマンサー？」

思っていたよりもショックが大きかったのか。

アリュージェの思考は空転するばかりだった。

異形——見る影もない魔物を見据え、目を細める。

「アンジエラ……」

「アンジエラ？ つて、ジェラードだろうが。オメエ、こんなときになに言ってるんだ？」
バドラックが呆れたように言うのと、さっさと荷物を担いできびすを返した。

「もうアルトリアには戻れねエぞ。俺は逃げるぜ、あばよ」

そんな捨て台詞さえ吐いて、バドラックが飄々ひょうひょうと茂みの奥に走り去って行く。

それを見送るでもなく、アリュージェはただ茫然と、目の前の魔物を見据えていた。

——たぶんあいつの選択が正しいんだろう。

だが、俺は逃げる気にはなれなかった。

戦場でもこんな気分になったことはない。

異形の姿が、ジェラードとかけ離れていればいるほど。

アリュージェの中で、青いリボンの帽子をかぶったアンジエラの顔が浮かんだ。

あんなバレバレの変装で無邪気に笑って、突拍子もないことで怒り、

父王のために、単身でアリユーゼの家に乗り込んで来た——

——ジェラードは、いったいどうすればいいのか……。

アリユーゼが考えを巡らせている間に、魔物が鋭い爪をふり下ろしてきた。その軌道は完全に、アリユーゼの首から上を薙ぎ倒す。

このままでは——、

(やられる……！)

闘争本能が危険を告げる。だが意に反して、アリユーゼの躰はからだびくりとも動かない。

すべてがスローモーションに。

鋭い爪が、己に向かつてふり落ちて来るのを見据えている。

ゆっくりと——

斬られる、と確信した瞬間に、空気を裂く音がした。あまりに突然の出来事で、一体なにが起きたのか、アリユーゼですら咄嗟に判断できない。まるで彼の意識ごと切断するような鋭い音。

「！」

アリユーゼは、はた、と瞬いた。

眼前で、白刃が一閃。ふり抜かれている。アリユーゼの首を、たったいま跳ね飛ばそうとした魔物の右腕が、その斬線と共に地面に転がっていく。

魔物の血が飛び散っていく。

アリユーゼの目を奪ったのは、陽に映える淡い金髪。魔物を切り裂く白刃の、凄まじいきらめきだった。

「……………」

思わず息を呑む。

——剣鬼。

不意に、アリユーゼは思った。

魔物の腕を断ち切った青年が、意志の強そうな蒼穹の瞳をぎらつかせる。青年の、身の丈以上もある剛刀が、彼の意志に合わせて輝いた。ぐつと。彼が刀を握り込む。

——アンジェラが、斬られる！

「待てっ！」

咄嗟とつさの予感にアリユーゼが叫ぶと、動きを止めた青年が、驚いたようにこちらをふり返って——、後ろに跳んだ。

魔物の豪腕が、その一寸先をかすめていく。

青年の淡い金髪をさらって。

氣付けばアリュューゼの躰からだも、青年によつて引き倒されていた。「どうした!? なにかあるのか!？」

刀を握っているからか、それとも、魔物が目の前にいるからか。青年——アレンは、鋭い口調で問いかけた。

そのとき。アリュューゼの頭上で光が生じ、炸裂するのを感じた。魔物が吹き飛ばされ、背中から地面に倒れる。

「人間よ。命は投げ捨てるものではない。お前も戦士ならば、戦いの渦中にこそ道を見出すべきだろう」

光が、アリュューゼの目を奪っていた。

アリュューゼが顔を上げると、天空から蒼穹の鎧が浮かび上がる。

陽光を跳ね返す、透き通るような白い両手足。

やわらかな風になびく、長い白銀の髪。

華奢な女の腰には、一振りの剣が差してあった。

「戦乙女、ヴァルキリー?」

神々しい光を放つて現れた女は、凜とした眼差しを魔物に向けた。

——聞いたことがあった。

神々は、魂ほろとくを冒瀆する存在と常に人知れぬ場所で戦いを繰り広げているのだというこ

とを。

4. アルトリア編 孤高の傭兵

「戦乙女、ヴァルキリー？」

「……戦乙女？」

アリユーゼが口にした言葉をアレンも反芻^{はんすう}してみる。突如、空から現れた女神と地上にそびえ立つ魔物。

(……なんだ、この感覚は。寒気がする)

アレンは、女神——レナス・ヴァルキュリアを見据えて剛刀を握りしめた。

見た目でいえば、魔物の方が遙かにおぞましい。だが目の前にいる女性にはまったく気配がない。角度によって蒼銀にも紫銀にもなる珍しい髪は、アレンが捜している子どもの片割れ——たしか「プラチナ」と言っていた——に似ている。

(これがウイルフレドの言っていた、戦乙女……?)

だが、いまそれよりもアレンは、アリユーゼがなぜここまで憔悴しているのか、理由を探している。

(鍵は……あの魔物)

魔物を睨み据えて、アレンは推理する。同時。アリユーゼが大剣を握りこんだ。その

手から、アリュージェは気付いていないが白い羽がこぼれ落ちる。小さな、光の粒子だった。

「……羽？」

かすかな気の流れを感じ取って、アレンがまたたく。考えている間はなかった。魔物が腕を振りかざし、戦乙女レナスに襲いかかる。

「！」

アレンが兼定カタナを抜き打つよりも早く、レナスは軽く跳躍して魔物の爪をかいくぐると、両手で上段から剣を打ち込んだ。

「ガアアアア……！」

魔物が耳障りな悲鳴を上げる。レナスの隣を、アリュージェが駆った。レナスがわずかに目を見開く。それも一瞬だ。思い直したようにレナスが目を細めたとき、間合いを詰めたアリュージェが、獣のように吼えた。

「おおっ！」

恫喝とともにアリュージェの大剣が、魔物の心臓を貫く。魔物がびくりと軀からだを震わせる。アリュージェは構わず大剣を引き抜いた。魔物の血が噴き出る。瞬間。アリュージェの大剣に、炎がまとわり付いた。

「……今、楽にしてやる」

アリュージェは、自分の声がどこか遠く感じていた。

轟音を立てて、魔物を刺し貫いた大剣が上空に向かつて切り上げられる。分厚い筋肉でおおわれた魔物の胸板が削がれ、飛び散る血が大剣にまわり付いた炎によって蒸発していく。

「気功……！」

アレンがつぶやく間に、魔物の巨体が転がっていく。

たった一撃だった。

それ以上、魔物が動く気配はない。アリュージェがぎりつと奥歯を噛み締めた。

戦いは、アリュージェにとって最高の喜びだった。

だが、いまは——。

死体と呼ぶにはあまりにも陰惨とした異形の骸を見据えて、アリュージェはきびすを返した。肩で息をしながら幽鬼のように歩き始める。その背にアレンは声をかけようとして、止めた。

代わりに空を仰ぐ。そこに現れた「ヴァルキリー」と呼ばれた女性を見上げて、

「あなたは、一体……？」

事態が呑み込めず問いかける。

レナスは異形の傍まで行くと、静かにこちらをふり返った。

「お前は、本当に人間か？」

真顔で問うてくる。

アレンは訝しげにレナスを見た。

「……ああ？」

むしろ人間以外のなんだというのか。

アレンは質問の意味が読めないままうなずいた。レナスは無言で目を伏せると、アレンの問いに答える気がないのか、そのまま異形に向き直った。

（人間が、私の加護も受けずに不死者の右腕を断ったというのか……）

胸中でつぶやきながら、レナスは精神を集中させる。

異形の屍が、淡い光を放ち始めた。

レナスの胸許——差し伸べられた彼女の両手の中に向かって、屍から浮かんだ光が、ゆつくりと舞い上がっていく。

すう——……、

何者にも侵し難い、清廉な空気が広がっていく。

「——」

そのあまりに幻想的な光景に、アレンは数瞬、目を奪われた。

この女性が人でないモノだと、気付いてはいた。

原理は分からないが、彼女がした行動をアレンはなんとなく感覚でつかめる。異形の屍から舞いあがった光が、レナスの躰からだに溶け込んでいったのだ。

「教えてくれ。その魔物は一体——」

アレンは言いかけて、ざっと辺りを見渡した。

——……ッ、

今度は、冷えた空気を感じたのだ。

人の気配。

言うなれば、狂気。

「そこか——」

手許の剛刀を払うと、アレンの剣先から真空の刃が地面に奔はしった。ふり切った先の大木が苦もなく切り倒される。この凄惨な現場に居合わせた、狂気を孕んだ人物。

深く考えなくとも、事件に関わる人物と分かった。こちらを監視するような、視線を感じたのだ。だが手応えがあったにも関わらず、切り倒された大木の先にはなにもない。

——否。

アレンは目を細めた。

(……揺れている?)

大木の陰に隠れていたのは、アレンは知らないが——魔術師風の男だった。丸眼鏡をかけ、慇懃で暗い笑みを浮かべている。その男の気配が、アレンの斬線で揺らいだのだ。まるでこの場にいるように見せているだけの、影のような——。

「何者だつ、お前は！」

レナスが跳躍し、男のいる方へと剣を抜いて走った。そのわずかな間。男にレナスが詰め寄る間に、木陰にいた男の影はなくなっていた。

「……………」

油断なく、レナスが視線を左右にふる。だが、もう気配を探ってもなにも感じない。街道の左右は山のため見通しはよくないが、レナスの目を掻い潜れるほどははずもない。なのに、見失った。

忽然と、男が消えたのだ。

「……………何者だ……………？」

誰も居ない街道の脇を睨んで、レナスがつぶやく。先ほどまで、木陰に居た男は完全に人間の気配であつたというのに。

それに——、

（私ですら気付かなかつた気配に、気付いたのか。……………人間が）

いくら浄化した魂を取り込む、精神集中の最中とはいえ。

レナスは横目でアレンを睨むと、空に溶け込むようにして消えていった。あとに残ったのは横たわる異形の死体と、騎士十数人の遺体。

そして――、

「……一体、なにが起きている……？」

レナスが去った空を見上げて、アレンは小さくつぶやいた。

レーテ街道を歩きながら、アリューゼは酷く虚ろな――ぎらついた殺気を纏わせていた。

いつか、弟が言っていた言葉が脳裏に過ぎる。

――つまらないと感じるのは、兄さんが満たされているからだよ。

(違う！)

アリューゼは、ぎぎと奥歯を噛みしめ、吐き捨てた。

(他人が朽ち果てることで、自分を確認できる)

戦場で、いくつも屍を作った。

背負った大剣をふり、己の強さを誇示するように、笑みさえ浮かべて何人もの人間を葬ってきた。

(……そうだ。絶対的な価値観を持つことができず、相対的にしか判断できない人種)

何人も、何人も何人も。

殺して、殺して——

他人を見下す思い。歪み。

戦場で自分が浮かべる笑みを、胸の昂ぶりを思い出して、アリユーゼは虚ろな気持ちで空を見上げた。

「俺も、あの国王と同じなんだ——」

つぶやいた言葉が、あまりにも他人事のように感じながら。

………

「お願いじゃ！ アリユーゼを助けてやってくれ！」

悲痛な少女の、レナスによって魂を取り込まれたジェラードの声に、レナスは眉一つ動かさずに問いかけた。

「助ける？ 助けるとは一体どのようなことを指す？」

静かに、厳かに。

思わず、えつと口を噤んだジェラードは、幽鬼のように街道を歩くアリユーゼを見下

ろして、うろろうと視線をさ迷わせた。

「そ、それは……」

「生き続けることか？ それとも、私に選ばれることか？」

ぱくぱくと酸欠の金魚のように口を開閉させるジェラード。逡巡しているうちに、うまく言葉に出せない自分に、苛立ちが涙となつて溢れそうだった。

「それは——！」

それは、

……

「そのうちくるだろうとは思っていたが。おとなしく逃げていればよいものを……。ここで騒ぎを起こしたところでなんの得もあるまい」

執務室に悠然と佇むロンベルト。その鼠顔を睨んで、アリユーゼは心の底から吐き捨てた。

「ほごくな！ 貴様に得があることが許せねえだけだ！」

大剣を握りしめる。ロンベルトとの間合いは五メートル弱。アリユーゼはいつでも

切りかかれるよう膝を曲げた。怒りで犬歯をむき出し、凄まじい殺気を放つアリユーゼを前に、ロンベルトはなぜか笑みを崩さない。

「なるほど。アリユーゼよ、お前は武勇に優れてはいるようだが、呪に関しては知識が浅いようだな」

「なに？」

「——それが、命取りだ」

わずかに目を細めるアリユーゼに、ロンベルトは人差し指を突き出し、下に向けた。

「金字方陣とはな。フフ、このようなものを言うのだよ」

「—」

瞬間。

アリユーゼの足もとに黄金の方陣が浮かび上がった。

「ぐああああああ……っっっ！」

脳髓を焼かれるような鋭い痛みが、アリユーゼの全身を駆け巡った。

黄金の方陣から雷花が放たれ、火花を散らして中空で踊る。その様を、眼鏡の奥で冷静に観察しながら、ロンベルトは思案顔を作った。

「しかし不思議だ。逃げたならまだしも、グールを倒すことが人間に可能なのか？」

アリユーゼの武勇は兼ねてから聞いている。故に、彼が生きてアルトリアに帰ってき

たこと自体には驚かなかつた。

問題は――、

ロンベルトはちらりと、金字方陣の中で悲鳴を上げるアリユーゼを見やる。

――人にあらざる不死者を殺すことが出来るのは、人にあらざる者でしかない。

昔、ロンベルトが読んだ神学書の一文だ。

それに関連する「ある女神」のことを思い出して、ロンベルトは、はた、と瞬きを落とした。

「まさか」

アリユーゼが本当に、自力でグールを倒したとすればこの金字方陣すらも今頃無力化しているに違いない。

それがいまも為されていないことを考えれば――

――こいつじゃ、わらわを裏切った男は！

不意に、聞き覚えのある少女の声がして、ロンベルトは鋭く周囲を見渡した。

(！)

固唾を呑む。

完全にグール化した人間の――死んだはずの王女の声だ。

ロンベルトの杖を握る力が、強まる。

と。

落雷のような眩さに、ロンベルトは目をつむった。

すぐさま、隙を作らぬよう目を開ける。そこに、殺意に満ちたアリュューゼが低く唸っているのが見えた。その背には、蜃気楼のように揺らめく、何者かの影。それをロンベルトが凝視すると、蒼穹の鎧と白銀の髪がうっすらと浮かび上がった。

戦乙女——ヴァルキリー。

「な……っ!」

ロンベルトは息を呑む。

視認した瞬間、アリュューゼを縛っていた金字方陣が、音を立てて消し飛んだ。

「ロンベルトおおおっ!」

幽鬼と化したアリュューゼの大剣が、直後。ロンベルトの腹を深々と抉る。

「ぐ、あ、はっっ!」

あまりの激痛にロンベルトは顔を歪め、口から血を吐いた。助けを求めるように、口ンベルトの手が宙を掻く。

彼の視線は、アリュューゼの後ろで悠然と佇んでいる、戦乙女を向いていた。

「なる、ほど……! やはり貴様が……、暗躍していたのか……!」

人間の魂を冒とくする者と、戦い続ける神。

冥界の女王・ヘルを信奉するネクロマンサーにとつては、まさに天敵と呼べる相手。

「なに言つてやがる、暗躍は貴様の得意技だろうが！」

アリユージェは吐き捨てるように言うと、造作なく大剣を引き抜いた。

ロンベルトの意識が暗転する。

床に転がったロンベルトの命は——尽きていた。

「ロンベルト様！　いかがなされ——……」

数瞬後。

物音に駆けつけた兵士が、床に転がったロンベルトを見て血の気を失った。

「ア、アリユージェっ！　貴様っ！」

兵士が咄嗟にいきり立って、剣をふってくる。

それを造作なくアリユージェが切り捨てると、また新たに、別の兵士が部屋に駆け込ん

できた。

何人も、

何人も。

……

「賊め！ 覚悟しろ！」

（俺が賊だと？）

心のなかで失笑しながら、アリユーゼは単調に襲いかかってくる兵士たちを斬り殺した。

どれもこれも、片手間に始末出来る。

それほどまでに、アルトリア騎士団の質は劣悪だった。

「俺はどうやらお前の世話にはなれないらしいぜ。死ねないんだからな」

後ろで静かに佇んでいる——恐らく、アリユーゼ以外には見えていない——女神をふり返って、アリユーゼが乾いた笑みを洩らした。

「真に強い勇者の魂は神界には導けないってか？ ははは！」

「うぬぼれるな人間よ。強さが全てではない」

「ふん、言ってくれなれ。死神が」

敵を前にして、

この大剣をふるって——、

今までで、一番空虚な時間だった。

どれもこれも、まるで紙のように死んでいく。

どれもこれも、まるで意志を持たない人形のように——。

何人もの兵士を斬り殺しながら、アリュューゼの心は空虚だった。

戦いは、己の中で生きがいだったはずだ。

なのに、今は——なにも感じない。

稚拙な兵士の上段切りを劍の腹で弾き、止めの一撃を——

止められた。

「！」

わずかに、アリュューゼが目を見開く。

いつの間にか目の前に居たのは、玉の汗を掻いた、金髪の青年だった。おそらく彼の身長より長い剛刀を手にして。

「……それ以上、殺すな」

蒼く澄んだ瞳で、彼は言った。

殺人という狂気に、憎悪という悪意に突き動かされたアリュューゼを、戒めるように。

「てめえは……」

青年の——アレンの劍を払い除けて、アリュューゼは距離を置く。

弾いた、と思ったアリュューゼの大劍が、それと同時、

真つ二つに切り裂かれた。

「！」

長年、アリユーゼと共に激戦を生き延びてきた大剣が。

瞳目どうもくして、アリユーゼがアレンを見ると、アレンは鋭い眼差しを兵士たちに向けた。

「剣を納めろ！」

空気が震えるほどの叱責だった。

アリユーゼに多くの仲間を殺され、気色ばんでいた兵たちが、びくりと肩を震わせる。

静寂が満ちていった。物言わぬ死体となった、ロンベルトを置いて。

アレンはアリユーゼに向き直ると、複雑な表情を浮かべてアリユーゼをじつと見据え

た。——あまりにも哀しそうに。

「……すまない」

それがなに対しての謝罪か、アリユーゼには分からなかったが、アレンはなにかを悔やんでいる様子だった。

拳を握りしめる彼を見返して、アリユーゼは不意に、腹の底から笑い出した。

虚しく響く、笑い声で。

——そう言えば、この青年は。

自分が、酷く馬鹿げたことをしていると思ひ出した。

馬鹿げてはいるが——後悔はない。

アリュージェはひとしきり笑ったあと、アレンに向き直ると、静かな眼差し向けてくる青年を見据えた。

「まさか、こんな所でもう一度会うとはな。一体、どういうつもりで追つてきやがった？」

「……訊きたいことがある。貴方が、あの魔物を殺すことを躊躇ちゆうちよした理由。——今は復讐鬼の顔で剣をふるう、その理由」

復讐鬼。

きつぱりと言い放つアレンに、アリュージェは苦笑を洩らした。

「……別に。こうするのが一番手っ取り早いってだけのことだ。まあ、お前に話したところはどうにもならねえよ」

ロンベルトを殺した、この状況では。

すべてが終わった、いまでは。

アリュージェは乾いた溜息を吐くと、背後に浮かぶ戦乙女を挑戦的に見上げて、言った。「俺を迎えにきたんだろ、死神？」

「無礼者！ 一度ならず二度までも！ 戦乙女は死神ではない！ そのような物言い、万死に値するぞ！」

「ア、アンジェラ……?」

思わずつぶやいた。異形と化し、凄惨な末路を歩むことを強いられた、気高い王女は戦乙女の隣で幽体となって空間にただよっていたのだ。

「へっ? し、知っておったのか?」

ジェラードが意外そうに目を丸めて、ばたばたと両手を動かしている。その様子は、あまりにも「アンジェラ」として自分の前に現れたときと同じで――、

「フフ……。そうか、お前も無事だったんだな」

アリユーゼは久しぶりに見るその変わらぬ姿に、知らずと安堵の笑みをこぼしていた。

「一つだけ訊きたい」

アリユーゼはレナスに向かって、言った。

「お前は死神とどこが違う」

「……死神は、お前に終焉しゆうえんしかもたらさない」

レナスは言った。

「だが、私はお前に道を作ってやることができる」

「道?」

「そうだ。だから、自らの足で歩くがよいだろう」

道——か。

自嘲的な笑みを浮かべて、アリュージェはつぶやいた。

途端。

アリュージェの気配が変わったことに気付いてか、アレンが目を見開き、引き止めるように腕を伸ばした。

「待て！」

（いつかと、まったく逆だな……）

アリュージェは失笑して、溜息とも取れる笑みをアレンに返した。

「お前とは、もう少し早く会ってみたかったぜ」

折れた剣を投げ捨て、アリュージェがつぶやく。アレンは首を横にふった。ゆったりと悟ったようなアリュージェの表情に、彼がなにをするのか察したのかもしれない。

「……人は、死ぬために生きるんじゃない！」

「未練はねえ。……もう決着はつけたからな」

決意は固まっていた。

言い切るアリュージェに、アレンの瞳が力を帯びる。まるで自分が死ぬ覚悟を決めたか

のように、最早、アレンがなにを言ってもどうしようもないほどの次元で、アリュージェが覚悟を決めたことを認識したように。

だが、その前に――。

「俺はアリュージェだ。……お前、名は？」

奇妙な縁で出会ったアレンに問うと、彼は静かに拳を握った。

「……アレン・ガード」

「アレン、か。……覚えとく」

アリュージェは口許に好戦的な笑みを浮かべると、腰に挿した短剣に手をかけた。

「アリュージェ！」

「親父さん……」

短剣を胸の前にかざしたところで、ロンベルトの部屋にアルトリア騎士団長が駆けこんできた。

部屋に積み重なった、数十の死体に騎士団長は顔色を失う。

そして――、

「アリュージェ。私にも剣を向けるのか？」

緊張した面持ちで問うアルトリア騎士団長に、アリュージェは静かに、穏やかに微笑つた。

どうせこの世に未練など、

——ない。

アレンは嘴み締めるように、拳を握り締めた。アリューゼの握る短剣が、分厚い胸板を突き破る。

そして、

倒れることもなく、両膝をついたアリューゼの亡骸は、白い羽が舞い落ちるとともに突如炎に包まれ、燃え上がった——。

——いまに思えば、奴と出会ったのは「縁」だったのだろう。

神に仇なすその男は、ニメートル強の剛刀を背に担いでいる。

——陰惨とした地上には疎遠の、強き意志を宿した蒼瞳。

俺が唯一、この世に残した未練とも言うべき相手。

アレン・ガード。

奴は俺の死に際に、まるで自分が自決するかのような顔でそう名乗った——。

「アリューゼさんが？　なにかの間違いですよ！　もう一度調べ直して下さい！」

アルトリア城の廊下に、青年の声が響く。

コツコツと軍靴が床を叩き、止まる。と、アルトリア軍近衛騎士団長の父は、無表情に息子をふり返った。『王立騎士団長』の名に相応しく、父は厳格な男だ。歳は五十前半。明るく映える金髪に、気難しそうな凛とした彫り深い面立ち。蓄えた鬚は几帳面に整っており、ギリシャ神話の男神を思わせる精悍な男だった。

絹で出来た上等なマントを翻し、父は息子に向きなおると頭をふる。

「ジェラード王女、ロンベルト殿、そして兵士三十数名の死者。……事態は明白だ」
「父さん！」

珍しく息子が食い下がった。普段は聞き分けの良い息子——ロウファの思いに比例して、彼が着ている銀の甲冑がカシャリと鳴った。

無理もない。

このロウファは、アルトリア最強と謳われた傭兵アリュージェを、誰よりも慕っていたのだから。

父の凛々しさに反して、ロウファは中性的な美青年だった。銀の甲冑に流れる細い金髪。青の瞳。女性のように線の細い面立ちが、今は怒りできゅつと引きしめられている。

父は溜息を吐いた。

「わかつてくれ」

去り際に、ロウファの肩を叩く。会話を終えるときの、父の癖だ。

いつも一方的で、それ以上の質問は許さない。

ロウファは唇を噛んだ。俯く。

槍を握る自分の手が震えた。自分の無力が、無知が、歯痒い。

(アリユーゼさん……)

胸中の声こころが、力なく零れていく。

まるで暗闇で灯火を失った幼子のように、ロウファの胸には、ぽっかりと穴が開いていた。

——三日前。

「ここに、男性が駆け込んでこなかったか?! 左目に刀傷のある、長身の男性だ!」

ロウファが昼の稽古を終えて門前を過ぎると、西門の門番に、血相を変えてひとりの青年が詰め寄っていた。

歳はロウファと同じ二十前後。ロウファより色素の薄い金髪と、蒼色の瞳が印象的だ。カーキ色のジャケツトに黒のTシャツ、白のズボンという——鎧が剣士の標準装備であるアルトリアでは、珍しい姿の青年だった。彼は背に、二メートル強の白い大きな

筒を抱えていた。

(左目に刀傷のある、長身の男性……?)

突然現れた青年の言葉に、ロウファはびたりと足を止めた。

左目に刀傷――

アリユーゼの特徴だ。

ロウファはハッと目を剥いた。

「ちよ、ちよつと君！ それつてもしかして、アリユーゼさんの――」

「頼む！ 通してくれ！ 急がないと、手遅れになる！」

ロウファに心当たりがあると見るや、青年は門番を押しつけて城に割り込もうとした。慌てて、門番とロウファが、青年を押しとめる。

「ちよつと待つてくれ！ その前に事情を――」

ロウファが問うと、青年はなにかに気付いたように、は、と瞬きを落とした。

「……悲鳴」

そう、確かに彼は言った。

ロウファは怪訝に思いながらも、青年に倣って耳を澄ましてみる。

途端、青年は二人の意識が別を向いたと見るや、脇を押さえていた門番を肘鉄で黙らせ、城中に駆け出した。

「い、い、い……」

慌てて、ロウファがあとを追う。

だが青年はすでに、十数メートル前を駆けていた。

多くの兵が倒れた、血みどろの廊下を無言で駆け抜けて——……。

……

……

ロウファがハツと顔を上げると、部屋の蝋燭が、ゆらゆらと自分を照らしていた。

今日は槍の稽古にも身が入らない。そう思って、自室の本を読み漁っていたときのことだ。

いつの間にか、うたた寝したらしい。アリユーズが事件を起こして以来、ロウファは眠れない夜が続いている。部屋に灯した蝋燭を見やると、半分くらいの高さにすり減っていた。

つまり、深夜だ。

蝋燭の揺れる火を見据え、ロウファは右手で額にかかった金髪を、くしゃりと掻きあげた。

「……どうして、忘れていたんだ……」

アリユーゼの死。

そのショックがあまりに大きすぎて、一部記憶が欠落したのかもしれない。——それから、思考も。

ロウファは慌てて机から立ち上がると、愛用の槍斧を手に、地下牢に向かった。

アルトリア最強の傭兵が、大臣ロンベルトを殺害し、自害してから三日。

アルトリア城最奥の地下牢に、ひとりの青年が投獄されていた。表向きは不審者として、実際はアリユーゼとの共犯容疑で。

アリユーゼが凶行に及んだあの日、青年はその場にいた。アルトリア城内の関係者でないにも関わらず。

青年は、アルトリア人らしい金髪碧眼だった。——碧眼、と称するには少し濃い蒼色。美青年というわけではないが、知的な鋭い双眸が、勤勉なヴィルノア人を思わせる。服装は、奇妙なデザインのジャケットと黒のTシャツ、白のスボンというラフな格好だ。名は、アレンといった。

投獄されたアレンは手錠と足枷で動きを封じられ、背に担いでいた二メートル強の白筒——相棒の剛刀を六人がかりで兵士に取り上げられている。

「……」

そんな地下牢の一室にて、アレンは三日前の出来事を思案する。

レーテ街道で起きた惨劇を。——そこから、アルトリア城まで兵士を斬り殺しながら大臣のもとまで進んで行ったアリユーゼの真意を。

あの街道には、アレンが見たことのない魔物が現れた。

アリユーゼがかたくなに殺すことを拒んだ魔物。

その魔物を倒した、天使。

そして、アリユーゼが血相を変えて城に殴りこみ、殺したロンベルトという男。

三日前の出来事で、気がかりな点はその三つだ。

ロンベルトについては、アレンは知らない。だが、この三日間の尋問で『ロンベルトが、アルトリアの大臣である』とは把握できた。

一介の傭兵がなぜ、国の大臣を殺す決意を固めたのか——。

それも自らの命を投げ売ってまで。

(街道に現れた魔物の周りには、この国の騎士団の死体が山ほどあった。あの魔物と、^{アリユーゼ}彼の関係。それが彼の死因を解く鍵だ。——恐らくは)

アレンにある材料は、それだけ。

あの魔物と相対したとき、アリユーゼは憔悴^{しやうすい}し切っていた。街中にいたときは、あれ

ほど好戦的な、ぎらついた目をしていたのに。

それが、アレンには引つかかっていた。

(……まさか……、あの魔物は人……だったのか? ……魔物と戦った場所の近くに落

ちていた小瓶。小型解析器スキャナーでは「グール・パウダー」と出ていたが……)

グール・パウダー。

スキャナーが分析した成分表を見ても、アレンの知る物質は一つとして出てこなかったこの惑星の粉だ。

仮説は出来ていたが、確かめる術が今はない。

(脱獄は簡単だ。だが、ルシオとプラチナの消息をつかむまであまり無茶もできない)

牢には照明がなく、天窓から入る月明かりだけが頼りだった。アレンは鎮座して闇をじつと見つめている。

投獄されてから今日まで、食事を与えられていなかった。

……かつん、かつん、

また、足音が近づいてくる。

(尋問か……)

薄く瞼を開け、彼は足音に意識を向けた。

常人ならば、アリューズと共犯でなくとも三度は自供してしまいそうな拷問。その中

でも、アレンは正気だった。

こうしてこちらの眠りを妨げるように、あるいは思い出したように、彼らが現れるのは珍しくない。だからアレンは、いつもそうしているように毅然きげんと尋問官を見据えた。「何度言われても同じだ。俺を疑うなら、まずはこちらが要求した捜査を行ってもらおうか」

あの魔物が現れた、現場の捜査を。

しっかりと語調で言うのと、足音が止まった。

尋問官が光を差し向けてくる。まぶしさで、目を固く閉じた。

「要求？」

口が酸っぱくなるほど繰り返した言葉に、相手が不思議そうな声を返してきた。

アレンは顔を上げる。この三日間。尋問官は五人やってきたが、そのどれでもない。

若い男だった。

(新しい尋問官か?)

それとも処刑人か。

アレンは目を細めると、若干の警戒を交えて相手を睨んだ。こちらの言い分をまるで歯牙にかけない対応は、もう身に染みみついている。だが、初めてアレンの下に現れた青年は、これまでの尋問官とは明らかに態度が違った。

傷だらけのアレンを見るなり目を瞠みはつたのだ。

「誰がこんなことをっ!？」

慌てて駆け寄ってくる。アレンは首を傾げ、奇異なものを見るように青年をしげしげと観察した。

「君は……?？」

「僕はロウファと言います。あの日、アリュージェさんが事件を起こしたときに。僕は貴方にお会いしましたね?」

ロウファに問われ、アレンはまたたいた。ロウファの顔を、もつとよく見る。すると、今までの尋問官たちとは真剣味が違った。

ロウファの真摯しんしな眼差しがアレンに向けられている。

「なるほど。ようやく、俺にもツキが回ってきたということか」

アレンはわずかに口許をゆるめると、少し、安堵したように言った。

「聞かせてもらえますか? 貴方の事情を」

「ああ」

つぶやく彼に、ロウファは表情を引き締めた。アレンは順を追って、あの日の状況を説明する。ちらりと番兵の詰め所を一瞥いちべつして。

「これは、あそこの兵士たちにも話したことだが……。ここの始まりは、恐らくあの街

道。俺は三日前、アルトリアの城下町で騎兵が慌ただしく走っていくのを見て、ヴィルノアに続く裏街道——レーテ街道と言うらしいな。そこに辿り着いた」

「レーテ街道、ですか……」

「ああ。そこで魔物に襲われているアリユーゼと出遭つたんだ。いつもと違って、気配が死んでいた。彼は地面に座り込んで、魔物が襲いかかってくるのを茫然ぼうぜんと見ていたんだ」

「アリユーゼさんが敵を前に？ ……失礼ですが、貴方は以前からアリユーゼさんとはお知り合いで？」

アレンは首を横にふった。

「いや。その前日——今から四日前だな。倭国料理店で、アリユーゼが女の子と食事しているときに知り合った」

「女の子？」

「その子についてはよく知らない。ただ、アリユーゼと親しそうな女の子だった。すごく目立つ、青いリボンの帽子をかぶっていたんだが……」

該当する人物に、ロウファは思い当たらなかつた。首をひねるロウファがよほど要を得ない顔をしたからか、アレンは話を本題に戻した。

「君の言いたいことは分かる。俺も、これでも剣士だ。アリユーゼが敵を前に戦意喪失

するような男だとは思わない。まして魔物の攻撃に反応出来なかったわけでもないだろう。だから……。恐らく、彼はなんらかの事情があつて、あの魔物をかばつていたんじゃないかと思う」

「魔物をかばう？ ……あのアリユーズさんが、ですか？」

「ああ。彼はなにか——ひどく絶望しているようだった。妙な気配を放ちながらも、彼はどうにか魔物を倒しはしたが——それ以上なにも言わず、幽鬼のようにその場を立ち去つていったんだ」

ロウファを見上げた。

戦乙女のことは語らない。あれが「この世」のものでないと、アレン自身が肌で感じたからだ。蠟燭に照らされたロウファの顔は、得てして表情がない。

アレンは話を続けた。

「あとは君も知つての通り。アリユーズはこの城のロンベルトという大臣を殺して、自決した」

「……」

ロウファが黙つた。アレンの言葉が全て真実とは思わない。だが、ウソを吐いているようにも見えなかった。

問題は、どの程度この話に真実が含まれているのか、ということだ。

アレンが、まっすぐにロウファアを見据えて言った。

「頼む。一度……俺があのとときいた、レーテ街道を調べてくれないか？」

「それが、貴方の希望する捜査、ということですか？」

「ああ。あのととき、どうしてアリューゼが魔物をかばおうとしたのか——。それが分かれば、ことの真相が見えてくると思うんだ」

「……………」

「それに、あそこにはアルトリア騎兵の死体もある」

「えッ!？」

ロウファアは息を呑んだ。アレンの無表情が、蝋燭に照らされている。

「魔物に殺された兵士だ。全員で八人にいる」

「アルトリア騎兵が、殺された？」

アレンがうなずいた。

「傷口からして間違いない。まだ、この城に戻っていない部隊があるはずだ。少なくとも、彼らは君と同じ甲冑を着ていた」

「……………」

ロウファアは鳥肌が立つのが分かった。王の勅命を受けて城を出た部隊といえば、王女捜索隊だ。まだ捜査が難航しているのだらうと思っていたが、この男の話が本当なら、

彼らはすでに——。

ごくりと唾を呑みこんだ。

ロウファの気配が変わる。緊張に満ちた彼の顔を見つめて、アレンは神妙な面持ちのまま続けた。

「ところで、グール・パウダーとこのを知っているか？」

「グール・パウダー？」

耳慣れない言葉に、ロウファが首を傾げた。柵の向こうでアレンが、眉根をひそめる。「この辺りで使われている品物だと思っただが……用途は俺も知らない。だが、兵士の死体のなかに、それらしきものを握っている者がいた。これくらいの小瓶だ」

アレンが親指と人差し指の間隔で小瓶の大きさを説明する。五センチくらいの大きさだった。

「装備からして、部隊長と思われる。魔物が目の前に居たというのに、彼は剣ではなくその瓶を握っていた。自分が命の危機にさらされていたのに」

「……」

ロウファが押し黙った。彼の言いたいことは分かる。騎士として、敵前で剣を握らず、瓶を握っていた理由——。

それは部隊長が剣を抜く前に殺されたということだ。

「でも——どうして貴方は、用途が分からない物を「グールパウダー」だと断定できるんです?」

ロウファが問うと、アレンが、う、と息を呑んだ。

「それは……」

「それは?」

「……以前に、同じような物を見たことがあるんだ。知り合いに、そう言ったことに詳しい人物がいて」

「なら、その人に「グールパウダー」のことを聞けば、分かる?」

「ああ……。だが、その人はもう——」

視線を伏せるアレンを見据え、ロウファが目を細めた。

数秒。

ロウファは真剣な表情のままうなずくと、さっそう颯爽と立ち上がった。

「まあ、いいでしょう。とりあえず——いまは貴方を、信じてみます」

アレンに対する疑念がないと言えば嘘になるが、調べてみると言われたなら、調べるだけだ。

目で答えてくるロウファに、アレンは顔をあげ、小さくうなずいた。

城下に降りたロウファは、場末の酒場に向かった。

城の正規兵——ロウファのまとう白銀の甲冑は、うらびれたこの場所にはあまり似つかわしくない。高貴な生まれと一目で分かるロウファは、明らかに酒場で浮いていたのだ。だがそれもいつものこととなれば、気にする者はいない。酒場に集まった客はロウファに一瞥いちべつくれることもなく、テーブルを囲った面々と他愛もない会話を続けている。

そんな酒場の奥に、テーブルを囲う冒険者の二人組がいた。
「で。そいつは信用しても大丈夫なのか？」

疑り深く訊いてきたのは、冒険者のうちのひとり、青みがかつた黒髪を一つにまとめた青年だ。年はロウファと変わらない。だが、こちらはいかにもみすぼらしい青銅の鎧を着た青年だった。

名を、カシエルという。

ロウファは逡巡のあと、うなずいた。

「少なくとも、調べてみる価値はあると思います。話の筋は通ってますから」
「でも、囚人なんでしょう？」

眉根をひそめて、もうひとりの冒険者、セリアは声を落とした。

こちらは女性で、長い茶髪を藍のリボンでまとめ、白とピンクの鎧をセンスよく着こなしている。だがカシエルと同じく、庶民臭い雰囲気きずなの女性だ。

「……」

「セリア」

黙すロウファに、カシエルがなだめるようにセリアを制した。

囚人。

それは、今は亡きアリュウゼのことをも意味する。

「ごめんなさい」

失言だったと気付いて、セリアが謝った。ロウファは空気が悪くならないように、いえ、とだけ答えて微笑う。

カシエルが、酒場のテーブルから勢いよく立ちあがった。

「じゃ。行ってみるか！ その【魔物】とやらが出たって街道に」

言つて、カシエルはパンツと拳を打ちつけるなり、頭の後ろで腕を組んだ。ロウファもうなずいて立ち上がる。肩越しに、ロウファは酒場の外を示した。

「行きましょう。外に馬を連れていきます」

酒場を出た三人は、ヴィルノアに続く街道、レーテ街道へと向かった。

アルトリア城下の宿。

そう広くない一室に部屋を取ったロジャーたちは、地獄のような腹痛を堪えしのぎ、

ようやくベッドの上に座り込むことが出来るようになった。

——なのに。

「遅い……、遅すぎるじゃんよー！」

胃薬を買いに行つたアレンが、未だ帰つてこない。

腹痛で動けなかつたときは深く考えなかつたが、峠を越え、腹の虫もようやく治まり始めたところで、ロジャーはいらいらと自分の膝を叩いた。

もう三日だ。

待つにも限度がある。

「道草食つてるにしても、腹痛で苦しんでるイタイケなオイラを三日も放置するなんて、フエイト兄ちゃんたちならともかく、アレン兄ちゃんらしくないじゃんよ！ ……なにかあつたのかあ？」

いかにも深刻そうな顔を作つて、顎に手をやるロジャー。その彼に、失笑にも似た溜息が返つてきた。

んあ？ と首を傾げながら、ロジャーが視線を巡らせる。

悪友のルシオが部屋に置いてあるティー・ポットからお茶を注いだあと、いかにも優雅に飲み干して、やれやれと肩をすくめていた。

「アレンさんに限つて、んなコトあるかよ。それに、あつたにしても心配ないだろ？ ア

レンさんに敵う奴なんているワケねえもん」

「いるじゃん！」

「あ？」

首を傾げてルシオが覗き込むと、神妙な顔でうつむいたロジヤーが顔を上げた。

「ガキと困ってる民間人」。アルフ兄ちゃんが言つてたぜ！」

「なっ!? ……バツキヤロ! まさかアレンさんが、腹痛の俺たちを置いて……」

「いや、分かんねえぜ。なにせアレン兄ちゃんのお人よしは並じゃねえからな! きつ

と、またなにか仕出かしてんじゃ……」

むむむ、とうなるロジヤーに感化されてか、深刻そうな面持ちで押し黙ったルシオが

拳を握る。

胃薬を買いに行つた、その間に――。

「……………やっぱ、違いぜ！」

ルシオは感嘆したようにつぶやいた。

たつたそれだけの間で【真の男】たる人助けを怠らない。

そんなアレンを勝手に想像し、ルシオはこくりとうなずいた。あわててカップを置き、愛用のカーキ色の頭巾を引つ被る。頭巾――否、【バンダナ】と称するのが、ルシオのこだわりだ。

「お？ どした、アホネコ？」

間抜けな顔でこちらを見る狸少年に、バンダナを鏡の前できっちりと被ったルシオは、まったく視線を向けず、よし、とつぶやいてきびすを返した。

「決まってるだろ。アレンさんの手伝いだよ、手伝い。お前はここで大人しくゴロゴロしてろ、バカダヌキ」

「お？ 手伝いだ？ なにしでかす気だよ、アホネコ♪」

「ちよつ……！ ついてくんなよ！」

「へんつ！ オイラの行き先がこつちなだけだい！ 絡むなよ、アホネコ！」

「んだとお！」

ぎゃいぎゃいと騒がしく騒ぎ立てながら、二人は宿を出る。そんな彼等が揃って迷子になったのは——、間もなくのことだった。

レーテ街道を行くと、不意にロウファの愛馬が大きく嘶いた。

「どうしたんだ!？」

「うわっ！」

直立する馬にカシエルが悲鳴を上げる。ロウファは手綱を引いて愛馬を宥めてやったが、驚きを隠せなかった。この馬は軍馬でも特に気性が大人しい。こんな風に興奮す

るのは、珍しいことだ。

「だ、大丈夫!？」

ロウファとカシエルの後方についてきていたセリアが、馬を止めて尋ねてくる。

カシエルは暴れる馬の手綱を引いてどうにか踏み止まらせると、カラ元気で笑ったあと、うなずいた。

「ん、まあ……なんとか」

「……おかしいですね」

そんなカシエルを尻目に、ロウファは首を傾げた。馬が一步も進みたがらない。戦場でも、勇敢に野を駆ける軍馬が。

「しょうがねえ。こっからは歩いて行こうぜ」

蹴つても叩いても、まったく反応しない軍馬にため息を吐いて、カシエルは颯爽と馬から降りた。

なんの変哲もない山道。今のところ、囚人の青年が言ったような魔物も、城の兵士の死体も見当たらない。

「そうですね」

カシエルにならってロウファも馬から降りる。草を踏みしめると、爽やかな風が街道を吹き抜けた。

——が。

馬が怯えた目で見ていた方角にロウファたちが歩き出すと、木々を抜けた所で異臭がたちこめてきた。眉をひそめて先を行くと、まるで地獄絵図のような醜い光景が広がっていく。

ひしゃげた荷車が街道を横断し、その周りに寄り添うように兵士たちの死体がごろごろと転がっていたのだ。

「……ひびく」

思わずつぶやいたセリアは、自分の呼吸器官を守るように口許を庇った。あまりの光景に、顔がしかめられる。

無残に朽ち果てた騎士団の遺体——。

囚人の青年——アレンが話した通りだった。

彼が【魔物】と称した異形の骸はなかったが。

「……」

見知った人の遺体を越えて、ロウファは無言のまま、ひしゃげた荷車に歩み寄った。甲冑の種類が違う兵——部隊長の死体だ。

「これが、」

真っ白になった部隊長の手に、小瓶が握られていた。栓は開けられている。中身もも

うないが、瓶の壁には少しだけ中身が付着していた。

「セリアさん！」

腰を上げ、痛ましい表情で兵士の死体を見やっっているセリアを呼ぶ。すると、セリアはこちらに視線を向け、「なに？」と首を傾げた。

ロウファが小瓶を持って、駆け寄る。

「これが、彼が言っていた小瓶のようです。——分かりますか？」

——グール・パウダーかどうか。

そう続く言葉を暗に伏せて、ロウファは真剣な表情でセリアを見つめる。

人間を、魔物に変える薬。

魔法剣士のセリアは、「グール・パウダー」をそのように説明した。

ロウファにとってはにわかには信じがたい話だが、この瓶が本当にグール・パウダーなら、【魔物】が現れたというのは事実になる。

まだ、アリュージェがなぜその魔物と戦おうとしなかったのかは分らないが——。

(というより、アリュージェさんに限って敵を前に剣を置くんなんて……)

アレンが話した内容で、ロウファが一番納得のいかない所だ。だがそれゆえに、アリュージェの真意と深くつながっているような気もする。

自害など、普段のアリュージェを考えればあり得ない。

父を斬らないためとはいえ——。

(だから僕は……、知らなければならぬ)

アリユーゼの真意を、無念を晴らすために。

考え込むように小瓶を見つめていたセリアが、顔を上げた。

「……だめ。こんなに少ないんじゃない、グール・パウダーかどうかなんて、確認のしようがないわ」

「そうですか……」

平静を装って返事したつもりが、溜息が混ざった。

セリアが申し訳なさそうにこちらを見る。ロウファは場を誤魔化すように微笑わらった。

カシエルが兵士の死体を検あらためながらつぶやいた。

「でもよ。この死体、確かに人の手によるものじゃねえぜ。傷口見てみるよ。これ、少なくとも剣の痕じゃない。——なにかに引きちぎられたみたいだ」

「……」

「それって。兵士が殺されたのは、【魔物】の仕業かも知れないってこと？」

セリアが問う。カシエルは死体の前に膝を折ったまま、うなずいた。

「ただの獣に正規部隊を全滅させられるほど、アルトリア騎兵だって腑抜けじゃないだろ。ってことは……」

言葉を切ったカシエルが、ゆっくりとロウファを見る。顔色を窺うように。

ロウファは考え込むように目を閉じた。

「……至急、城に戻って応援を呼びましょう。少なくとも、彼らをここに放っておくわけにはいきません」

目を開けて、カシエルを見る。いつになく難しい顔のカシエルがいた。お調子者としての性格が強い彼だが、決して愚かではない。それを、ロウファは知っている。

「だな」

だから、明言を避けたロウファに対して、カシエルがニツと笑ってくれたのは、ロウファにとって救いだった。

ロウファはカシエルを見据えて、言った。

「それから、僕はもう一度。彼に会ってみようと思います。——地下牢の彼に」
つぶやいたロウファに、カシエルも神妙にうなずいた。

カシヤンと音を立てて、隣の牢が開けられた。

「大人しく入ってろ！ 逆賊が！」

兵士の罵倒する声と、たたらを踏む靴音が重なった。

兵士の言葉で、アリュージェの身内、と察した囚人の青年——アレンは、隣の牢に寄る

なり、そつと耳をそばだてた。

かつかつと軍靴を鳴らして、番兵が牢を去っていく。

「痛たたた……つ」

隣の牢に残された囚人の声は、聞き覚えのない男だった。倭国料理店で会った、あの少女とは違う。

アレンは隣の牢に向かって問いかけた。

「大丈夫ですか？」

「……！」

ふと、隣の牢で息を呑むような気配が上がった。

まさか、こんな所で声をかけられるとは思わなかったらしい。戸惑っている様子が伝わってきた。

アレンはわずかに、語調だけを落とした。

「アリュージェさんに近い方、とお見受けしますが？」

途端。隣の牢に入れられた男が、はつきりと息を呑んだ。

「き、君はっ……!!？」

「彼の知り合いです。彼が自害したその場に、居合わせました」

「ロンベルト様と王女様を殺した、兄さんの仲間……ってこと？」

「……王、女？」

隣牢の囚人——ロイの質問に、アレンはハッと息を呑んだ。

もしか、あの魔物は——。

アレンは慎重に仮説を整理した。

「あのつ、彼女は元気ですか？ 白い帽子に、青いリボンをつけた、貴族風のご令嬢です」

事情は良く分からないが、アリュージェと少女が、アレンには親しい仲のように見えた。血生臭い傭兵の男と、いかにも貴族風の少女。

組合せとしては、あまりにも脈絡のない二人に、一種、物珍しさを感じていたのだが。

「……ジェラード王女のこと？」

ロイが声をひそめた瞬間。

アレンの中で、仮説は真理として繋がった。

では——、

グール・パウダーとは。

「……………」

視線を下げ、アレンは息を呑んだ。

あの日出遭った、魔物のことを思い出す。

アリュージェの憔悴し切った顔を。

魔物を斬るなど訴えた、彼の悲痛な叫びを。

当然だ。

あれは——、あの悪魔は、王女だったのだから。

あのとき、倭国料理店で仲良くアリユーゼと話していた彼女が、あの姿に……。

(そして——、その犯人がロンベルト。そう言いたかったのか。貴方は)

自殺したアリユーゼを思い出しながら、アレンは、ぐ、と奥歯を噛み締めた。

なにもかもが後手。

それが、どうしようもない現実だと分かっている。

「あの……？」

黙りこむアレンを不思議に思っただか、ロイが尋ねてきた。

思考を解いたアレンが、顔を上げる。

まだ、問題は残っている。

——未練はねえ。……もう、決着はつけたからな。

最期、アリユーゼが死ぬ間に、アレンにかけた言葉だ。

『死ぬな』と伝えた、自分に対するアリユーゼの解答。その剣一本で、自らの復讐を遂げたアリユーゼの顔を思い出しながら。

(貴方は良くて、まだ……終わってはいない、か)

アレンは苦笑気味に、力ない笑みを浮かべた。フツと息を吐く。

これがアレンに出来る、唯一の手向けだ。

誇り高い死を選んだ彼への。

結論付けると、アレンは蒼瞳を開いた。

「自分は、アレン・ガードという者です。貴方のお名前は？」

問いかけるアレンに、ロイの不思議そうに首を傾げながらも、答えた。

5. アルトリア編 (完) 運命を変える者

ロウファが地下牢に向かうと、そこに目的の人物はいなかった。

ロイが鉄柵越しに、暗い視線を向けてくる。ロウファは慌てて番兵に詰め寄った。

「もうひとりの囚人は、どうしたんです!？」

「……いい、いくら尋問しても口を割らないので、先に処刑することに……」

「っ、っっ!」

ロウファは番兵の胸倉を乱暴に手放すと、ロイに一瞥だけを送って地下牢をあとにした。

（くそっ! あの人が殺されてしまったら、本当にアリューゼさんの潔白を証明する人がいなくなる!）

走った。

アルトリアの代表的な処刑法は、ギロチンだ。牢獄から屋外に出ると、城壁を挟んでギロチン台がある。周りは木柵で、市民たちが希望すれば処刑の様子を見ることができ

る。アレンの容疑が、ただの不審者でないことをロウファも分かっている。王族殺しの犯

人として祀り上げられては、ロウファにはどうすることも出来ない。
(だから——！)

それまでに彼を捕らえねばならない。

祈るような気持ちでロウファは処刑場に行く道を走る。

あと一歩。

処刑場に行く、鉄扉を開ければ——。

そこで

わああああ……っ！

歓声が、ロウファの耳に届いた。

「くそおっ！」

固く閉じられた鉄扉をロウファは力任せに殴った。

この扉を開ければもはや首なしの証人が、そこに——。

悔しさで涙が滲んだ。

——そのとき

「なんとしても捕えろ！」

「手の空いている者はすべて奴の捕縛に向かええ！」

「……ええ？」

ロウファアは瞬いた。

歓声と思つたその声が、実は兵士によるものだったのだ。処刑場から聞こえる声は、よくよく聞くと城内からだとは分かる。

ロウファアは目を剥いた。

「まさか……！」

考えるより先に、走り出した。

事情は分からない。だが彼が死んでいないのであれば、まだ話を聞くことは出来る。

まだ最悪の事態は防げる——。

そう信じて、ロウファアは走つた。

「はっ、はっ、はっ！」

一歩を踏みしめる度、甲冑がカシャカシャと音を立てる。槍を手にし、彼は全力で走つた。

今度は——、アリュウゼのときにように遅れるものかという一心だった。

（頼む……！）

間に合え、と祈るような気持ちで招集されていく兵士の先を追つた。

謁見の間に続く廊下に、転がるようにして駆けこむ。

そこに例の囚人がいた。

並み居る近衛騎士たちに囲まれていながらも、堂々と立つ囚人が。

「くそっ！　なんて強さだ！」

忌々しげに舌打った近衛騎士は、自分の折れた剣を見下ろした。

相手はひとり。

先ほど城の廊下を歩いているアレンが目撃され、捕らえようとしたのだが、この男の強さに負けて捕縛できずにいる。

囚人の背には物干し竿のように長い、二メートル強の筒があつた。だが実際に近衛騎士の剣を折つたのは、男の貫手。

彼は素手だつた。

「もう一度、言う」

静かに、厳かに。

アレンは兵士たちを睨み据えた。思わず、兵士たちが背筋を伸ばす。

「城主に会わせろ。言うべきことがある」

「解せぬことを。お前は処刑されるべき囚人。口を慎むが良い！」

凜と声が響き、ロウファはハッと目を剥いた。ふり返る。すると自分の肩を叩く父とすれ違つた。

近衛騎士団長。ロウファの父だ。

白銀の鎧を纏った近衛騎士団長を前に、アレンは目を細めた。

「……王の側近か」

騎士団長の立ち振る舞いもさることながら、アレンの目に留まったのは、己の偉業を誇るような騎士団長の胸の勲章だった。その数が、作りが、普通のものよりも華美である。

精彩のない城下の民からは想像もつかないほどに。

アルトリアをよく理解していないアレンにも、今の国内情勢が読めてきた。

なんと虚勢に満ちた国なのか。

勲章など、称号など。

すべて壊れ、滅びてしまえば、なんの価値もないというのに。

（曇っている）

疲れた顔をした町の人々を思い出して、アレンは騎士団長を睨んだ。

凍てつくような、同時に、激しく燃え盛るような、怒りの瞳で。

「これを見ても、同じことを吐くつもりか」

アレンは声押し殺した。感情は乗せない、抑揚のない口調だ。

内ポケットから取り出したのは、脱獄後、ロンベルトの部屋で見つけた暗号文である。

それをアレンは騎士団長にもはつきりと見えるよう掲げた。

ヴィルノア宛の、ロンベルト直筆の報告書だ。

「……それは！」

ロウファが息を呑む。さしもの騎士団長も顔色を変えた。

ロンベルトの筆跡で書かれたその報告書には、アルトリアの内政は勿論、次の出兵予定、数、傭兵を招き入れる準備期間、——そして。金で雇い入れた兵で国内を固めて、最後的にはアルトリアの防衛力を、まったくの無にする計画。とどめにアルトリア王位第一継承者ジェラードをさらい、うまくいけばヴィルノアの人質として監禁、失敗すればジェラードを関係者ごと皆殺しにするという、その第一段階が終わったことの報告。

すべてが詳細に、明瞭に書かれていた。

「ロンベルトが……、ヴィルノアのスパイだと？」

我が目を疑う騎士団長に、アレンは無言のままうなずいた。

「ロンベルト様が……」

茫然と、ロウファもつぶやく。

今は亡き宰相と、あまり話したことがないが、そういった謀略をするような男には見えなかった。少なくとも、ジェラード王女の教育係として立っていた彼は。

騎士団長はしばらく黙っていたが、すぐに表情を元に戻した。

「それで。……これを見せたことで、己の罪が払拭できると言うつもりか？ その証拠

は、提示していないというのに」

「父さん！」

「黙っているロウファア！」

「！」

ロウファアに引き下がる気はなかった。今回の、このことだけは。

だが、ロウファアが決起して口を開く前に、視線で、アレンに止められた。

そして――、

アレンは騎士団長を見、苦笑した。

騎士団長を前に、思い出したのだ。

自害する直前のアリュューゼにかけた、騎士団長の言葉を。

――アリュューゼ。私にも剣を向けるのか？

そのときの、この男の顔を。

彼は、アリュューゼが剣を向けないと知っていた。

その上で――

アレンは固く、拳を握りしめた。

「そうやって、アンタはスパイに激怒した誇り高い戦士の死を不意にし、その弟まで罪人だと、国の決定だからと殺すつもりか？ 俺の言葉を信じないのは構わない！ だが。」

ならばなぜ、調査の手掛かりを不意にした！　なぜその手で真相を調べなかった！　なぜ、自分と親しい人間の死を、その意を汲んでやらなかった！」

アレンの恫喝で、場の空気が一気に緊張する。金縛りにでもあつたように、皆、息を呑んで動けない。

激しい怒り。

今にも処刑される身の、ただの極悪犯の男に浮かんだ怒りが、蒼の瞳が、兵たちの胸の奥にあるなにかを、激しく揺さぶる。

【忠義】という名の。

「父さんに、捜査願を……？」

静寂に満ちた廊下で、ロウファはぼつりとつぶやいた。力なく、呆然と。

「……ああ」

アレンは静かにうなずいた。

途端。

ロウファの瞳が、感情を帯び始める。

どれだけ嘆願しても、たとえ証拠が見つからなくとも、ロイだけは釈放すべきだとロウファが進言したときの、父の顔を思い出しながら。

「……なぜ、僕に黙っていたんですか。父さん……！」

アリュウゼの死の真相に関する情報を、調べることすら許さなかったというのか。尋ねる息子を前に、父の返事は素っ気ないものだった。

「お前には、知る必要がない」

能面のような父の無表情を見据えて、ロウファの顔色が怒りに染まった。

途端、くぐもった鈍い音が、城の廊下に響く。

ロウファは目を剥いた。

かつと頭が上がった血が、一瞬、冷えた気さえした。

「ぐうっ！」

たたらを踏んで——それでも堪え切れず、父の躰からだが廊下に崩れた。左頬に内出血。父の唇から、一筋、血が流れた。

「っー」

見上げる父の顔色が、怒りを帯びる。それを見下ろして、騎士団長の左頬を容赦なく殴り倒したアレンは、静かに問うた。

「殴られると、腹はらが立つか？」

淡々と、無表情に。

囚人でありながら、自分を見下ろす男。

許される無礼ではない。それでも騎士団長の唇は痛みで強張り、くぐもった呻き声を

上げるだけだ。

反論すら、ない。

蒼の瞳がゆらりと揺れた。

「……アンタの怒りは、その程度のものか！」

右腕一本で騎士団長の襟首を掴み、乱暴に立たせる。怒りで騎士団長を睨みつけたが、騎士団長はアレンと視線すら交わそうとしなかった。

——曇っていた。

どうしようもないほど。

当然だろ。民間人の死は悲惨だが、軍人の死は立派。そんなもんだ。

昔、同僚が言っていた言葉を——唯一、自分と考えのまったく違う同僚と、アレンが共通した考えを——軍人の、戦士の「死」を、この騎士団長は、ただの犬死に貶めたのだ。

戦場で散るのは「立派」。

そうやって「立派」に死ぬのが軍人の務めだと、己に言い聞かせて戦場に立つ男たち。

だがそれは同じ信念を持った仲間が後ろにいるからこそ、勇んで向かえるのだ。それをこの騎士団長は共に戦うどころか、後ろから突き放した。

弱り切った国力をひた隠し、アルトリアは万全だとその夢を見続けるためだけに。

軍人として、もつともやってはならないこと。軍人の誇りを、泥で汚すような行為を平気で行ったのだ。

アレンには、それがどうしても許せなかった。頬を打たれた痛みなど、戦友を亡くした痛みには比べれば取るに足らない。

ぎり、と奥歯を噛み締めて、アレンは騎士団長を無造作に跳ね除けた。重い尻餅をついて騎士団長が倒れる。だがアレンももう、見向きもしない。こつこつと響き渡る靴音を耳にしながら、兵士たちは呆然とアレンの背を見送った。その中に、彼を追いかけるだけの気概のある者はいなかった。

抜けていた。

欠けていた。

腐っていた――。

軍人としての誇りも、信念も。

どうしようもない数の人間が、救いようもないほど根の部分で。

――お前に話したところで、もうどうにもならねえよ。

ロンベルトを手にかけたあと、アリユーゼが言っていた意味が、今のアレンにははっきりと理解できる。

それでも恩師に刃は向けられぬと信義を貫き通した彼の強い心。

アレンは目を閉じ、己の怒りを静めるように、ふ、と息を吐いて、歩き出す。

謁見の間は、もう目の前にあつた。小国アルトリアに、あまりにも不釣合いで華美な虚栄の扉。その扉に手をかけて、アレンは静かに拳を握つた。

自分の行為は無駄になるかもしれない。

曇つた騎士団長の目を、死んだアリュウゼの目を思い出して、アレンは思う。

だが生きていく限り、立ち向かわねばならない。どんなに不合理なことでも、己の本懐を遂げるためには、背を向け、逃げてはならない。それが父から唯一学んだ家名ガードの誇りだ。

豪華な内装の、空虚な部屋を睨み据えて、アレンは一步、踏み出した。

「……………」

その背を見据えて、ロウファは目を瞠みはつた。

なぜか、この青年がアリュウゼと被つて見えたのだ。

——己のみを信じて生きる、強靱な精神力が。

ロウファは拳を握りしめると、きつ、と顔を上げた。

「僕もつきあいます」

「ロウファ!？」

父の叱責に近い声がかかる。だがロウファアは、父に構わなかった。

「……………いいのか?」

騎士団長を視界の端に、アレンがロウファアを見る。

ロウファアは謁見の間へと続く扉を見据えて、言った。

「僕も、アリュューゼさんの真意を知りたいと願っている者のひとりですから」

「そうか」

つぶやいたアレンは、ゆっくりと扉を開けた。

「ま、真を申しておるのか!?!」

度肝を抜かれたような顔で、アルトリア国王は渡された紙とアレンを交互に見比べた。

アレンに渡されたのは、三枚の報告書。

ロンベルトが最期に書いた、ヴィルノアへの報告書だ。アルトリアの重鎮だった彼の文字を、国王は一番よく知っている。報告書と共に、ロンベルトの部屋からグール・パウダーの原料をアレンが手渡してきた。

「その報告書とは別に、この瓶がロンベルトの机の小箱に入っていました。自分が話した現場に行けば、これと同じ物が見つかるはずですよ。王女を凄惨な死に追いやった、こ

の瓶と同じ物が」

そう言つて、アレンはロウファを見た。

うつ、とロウファが息を呑む。王女捜索隊の部隊長が手にしていた小瓶と、まったく同じ型の小瓶を目にしたためだ。

「それじゃあ、ジェラード王女を殺したのは……!」

ロウファが言いかけて口をつぐむ。国王は状況を理解できないでいるのか、死んだ魚のような目をアレンに向けて、首をかしげた。

「その小瓶が、なんだと申すのだ?」

「グール・パウダーです」

「グール・パウダー?」

さらに首を傾げる国王に、本来ならばグール・パウダーの説明など必要ない。

なぜなら、玉座の傍らに、豪華な杖があるからだ。

魔導師の端くれならば一度は耳にするグール・パウダーの名。ネクロマンサーの研究過程で生まれる副産物という常識を、しかし、王は知らなかった。知識の象徴たる杖を、玉座の隣に置いていながら。

だが、そんな常識など知らないアレンは、起こった出来事から言うべきことを伝えた。

父親に見せるには——あまりにも無残な、娘の遺骸を思い出しながら。

「人間を魔物に変える薬です。アリュューゼは、魔物に変わってしまった王女を救おうとした。だがそれも適^{かな}わず、ロンベルトの策略を知って先日の暴挙に出たのです」

「そん、な……!」

あまりの真実に、ロウファは言葉を失った。

それでは、あんまりだった。

——そうやって、スパイに激怒した誇り高い戦士の死を不意にし、その弟まで罪人と、国の決定だからと殺すつもりか!

先ほどのアレンの言葉に、今更ながらにぶるりと背筋が凍った。

彼がいなければ、アリュューゼは、ロイはどうなっていたことか。

「な、なな、なんじゃと?! ならばなぜ、その理由を余に話さなんだのだ?」

震える唇で、国王が本当に不思議そうに目を丸くする。

アレンは、じ、と蒼の瞳で王を見据えた。

「耳を、澄まされましたか?」

「……なに?」

「あなたは国を治める方だ。高貴な身分と引き換えに、はてなく重い責務を負った方だ。あなたはその責任を果たすために、多くの声を聞き、多くの家臣と力を合わせねばならない。その意に反する者も、利用せんとする者も多くいるでしょう。あなたは城下の民

と言葉に気を向けられましたか？」

澄んだ蒼の瞳に浮かんでいたのは、最早怒りの色ではなかった。

——深い、哀しみ。

王族という血筋に生まれたがために枷を受け、誤りを正す家臣も、事実を伝える者もなかつた王を憐れんでいるのか、

それともこの王によって命を落とした、多くの兵を悼んでいるのか。

王は死んだ魚のような目を見開いて、ごくり、と固唾を飲み込んだ。

目の前の青年は、語調は穏やかだが、あの男を思い出させる。

ははは……哀しいな、王よ。

高貴な自分を嘲あざけった、傭兵風情を。

——俺はこんな茶番に付き合うほど暇じゃあない！

あの、傭兵風情と——。

「……………」

同じように、己の間違いを真つ向から正されて、国王は手で顔を覆った。

否。

侮辱からの回避方法を、彼は知っている。

国王は掌の下で憤怒の表情を作ると、指の隙間からアレンを見据えて——、ぎ、と奥

齒を噛み締めた。

「無礼者が！」

恫喝というよりヒステリックな怒声でアレンを諫めると、目の前の青年はかすかに目を細めた。その彼に、国王は、びっ、と人差し指を突きつける。

「ロンベルトがスパイじゃと？ ジェラードが化け物に変えられたじゃと？ あの傭兵風情が、娘のために命を投げ出したじゃと!？」

顔を真っ赤にして怒鳴り始めると、アレンを指差す指にも、力が籠もった。

不審人物として捕らえた男の虚言と、そう思ってしまったえばなんのことはない。

「貴様、一体何様じゃ!？ なんの根拠があつて——」

「陛下——」

ロウファアが国王を止めようとして、アレンに制された。しかしロウファアも、アリュエに冤罪を着せたままにはおけない。

睨みつけるようにアレンをふり返ると、アレンが首を横にふった。

ここは任せろと。

彼の瞳が言っている。

「……………」

ロウファアは不服ながらも、とりあえず黙した。

アレンが言う。

「ロンベルトがスパイという証拠は、今、陛下が手にされている書類を見れば明らかです」

「黙れ無礼者が！ どうせ、これは貴様の作った紛い物じやろうが！」

怒鳴りつけると、アレンは小さく、自嘲気味に笑った。

「……なるほど」

この時代にもある筆跡鑑定をすればすぐに分かることだが、どうやらそれも聞く耳は持たないらしい。

そして騎士団に証拠を探させようにも、あの騎士たちでは――。

アレンはちらりとロウファを見やると、言った。

「馬を借してくれ。この人には、見せるべきものがある」

「見せるべきもの……？」

急に話題をふられて、ロウファが首を傾げる。それも一瞬のことだ。

ロウファはぐつと表情を引き締めると、小さくうなずいた。

アレンに連れてこられたその場所は、ロウファたちが調査に来たレーテ街道だった。

馬が思わず足を止める、異臭に満ちた、あまりにも醜い場所。

そこに無残に朽ち果てた騎士団の遺体が横たわっていた。

あまりにも禍々しい光景に、国王は口を両手で覆った。

「き、きき、貴様貴様っ！ ……よ、よよ、よくも余を、こんな所に連れてきて……！」

「件のグール・パウダーを所持している遺体は、こちらです」

喚く王には取り入らず、アレンは無残に朽ち果てた騎士団の——搜索部隊の小隊長を務めていた男の遺体に歩み寄った。ロウファたちも見たものだ。

「確かに、彼が小瓶を握っていました。陛下」

ロウファが言うと、国王は顔をしかめながらもうなずいた。

アレンが問う。

「彼が握っていた小瓶の底に、粉が付着していなかったか？」

「緑色の粉のことでしょうか？ しかし、あれは仲間にも確認してもらいましたが、グールパウダーと断定することは……」

あまりにも極微量の付着物に、ロウファが困惑する。

アレンは微笑った。

「なら、グールの死体があれば納得出来るな」

「……グールの死体、だど？」

後ろをふり返って国王が問うと、アレンは小さく頷いた。

「あれです」

一瞬、憂いの色を浮かべたアレンは、崩れた荷馬車を指差した。無残に飛び散った、ジェラードの物と思われる衣服の残骸を。

これにはロウファよりも国王の方が反応を示した。

「う、ううう、嘘じゃー!」

かつと目を見開き、国王が首を横にふる。異形の死体はなかった。それでも、異形の血がついた馬車はひしゃげ、ボロ切れと化したジェラードの服には見覚えがある。

馬車の周りについた、おびただしい不死者の血が。

「こんなものが……!」

カシエルたちと来たときは気付かなかった。

思わずロウファがつぶやくと、国王は場所を指差して怒鳴った。

「き、きき、貴様貴様っ! これ、ここに、これっ、これが!?! これが……、ジェラード

……じゃと?」

はなはだ
甚だしい無礼だ。とてつもない、侮辱だった。

怒りで目の前が暗くなりそうだ。

だがそれと同時に、国王の視界に入ってくるのは、変わり果ててはいるが、見知った

騎士団の顔ぶれ。

どれも、自分が王女捜索のために差し向けた騎兵たちだった。

「これが……ジエラード……じゃと?」

もう一度、つぶやく。

人間を、魔物に変える薬。

魔物——。

この男はそう言った。

だが。

だが——、

「ジエ、ラ……ド……じゃと?」

面影など微塵もない。愛らしく整った娘の顔も、聞かん気の強そうな瞳も、美しく伸びた、あの金色の髪も。

どれも、この禍々しい馬車の痕からは見られなかった。

「……嘘じゃ、嘘じゃ嘘じゃ嘘じゃ!」

娘が、こんな身で死んだなど!

ロンベルトが、ヴィルノアのスパイだなど!

こんな男の言うことが、すべて現実にあるなど!

国王は首をふって、すべてを否定した。

血の上った頭でアレンを睨み据える。こんな気味の悪い場所まで連れてきて、凝った芝居で自分をたぶらかさそうとした、この男を――

(余を……！)

そのとき、国王は目を剥いた。

後ろにいたアレンが、深く、目を閉じていたのだ。

騎士の死を、王女の死を悼むように。

彼は蒼瞳を閉じ、冥福を祈るように右手を握って立っていた。彼を虚言者とのたまうには、その光景は厳肅で、清廉で、そしてあまりにも――残酷だった。

「……………うっ」

国王の頬に、涙が伝った。

嘘であつて欲しかった。

すべて虚言で、すべてが悪い夢であつて欲しかった。

「うう……っ、っっ！」

娘の遺体――とも言えない、馬車の残骸を見据えると、王は力なく膝をついて、例えようのない絶望に涙した。

どうして――。

(ジェラードを……、娘をこんな卑しい姿にするぐらいなら、どうして余を殺さなんのだ)

じや……！）」

本当は、分かつていた。証拠と差し出された書類を目にしたときから。

あまりにもロンベルトが推し進めていた政策に沿った報告書の内容と、ロンベルトの癖字を、誰よりも国王は理解していたのだ。

見間違えるハズもない。

だが。

信じた家臣が、スパイだった。

卑しい傭兵が、娘の仇を討った恩人だった。

娘の無念を晴らすため、その身を犠牲に、汚名まで被ってロンベルトを討った――。

それは王にとって信じたくない現実だ。

「ふう……ふう……つっ！」

首を横にふる。手で耳を塞いで、嫌々する子供のようになり、うずくまって首をふった。

一番大切なものを奪われた。

昨日、傭兵に娘が殺されたと聞かされたときよりも、ずっと。

惨めな現実が――真実が、弱い王の心には、受け止めようもなくのしかかる。立つ気力さえ、湧いてこないほどに。

「これ、が……」

骸さえも残っていない娘のボロ切れと、騎士団の遺体を見据えて、ロウファがつぶやく。

生前の王女を、当然騎士であるロウファも知っている。

あの可憐な少女が——いまはこんな姿で。

(この人が脱獄しなければ、こんな場所トコロで、野晒しとなっていたのか……)

こんな寂しい場所で。

そう思うと、ぶるっ、と身が震えた。

今なら分かる。

アリューゼがこんなものを目にして、黙っているはずがないと。だからこそ、アリューゼなのだ。

父の本性を知って絶望した今、アリューゼの、あまりにも真っ直ぐな信念がロウファの胸を叩いた。

(アリューゼさん……)

涙が、込み上げてくるような気さえした。

アリューゼが、自分の思い描いた通りの人物であったことに改めて安堵して、それと同時に、それを失ったどうしようもない悲しみに、ロウファは喉の奥にある熱いものを飲み込んだ。

「……叩つてあげましょう。我々に出来ることは、もうそれしかない」

静かにつぶやくアレンに、失意の王は首を横にふった。

「なぜ、じゃ……！　なぜ、……こんなことに……！」

深く目をつむる。他の言葉を聞かないように、王はわめく。

涙が、軀からだ中の力という力を、洗い流すように落ちていく。

(……もう、立てぬ……！)

だらしなく嗚咽を吐いて、王は無念に膝を折るしかない。

もうなにも、したくなかった。

「……それに関する答えは、もう知っておいででしょう？　本当は、ずっと前から」

上から降るアレンの言葉が、深く、えぐるように胸に刺さる。

なぜ――。

アレンの言う通り、国王は知っていた。

なぜ、こんなことが起きたのか。なぜ、これを未然に防げなかったのか。そしてなぜ、

自分はそれを理解しようとしなかったのか。

「よ、……余……、……余、が、……悪い……のか……っつ！」

うづくまる自分が、惨めだった。

違う！　父上はなにも悪くなどないのじゃ！

そう言つて励ましてくれていた娘は——もう、この世にいない。

「余、が……!」

愚王だと、罵るばかりで具体的にどうすれば良いかなど、誰も教えてはくれなかった。

民の声——。

民の声とは一体、なんだというのだ。

愚王と、罵る臣下と一体なにを話せというのだ。

「余は……、余は」

「……失礼を」

うなだれた国王の頭上から、アレンの声が届いた。

白くなった頭の中で王は首を傾げるが、からだ 躰が反応しない。

王の襟首が掴まれ、片腕で、アレンにからだ 躰を持ち上げられていた。

「!?!」

目を白黒させる。何事か、王が事態を把握するよりも先に——

「いつまで寝惚けている!」

街道の脇に広がる草原に、恫喝が響き渡った。

びくり、と硬直していた王のからだ 躰が動き出す。顔を上げると、王の、死んだ魚のような

瞳を刺し貫くように、蒼の瞳がこちらを睨み据えていた。

「アンタは娘の死の前に、それでも自分の愚かさから背を向け、逃げるつもりか!? 立ち向かえ! 菌を食いばれ! 泥水を飲み、辛酸を舐める覚悟で乗り越えろ!」

ロウファは目を見開く。あまりに突拍子のないアレンの行動に、目を疑った。

王の目が見開かれる。本当に、今、目が覚めたかのように。

「……………」

つぶやく国王を見据え、アレンはゆっくりと、国王の襟首から手を離した。

国王の持ち上げられていた躰からだが、支えを失って崩れ落ちる。腰から尻餅をつくように座り込んだ。ぺたりと地面に手をつけて、国王は力のない瞳をアレンに向ける。

どれほど脱力しようとも、蒼瞳から、目を背けられなかったのだ。

この男を前に、拒否権はない。

一切の、甘えを許さない戦士の瞳だった。

「……………ああ……………」

痛感させられてしまう。

国王の苦悩が、この男の前ではちっぽけな言い訳に過ぎないと。

見下ろすアレンが、じつとこちらを見据えている。澄んだ蒼瞳が。

「……………」このまま、ヴィルノアの好きにさせるのか?」

「!」

静かに問われて、国王は、ぐつと齒の根を食いしばった。

——娘を、こんな姿にした^{ヴィルノア}大国を。

許しておけるはずがない。だが現実にはヴィルノアに立ち向かえるほど、アルトリアは強くない。

大国に比肩するには、この国はあまりに非力だった。

「……っ、っっ！」

悔しきで目がかすむ。本当なら、ロンベルトの報告書を見た時点で決断しなければならなかった外交問題。

見てみぬフリをするべきか、否か。

ジェラードのことがなければ、考えるまでもなかった弱腰外交。

だが、

だがそれでは——。

「くち、おいしい……！　口、惜しい……っ！」

なにも言えない自分が、なにも出来ない自分が。今も、昔も——そして、将来も。

国王は拳を握り、齒の根からこぼれる嗚咽と、伝う涙に必死でこらえた。

どうしようもない屈辱だ。騎士団の弱体化という現実を知っているわけではない。

だが、知らなくとも分かる。

ヴィルノアに勝てるはずがないと。

それほど、ヴィルノアは世界の脅威だった。

「屈するの？ そうやって」

静かに降ってくる声に、国王は怒りの瞳をアレンに向ける。死んだ魚の目ではない、愛娘を殺された父親の怒りの目だ。

しかし、それを見下ろすアレンは冷たく、容赦がなかった。

「あなたが招いた結果だ。玉座にふんぞり返ったまま、この国のいまに真剣に向き合わなかったあなたの責任」

「黙れ！ 無礼者が！」

くつくつと沸く怒りが、アレンの瞳をも睨み返した。それも長くは続かない。次の言葉が、国王の胸に突き刺さったからだ。

「なぜあなたはそうやって、身分ばかり気にする？ 貴族も平民も、あなたの前では同じ、アルトリア国民だというのに」

「っ……………」

弾かれたように顔を上げ、国王は眉根を寄せた。

「アルトリア国民……………じゃと？」

脳裏を過ぎったのは、あの、異例の表彰式だった。

蛮族退治で活躍した傭兵の男を、表彰したあのときのこと。

——傭兵風情が……。貴様も蛮族と変わらぬクセに。

あのときの毒づきを、まるで知っているかのように。

「き、さま……」

ふるふると握る拳に力が入った。もつての外だ。なにを隠そう、あのような傭兵風情と、貴族と平民を、等価に見るなど——

「出来ないことじゃない。あなたが指導者として力を発揮していたなら、貴族からの献金を安直に忠誠ととらえていなければ」

「っ、っっー」

氷塊を背に押し付けられたような気分だった。なぜかは分からない。

臣下が王に財産の一部を献上するなど当然だ。だが目の前の男は、それだけで満足するのを許さないように、冷えた目をしていた。

「あなたが、国政から目を逸らさなければ」

つぶやかれた言葉とともにアレンは一步、前に踏み出した。それと同時に、国王は地面を這って後ろに下がる。

ひっ、と緊張した喉が声を洩らした。

壮絶な緊張感。頭に上っていた血が、残らず冷えていくのが分かった。

「都合の悪いときだけ、臆するのかわ？」

「っ！」

我に返って、国王はアレンを睨み上げる。目の前の青年はどこまでも冷たく、静かな表情だった。

「そして自分を守るために、怒ったフリをする」

アレンは国王の前で膝を折った。視線が同じ高さになる。見開いた国王の目には、同じ高さの視線が、はるか高みにあるような気がした。自分とは、まったく違う次元の高みに。

「う……」

唾を飲み込んで、国王は覚悟を決めたようにアレンを見る。緊張で顔が引きつった。だが、その緊張が恐怖からのものではないことに、国王はまだ気付かない。

「それではなにも変わらない。——変わらないんだ」

アレンの瞳が、和らいだ。

国王をはらんでいた緊張が消える。肩の荷が、す、と下りたような錯覚さえした。

しかしそれでも、哀しい瞳だった。目の前の青年の瞳は。

国王は息を呑む。いづらか緊張が解けた分、王には余裕が出来たが、先程のように青年を罵倒する気になれなかった。

ただ、

変われないと。

青年の言葉が、ずしりと胸に沈み込んだ。ヴィルノアに屈するしかない。その現実を変えようがないと思うと、国王の拳が震えた。

(不思議な、男じゃ……)

アレンを見上げて、国王は思う。相当無礼を働かれたというのに、国王の心は——視界は、妙にすつきりと晴れていた。

(この男は……余に、勇気をくれる……)

亡くした娘のように。

精彩のない家臣たちとは違う。アレンの意志を持つ光に、王の心は揺れていた。

「余に……、余に、立ち直れと申すのか……?」

死んだ魚の瞳が、希望の光を見つけて、アレンを見返す。先程の怒りの目ではない。今はまだ小さな、小さな光を眼に宿して、すう、とアレンを見る。

その国王の変化に、アレンは嬉しそうに微笑^わった。

「自分の弱さを知った人間は必ず強くなれる。いまのあなたのように、意志の光を宿せ
たなら」

「……余が、つよ……く?」

初めて耳にした言葉に、国王は目を丸くした。あまりにも縁遠い言葉過ぎて、一瞬、言葉の意味を理解出来なかったほどに。

うなずくアレンの姿が、鮮やかに、王の目に焼きついた。

「人は過ち、迷い、見失うものです。自分のことも理解出来ないのに、相手のことも理解しなくてはならない。……あなたの過ちは悲しい因果を生んだ。だが、あなたが齒を食いしぼり、その過ちに正面から立ち向かったなら。王女の死は、ただの死ではなく、あなたにとって最も重要な、意味のある死になる。——少なくとも、私はそう考えています」

「……余は、お前を投獄し、処刑までしようとしたのじゃぞ? ……なのにそれを、赦す(ゆる)と言うのか?」

どうして、この男は保身を考えない。

どうして、この男は最初から国王を奮い立たせるために、ここまでするのか。自分が殺されるかもしれない、そんな状況だというのに。

(……なぜ、余を恨まないのじゃ……)

ここまで賢明な、近衛騎士団でさえ明かせなかつた真実を、解き明かすほどの男だというのに。

アレンは国王をふり返ると、首を横にふつた。

「いいえ。私が貴方を赦すときは——この国に、笑顔が戻ったときだ」
「国の笑顔……それが、民の笑顔、と?」

神妙な顔で、しかし、本当の意味で「民の声」を理解していない王は、自信がなさそうに声を落とした。

すると、この不思議な青年は、冗談事のように言った。

「よろしければ手伝いませうか? 城下がどんな町なのか。その目で確かめてください」

王の無知を、少しも責めずに。なぜなら王の目覚めは、今このときだと理解しているから。

意志の光を帯びた、王の瞳を見据えて、アレンは微笑^{わら}った。

「絶対、右だ!」

「いんや、絶対左だ!」

アルトリア山岳に続く街道のど真ん中で、二人の少年はいがみ合っていた。ひとりにはタヌキの耳としっぽを持つ、八十五センチの小柄な少年。

もうひとりには、黒猫の耳としっぽを持つ、百センチ前後の——小柄な少年。

二人はきりきりと奥歯を噛み、互いを睨む。

最早、どちらの道が合っているかなど関係なかった。

（右だ！ 絶対、右に行つてやる……!）

（左！ つつたら、左だぜい!）

迫力のない、しかし、やる気だけは伝わってくる睨み合いを繰り返しながら、二人は、むむむ、と眉を寄せる。

どこかに消えていったアレンを探して、早三日。街に下りたのはいいが、目撃証言が街の外にまで及んだため、こうやって街道まで出てきたのだ。

それから、クレルモンフェランとヴィルノア、どちらに向かうか悩んだ。考えても分からないので、結局じゃんけんで決め、東に向かうことにする。

クレルモンフェランがある東。

この時点で、アルトリアにいるアレンと会える可能性がなくなっていることに、二人は気付かない。

大小の山々が連なるアルトリア山脈を、不毛な言い争いを続けながら歩いていく。

しばらくして――、

「つうか、おかしいじゃんか！ さつきから二時間も歩いてなのに、ちつともアレン兄ちゃんに会わないぜ!？」

ロジャーは地団駄を踏んだ。

鬱蒼^{うつそう}とした山合を歩いていくと、次第に街道から外れてしまったのだ。不毛な言い争いに夢中で、前をよく見ていなかった所^せ為もある。

「う、うう、うっせうっせ！ 最初に町の外に出たとき、東に行けつつつたのは、お前だろが！」

昼間だというのに、そこは鬱蒼とした木々で暗くなっていた。

ルシオが視線を左右にふりながら不安の色を浮かべる。だが、それをロジャーには気取られまいと、敢えて大声を張り上げた。

対するロジャーは、そんなルシオの心境など気付かない様子だ。

「棒切れ持ってきて倒れたほうにしたのは、お前じゃんか！」

「う、うっせ！」

「んだとお！」

ふんふんと、頭から蒸気を出さん勢いでロジャーがぴよんぴよんと跳ねる。それを視界の端で見ながら、ルシオが一層、不安そうな色を顔に浮かべた。

「……お、おい。バカダヌキ」

声をひそめて、ルシオが茂みに身を隠す。

「んだよ、アホネコ？」

ロジャーは無頓着だ。

不用意に声を暗い森に響かせるロジヤーの口を、ルシオがひつと喉を鳴らしながら、手で押さえた。

（バツキヤロ！ ……アレ見ろ）

もごもごとルシオの手の中で暴れるロジヤーを制して、ルシオが茂みの中から指さした。

石造りの建物だ。かなり年季の入った物と思われる。

アルトリア山岳遺跡と呼ばれる場所だった。

ルシオの手を払い除けたロジヤーが、嬉しそうに目を光らせる。

（おお！ でかしたぜ、アホネコ！ まさに兄ちゃんが首を突つ込みそうな遺跡じゃんか♪）

口笛でも吹かんばかりの勢いで、ロジヤーは背中に差した手斧を握るなり、さくさくと茂みから出て行く。

「お、おい！」

その彼を引きとめようとルシオが手を伸ばすと——ふり返ったロジヤーが、に、と口の端をつり上げた。

「よっし、今はとにかく冒険を楽しむぞ♪ アホネコっ♪」

ぴよんと一つ高く飛んで、ロジヤーは遺跡の中に入っていく。そのあとに、あわてて

ルシオも続いた。

「ま、待てコラ！ 抜け駆けは許さねえぞ！」

逃走、続く――。

……………

「マジかよ……………」

陰惨とした馬車のあるレーテ街道の空に、既に肉体をなくした二つの魂が、地上を見下ろすように浮かんでいた。

ひとりには長身巨躯の、生前は最強の傭兵として名を馳せていた男。

もうひとりには、豪華なピンク色のドレスに、美しく波打った金髪が印象的な、人形のように顔の整った姫。

生前、ジェラードと呼ばれていた少女だった。

「まったくじゃー！」

彼女は可憐な顔を真っ赤に染めて、父の傍らに立った男を噛み付かんばかりに睨み据えた。

「父上をあのよう罵倒するとは、なんたる無礼！ 万死に値するぞ！」

手に握った杖を、叩き折らんばかりの勢いで、アレンに向かつて罵倒する。

少女の傍らで同じく成り行きを見守っていたアリユーゼが、顔をしかめて首を横にふった。

「逆だ、ジェラード。奴はお前の父親の、あの死んだ目を醒ましやがったんだ。……愚王としか言いようのなかった、あの不甲斐ない王をな」

「な、ななんじやと、アリユーゼ！ 父に対する一度ならぬ二度の暴言！ 最早我慢ならぬ、妾が直に引導をく！」

杖をふりかぶって、高々と詠唱を始めるジェラードを、アリユーゼは片手でむんずとつかんで押し止めた。

やはり信じられない、と驚愕した目を、アレンに向ける。

「……大した野郎だ」

もしかしたらこの男は、弟のロイを助けることやアリユーゼたちの無念を晴らすだけでなく、アルトリアそのものを変えるのかもしれない――。

そんな突拍子もないことを、感じさせる男だった。

「早まるんじやなかったぜ……！」

ぐつと拳を握り、口惜しげにふるふると首をふる。

せめて奴と一戦交えるまで。それまで生きていた方が――

「もがあく〜！ もが、もがあく〜！」

押さえ込んだ王女が、暴れつつもなにか叫んでいる。

その王女に視線を落として、アリューゼは冗談混じりに考えた思考を笑って掃き捨てた。

「……ん？ どうかしたのか、ヴァルキリー」

本当なら来たくもなかったジェラードの遺体残る地に、有無を言わせず連れてきた戦乙女を仰ぎ見る。

なぜか驚いたように、アレンを見る彼女を――

(馬鹿な……。 ドラゴンオーブ 四 宝をなくした地上界の混乱を……治さめるといふのか、人間が)

アリューゼの言う通り、国王の心情の変化はレナスも感じていた。

国王の、顔つきが変わったのだ。

愚王と。

そう揶揄やゆされていた男とは思えないほど、なにかが変わっていた。

――そして、

一カ月後。

王都アルトリアを一望できる丘の上に、ロウファとアレンは居た。

ここはロウファにとって、かつてアリューゼと訓練後に訪れた思い出の場所だ。

アリューゼは丘の上に群生する草を一房掴んで、さっと風になびかせた。

——お前は風に吹かれっぱなしの草か？

騎士団長の息子として、周囲の羨望、嫉妬、期待、失望……。

いろいろな感情を含んだ好奇の目にさらされていたロウファは、あの頃伸び悩んでいた。

何度練習しても槍の腕が上がらず、なんのために槍を持っているのか。

それすらも分からず、ただ日々を生きて、時間に身を委ねていた頃。

アリューゼがふとこの丘に呼び出して、言ったのだ。

ロウファを、草と。

「……………」

今でも目を閉じれば、アリューゼがくれた言葉の一つ一つが、ロウファの脳裡に蘇ってくる。

丘に吹き上げる風を感じて、ロウファは目を細め、アリューゼよりも一回り小さい、自分と同じ年くらいの青年を見据えた。

「ありがとうございます、アレンさん。あなたのおかげでアリューゼさんの濡れ衣はお

ろか、アルトリアも少しずつ、良くなっている気がします」

丘から王都を眺めていたアレンは、ロウファの声でこちらをふり返った。

ロウファより淡い金髪が、風になびく。アレンの髪は色彩の淡さを物語るように、陽に当たると白く透けた。

ロウファほど繊細な面立ちではないが、それでもロウファと変わらない体格の彼が所持している「剛刀」はいささか青年が握るには違和感がある。なぜなら得物の大きさは同じでも、ロウファのように「槍」ではなく、彼が持っているのは「剣」なのだから。

白袋から解放された「兼定」は、全長二メートル三十センチほどの姿をさらしていた。ロウファは槍斧を握りしめる。

アレンは王都に視線を向け、首をふった。

「アリュージェのことも、この国のことも。解決させたのは、——これからも解決していくのは、君と国王陛下だ。俺はきつかけを作ったにすぎない」

「そんなことはありません。……少なくとも、そのきつかけがなければ、我々はとんでもない過ちを犯すところだったんですから」

「……ヴィルノアか」

「ええ。陛下と協議して、新しい騎士団の構想が出来たんです。できれば貴方にもその中に入っていたideきたい」

アレンは首を横にふった。

「すまない。人を待たせてるんだ。君に捜してもらってた、子どもたちとは別に。……てつきり王都内で待っていると思つてたんだが、どうも外に移動したようだな。これから、そちらも捜さないといけない」

苦笑混じりに嘆息するアレンに、ロウファは小さく微笑^{わら}つた。

「そうですか……。不思議ですね。貴方なら断ると思つてました。【騎士】なんて柄じゃないつて。……貴方はどこか、アリュューゼさんと似ているから」

「俺が？」

「ええ」

うなずいたロウファは、ザツと槍斧を構えた。

「アレンさん。どうせこの国を出るなら、最後に一度。僕と立ち合つただけませんか？ その剛刀の実力、しかと目に焼き付けておきたい。——この国を変えた、貴方の実力を」

「……悪いが、この刀は人に向けるものじゃない。だが相手にはなろう。アリュューゼに比べれば力不足かも知れないが、全力で行かせてもらう」

アレンは言うど、剛刀を脇に置き、ジャケットの懐から一本の筒を取り出した。

アルトリア国家防衛軍。

国王が立ちあげた新制度は、それまで金で雇うだけに過ぎなかつた傭兵を、希望すれば正規兵として王が認め雇用する、アルトリアの新騎士団のことだつた。

貴族と傭兵。

かけ離れた身分の差に、発足当初は衝突が絶えないと予想された新騎士団だったが、就任した若き騎士団長、ロウファの働きにより事態は大きな混乱を見せなかつた。

そしてもう一つ。

新騎士団が発足されるのと同じころ。

アルトリア王都に、ちよび髭を生やした貴族風の男が、度々現れた。その男に生活苦について相談すると、なぜか次の日には国から救済措置が政策として発表されるらしい。

そんな明るい都市伝説が王都を賑わせ、街が、国が、変革を始めた。

その影に、身の丈よりも長い剛刀を操る青年の姿があつたことを、アルトリアの国民は知らない……。

「やっ、と」

徐々に活気を取り戻し始めた王都を見下ろして、アレンは旅の一式を肩に担いだ。片手間に通信機を展開する。以前、ロジャーとルシオに渡しておいた通信機が作動していれば、彼らの現在地が特定出来るのだ。

ほどなくして、ぴぴっ、という電子音。

画面に、ロジャーとルシオの現在地が示された。ここからちょうど三十キロほど下った地点だ。

それを確認して、アレンは溜息を吐いた。

「結局、土産らしい土産を用意出来なかつたな……。怒つてないといいんだけど」
困ったように頭を掻きながら、アレンはアルトリアに背を向けた。

長い旅を、続けるために——……。

6. ラッセン編 貴族と奴隸

町の広場はひとでごった返していた。競りを仕切る商人のかまびすしい声が熱気をさらに盛り上げ、広場中央にそびえる巨大な檻が衆目を集めている。

木槌が高らかに打ち鳴らされた。

競りの始まりである。檻から引きずりだされてくるのは、農村や異国から連れてこられた奴隸だ。

喧騒はとどまることを知らず、押し寄せるひとは浮かれたように紙幣を空にかかげる。より多く札束を握る者こそがこの土地の正義だった。

奴隸市から東に進んだ先に、この衛星都市ラッセンを取り仕切る【衛士長】の屋敷がある。

——主人あのひとが愛してさえくれたなら

——あの奴隸さえ、あんな奴隸さえいなければ

吹き抜けになった板張りの玄関フロアで、夫人のか細い声は、おびただしい血と異形になりつつある人間のうめきで掻き消えていった。さきほどまで「奥さま、奥さま」と金切るように叫んでいた使用人すらも巻き込んで、夫人の、もはや怨嗟と化した【願ひ】

は二人の人間を二体の魔物に変えていく。

「……愚かなことを」

戦乙女が、空からぼつりとこぼす。魔物と化していく人間の前に、なにもない空間から白い羽根が数枚、はらり舞い落ちた。羽根は小さな光の粒となり、光のなから蒼穹の鎧を着た、銀髪の女神が迫り出してくる。

地上界に降りた戦乙女レナス・ヴァルクユリアは、寸前まで浮かべていた憐れみの表情を消すと、凜とした眼差しで二体の魔物——不死者を睨み、腰の剣を引き抜いた。

「冥界にそそのかされるまま闇に堕ちた人間よ。あるべき場所に還れ！」

白刃がきらめく。女神の一刀が不死者の胸を難なく払い斬ると、ふたつの魂が魔に落ち切るより先に、女神によって浄化されていく。

だれもいなくなった衛士長の屋敷。

戦乙女は残りの家の者が戻ってくるよりさきに、空間に溶け消えていった。

「なんてきれいな花。コレ、名前知ってますか？」

男は屋敷を出て、使用人とともに奴隸市場へと向かっていた。赤みのある焦げ茶色のゆるい巻き毛を肩まで伸ばし、彫り深い顔立ちに太めの眉、ひげは細めに、几帳面に整

えている。黒い軍服は袖の部分に金の装飾、襟元には白いレースが配され、ジェラベルン貴族の手本のような洒落た装いだつた。男の目は意外にも小さく、二重瞼と下瞼の肉付きの良さが切れ長ながらもくつきりとした目力を感じさせる。髪の色よりも瞳は濃い茶色だ。

男が住むこのラッセンという町は、王国全体が経済破綻であえぐなかで唯一、経済を成り立たせている商業都市である。おもな産業は町を象徴する巨大な奴隷市場。治安もよく、町の軍政を担う【衛士長】は民衆の支持を集めている。

「阿沙加、そんなに行きたくないのか」

男——【衛士長】を務めるベリナスは整つた眉根を寄せて、後ろをふり返つた。

「……………」

使用人の少女は——もはや屋敷で唯一の同居人となつてしまつた彼女は、ベリナスの問いに応えず、道端に咲いた白い花を手許で遊ばせている。陰気な倭人の娘だつた。

——ベリナスさまあつ！ うふふふつ

昔は明るくほがらかに、この使用人、阿沙加はベリナスに心開いていた。年相応にそつつかしい面があり、ジェラベルン貴族たちとは毛色の違う、奥ゆかしさと慎ましさもつた可愛らしい娘だつた。

それがベリナスが妻をめつたあたりから、阿沙加の笑顔は徐々に曇り始めた。妻と

折り合いがうまくいかなかったのもある。だがそれ以上に数週間前、ベリナスの妻と使用人のマリアが原因不明の病で亡くなってしまってから、阿沙加は笑顔どころか、生気をなくしたように鬱々^{うつうつ}と日々を過ごすようになってしまったのである。とくに使用人のマリアは、阿沙加を奴隸市から連れ出し一人前の使用人に育て上げた、阿沙加にとってラッセンでの第二の母のような存在だ。

殻に閉じこもってしまいうのも無理からぬことだった。

ベリナスは道端の花をいらう阿沙加をじつと見つめたあと、彼女が握っている花を奪い取った。「あ」と阿沙加が小さな悲鳴を上げる。

「返してください！ ベリナスさまっ！」

阿沙加が叫んだあと、ハツとしたように口をつぐんだ。倭人らしい艶やかな黒髪が、陽の光を浴びて青く照りかえる。彼女は腰まで流れる長い髪の持ち主だったが、白い三角巾で髪をひつ詰めており、うつむいても乱れない。メイド服に身を包んだ彼女は伏せ目がちにむつつりと押し黙ったあと、ようやく口を開いた。

「……人の売り買い、好きじゃないです。見るのも、嫌！」

異国生まれゆえに阿沙加の言葉は少しカタコトだった。奴隸が貴族に抵抗するなど、ジェラベルンではありえない。貴族によれば奴隸を殺しかねないほどの不敬なのだが、ベリナスは困ったようにため息を吐くだけだった。

「仕方がないことだ。私の妻も、マリアも、もういないんだ。お前ひとりで屋敷をきりもりするのは無理だろう？」

「ベリナス様に買われる人、幸せ。それはいいの。でも……他の子は皆かわいそう。私、見たくない」

「阿沙加にきてもらわないと困るんだ。異国の言葉は私にはわからないし、働けそうな子を選んでもらわないと——」

「それが嫌なんです！ 私の一言が、人の一生を左右するなんて……」

「花ならいいのか？」

言われて、彼女は哀しげに目を伏せた。

「召使を選ぶのは、花を摘むのとどう違うんだ」

「……」

沈黙は、阿沙加にとっての防御手段なのか——。

ベリナスは阿沙加から奪った白い花を一瞥いちべつすると、彼女の髪に、そつと花を挿した。艶やかな黒髪に、白い花弁はよく映える。

ベリナスが満足げにうなずいた。

「こうなることが、この花の運命だったんだ」

「ウンメイ？」

「そう。神によって定められた——」

「人と花は同じ、か……」

ふと、ベリナスがまたたいて後ろをふり返った。

奴隸市に続く街道に、青年が立っていた。陽に透けるようなさらりとした金髪と、深い蒼の瞳。身長は、長身のベリナスよりもまだ頭一つ分上にある。彼は黒いシャツに革のジャケットという一風変わった服装で、身の丈よりも長い、妙な筒を背負っていた。

「私には、そちらの女性の言い分の方が共感できますね」

青年が苦笑するようにつぶやく。どこにでも居そうな青年であるのに、彼の生命力とでも言うのか。どこか町の者たちとは違う【光】を感じさせる男だった。

ベリナスは首を傾げた。

「君は……?」

「私はアレン・ガードという者です。この地には先ほど着いたばかりでして……、新参者が出過ぎたことを申しました」

アレンが頭を下げてくる。ベリナスは「いや」と生返事を返すと、横目で阿沙加を見た。自分と同じく、阿沙加もまた、青年独特の雰囲気を目を丸め、きよとんとした顔でアレンを見ている。

ベリナスは一瞬間をしかめて、アレンに向き直った。

「私は気にしていない。ここにきたばかりと言うことは、旅人かね？」

「はい。人を捜しているんです。ルシオとプラチナという男女二人組なのですが、知り合いからこの町で見かけたという情報があり、立ち寄りました。……二人とも、私と同じくらいの歳です。ルシオは金髪碧眼の男性で、プラチナは銀髪の女性です」

ベリナスは難しい顔で押し黙った。衛士長を務めているが、少なくとも近隣の貴族や町の防衛部隊にそういった名の者はいない。

「ほかに服装や、背格好など特徴はないのですか？」

引っ込み思案で人見知り。そんな阿沙加が会話に入ってくるのは珍しいことだ。

ベリナスが驚き、阿沙加を横目見る。アレンが弱った声で言ってきた。

「じつは二人に会ったのは五年前なんです。なので、いまの二人について詳しいことはなにも」

「……ベリナスさま」

物言いたげな彼女を見下ろして、ベリナスはため息を吐いた。彼女がなにを企んでいるのか、わかったのだ。

「家に、お客人をお招きしろと言うのだな？ 阿沙加」

柔らかい口調で問いかけると、阿沙加はうなだれながらも、小さくうなずいた。

ベリナスが苦笑する。彼女の魂胆は、召使選びを先延ばしだ。アレンの変わった雰囲気

氣に一瞬、目を奪われたのもあるだろうが、それ以上に客人をもてなすために早々に屋敷に帰ろうというのだ。

うつむいている阿沙加を見つめて、ベリナスの胸が痛む。彼女と視線が合わなくなつてからどれほど時が経つのか——もう思い出せなくなつていた。

「ヴァルキリーよ。ここが、次の勇者の魂が選定される場所か？」

ラッセンよりはるか上空、ミッドガルド地上界全体を見渡せる天空で勇者の魂たるアルトリア王女、ジェラードは幽体のまま首を傾げた。彼女の隣には同じく、マテリアライズ現世に顕現せずいたうたう戦乙女がいる。

「そうだ。だが……」

「アレンのやつもいやがるな。どうやって嗅ぎつけてんだか知らねえが、こりやヴァルキリーの出番も怪しいもんだぜ」

ジェラードと時期を同じくして勇者の魂となった傭兵、エインフェリアアリユーゼが頭の後ろで両手を組みながら呑気に言つた。

地上を見下ろす女神レナスの視線は、厳しいものだ。

「戦乙女の見定めた死期は絶対だ。その運命を歪める者が神以外にいるのだとすれば、

それは摂理に反する」

「ひとがひとを助けてはいかん、というのか?」

ジェラードが不安そうに聞いてくる。レナスは街歩ゆくアレンを見下ろしていた。

「やつがどのような存在なのかはわからない。だが、ふたたび運命さだめを歪めることがあるならば警告が必要だろう」

一方で、レナスは疑問を感じていた。下界の人間たち——つまり、アレンたち——が向かう【衛士長】の屋敷。あそこは少し前に、レナスが不死者に墮ちんとしていた夫人と使用人を浄化した場所だ。

（——あの場所に、まだなにかが?）

戦乙女はさらに精神を集中させる。なにかが視みえてくるはずだ。

.....

アレンはベリナス邸の厨房の扉によりかかって、ひたすらうなだれていた。

「オイラたちも、一宿一飯の恩義は体で返すじゃん!」

ぶかぶかの一角白眼ヘルメットを押し上げて、狸の耳と尻尾をもつ少年——ロジャーは、えへんと胸を張った。彼の動きに合わせて、ふさふさの耳としっぽが軽快にフリフ

りと踊る。緑色のタートルネックに、カーキ色のオーバオール。大きめの手袋もやはりカーキ色で、好奇心の強そうな焦茶色の瞳は、満月のように丸く、嬉しそうにジッと目の前を見据えている。

ロジャーは包丁を高くかかげ、ベリナスの屋敷の厨房で仁王立ちしているのだ。

「あ、あの……」

厨房の入り口でうなだれているアレンの傍らに、阿沙加がいる。夕飯の支度に取り掛かろうとしたのだが、厨房を少年「たち」に占拠され、おろおろしているとどこだつた。

ロジャーと対峙するように立っているのは、クロネコの耳としっぽを持つつり目の少年、ルシオだ。こちらはお玉を片手に、どん、と胸を張っている。カーキ色のバンダナを頭に巻いたルシオは、長めの黒い前髪をバンダナの左右から視界の邪魔にならないように流している。ロジャーよりも黒に近い瞳だ。

二人とも瞳にやる気の炎を漲らせ、互いを睨み合っていた。

「へん、バカダヌキ！ 俺と料理対決しようなんて片腹痛いぜ！ こちとら、父ちゃんと母ちゃんが出稼ぎに行つてる間、弟と二人で家を切り盛りしてきてんだ！ フォルテお婆さんの飯食つて、ぬくぬく育ててきたお前とじゃ、持つてる素材が違うんだよ！」

「はん、偉そうに！ いつつもお前らの飯作つてんのベリオンじゃんか！ それに甘い

のはそつちだぜアホネコ！ このロジャー様はフェイト兄ちゃんの目を盗んで、各地の工房を巡ってはマリア姉ちゃんと二人で料理の修業を積んできてんだい！ 言わばお前とは、住んでる次元が違うじゃんよ！」

「……二人とも……」

アレンが声をしぼりだすようにして制止する。その手には、阿沙加の使い古した雑巾が握られていた。小間使いの阿沙加が、忙しく屋敷内を駆け回っているのを見つけて、アレンが手伝うと言い出したのだ。どう見ても奴隷や召使とは縁遠い彼が、そんな申し出をしてきたのが阿沙加にとって意外で、阿沙加は言葉の意味を理解するのに数秒かかった。

「そんな、お客様にそのようなこと……！」

アレンに言われた当時、阿沙加は首をふって断ったが、アレンがやんわりと微笑わらって返してきたのが少年のさっきの言葉だ。

「二宿一飯の恩義は返すのが礼儀だ」

阿沙加から取り上げた雑巾を、表彰状かなにかのように見せびらかして。

意外にも少年のような笑みを浮かべるアレンに阿沙加は戸惑いながらも、納得まではしなかったが引き下がった。人の意見を跳ね除けられるほど、彼女の意思は強くない。召使にそれほどの権利があるはずもなかった。

そうしてアレンが掃除を手伝うと、高価な調度類や広い床、高い棚などを掃除するうえで、彼は戦力になった。阿沙加が一日かけてようやく終える掃除を、二時間足らずで終わらせてみせたのだ。

「家事は得意なんだ」

アレンが得意げに言い、阿沙加もつられて微笑わらった、そんなときだった。客室で大人しくしていたはずの少年たちが、アレンの活躍を見てやる気をみなぎらせたのは。

——そうして、今に至るわけである。

アレンはようやく厨房の扉から躰からだを離すと、身の丈に合っていない厨房に行儀悪くも仁王立ちしている亜人少年二人を、す、と見据えた。少年たちが机から跳び下り、いまにも食糧庫から食材を取り出そうとしている。

「……そこまでだ、二人とも」

アレンはいつになく、声音を落とし、言った。ロジャーとルシオが、う、と同時に息を呑む。ぎこちなく少年たちは罰の悪そうな顔で背中をふり向くと、アレンが長いため息を吐いたあと、どこか遠くを見るように斜め上の天井を見つめていた。

「……二人の腕は、俺がよく知っている」

あの99.9%は劇物として出来る上がる手料理を、間違っても阿沙加やベリナスに食べさせるわけにはいかない。固く決意し、「厨房は俺が受け持つ」と強めに言い切ると、

しょんぼりとした少年たちの視線が、アレンを見上げてきた。

「兄ちゃん……」

「アレンさん……」

邪魔だ、と言外に言われ、ひどく傷ついたようだ。

アレンは無言のまま、ぴくりと片眉を引きつらせると、とりつくろうように小さく咳払いした。

「ロジャー、屋敷の外にまだ整理されていない薪があつた。あれを割っておくと、ベリナスさんたちはすごく助かるだろうな。——それからルシオ。屋敷の裏に大きな甕かまどがある。そこに井戸の水を溜めておくと、今後、炊事や洗濯のときに便利だ。……どちらも単純だが相当辛い作業だ。今日の間をやっておけば、一宿一飯の恩は返せるかもしれない」

言つて、アレンがロジャーとルシオを横目見る。表情を輝かせた少年二人が、間髪を置かずにうなずいた。

「任せとけ！」

ロジャーとルシオが仲良く言つて、厨房を走り去っていく。また、どちらが先にその仕事を終えるか勝負だ、などと不毛な争いを展開しているのが廊下から聞こえていたがアレンはそつとしておいた。

「……やれやれ」

「あ、あの……」

阿沙加に呼ばれ、アレンが首をかしげながらふり返った。ああ、と思い立ったように阿沙加に謝る。

「すまない。ベリナスさんも忙しい人のようだったから、薪割や水汲みといった重労働は早めに済ませた方がいいと思っただ。余計な世話だったか？」

アレンの気さくさは阿沙加が身分の低い召使だから、というより、年下の少女だったから、といった風だった。恐ろしく分けへだてがない。阿沙加は戸惑いを感じながらも「いえ」と首をふり、目を伏せて答えた。

「水汲みも、薪割りも、……私の仕事、ですから」

阿沙加が消え入りそうな声でつぶやくと、アレンがまばたきを落として、うなずいた。「失礼する」

アレンが阿沙加の手を取る。ベリナスの屋敷にきたばかりのころを思えば、ずいぶんとマシになったマメとあかぎれがいくつも出来た、召使の手だ。

阿沙加はあまりにも骨張った手に羞恥心を覚えて、とつさに手を引いた。だが彼女の手を握る手は意外にも固く、ほどけない。

「ヒーリング」

一瞬で構成された魔力が、少女の手に集まって青白く輝く。温かな感覚が触れてきた。洗いたての毛布を、そつと手の甲に当てられたような――。

阿沙加が戸惑っている間に、アレンは視線を上げ「すまない」と勝手に触れたことを謝ると、手を離れた。目を白黒させている阿沙加を置いて、アレンが厨房に向き直る。「ベリナスさんに苦手な物はないか？ 一応、さつき露店で味見をしたから大丈夫だとは思うんだが」

アレンの言葉を聞き流しながら、阿沙加は自分の手を見下ろした。長い召使生活で、まめとあかぎれがいくつも出来ていたはずの自分の指。

「！」

それがいまは白魚のように瑞々しい、見たこともないほど美しい肌をした手になっている。

阿沙加は息を呑みながら、じ、と自分の手を見つめて

「あ、……うつ！」

意味のない音をこぼしつつもアレンを見上げた。

アレンが手際よく食材を切る手を止めた。ふり返って、驚いている阿沙加を見ると、ああ、と小さくつぶやく。

「俺は魔導師なんだ。だから、簡単な回復魔法を使える」

「魔導師、様……………」

「正規ではないんだけどな」

アレンはまな板に視線を落とし、また手際よく食材を切り始めた。

「あ、あの……………」

今度は手を止めずにアレンは切り分けた食材をさつと皿に移している。

「どうして、こんな……………良くして下さるんですか……………」

「阿沙加。煮込み鍋はこれを使って構わないのか？」

「え？……………は、はい」

まったく関係のない問いを返されて、阿沙加は所在なく視線を落とす。煮込み鍋に水を入れ、火をつけたアレンが、火力を調節してからふり返った。

「二宿一飯の恩義、じゃ納得出来ないか？」

「……………」

阿沙加がうつむく。アレンは困ったように眉をひそめると、しばらく間を置いてから、観念したように言った。

「一生懸命だったから」

「え……………」

言葉の意味が理解できず、阿沙加が顔を上げる。阿沙加の前にあるのは、どこか遠慮

しているようにも見える、苦笑めいたアレンの顔だ。これを言っつていいものかどうか、悩んでいるときのアレンの癖だった。そんなことを阿沙加が知るはずもなく、アレンは意を決して答えた。

「君が、疲れているように見えた。ペリナスさんも含めて」

「……………」

阿沙加はどう答えればいいのか分からなかった。少なくともアレンは阿沙加に同情していない。そして、阿沙加を奴隷として見ない代わりに、ペリナスを貴族としても見えない。

分かったのは、その二つだけだ。

アレンには身分という概念がまったく欠如していた。あの二人の少年たちと同様に――。

「外は、自由で……………」

アレンは旅人だと言った。それを聞いたとき思った。彼がいた国に行けば、外ならもつと自由に、幸福に――。彼等のように、笑えるのだろうか。

最愛の人と、

ペリナスと。

だが言葉は阿沙加の喉で詰まり、そのままため息とともに、空虚な宙に散っていった。

「……苦しいのか、この場所が」

「！」

ずつと見られていると思わなかった阿沙加が、頬を赤くして顔を上げる。どこか怯えた表情の阿沙加を見て、アレンは目を伏せた。

「だったら、立ち止まって深呼吸するといい。君は、懸命に自分の職務を果たそうとしているが、反面、職務だけを見つめて、すべてを諦めようと自分を追い詰めようとしている」

「……………」

「もつと頼つていいんだ。君は、君が思っている以上に幸せになる素質を持っている。

……そうだろう？」

最後に、ベリナスとの関係を指さしているのだと知って、阿沙加は息を呑んだ。目を剥き、ふるふるすると頭を横にふる。

「違います…………… 私とベリナス様は、決して……………っ！」

阿沙加はゆっくりと後ろに退きながら、首を横にふった。アレンの言葉をこれ以上聞かないように耳を塞ぐ。それだけでは耐えきれず、その場にうずくまった。

「……………すまない」

そんな阿沙加を見かねてか、アレンが寂しげに言ってくる。阿沙加は更に首をふつ

た。

同情。

そんなもの、自分には――。

「阿沙加。少し、味見をしてくれないか？」

火を入れた鍋に向き直ったアレンが、肩越しに問いかけてきた。うずくまった阿沙加が、反応できずにアレンを見上げる。

「ベリナスさんに食べてもらおう前に、アドバイスを聞こうと思つて。……立てるか？」

アレンが心配そうに覗き込んでくる。阿沙加は思わず泣き出しそうになった。

（どうして、そんなに――……！）

自分には、身に余る優しさを。

自分には、不釣合いな温もりを。

阿沙加は唇を噛んで、アレンの視線から逃れるように目をつむった。やはり同情ではない。この青年は、会って間もない阿沙加を、ベリナスを、心配している。

「……阿沙加」

阿沙加は目に浮かんだ涙を、感づかれないように拭うと、アレンに手を引かれて、立ち上がった。

「すまない。付き合わせてしまつて」

詫びる彼に、阿沙加は首を横にふった。悪いのは、すべて自分なのだ。卑しい身分で、ベリナスを愛した。

卑しい身分で、ベリナスの傍にすることを、今もなお望んでいる——。

彼女の思考を断ち切るように、小皿を手渡された。なにかのスープだ。味見しろというので、阿沙加はそれを、ついと口に含んだ。

「……！」

すると、温かな感触が阿沙加の胸に広がった。痛みも、苦しみも。阿沙加が抱えていた悩みも全て、ふっと忘れさせてくれる、そんな感覚。

肩の荷が下りる、といった感じだった。

「美味しい……！」

驚いて何度もまばたきし、渡された小皿と、アレンを見比べる。アレンがほっとしたように笑った。

「家事は得意なんだ。昔から」

褒められて、アレンは少し照れているようだった。

阿沙加が口許に手をやる。いつも強張っていたはずの筋肉が知らぬ間にほころんでいる。

（私、笑ってる——？）

たった、こんなスープ一口で。

阿沙加が驚いて、不思議そうに首を傾げる。アレンはそのさまを見ていたが、まばたきをひとつ落とすと、厨房の奥——窓の向こうに視線をやった。

「アレンさ〜ん……!」

「おおい! 兄ちゃ〜ん……!」

遠くで、ルシオとロジャーの声。二人の仕事が終わったにしては、少し早すぎる時間だ。アレンが首を傾げる。阿沙加を一瞥して言った。

「行くう」

厨房の窓から入る夕陽が、アレンを照らすように射し込んでいる。その光景に、ぐ、と息を吞んで、阿沙加は小さくうなずくと、彼に連れられるようにして厨房を出た。

なかなか器用に薪を割る——までは良かったが、勢い余って薪割り台まで割ってしまつたロジャーと、裏の桶に水を汲む——までは良かったが、調子に乗って屋敷中の水を盛大に床にぶちまけたルシオを、アレンが無言で、頭を抱えるようにして見下ろしている。

その三人の間に流れる微妙な沈黙に、阿沙加は柄にもなく、ころころと笑つた。

7. ラッセン編（完）女神の忠告

——お二人のお心遣い、心より感謝します。

ベリナスは、今日招き入れた客人のひとことを思い出して執務書類に走らせるペンを止めた。

（……二人？）

ベリナスに礼を言うのは当然だ。だが召使の阿沙加にまで——倭人の奴隷にまで礼を言う者はこのジェラベルンには存在しない。アレンは旅人と名乗ったが、そのふる舞いから身分の低い者でないことはうかがい知れた。貴族にしてはあまりにも貧相な身なりにギャツプがある。

またアレンが連れてきたあの二人の少年も妙といえば妙だ。あのくらいの子が——アレンの息子や弟といった風でもない子が、なぜ彼とともに旅をしているのか。

考えれば考えるほど、妙な旅人だと思った。一方で、アレンに対して猜疑や警戒を抱けない自分もいる。いまもアレンが捜している二人について部下に探らせている。ベリナスの親切心はいつものことだが、どこか「力になりたい」と思わせる素養がアレンにはある。

「……いかん」

軽く頭をふって、改めて仕事に取り掛かる。だがどうにも、上の空だった。

奴隸市から帰った日の夕食。ようやく執務を終えたベリナスは、食卓についた。今日は客人もいるため品数が多く、色とりどりの食材が所狭しとテーブルに並んでいる。ふとベリナスは目を丸くした。

「……おや？」

いつも阿沙加が作ってくれる夕食とはまったく違う、見たこともない料理がテーブルを占めていたのだ。

「すみません。ベリナス様……」

ベリナスの隣に立って、阿沙加がうつむく。ベリナスは要を得ずに首をかしげている。

向かいの席に座ったアレンが、阿沙加の代わりに答えてくる。

「私が無理を言って、厨房をお借りしたんです。阿沙加に味見してもらいましたから、お口には合うと思うのですが」

「君が？」

心底驚いて問いかけると、アレンが小さくうなずいた。

「兄っちゃん料理〜♪ ひっさびさの料理〜♪」

「やっぱ見た目からして違うんだよなあ……。つつても、確かにアレンさんと同じ手順は踏んでるはずなんだけどなあ……」

ロジャーがナイフとフォークを握って、上機嫌に歌う隣で、ルシオが小首を傾げている。アレンはなにか言いたげに、なにも言えずに複雑な表情で黙り込んでいた。ベリナスの傍らに立った阿沙加が、くすくすと微笑う。

ベリナスは目を見開いた。

阿沙加の笑った顔。それもこんな無邪気な笑顔は、ベリナスでさえも久しく見ていない。無意識にアレンを見やる。ロジャーたちを見据えて、仕方がないな、と言わんばかりに笑っている彼を。

「お客人に、すまないことを」

「いえ。私が無理を言いましたので。……よろしければ彼女も一緒にどうぞ」

「いいのかね？」

「我々は客というより、厄介者ですのぞ」

「……ありがとう」

ベリナスがほがらかに笑み、視線で阿沙加に傍らに座るよう命じた。二人でいるときでさえ、一緒に食事は遠慮してくる阿沙加が、こうして素直にベリナスの指示を聞いた

のは、客人の前だったからかもしれない。

ベリナスは複雑な心境で小さく笑むと、見たこともない料理にフォークを入れた。

「では、戴いたこう。アレン君」

「恐縮です」

アレンが礼を返してくる。ベリナスはフォークで切り分けた肉を、ぱくりと含んだ。驚きに目を剥むく。気づけば柄ガラにもなく夢中で口のなかの肉を咀嚼そしゃくした。

一噛みする毎に、ふわりと広がる香ばしさと、しつかりと落ち着いた肉の旨さ。肉汁もさることながら、舌の上で、ぶるんと弾ける肉が、ベリナスの歯に当たるとなんの抵抗もなく二つ、四つと分かれていく。

「美味い……！」

ベリナスがつぶやくと、アレンは嬉しそうだった。

「これ、は……」

「阿沙加？」

ベリナスの隣で食べている阿沙加の異変に気付いて、ベリナスがふり返る。阿沙加の頬には涙が滑り落ちていた。彼女が小皿に取ったのは、ベリナスが食べたものと同じ、鶏肉をなにかのタレで焼いたもの。

ベリナスの向かいの席で、ロジャーがもりもりと料理を平らげながら、どこか誇らし

げに、手に持ったスプーンを掲げた。

「兄ちゃんは、一度食べた料理はなんでも覚えてんだぜ！ 姉ちゃん、倭国ってトコの人だろ？ オイラたち、アルトリアで倭国料理店の全メニュー制覇したから、倭国料理はお手の物じゃんよ！」

「そうそう。なんてたつて俺たちは、途中でダウンした変な姉ちゃんの分まで食ってやつたからな！」

ロジャールの隣で、ルシオも料理をもりもりと平らげつつ、偉業を誇るように何度もうなづく。

「……あれは、胃にも財布にも悪かった……」

アレンは長いため息を吐いて、天井の片隅を見つめていた。

ベリナスの隣で、阿沙加はゆるゆると涙を流している。もしかしたら自分が泣いていることにさえ気付いていないのかもしれないかもしれない。もしかしたら自分が泣いている。がとう……ごさいます……」

味見のときは気付かなかった——思えば完成品の味見はしなかったこの料理は、阿沙加が失くした——故郷の味だ。素材や細かなアレンジを加えていても、阿沙加には分かる。

遠い昔。

奴隸としてこの地を踏むよりもずっと前に、温かな食事を用意して待つてくれた、そんな穏やかな日々の。

「……………う、……………つう！」

あまりに遠すぎて、阿沙加の思考の端にも掛からないほど、別世界の記憶として刻まれた現実だ。

「阿沙加……………」

ベリナスが心配そうに語りかけてくる。倭国に捨てられ、見知らぬ土地で物のように扱われ、どうしようもなく不安だったあのころ。優しく手を引いてくれた人の声が、いまもここに。

「美味、しゅう……………ござい……………、ますね。ベリナス、様……………っ！」

ベリナスに精一杯笑いかけて、阿沙加は涙を袖で拭うと、それでもぼたぼたと溢れる涙に困りながら、料理を食べる。

美味かった――。

どれを取つても、この世でなにより美味しい料理に、阿沙加はめぐり合えた。

「美味、しい……………！ 美味しい……………！」

抑えた声で、嗚咽混じりに阿沙加がつぶやく。ベリナスは言葉を失い、圧倒されたように押し黙った。

「ベリナスさんも、どうぞ」

アレンに促されて、ベリナスも気を取り直して食事を再開する。今度は、鶏肉の隣に置いてある前菜のようなものを口に運んだ。

(確かに、美味い……)

ベリナスが今まで食べてきた、どのシエフが作った料理よりも。だが阿沙加の涙の理由は、それだけではないように思えた。倭国料理とさきほどロジャーが言っていたが、珍味といわれるあの国の料理が、これほど抵抗なく食べられるはずがない。

少なくともベリナスの知る、ベリナスが今まで見てきた倭国料理は――。

「……」

そこまで考えて、ベリナスはまたたいた。

同じ倭国料理。

なのに、ベリナスまでもが美味いと感じるこの不思議な味を、阿沙加は故郷の味として食べている。

狐につままれたようにベリナスが料理を見下ろす。

(私は、いったいなにをやってきたのだ――?)

答えは見つからない。迷宮はベリナスを思考の渦に突き落とす。ただ阿沙加の笑顔と涙を久しぶりに目の当たりにして、ベリナスのなかでなにかが変わっていた。

「なあ、ベリナスのおっちゃん」

「コラ、ロジャー！」

「アレン君、かまわない。……なんだい？」

食事が終わるころにロジャーが思い立ったように話しかけてきた。地方領主をおっちゃん呼ばわりしてしまうロジャーの気さくさにアレンは慌てたが、ベリナスが笑って受け流す。みなに関心が自分に集まったのを確認してから、ロジャーがあらためて言った。

「この町のあのでっかい檻、あれ、なんに使うんだあ？」

食事するみなの手が止まった。ベリナスはそつとアレンを見る。表情は変わらないが、アレンの空気がややびりついたのがわかった。

「ドラゴンでも捕まえんのかと思っただけど、それにしちや小さいし、檻の前に階段みてえなのもあつただろ？ スフレ姉ちゃんたちみたくサーカスでもみせてくれんのかな？」

「けどよバカダヌキ、スフレの姉ちゃんたちが連れてたライオンやら鳩が入るにしちや、あの檻でかすぎだぜ？ やっぱ別の、なんかがあるんじゃないかねえのか？」

「ともかくよ！ お祭りみてえなのがあるならオイラ、見てみたいじゃんよ！」

「ダメ！」

嬉しそうに語るロジャーとルシオを鋭い声で制したのは、阿沙加だった。ロジャーと

ルシオが驚いて目を白黒させている。阿沙加は二人を睨み、強い声で言った。

「絶対、ダメ。あなたたちがあんな所に行ったら、危ない目に遭います。だから、絶対に行かないで！ 外に出るならアレンさんから離れてはダメ！」

「阿沙加姉ちゃん……？」

すがるような阿沙加の様子に、ロジャーとルシオが顔を見合わせる。阿沙加は胸の前で両手を組み、祈るようにつむきがちに確認してきた。

「約束してくれる？」

「お、おう……」

ロジャーとルシオが、気圧されながらもうなずく。アレンが「食事を続けよう」とみなに言って、その場の緊張はいったん流れていった。

その夜。ベリナスの身に異変が起こった。

……みし、

布団のうえに、なにかが乗っている。上質な木製のベッドがベリナス以外の重みで軋きしんだのだ。

夢半分に瞼を開けようとしたが、躰からだがまったく動かない。指一本すら動かさなかった。ふいに首を絞められる。息苦しくなった。

「つ、つつー！」

喉許に絡みついた奇妙な感触をふり払おうと足搔くが、躰が動かない。冷や汗がどつとにじんだ。開かない瞼の向こうに、濃密な質量を感じる。冷たく、重く、暗い気配だった。

——こんな奴隷さえいなければ！

こもった女の声が聞こえたと同時にベリナスの耳の奥で、金属がすれ合う音がした。閉じた視界が——光に包まれていく。

「つつー！」

反射的に腕に力を込めると、躰はそれまでの鬱屈を晴らすように、バネ仕掛けのごとく跳ね起きた。直後、身構えるベリナスの目に飛び込んできたのは——つい先ほどまで自分の上に乗っていた女の顔をした白い靄だった。

「死霊?！」

ベリナスが息を呑んだ。顔立ちはわからない。だが恨みがましい視線が、見知ったものである気がして背筋が凍った。

突如、夜闇に包まれた部屋が、すべて光に照らされる。鳥が飛び立つときの盛大な羽音が響くと同時、光のなかから、白い翼を広げて現れてきたのは——銀髪の女神。蒼穹の鎧を身にまとった、運命の導き手だった。

「お前は何者だ！ ……まさか！」

ベリナスが息を呑み、銀髪の女神を凝視した。彼女は無言で腰の剣を抜き、目の前の死霊を払い斬る。死霊は声も立てず、ねつとりと恨みがましそうにベリナスを見据えて霧散していった。

室内に残ったのは、淡い光を放つ女神と、ベリナスのみだ。

動揺するベリナスに、死霊を切り裂いた女神は淡々と告げた。

「……」この屋敷は不死者に呪われている。娘が危ない」

「阿沙加が！」

反射的に部屋を飛び出していた。思考はうまく働かない。それでも、あの死霊を見てベリナスは直感している。

あれは、自分を殺そうとした。

恐らく阿沙加をも——

「阿沙加！」

「あ、おっちゃん！」

「くらっ！ ロジャー！」

必死の形相で阿沙加の部屋に転がり込むと、ロジャーの呑気な声と、アレンの慌てた

叱責が室内に飛んだ。一瞬、ベリナスがひどく馬鹿げた勘違いをしてしまったと思わせるほど、緊張感がなかった。

だがロジャーとルシオに守られるようにして、部屋の入り口近くに立った阿沙加は、怯えた表情でベリナスを見てくる。

「ベリナスさま！」

「なにっ!？」

阿沙加は首を横にふり、「来るな」という。ロジャーと、ルシオの前、部屋の奥に立っているアレンと、対峙する影がある。室内に悠然と浮かぶヴァンパイアだ。それと目が合った途端、ベリナスの背筋に電流が走った。

「貴様は——!？」

さきほどの死霊が脳裡のうりをよぎる。

ベリナスの前で腰に手を当てたルシオが、ヴァンパイアに向かって自信たつぷりに言い放った。

「ま、お前もアレンさんに見つかったのが運の尽きだな！ 悪魔だかんだか知らねえけど、『けーやく』だかんだかの悪巧みは、ここまでだぜ！」

「よ！ 虎の威を借る狐ならぬアホネコ！」

「うっせ！ バカダヌキ！」

ぎやいぎやいと言い合う二人とは視線を交わさず、アレンは町にいたときと同じ、二メートル近い巨大な筒を手にしていた。なにかが入った筒だが、筒が長すぎてベリナスには中身の見当がつかない。

アレンは静かに、その悪魔——エルダー・ヴァンパイアを見据えた。

「方陣が崩れれば、契約書を失くしたのも同じ。貴様がここにいる理由は、もうないはずだ」

「愚かな。契約は既に成された。対価を受け取り、我がきた時点で成就しているのだ」

エルダー・ヴァンパイアは阿沙加を見て、口端をうつつすらと広げた。

「……そうか」

アレンが筒に手をかける。筒を巻いていた紐を一瞬でほどくと、中から現れてきたのは、二メートル超の剛刀だ。アレンはそれを手に言い放った。

「ならばその契約ごと、俺が断ち切る！」

〈莫迦^{バカ}な——！〉

エルダー・ヴァンパイアが嘲笑にも似たつぶやきをこぼした瞬間。悪魔の手に宿った魔力が魔力として放たれるよりさきに斬られた。

抜く手すら見えない神速抜刀だった。エルダー・ヴァンパイアが状況を理解できず首をかしげた。不思議そうに自分の軀^{からだ}を見下ろす。頭から足先まで、一刀両断されてい

た。

〈ぎぎぎ。いいいやああああ……っ！〉

エルダー・ヴァンパイアの魂が凄まじい叫声とともに、闇のなかへと沈んだ。

小さな鏝鳴り音が立ち、部屋に静寂が訪れる。さきほどまでの争いが、まるで夢だったようだ。

「……終わりだ、ヴァンパイア」

エルダー・ヴァンパイアが居た部屋の壁をあらた検め、アレンは傷がついていないことを確かめると小さくうなずいた。ベリナスがうわごと譫言のようにつぶやく。

「君は、一体……アレン君？」

ふり返ったアレンが、静かに笑う。

「あなたがたを見かけたときから、妙な感じがしたんです。俺は魔導師ですから、そういう感覚に敏感で……。だから屋敷を掃除させて頂いたときに原因を探って、阿沙加に憑いた魔術の、厄除けをしたんですよ」

「しかし……、あれは……！」

「昼間に気付いて身代わり人形を仕込んでおいたのが幸いしたようです。方陣を崩しても、この威力。……さっきの使い魔の主は、相当高位の魔族か」

最後は独り言だった。アレンは改めて、阿沙加に向き直る。

「怪我は？」

「いえ……………」

ふるふると小さく首を横にふる彼女に、そうか、とうなずいてアレンはきびすを返した。ベリナスが、引き止めるように彼の名を呼んだ。

「アレン君！」

「すみません。見知った気配がするので先に会ってきます。ルシオ、ロジャー。夜更かしはほどほどに、な」

「任せてください！」

「今夜はふかふかベッドで『枕投げ男勝負』だぜ！ アレン兄ちゃん、早く帰って来いよな！」

「……………ほどほど、は伝わりにくいかな？」

「じゃ、後でな！ 兄ちゃん♪」

どこまでもマイペースで言い切つて、客間に戻っていくロジャーたちの背中を見つめて、アレンはため息を吐くなり阿沙加の部屋を後にした。

阿沙加の部屋は屋敷二階の奥まった場所にある。そこから四、五メートルほど歩いて

玄関ホールに行くと、彼の見知った——最近知ったばかりの女性が、神々しい光を放って立っていた。

月明かりのなかに映える、銀髪の女神。

女神はくるぶしまで伸びる銀髪を肩のあたりから三つ編みにしている。アレンが玄関ホールにたどり着くなり、彼女は青い瞳をそつと押し上げた。女神の肌の白さを強調するように、その全身からは淡い燐光が放たれている。

「また、会ったな……」

アレンの言葉に応えず、レナスは無言のまま、アレンが階段を下りてくるのを見守っていた。下りるアレンの足音が、レナスのいる玄関ホールで止まる。

ちようど、二メートル。

アレンに染み付いた戦闘習慣が、ぴたりと足を止めるその場所で、アレンは屋敷の二階、阿沙加の部屋とは真逆の——左側の部屋を仰いだ。

「……あなたは知っているのか？ 阿沙加にかけられた呪いの主が、一体なんなのかを」
「この原理はお前が理解した通りだ。でなければ、あの部屋で見つけた魔人の方陣を、あかも容易く無力化させることは出来ない」

「魔人の、方陣……？」

初めて聞いた名を口にするように、アレンが思索顔を浮かべる。女神——レナスは小

さく目を細めた。

「少なくともアレによって、あの少女は呪い殺されるはずだった。そしてあの男ベリナスがその命を代償に、彼女の代わり身となる運命だったのだ」

「それがあなたの予見、と？」

「……戦乙女が見定めた死期を、お前は狂わせた」

レナスは淡く光る蒼白の鎧から白い翼を広げると、細身の剣を抜き打った。まさに神速。放たれた白刃が、アレンの喉許で止まる。アレンは涼しい表情のまま微動だにせず、レナスを見つめていた。

「なぜ、抵抗しない？」

「あなたに斬る気配がなかった」

「甘いな。人間よ」

白刃を喉許に突きつけたまま、レナスが厳しく告げる。

アレンは微笑んでいた。

「それに、あなたに礼を言いたかった。ベリナスさんを救ってくれて、ありがとう」

レナスは息を呑んだ。

彼は、知っていたのだ。

死霊にうなされ、殺されかけたベリナスが、レナスによって救われたことを。

ベリナスの悪夢は、妻の呪いの余波を受けた副産物のようなものだ。それに干渉する能力をアレンは持っていない。

彼自身、ベリナスが悪夢にうなされているのを察知できたわけではないが、なんとなく分かった。

——この戦乙女が、少なくともアレンが屋敷にいる間、ずっとベリナスの隣にいたことを。

見えなくとも感じたために、アレンは静かに微笑わらっていた。剣を突きつける相手に少しも臆おそさずに。

「貴様……」

「あなたは死期の近い戦士の魂を、神界に連れて行く神、らしいな。だがあなた自身は人に死を与えるわけじゃない。だろう？」

「……どういう意味だ」

「あなたは人の命を引き取る。だが、その心を守ろうとした。アリュウゼゼが自害したあのときも。ベリナスさんが闇の気に晒された今も。少なくとも、俺にはそう見えた」

「……………」

レナスは視線を下ろすと、アレンの喉許ノドに突きつけた剣を納めた。人間が知れるはずもない神の行いを、この男は理解できた。運命ノルンの女神のなかで最も神格の高いレナスを

以ってしても、目の前にいる男の奥にあるものはうかがい知れない。人間であるのに、この男はすでに神の気配を覚えてしまっている。

無言のままきびすを返すレナスに、アレンが問う。

「行くのか？」

レナスは質問に答えず、ただ肩越しにアレンをふり返って言った。

「戦乙女の見定める死期は絶対だ。……次の妨害は、容赦しない」

「二つだけ」

レナスが鮮やかな蒼の鎧から清廉な白い翼を広げて、空間に溶け消えるまえにアレンをふり返る。——自分でもどうしてふり返ったのか。

レナスが首をかしげる間もなく、アレンが言った。

「あの方陣を作ったご夫人を。あなたなら助けられないか？」

アレンが昼間に見つけた魔人の方陣。それを発見した場所がベリナスの妻の部屋だった。

今日屋敷にきたばかりのアレンが、犯人をベリナスの「妻」と断定できたのは、あの魔人の方陣が、妻の部屋のクローゼットに刻まれていたためだ。

阿沙加が着るにしては、あまりにも豪華な服。

ベリナスの母にしては、あまりにも若いデザイン。

そしてなにより阿沙加とベリナスの関係を看破したアレンは、誰がなぜ、そのような方陣を組んだのか、大体の予想がついた。

憎しみに駆られた妻が、すでに逝去していることも。

レナスはアレンをふり返って、首を横にふった。

「魔人に贄として魂を捧げた人間は、魔人の一部として取り込まれる。消滅した魂を、私が救うことは出来ない」

「魔人が死んだその後でも、か？」

問いかけるアレンに、レナスは一瞬、耳を疑った。

人間が、魔人を？

蟻が象に挑むような話だ。賢明であると思われた男が、しかし人間であるがゆえに無知だということを書いて出して、レナスは失笑した。

「魔人に人間が挑むことは不可能だ」

「魔界にいるから、か？」

「そうだ」

それもヴェリザともなれば魔人でも上級種だ。アース神族のレナスたちでさえ、まともに対手をすればどうなるか分からない魔界を、まさか人間に扱えるはずもない。

彼は魔界ニブルヘイムに向かう術さえ、持っていないのだから。

アレンは静かに視線を落として、それからもう一度、レナスを見上げた。

「……それで。最初の質問の答えはどうなんだ？」

——魔人を殺した後、解放される人間の魂を。

そんな小さなものにこだわるアレンに、レナスは鼻で笑った。まるで話にならない。

「出来ないことを知っても、無駄なことだ。どの道、お前には関係ない」

「それは俺が考える。俺に出来る最大限のことを。……だから」

言葉を切った人間は、恐れ多くも神であるレナスを真正面から視線で射抜いた。

「もしも俺が成功したときは——、ご夫人をよろしく頼む」

人間の戯言にレナスはそれ以上答えず、夜闇に消えていった。

「……すまない」

誰も居なくなつた虚空に、アレンのつぶやきが洩れる。

次に向かうのは、ベリナスの部屋だ。屋敷の主人が、そこで待っている気配がした。

「夜遅くにすまないな、アレン君」

「いえ。それで話というのは？」

木製の丸テーブルを二人で囲み、ベリナスとアレンはテーブルに立てた蠟燭の火を見ていた。

ベリナスの左手には、珍しく果実酒が握られている。酒の手を借りねば、とても寝付けない。この日はいろいろなあり過ぎた。

「まずは君が捜していた二人組だが、やはりこの町にはいないようだ」

アレンは予想していたのか「調べていただきありがとうございます」とすぐに礼を返してくる。

ベリナスが果実酒を一口あおる。「私の話を聞いてくれるか」と問うと、アレンは黙つてうなずいた。ベリナスは礼を言い、胸のうちを打ち明けた。

「さきほど阿沙加を襲った魔物……。あれを放つたのはおそらく、妻なのだ。私はよき貴族、よき指導者であるために今日までを生きていたつもりだった。ひとびとの模範となるように自分の感情がどうにもならないときは、神の定めた【運命】だと受け入れ、事態を割り切るように努めてきたのだ。だが……。実際はっ」

ベリナスの唇が震え、ベリナスは動揺を隠すように左手で顔を抑える。アレンが落ちて着かせるように、ゆっくりと声をかけた。

「ご夫人も、つらいお立場だったと思います。貴族の女性が子を身ごもれない苦痛が、彼女を追い詰めてしまったのでしよう」

「違う！　話は、それだけではないのだ。私が、私が阿沙加を……。阿沙加を愛してしまつたがために、私は妻を抱くこともできなかつた……。そのせいで妻は、追い詰められ

た。自殺ではなかったのだ。阿沙加を殺すために、自分の身を——」

果実酒を入れたグラスを握る手が震える。アレンが気づかわしげにこちらを見ていた。

「ですがベリナスさんは阿沙加さんと、なにか関係をもったわけではないのでしょうか？」
「当たり前だ！ 神に誓って、妻の立場を穢すことはできない。だが私が感情を御せなかつたばかりに、私を慕ってくれた妻があんなことに……」

——阿沙加が奴隷でなく貴族であつたなら

——ベリナスが感情もなく、妻を抱ける冷徹さを持ち合わせていたのなら

——妻と「阿沙加は奴隷の倭人であるまえに、家族同然だ」という価値観を共有できたらなら

ジェラベルンに住む者たちが「当たり前」として甘受している常識が、最悪の形で噛み合つた悲劇だつた。ベリナスの苦惱は、ジェラベルンで正義とされているものを護り続けるかぎり決して晴れることはない。

ゆえにアレンを、部屋に招き入れたのである。

「私の、私のせいで阿沙加は笑顔を曇らせ、妻も、マリアも、みなこの世を去つた。信頼していた部下も父も戦争で……私はいつたい、どうするべきだつたのだ？ アレン君、まだ年端もいかぬ君にこんなことを聞くのは間違つていると思う。だが私は君の料理

を食べ、阿沙加の反応をみて、衝撃を受けた。決してまじりあうことがない二つの文化が、違和感なく溶け合っていた。君には、わけへだてがない。だから我々がどうすればいいのか、君ならば——」

「……社会として成り立ってしまっている価値観をひっくり返すことは容易ではありません。ましてラッセンは経済の根幹が奴隷市場。もしいまの状態で奴隷の立場をよくすれば、労働力を奴隷に任せきりだったこの国の支配層——つまりベリナスさんと同じ貴族たちからの反発は相当なものになるでしょうね」

だからこそ、と続けたアレンが自分にも手渡されたグラスをからりと鳴らした。

「やりがいがあるとも言える」

ベリナスがまたたく。

「ラッセンを……変えようというのか？ 私ひとりのために」

「いいえ。ただ、あなたはラッセンの住人でありながら、私の連れ——ロジャーやルシオを歓迎してくれた。ひとと見た目が違うからと言って下に見なかつた」

「客人をもてなすのは当然だろう」

アレンが小さく笑う。

「あなたは優しい方です。見ず知らずの私のためにひとを捜してくれ、このラッセンの独立部隊の方々や民衆からも慕われている。経済破綻した本国と違い、商業都市として

町を成り立たせている優秀な方。私は、ラッセンにいるひとびとがあなたのような視野をお持ちなら、今回のことは起こらなかつたと確信しています。すなわち奴隷は【物】ではなく【ひと】として尊重できていれば」

「……そんなことはない。私は阿沙加を愛してしまっただけで、奴隷は奴隷と……見放している」

答えながらもベリナスはうつむき、震える手を抑えた。思い出すのはこの青年と出会う寸前のこと、阿沙加が道端の花を摘んでいたときのこと。

——こうなることが、この花の運命だったんだ。

——ウンメイ……？

——そう。神によって定められた——

悲しげな阿沙加の顔が浮かんで、ベリナスの胸が痛む。こんな想いは、ジェラベルン貴族にあるまじき邪念だ。わかっている。わかっているのに消しきれず、【運命】を持ち出して割り切るしかなかった。

だが、

運命？

妻やマリアが死んだのも、運命というのか。

父や 多くの仲間が戦死したのも、運命といえるのか？

自分がいまここにいるのも、運命のたまものなのか？

阿沙加と出会ったのも——！

ベリナスの心が限界を告げている。大切な人を「大切だ」と言えない世情が、心を軋ませる。だからジェラベルンの常識に毒されていないアレンの言葉を聞きたかった。

聞きたいまでも、生まれてからずっと「正しい」と言われてきたことを変えることに抵抗がある。

ベリナスがもつとも、その正しさに苦しまされてきたというのに。

アレンはベリナスの肩にそつと手を置いた。

「私も、生まれは田舎の地方領主家です。ですから幼いころから人の上に立ち、剣術を極めることは義務だった。周りに負けないために自分を殺し、弱音を殺し、つねに平静を保つよう努めてきました。けれどロジャーやルシオたちと出会って、私は救われた。自分のあるがままの感情を受け入れ、話してもかまわないのだと、ロジャーやルシオは教えてくれます。彼らの国には差別がない。種族間の違いは、彼らにとって尊敬すべき個性ではないんです」

「個性……？」

「すごい国です。ロジャーとルシオだけでも祖にもつ種族は違うのに彼らは争わない。完璧に棲み分けている。過去には彼らの国に攻め入ろうとした国もあったそうです。

けれど彼らの国は互いの個性を生かして、侵略を退けた。だから多種多様な種族がいる彼らの国の隣都——交易の街、ペターニという隣国においても、ロジャーやルシオといった「亜人」は受け入れられている」

「そんな場所があるのか……」

しみじみと驚くベリナスに、アレンはうなずいた。

「このラッセンが、ペターニのような街になるのは遠い未来かもしれない。あるいは、ないのかも。それでも違う種族を受け入れることは、決して不可能じゃない。ラッセンも変わるはずなんです。支配階級は強大な権力で、これまで正義とされてきた立場を失うことに強烈な反発を示すでしょう。しかし、あなたは、阿沙加を幸せにできる人です。きっと阿沙加だけでなく、多くのひとを」

「……………」

「戦いましょう」

ベリナスの瞳に、力が帯びていく。アレンの言っていることが常識外れであることはベリナスも十分承知している。だが目の前の男の、迷わない視線はベリナスの心を動かす力を持っている。

「私は、阿沙加を愛してもいいのだろうか……」

ベリナスの瞳が揺れる。アレンは正面から見返してきて言った。

「あなたはなにも間違っていない」

夜が明けた早朝。旅支度を終えたアレンは、眠気眼のロジャーとルシオを連れて、ベリナスの屋敷の前に立っていた。

「もう行ってしまうのか？」

「ええ」

見送りにきたベリナスに言われ、アレンがうなずくと、ベリナスが不満そうに眉根を寄せた。

「君は私と阿沙加の恩人だ。せめて礼をしてからでも……」

「方陣を解いたのは、一宿一飯の恩義です。気になさらないでください」

「しかし……!」

物言いたげに口を嚙むベリナスに、アレンは微笑いかけた。ベリナスの隣で、彼と一緒に見送りにきてくれた、阿沙加を一瞥して。

「お幸せに。吉報をお待ちしています」

アレンの言葉に、阿沙加とベリナスが顔を見合わせ、照れたようにうつむく。アレンがベリナスに手を差し伸べる。すると、ごしごしと目許をこすったルシオとロジャーも

続いた。

「元気でな！」

「世話になつたぜ」

三人の、差し伸べられた手を見下ろして、ベリナスは大きくうなずいた。困ったことがあればこれに話しかける、と言われて持たされた謎の四角い箱が、ベリナスのズボンのポケットにある。

アレンとルシオとロジャーと、これでは握手というより円陣のようだが、ベリナスは気にせずに彼等の手に、もう一方の自分の手も重ねた。

「ほら、阿沙加姉ちゃんも！」

ロジャーに言われて、阿沙加が戸惑いながらも手を差し出す。五人の手が重なったところで、アレンが言った。

「次に会う、そのときは——」

ベリナスを見やってアレンが微笑^{わら}う。それに、こくりとうなずくベリナスが、後に続いた。

「私は誓いの言葉を、阿沙加と交わそう。例えいくらかかろうとも、ラッセンの市民に、私たちを認めさせてみせる」

阿沙加がハッと目を見開く。アレンが言ってきた。

「御武運を」

「君も。君たちの旅に、幸運が待ち受けんことを」

互いにながずき合うと、円陣を組んでいたロジャーが張り切った声で叫んだ。

「がんばるぞー!」

「おー!」

声をそろえた四人の 円陣が解ける。

ベリナスは柄にもなく腹からの大声を出して、驚いた表情でこちらを見る阿沙加に笑いかけた。もう表に出ているというのに、その彼女の肩を抱く。

「ベリナス様……」

阿沙加の涙ぐんだ声が、いまのベリナスの活力だった。

そして――、

ベリナスに彼女を選ぶ勇気を与えてくれた青年の背を、ベリナスは建物の影で見えなくなつてからも、見送り続けた……。

8. カミール村編（完） 神に挑む者

天空にいるレナス・ヴァルキュリアは凜とした面持ちに怒りをにじませ、下界を見下ろした。

——怒り。

本当にそう分類していいのかは、彼女自身にも分からない。だがレナスは地上を見下ろし、眉間に深いしわを刻んだ。

「あの、人間め……」

眼下に広がる鬱蒼とした森林の向こうに、小さな村がある。地上界によくあるさびれた村だ。

レナスは忌々しげに目を細めた。

………

ラツセンを出立して数日後、ロウファの寄越した早馬が金髪ルの少年オの情報を持ってきた。放浪の賞金稼ぎとして名をはせる彼を見た、という冒険者が現れたのだ。

アレンはまず情報の真否を確認するために、冒険者を追うことに決めた。ジェラベルンに向かいかけた足を引き返し、一路、アルトリア領内カミール村に向かう。目撃した冒険者の男が、ギルドから依頼を受けてここに向かったというのだ。

「に、兄ちゃん……」

「アレンさん……」

どこにいても賑いを忘れない亜人の少年たち——ロジャーとルシオですら、村の異様に息を呑む。

巨大な岩山を背中に抱くカミール村は家のほとんどが岩をくりぬき、そのなかに木造家屋を押し込めている。さびれた山村にしては大きな軒家が多く、見る者の目を奪うが、それ以上にロジャーとルシオを震え上がらせたのは、広場に散乱する石像だ。

男、女、子ども、老人——……。

本物と見まがうほど精巧につくられた石像は、例外なくすべて壊されている。買い物に行く途中の娘や、孫と遊んでいた老人、薪を担いでいた男性など表情の細部に至るまでが生々しく、村人がだれひとりいいないこともあつて不安をおおる。

「あれは……」

アレンがつぶやいて、視線を上げた。村の奥にある遺跡の入り口に、冒険者風の男女が立っていた。こちらは石像ではなく、生身の人間だ。

「おお！ ちゃんとひとが居たじゃんかあ！」

ロジャーが飛びつくように駆け出した。遺跡の入口にいる男女が、びくりと肩を震わせてふり返る。若い二人組だった。青年のほうが、ロウファの使いが言っていた金^ル髪の少年^シの目撃者だろう。彼はロジャーたちを見るなり大きく目を見開いた。

「村の生存者?! ……じゃあ、ない……か……」

黒髪をうなじでひとつにまとめた青年——カシエルは、ロジャーとアレン、ルシオを順に見やって、ため息を吐いた。青銅の鎧は簡素だが使い込まれている。失望したようなカシエルを見やって、アレンは首をかしげた。村の異様さの原因を知っているような顔だった。

カシエルは見慣れない——やや錆びた剣を握っていた。

「我々は先ほど村についた者です。生存者、と言われましたが、これは一体……?」

慎重にアレンが問うと、カシエルの隣にいる茶髪の女剣士——セリアが、陰鬱な表情で答えた。

「私たちは、情報屋の依頼でこの村にきたの。村が魔物に襲われたから、助けてくれって」

「だが、実際は見ての通りさ。ここにいる村人は……全員石化された上で、破壊されちゃってる。村を出るなら、早いほうがいいぜ」

カシエルは握った鑄剣を見下ろして、やり切れない調子でつぶやいた。アレンの傍らから、ルシオが首をかしげる。

「そうすると、兄ちゃんたちはどうするんだ？ もう事件は終わってるように見えるけど、兄ちゃんたちは、まだ村を立ち去りそうにないぜ？」

「とりあえず、村の生存者を探さ。せつかく石化解除の薬を用意したんだ。一度くらい、使っておきたいだろ？」

動いている村人、という期待は捨てた。

カシエルの言外の言葉に、セリアの表情が曇る。

アレンは視線を落とし、カシエルが握っている古い剣を見てたずねた。

「村人全員を石化させる相手に、なにか心当たりが？」

「おそらく、メドーサだ。村人以外は石化してない。石化させたあとは必ず破壊する。

そんな知恵がある魔物と言え、な」

「では、その剣は？」

「この建物の門代わりになってた剣だよ。刀身にルーン文字が刻まれてて……、えっと、セリア？」

なんと書かれていたのか思い出せなくて、カシエルがセリアを見やる。連れの女性は力なく微笑わらった。

「蒼穹の煌きを集め鍛えし剣、グラン・ステイング。我、この地に絶対悪を封ずる」と刻まれていたの」

「ぜったいあく」ってなんだ？」

「それに、封じてあったものを外してもいいのか？ 兄ちゃん？」

矢継ぎ早に問いかけてくるロジャーとルシオに、カシエルは折り合い悪く頬を掻いた。

「それは……まあ」

アレンも遺跡に続く階段を上り、入り口に立った。村のなかでも一際存在感のある巨大な建物の扉が、わずかに開いている。

アレンは門のあった場所と、カシエルの持つている剣を見比べて目を細めた。

「……すでに封印は解かれたあとのようだ」

つぶやくアレンを見て、カシエルが意外そうにまたいた。

「アンタ、魔導師かなんかなのか？」

「……ええ」

アレンが半開きになった遺跡の扉を押し開ける。錆びた鉄がこすれあって間延びした鈍い金属音が鳴り響いた。開かれた鉄扉の向こうにあったのは、地下への階段だ。遺跡特有の埃っぽい空気。階段をしばらく降りていくと、祭壇のある部屋を見つけた。床

に、なんらかの魔法陣が描かれている。

「あれは……!」

後ろからセリアが驚き、一行を追い抜くように駆けだした。石造りの部屋のなか――祭壇に腰掛けた少女の石像がある。

セリアが上ずった声で叫んだ。

「奇跡よ! 石化した状態でそのまま残っているなんて。カシエル、薬をちようだい!」
「……そういうことか」

「え?」

セリアが不思議そうに相棒をふり返る。いつもなら、自分と同じように生存者の無事を喜ぶ彼が、緊張で声を強張らせていた。

遅れて入ってきたカシエルは堅い面持ちのまま、床に描かれた魔法陣のうえで足を止めた。

「子どものいたずらで、魔物の封印が解かれたのさ。こんなところに子どもがいるの、おかしいだろ?」

セリアの表情から、喜色が消える。

ルシオが眉をひそめた。

「子どものいたずらだって!」

驚きに目を見開くルシオに、カシエルがうなずいた。アレンの足許でロジャーが、ぴよんぴよんと跳ねる。

「こらあつ！ そんな危ないモン封印してんなら、ちゃんと入れないように、貼り紙の一つでもしろつてんだ！ 危なっかしいにも程があるじゃんよお！」

「……まったくだ」

ルシオもあきれたようにうなずいた。

村から避難しろ、というカシエルたちの忠告は、どうやら三人とも聞く気がないようだった。カシエルはそんな彼等を横目に、セリアをふり返る。懐から石化の解薬が入った小瓶を取り出し、肩をすくめた。

「いますぐ石化を解く必要はないよな。子どもの泣き声は苦手なんだ」

「……そうね。村を出てからでも遅くはないけど——」

瞬間、セリアの表情が固まった。

「その少女は百年後に目覚めさせる予定だ。私からの謝礼としてな……。そのほうが、幸せだろう？」

地を這うような低く禍々しい声が響いた。この場にいる誰のものでもない、第三者の声だ

一同が構える。各々、自慢の得物に手をかけ、油断なく周囲を見渡すが、声の主は見

当たらない。——冷たく、硬く、どこか不吉な声だった。

「この野郎！ 姿を見せやがれ！」

カシエルが体格に似合わぬ大剣を抜いて威嚇する。返ってきたのは、不吉な第三者の忍び笑いだ。

「善意と悪意を両立させて、なにが面白いの!?! 事実を覆い隠しても、なににも変わらない

わ！」

細身レイビアの剣を鋭く構えながら、セリアが叱責する。

瞬間。

石室の闇が、ぬらりと動いた。

「危ねえっ！」

ロジャーとルシオが同時に叫ぶ。カシエルはただ、首を傾げていた。

「——え？」

セリアが、カシエルを見て表情を凍りつかせる。その瞳が、恐怖に揺れた。

火花が散る。

カシエルの視界に、白いなにかが、蛇のように地面に落ちていった。兼定カタナを納めてい

た、白筒が。

〈なにつ!〉

カシエルの背中を狙い打った『その者』が、驚愕する。『その者』の手にした槍が——カシエルの背を突き刺ささんとした矛先が、音もなく切り落とされたのだ。

「……お前が首謀者か」

ぼつりとつぶやいたアレンが、抜き打った。

「——くっ！」

『その者』が舌打ちし、咄嗟にあとずさる。二メートル近い剛刀の間合いを、人間とは思えない跳躍力で『その者』は逃れた——はずだった。

「馬鹿なっ!？」

剣尖から疾風が生じ、槍を握る『その者』の腕が切り落とされる。

「……す、い……い……！」

セリアが、ぼつりとつぶやく。カシエルはぼうぜんとしていた。

「ぐう……、貴様アツ！」

落とされた右腕を抱えて、『その者』がカットと目を見開いた。石室の闇が集約され、黒い渦になっていく。あるとき、『その者』を中心に闇が爆発した。

「ハアツツ！」

壮絶な気魄とともに突風が巻き起こる。カシエルは咄嗟に両腕で頭をかばい、その場に伏せた。吹き荒ぶ風が、カシエルの長い髪を強かに打ちつける。

「な、なんだ……!?」

事態が把握しきれず、カシエルは身を伏せたまま視線をめぐらせた。傍らで兼定を握るアレンは、集約した闇が放つ烈風をまるでそよ風と感じているのか、平然と立ったまままだ。

カシエルと同じく身を屈めたセリアが、両腕の隙間から驚きの声を上げた。

「不死者——グレーターデーモン!?」

「悪魔だど!?」
デーモン

カシエルも目を見開く。

集約した闇のなかから魔物が現れ、巨大な四肢を広げて低く吼える。

——グオオオオ……!——

天井に頭がつきそうな巨躯だった。人型の魔物は、頭と手足は鋭いトゲ状になっており、胸から腕、腹から脚にかけて人間の筋肉を異様に発達させたような硬い鎧皮におおわれている。尻から爬虫類のしっぽが生えていた。

魔物はアレンを見下ろし、いびつな唇を割った。

「この姿となれば貴様に一片の勝利もない! 死ぬ、人間よ!」

灰色の筋骨隆々とした腕をグレーターデーモンが掲げると、その掌にまた闇が集約する。空気を丸ごとゆがめて押し込めるように風が巻き起こり、カシエルは心の底から恐

怖した。

（殺される——！）

冷たい汗が、額を、背を、手を這う。人間には理解できない異次元の現象。なにが起きていのかわからない恐怖が、身をすくめさせる。

「同じことだ」

アレンの声が、カシエルの震えをぴたりと止めた。

「……え？」

ぼうぜんとアレンを見上げる。アレンの身の丈以上もある剛刀が、ふり抜かれていた。闇を掲げるグレーターデーモンを真横に両断する銀弧が走る。

「ば、馬鹿な!? こんな、こんなことが……!」

目を見開くグレーターデーモンの、集約していた闇が霧散する。ゆつくりと、バランスを崩したグレーターデーモンの巨体が突如、光に包まれた。

光の翼を広げた、女神によって。

「!」

アレンがわずかに視線を上げる。そのときには既に、銀色の髪をなびかせながら、女神レナスの手にした剣が、グレーターデーモンを頭から一刀両断していた。

——グアアアアア……ッ——

断末魔の悲鳴を上げて、グレートターデーモンが光のなかで散っていく。

そのさまをじっと見据え、カシエルは空から降るように現れた、女神を見つめた。

「戦乙女、ヴァルキリー!?!」

蒼穹の鎧に身を包み、女神は溢れんばかりの光を放ちながら地上に降り立った。

金糸で刺繍された豪華なスカートから、すらりとした彼女の脚が見え隠れする。手にした剣と、蒼穹の鎧。戦士の武具を身にまといながらも女性らしい神々しさを放つ、美貌の女神。

カシエルの驚きなど女神の眼中にはなかった。

「忠告はした。覚悟は出来ているか、人間よ」

凜としたレナスの声が、アレンに向かって鋭く放たれる。対峙したアレンが兼定を納め、レナスに向き直った。

「この場でだれかが命を落とすことが、あなたの見た運命、ということか?」

「そうだ。お前の存在は、主神オーデインが定めた運命を狂わせる」

答えたレナスは剣先をアレンに向け、言い放った。警告はそこまでだった。レナスのからだが消えたかに見えたとき、彼女はすでに剣を上段から打ち込んでいた。

(速い——!)

カシエルが思わず息を呑む。明らかにグレートターデーモンをも上回る実力。異次元

の存在に、カシエルは冷や汗が滲むのを感じた。

火花を散らして、劍戟が交じり合う。カシエルが瞬いたときには、アレンが黒刀を手に、レナスの劍と刃を合わせていた。

兼定ではない。

この黒刀は、持ち主の意思に合わせて形状を変えるアレン^{レーザークエ}の世界の武器^ボ通常は三十七センチほどの黒筒。握ると持ち主の意思に合わせて形状を変える銀河連邦軍の主要武器だ。

「なっ……!?!」

レナスを含めて、カシエル、セリアが驚愕に目を見開く。

「どこから、あんなものを……!?!」

「ヴアルキリーと、互角の剣速だ?!」

セリアとカシエルの驚きが、レナスの舌打ちと重なる。レナスの背に、光の翼が具現化された。

「我と共に生きるは冷徹なる勇者、出でよ!」

薄暗い石室に光が満ちる。ばさりと音を立てて光の翼が広がると、あまりのまぶしさにカシエルたちは目を細めた。光のなかから、カシエルの見知った男が現れるとも知らずに。

「……容赦しねえぜ」

石室に響き渡る、重低音。その声を聞いたとき、カシエルの首が跳ね起きた。大きく目を見開く。恐怖以外の感情で、ぶるりと躰からだが震える。

「そ、の声は……っ！」

上ずった声でカシエルが叫ぶ。光のなかから、三つの影が現れた。アレンの兼定よりも更に長い、三メートル近い大剣を苦もなく握り、挑発的な、不敵な笑みを口許に浮かべた凄腕の傭兵——アリュューゼ。そして、アルトリア王唯一の実子にして第一王女、ジェラード。東国クレルモンフェランの若き弓士、ラウリイの三人だった。

「馬鹿な……！ あいつ、確か死んで……！」

アリュューゼを見据えて、カシエルは混乱する頭で視線を左右にふる。カシエルの目に留まったのは、戦乙女ヴァルキリーの姿だ。

一時は王女殺害の犯人と疑われ、死んだアリュューゼの魂は——、

「そう、か……！ 勇者の魂エインフエリアになってやがったのか！」

一瞬だけカシエルを見やったアリュューゼが、に、と笑ってみせた。

「ヴァルキリー、手加減しなくていいんだろ？」

大剣を構え、アリュューゼがアレンを見やっつてつぶやく。

対峙したアレンが口端をゆるめて、ロジャーとルシオをふり返った。

「兼定を頼む。ロジャー、ルシオ」

二メートル強ある剛刀を横たえ、自分の腰にも満たない少年たちにそう言うのと、少年たちは自慢げに、おう、と答えた。見た目にも重そうな剛刀が、アレンからロジャーたちの手に渡る。

「ちやんと持てよ！ バカダヌキ！」

「お前こそバランス崩すんじゃないぞ！ アホネコ！」

ぎやいぎやい言いあいながら、二人は自分の身長の三倍はありそうな剛刀の端と端を持つ。それを見届けるなり、アレンはアリュージェをふり返った。

「……………」

アレンが黒刀を象ったレーザーウエポンを、居合いの体勢で構える。対峙したアリュージェが、にっと笑った。

「ふんっ。行くぜ！」

重く鋭い音を立てて、アリュージェが踏み込む。通常からは考えられない間合いで、アリュージェが大剣をふり下ろした。豪快に風を切って、アレンを叩き潰すように刃がふり落ちる。

「ハアッ！」

その威圧的な風が、カシエルたちにも届きそうだった。アリュージェがふり切る寸前で

アレンも踏み込む。重力に従い落ちる大剣を、抜刀術で薙ぎ払うように迎え撃つたのだ。

こすれ合う刃の音が、火花を散らして不快に響いた。

刀と化した特殊武器レーザーウェポンと三メートル強の大剣。アレンとアリユーゼ。得物の上でも、体格の上でもアリユーゼが勝るが、つばぜり合いとなった両者は、ぴたりと固まっていた。

「……やるじゃねえか」

卓越した筋肉を軋ませながら、アリユーゼ笑う。アレンも、にっと笑い返すと、くると鐔を返した。横薙ぎから面打ち——アリユーゼの脳天を叩き切らんと走る斬線に、アリユーゼは息を呑むと同時に、大剣を横に構えた。

ありえない爆発音が起きた。

「ぐ、うっ！」

みしみしとアリユーゼの腕が軋む。一瞬、握力が飛んだ。そんな彼の目に飛び込んできたのは、対峙した青年の、容赦ない追撃。

（突き——!?!）

目をみはる間もない。強烈な面打ちで完全に動きを止めたアリユーゼに、アレンが刀を握りこむなり、踏み込んでくる。

「疾風突きじやんよー！」

ロジャーの気楽な叫びとともに、黒刀に白い風を巻いたアレンの突きが、アリユーゼの大剣とかわた軋を軋ませた。また爆発音が鳴る。爆発の正体は——気功だ。

「アリユーゼー！」

「アリユーゼさん！」

唸るアリユーゼに、ジエラードとラウリイが目をみはる。アリユーゼは歯を噛み、後方に吹き飛びそうな衝撃を耐えた。遺跡の床を搔いて後退したアリユーゼに、アレンが追い打つ。

瞬間。アレンは目を見開いた。

背中に怖気。

（拳ッ！）

「兄ちゃん！」

「アレンさん！」

ロジャーとルシオの叫び。同時、アレンの刀をかいくぐって、アリユーゼの裏拳が走っていた。

前ぶりもなく最短の距離で走るアリユーゼの拳が、アレンの前髪をさらう。アレンが気付かなければ直撃したバックスピナツクルが、不気味な轟音を立てて空を切った。

「破ッ！」

アレンが上段からふりかぶる。電光石火の速度で打ち込まれる刃を、アリュージェはわずかに身をひねってかわす。と、

「俺の勝ちだ」

にやりと笑うアリュージェの大剣に、炎が宿った。

「奥義、ファイナリティブラスト！」

さきほどの礼をするようにアリュージェの気がからだから爆発する。燃え盛る炎が大気を揺らし、重い踏み込み音が弾けた。アレンよりもさらに強力な、炎をまとった強烈な突きである。

アレンがとっさに受け太刀する。アリュージェの巨体による強烈な突きとともに炎の爆発が、波状攻撃でアレンの腕を痺れさせる。

「……っ！」

アレンが息を呑む。アリュージェの走り抜けたあとを、さらに火柱が続いた。石室が焼ける。幾筋もの火柱が地面から生え、襲ってくる。アレンがとっさに剣で切り払った。

「っ！」

しのいだかに見えたアレンが、アリュージェの次ぐ切り上げの追い打ちで吹き飛ばされる。

炎が爆ぜる。

「……っカ！」

衝撃に耐え切れなかったアレンが、息を吐いた。地面に叩き落ちていく。

「アレン兄ちゃん！」

「アレンさん！」

ロジャーたちが兼定を握り、叫ぶ。

弾けるような音と同時に、白い煙のなかから刃が走った。地面を這う疾風の刃。

「空破斬だっ！」

ルシオの嬉しそうな声をよそに、アリュージェが大剣を払って防ぐ。

「……チイツー！」

アリュージェが毒づいた。

炎に焼かれた煙が晴れたころには、アレンが刀を手に立っている。刀の柄を、両手で握り込んで。

「……ほう」

静かに口端を吊り上げたアリュージェは、そこでレナスをふり返った。

「手え出すんじゃねえぞ。ヴァルキリー」

大剣を横たえ、アリュージェは己の領域テリトリを示す。剣を構えたレナスが、アリュージェを一

瞥する。

「奴は、俺の獲物だ」

レナスにはなにも言わせないよう、アリュューゼも好戦的な笑みを浮かべたまま、大剣を握りこんだ。

アレンがわずかに、目を細める。——微笑う。

「貴方とは、一度本気でやりあってみたかった」

「俺もだ。だがな——」

アリュューゼのファイナリテイブラストを喰らって、アレンとアリュューゼの間合いは三メートル強。剣戟の間合いとしては、遠い。得物の差でアリュューゼに分があった。

アリュューゼは鼻を鳴らすと、手にした大剣を振り上げた。

「だったら、^{テメエ}自分の得物。抜いたらどうだ！」

アリュューゼの踏み込み速度が上がる。上段からのふり下ろし。火の粉を散らして、刃を寝かせ受けるアレン。

瞬間。

アリュューゼの大剣が、息つく暇なく切りたててきた。踏み込もうとするアレンを押し、卓越した腕力で大剣をふるい、間合いに入れさせない。

「っ！」

息を呑むアレンに、アリュューゼの不敵な笑みが向けられる。

「兄ちゃん!」

「兼定を早く! アレンさん!」

少年たちの悲壮な声。

「剣のふりが速い!」

ロジャーたちの傍らで固唾を飲んでいたセリアが、うわごとのようにつぶやく。

一際甲高い金属音が立つと同時に、激しい火花が散り、アレンが後ずさった。豪速の、アリュューゼの剣。その破壊力と剣速に、カシエルが舌を巻く。

「アリュューゼの奴、俺が知っているとときよりも、ずつと強くなってやがる……!」

知らぬ間に、いつもカシエルたちの想像を超えていくアリュューゼ。その彼の凄まじさが、勇者の魂エインフエリアとなって磨きがかかったようだ。

レナスの傍らに立ったジェラードが、得意顔で叫ぶ。

「思い知ったか無礼者が! アリュューゼに勝とうなぞ、百年早いわ!」

腰に手を当てる、ジェラードがふんぞり返る。ロジャーとルシオが鋭く反応した。

「んだとお!」

「アレン兄ちゃんはこんなもんじゃねえ!」

噴気するロジャーたちとは離れたところで、いままで戦いとは縁遠かった新たな

エインフェリア
勇者の魂、ラウリイはほうとため息を吐いていた。

「……凄い……！……！ どちらも、凄すぎる……！……！」

アリユーゼの猛攻をアレンは紙一重でさばき切る。間合いは変わらず、アリユーゼに分がある。しかしアレンは剛剣のある一撃を完全に見切り止めるや、強引に鏢迫り合いに持ち込んだ。

——そこから、踏み込む。

「行っつけええええ！」

ロジャーとルシオが拳を握って叫ぶ。

刃をスライドさせながら前進するアレンに、アリユーゼがカツと目を見開いた。

「甘い……！」

一瞬で鏢迫り合いを払い、アリユーゼの水平切りが走る。風が起こった。水平の斬線がきらめくように、銀の弧がアレンに迫る。

「あれに対応するのかよ!?!」

悲鳴に近いカシエルの驚き。

刀を払い除けられた瞬間。アレンは構えを取っていた。アリユーゼの水平切りに、突きを合わせる。

「疾風突きだ！」

目を輝かせるロジャーたちの宣告通り、アレンの刀が風を巻き、蒼く輝いた。

鋭い踏み込み音を立てて、アレンが滑走する。空間ごと叩き切るアリユーゼの剛剣と、空間ごと貫くアレンの速剣が、ぶつかり合う。

両者が真つ向から激突した瞬間。妙な風が、同心円状に広がった。

「な、ツ!?!」

目を見開くアリユーゼ。アレンは突きを放っていた。水平切りに合わせた突きと、もうひとつ。

「!」

全く同じ威力を持つて走る突きに、アリユーゼは舌打ちする。拳で叩き落した。力など込める間もない。半ば強引に、自分と刀アレンの間に拳を割り入れただけだ。

(更に、だど!?)

アリユーゼが目を見開くより先に、弾いたはずの刀が、アリユーゼに向かって走っていた。

三連疾風突き。

その悪魔的な突きの連撃に、アリユーゼは命からがら、上体反らしでどうにかかわした。自分の真上を走る太刀風が、寒気を呼ぶ。

同時

アレンの斬線が、増殖した。

「こいつあ……！ 夢幻鏡面刹じゃんっ！」

ロジャーの声にこたえるように、音もなく、増殖した斬線がアリユーゼを襲う。ぱつと見ただけでも一瞬で十を超える斬線だ。残像と実体、その分別は——不可能に等しい。

「おおおっっ！」

大剣の柄を握り、アリユーゼが吼えた。息つく間もなく浴びせられる斬線に、アリユーゼの大剣が重なる。火花が散る。怒涛の乱撃に、アリユーゼの食いしばった歯の根が、ぎしぎしと鳴った。

（くっ！ 速え——！）

アリユーゼが呻くと同時、アレンの刀が輝いた。白く、青く。

アリユーゼが息を呑むと同時、輝くアレンの白刃が、受け太刀したアリユーゼの躰からだごと、上空に吹き飛ばした。

「破アッ！」

アレンの裂帛の気合と同時、光の刃と化した刀が、アリユーゼを切り上げる。

轟音を立てて、アリユーゼの巨体が浮かぶ。だが、すぐに体勢を立て直したアリユーゼは、上空に飛んだ状態から拳をふり下ろした。

「ハアッ！」

口の端に垂れた血など、拭う暇もない。アリューゼは中空でくるりと反転するなり、アレンに向かって走った。同時。腰溜めに握った拳を、アレンも繰り出す。炎と気を巻いた、己に放てる最強の拳を。

「覇あッ！」

アレンが叫ぶと同時、両者の拳が、ぶつかる。

衝撃波と熱風。全く互角の拳が、遺跡の中央で激突し合う。

「そんなんっ!？」

「兄ちゃんのバーストナックルと、互角だっって!？」

目を見開くルシオとロジャーを置いて、壮絶に笑んだアリューゼが大剣を握り締めた。

「奥義、ファイナリティブラストおをつっ!!」

超近距離から、アリューゼの突きが放たれる。大剣が炎を巻き、突きのあとに火柱が走るアリューゼの奥義。

ルシオとロジャーが、かっと目を見開いて叫んだ。

「危ねえっ!」

アリューゼの突きが豪速で走る。

——だが高い音を立てて、ファイナリティブラストの突きが、あっさりと受け流された。

「なっ!?!」

アリユーゼが目を見開く。その立ち直りも早い。瞬時に大剣を切り上げるアリユーゼに、アレンが身をわずかにずらしてかわした。

アリユーゼの大剣が、火柱が、虚しく空をつかむ。直後。アレンが上段から打ちこんだ。アリユーゼの着地際を狙う、ふり下ろしから発せられる地上を這う真空刃——空破斬を、アリユーゼは舌打ちと同時、大剣をしのいだ。

だんっ、と力強く着地したアリユーゼが、間合いを空けてアレンと見合う。

アレンは悠然と、刀を構えた。

「なんじゃと!?! アリユーゼのファイナリティブラストを、あやつ……!」

「そんな……!」

息を呑むジェラードの隣で、ラウリイも蒼白になった顔で、目をまたたかせた。アレンが静かに言う。

「俺に、一度見せた技は通じない」

アリユーゼはカッと目を見開くと、肩を震わせた。くつくつと湧き上がる衝動に、アリユーゼは素直に従った。

「ハハッ！ コイツあ良い！ 最高だ！ ……初めてだぜ。俺の全力を試すに足る相手！」

右手で顔の半面を押さえて、アリュューゼが盛大に笑う。それを見据えて、アレンも不敵に笑い返した。

「簡単に倒れんじやねえぞ。アレン」

つぶやくアリュューゼの目つきが、変わる。対するアレンも無言のまま、刀の柄を握りこんだ。

空気が、張り詰める。

そのとき、傍観していたレナスが、アリュューゼの前に割り入った。

「座興はそこまでだ。アリュューゼ」

静かに放たれるレナスの言葉。ふり返ったアリュューゼが、眉間に皺を寄せた。

「なんの真似だ、ヴァルキリー」

「私の任務はこの男を倒し、主神の定めし運命を平定することだ。アリュューゼ、お前にはそれなりに時間をやった。ゆえにこれ以上、お前の戯れに付き合つてやる気はない」

「……テメエ！」

「あくまでも続けるというのであれば、お前は下がっている。私が決着をつける」

冷厳なレナスの物言いに、アリュューゼは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

数秒の沈黙。

アリユーゼは諦めたように短い息つくくと、アレンに向き直る。

「と、そういうわけだ。悪いが、ここからは四人でやらせてもらうぜ」
「構わない」

一分の迷いなく、アレンは答えた。同時。レナスが剣を一気に抜き放つ。

「人間よ、魂を冒涇した罪は重い」

「んあ？ ぼうとく？」

ロジャーが要領を得ず、首を傾げる。と、ルシオが、レナスを睨むようにして叫んだ。
「罪だつて!? アレンさんが、一体なにしたらつてんだよ!」

「……そうだぜ! 兄ちゃんはまだ、困ってるひとを助けてるだけだ!」

ルシオとロジャーの言葉は、完全に無視された。

レナスは構わず、剣を握り込む。

「其は、^そ聖の^{しやう}下に滅せよ!」

アリユーゼのバックスピンナックルが、風を切つて強暴に走る。重い爆発音を立てて動きを止めた拳は、アレンの刀の柄でぴたりと止められていた。

「なっ!」

「……チイツ!」

アリュューゼが舌打つと同時に、拳に衝撃が走った。鈍い金属音を立ててアリュューゼの拳が切り払われる。同時。アリュューゼに隙。その傍らを、レナスがすり抜けた。

「ハアツ！」

鋭い踏み込み音を立てて、レナスの剣がふり落ちる。だが、アレンの返す刃が速い。一瞬でひるがえった黒刀が、レナスの剣を受け太刀する。ちかちと鏗を鳴り合わせながら、アレンがレナスを見据える。

「ひとの運命を変えることが、魂の冒涇だというのか」

静かに放たれるアレンの言葉は、感情を殺したように抑揚がなかった。

「そうだ。主神オーディンの定めし運命を変える——これは何者にも許されぬ大罪」

アレンの無表情に構わず、レナスも険しい色を瞳に宿す。そのとき、目の前の蒼瞳が、すう、と力を帯びた。

「つまり、これもオーディンとやらが仕組んだことなのか。平穩に暮らしていた少女が薬で化け物にされたことも、ひとがひとを憎んで呪い殺そうとしたことも、この村人が全員石化されたことも！ 貴方は、容認しろと言うのか！ 俺に、……俺に、ひとを見捨てるか！」

怒りの色が、アレンの瞳に宿る。

瞬間、至近距離からアレンの上段から打ち込んだ。刀をふり下ろすのと同時、真空の

刃がレナスを襲う。レナスが舌打ちし、サイドステップでかわした。地面を掻いてあとずさったレナスが、口許に冷ややかな失笑を浮かべて言い放つ。

「人間の作った物ごときが、神の武器に敵うと思ったのか？」

レナスの宣言通りに、アレンの手許で、金属がひび割れる甲高い音がした。——アレンの黒刀に、ヒビが入ったのだ。ロジャーとルシオが身を乗り出す。アレンは構わず、右に視線をやった。

「神の名の下に！」

弓をつがえるラウリイが、黄金の光を集らせる。直後、それは無数の矢となってアレンに降り注いだ。

「奥義、レイヤーストーム！」

石室を一瞬、黄金に染め上げるほどの無数の矢の嵐だった。

「そんな……っ！」

すべて紙一重で見切られている。まるで針の穴を通すかのような矢と矢の合間を縫って、アレンは最小限の動きでレイヤーストームの矢をすべて回避してくる。

息を呑むラウリイの前で、踏み込んだアリュウゼが凄絶に笑う。

「そうこなくちゃ面白くねえぜ！」

大剣に炎が宿る。弾丸のような、豪速の突き。

「奥義、ファイナリティブラスト！」

突き、衝撃波、火柱。

三段階からなるアリユーゼのファイナリティブラストに、アレンが抜刀から受け太刀した。

受けた者の両腕をもぎ取るような衝撃が、刀を通して伝わってくる。

アレンは突きと衝撃波を完全に受け切って、その勢いがわずかに弱まった所に踏み込んだ。

「砕っ！」

鋭く吼えると同時に、手中の刀が青白く輝いた。雷撃を孕んだ、アレンの横薙ぎ。

両者、交差する。

アレンの斬撃に、雷が走った。——横に一閃。アリユーゼの突きとアレンの雷がのたうつ。その技の終わり際を狙ったのは、ジェラードの大魔法だった。

「我焦がれ、誘うは焦熱しょうねつへの儀式、其そに捧げるは炎帝の抱擁ほうよう！ イフリートキャレス！」

ジェラードの持つ赤い宝珠の杖がきらめく。瞬間、石室が闇に包まれた。

「な、なんだなんだなんだあつ!？」

「ど、どどど、どうしたってんだ!?! 一体!！」

きよろきよろとロジャーとルシオが辺りを見渡す。

アレンの周囲に、漆黒の闇の中でも燦然さんぜんときらめく炎の円陣が描かれた。それはアレンの頭上で一本の赤い炎の線で繋がれると、巨大な炎の波となつて走つた。——まるでマグマだった。

石室の気温が増す。伏せたカシエルとセリアの頭上を、熱風が撫でた。その炎のなかで、アレンが笑う。

「魔法防御!?」
スベルガード

セリアが目をみはつた。杖を掲げたままのジェラードも、う、と息を呑む。

「あやつ、魔法使いか!?!」

「魔法も使いやがるのかよ!」

ジェラードとアリューズの声が重なる。その二人の驚きに割つて入るように、レナスが踏み込んだ。

「見事だ。だが、神技は破れるか!」

レナスの剣が、縦横無尽に走る。まさに神速の連続攻撃。それにアレンも刃を合わせる。幾重にも重なる剣戟音が、まったくの同じ剣速で刃を交し合う。

だんつ、と強く地面を蹴つたレナスが、背中に翼を具現化させて、上空高く飛び上がった。

「神技!」

レナスの掲げた右手に、青い光が集い始める。光が——巨大な槍となる。

「ニーベルン・ヴァレスティ！」

レナスの身の丈以上もある巨大な槍が、青い光を放ち、光の鳥となつてアレンを襲う。鋭い口を開けて、迫る麗鳥を見上げて、アレンが刀を握りこんだ。

「……光の鳥か」

瞬間。

アレンの躰からだから赤い煙が巻き上がった。ゆらりと形を成さぬ煙が、朱雀を象る。赤く、白く、輝く朱雀。それを背に、アレンが蒼瞳をたぎらせる。

ひとを丸呑みするほどの朱雀が吼えた。アレンの握るレーザーウエポンが、異様に輝く。

同時。

アレンは地を蹴った。レナスの放った光の鳥に向かつて。

「朱雀疾風突きじゃんっ！」

ロジャーの嬉しそうな声が響く。

レナスの光鳥と、朱雀と化したアレンの突きが激突する。凄まじい光と熱が石室を呑みこみ、爆散した。

烈風が吹きすさぶ。

乱暴に逆立てられる髪を押さえつけると、暴発した力と力が、むせ返る様な熱気を帯びた。

軽やかにレナスが着地する。剣を払ったレナスは悠然と、反対側に着地したアレンをふり返った。

「アレンさん！」

「兄ちゃん！」

ルシオとロジャーが慌てて声を張り上げる。

アレンの黒刀が、音もなく砕け散る。と、アレンの躰からだが、がくん、と崩れ落ちた。

たたらを踏み、体勢を立て直したアレンは、ニーベルン・ヴァレスティの余波で血まみれだった。技の威力は互角。だが、剣の強度が違いすぎる。アレンが放つ朱雀疾風突きの剣気に、レーザーウエポンでは耐えられない。

手許の黒刀を見下ろして、アレンは息を吐いた。

(やはり……)

レーザーウエポンの核コアが壊れている。もう刀の復元は不可能だ。技の威力に、この武器も持たない。

最早鉄屑ですらないレーザーウエポンを握るアレンを見据えて、レナスはつぶやいた。

「神技を受け切ったか。だが、次で終わらせる」

剣を返し、レナスが構える。アレンは、ロジャーたちをふり仰いだ。

「兼定を」

「オツケ！」

待ち焦がれていたように、ロジャーとルシオが顔を見合わせ、同時に兼定を投げつける。それを片手で受け取ったアレンは、壊れたレーザーウエポンを懐にしまうと、レナスに向き直った。

「ほう、ようやくその刀を手にしやがったか」

口端を吊り上げるアリユーゼ。レナスはただ冷ややかに、アレンを見据えた。

「武器を持ち替えたくらいで、神が破れると？」

アレンは答えず、兼定を腰溜めに構えた。

瞬間。

彼を取り巻く気配が、変わった。空気の塊が、アレンを中心に弾ける。走る剣気。その場にいる全員が、思わず息を呑む。その中で唯一、レナスだけは顔色を変えない。

アレンが兼定を握った。

「この兼定に、斬れぬものはない」

自分の——己が放つ技すべてに応えてくれる、この刀だけは。

続く言葉を呑みこんで、アレンは静かにレナスを見据えた。

空気が張り詰まる瞬間、アリュューゼを初めとした勇者の魂たちが動き出した。

「面白え！ 試してやらあ！」

アリュューゼが鋭く踏み込む。弓をつがえたラウリイが、黄金の光を矢に集約させて、放つ。

「神の名の下に！ 奥義、レイヤーストーム！」

「奥義！ ファイナリティブラストおをつ！」

無数に走る光の矢の間を、アリュューゼの炎の突きが駆け抜ける。今度は針の穴ほどの隙もないレイヤーストーム。

——かわせない。

続いて、ジェラードが赤い宝玉の杖をかかげた。

「奉^{ほうれい}霊の時来りて此へ集う、鳩^{じゅん}の眷属、幾千の放つ漆黒の炎——カラミティブラスト！」

大魔法の影響を受け、石室内が再び黒く染まる。

前方に光の矢の雨と炎の突きと波状に迫る爆発。そして、ジェラードの頭上に集まっ

た、巨大な炎の弾頭——カラミティブラスト。

炎と光が交じり合い、爆ぜるなかで、カシエルは頭を庇いながら叫んだ。

「やべえ……ッ！」

アレンに対して、の言葉ではない。強大な気と熱の塊が、石室の中で爆発しようとしていたのだ。

カシエルの視界がすべて、金と赤で埋め尽くされる。

——そこを、

「覇アツ！」

黄金の真空刃が切り裂いた。石室全てを覆い尽くすような爆発を、石室ごと切り裂く巨大な真空刃が一閃したのだ。

「ぐああああつ！」

「うわあああつ！」

「あああつ！」

音という音をも飲み込む世界の中で、アリュウゼたちの悲鳴が上がった。

黄金の刃に断ち切られ、行き場を失った技の余波が勇者の魂^{エインフエリア}たちに返つたのだ。どれほど強力な光を放つていようと、強烈な炎を滾らせていようと、決して揺るがない、黄金の刀の下に。

アレンは兼定をふり切った体勢から立ち直ると、レナスをふり返った。

「……来い。どんな理由があれ、俺は——俺の道を行く」

兼定を握りこみ、低く構えるアレン。

瞬間。

それまで抑えられていた彼の敵意が、レナスに向かって放たれた。
プレッシャー
 強烈な圧迫感としてアレンに内包されていた気が、一瞬、顔を覗かせたようでもあった。

アリューゼが唸りながら、立ち上がろうと大剣を杖代わりに力を込める。ジエラードとラウリイは、爆発の衝撃波だけで軽い脳震盪を起こしたようだった。

「そんな……力が違いすぎる……！」

立ち上がろうとからだ 軀に力を込めても、思うように動かない。不安定な頭を押さえながら、白くなった顔でラウリイはつぶやいた。

ジエラードが目を見開く。

「ア、リ्यूーゼ……！」

それでもアリューゼだけはひとり、ともに黄金の空破斬を喰らったというのに、立ち上がろうとしている。震える下肢は、力むたびに悲鳴を上げ、耳障りな音を立てて血が床を汚す。そんなアリューゼの全身には、ぱっと見ただけでも生々しい、深い刀傷が刻まれていた。

「下がっている、勇者の魂たちよ」
エインフェリア

レナスが剣の切っ先で止める。立ち上がろうとしたアリューゼの強い眼差しが、レナ

スを睨み上げた。

「……ヴァルキリー」

抗議の目ではない。ただ、アレンの持つ危険性をレナスに伝えようとしていた。

こいつはひとりでは倒せない。

レナスは小さくうなずくと、アレンに向き直った。ジェラードが恐怖で身をすくませながら、つぶやいた。

「これは……、強敵ではないのか……!？」

兼定を持つ、アレンを見据えて。

アレンは身じろぎもせず、冷えた眼差しをレナスに向けていた。凄絶な^{プレッシャー}圧迫感。しかしレナスは、剣を強く握り締めて、言い放った。

「人間風情が、調子に乗るな」

鋭い踏み込み音を立てて、レナスが跳びこむ。神速の連続攻撃がレナスから放たれた。そのレナスと、全く直角の剣速だったアレンの剣が——レナスを押し切る。

「くうっ！」

アリュージェとカシエルが、茫然と目を見開いた。

「なにっ!？」

「ヴァルキリーが、打ち負けるだっ!？」

思わず叫ぶ。ロジャーとルシオが、得意げに胸を張った。

「あつたりめえじやん！ 兼定持った兄ちゃんに、連続攻撃なんてムダムダア！」
「行つけええ！ アレンさん！」

ルシオに呼応するように、アレンの剣速が上がる。

「……つくー！」

レナスが舌打つ。同時、強烈なアレンのふり下ろしが落ちた。

みしみしと、受け太刀したレナスの細腕が悲鳴を上げる。それも数秒の間で、レナスの剣が、突如真つ二つに折れた。存外、軽い音を立てて。

「馬鹿な!? エーテルコーティングされた武器を、人間ごときが!?!」

思わず悲鳴に近い声でレナスが叫んだのも束の間、彼女が地面を蹴って距離を取った。光の翼を具現化させ、高く、宙に飛ぶ。

「ならば！ 神技、ニーベルン・ヴァレステイ！」

上空に飛んだレナスが、翼をはためかせ、巨大な槍を具現化させた。青く、白く輝く光の槍をアレンに向かって投げると、それは光の鳥となって鋭い咆哮を上げた。

アレンが兼定を握りこむ。その刀身が青白く輝く。

同時。

アレンの背に、朱雀が現れた。兼定と同じ、澄み切った蒼瞳の朱雀だ。アレンと、朱

雀が共鳴するように吼える。

——黄金の、朱雀だった。

「さつきと色が違う!?!」

「な、に……!」

息を呑むラウリイの隣で、アリユーゼもあまりのことに目を見開いた。

兼定の——あの剛刀に集約された莫大な気の量に、黄金の朱雀が放つあまりにも神々しい光に、息が詰まる。

ニーベルン・ヴァレスティの光の鳥よりも、なお輝かしい光。それは女神の放つ光を月とするなら、すべてをあつさりとし去る太陽のようだ。

「ヴァルキリー!」

ジェラードの悲鳴。同時、地面を蹴ったアレンが、レナスに迫った。

朱雀と化したアレンの突きが、一瞬でニーベルンヴァレスティを貫き、レナス自身をも飲み込む。

「ヴァルキリーイイ!」

目を見はつたジェラードが、レナスに向かって叫ぶ。だがあまりの轟音に、声が音をなさなかつた。

ただ、白い光が全てを包み込み——、

………

静寂を取り戻したところで、膝をついたレナスの姿が、アリュージェたちの前に現れた。

「ヴァルキリー!?!」

「ヴァルキリー様!」

勇者の魂たちが、声を揃えてレナスを呼ぶ。だが、肩で荒い息を繰り返すレナスには、エインフェリア答えるだけの気力は残っていないかった。そのレナスを静かに見下ろして、アレンは兼定を納める。

「……行こう。ロジャー、ルシオ」

アレンはレナスから興味を失ったように背を向けて、石壇にある少女の石像を抱き上げた。

「くっ!」

剣を握り呻くレナスを、ロジャーとルシオが横目見ながら、遠慮がちにアレンのあとに続く。カシエルとセリアは、事態を呑みこめず、ぼうぜんとなり行きを見守っている。まだまだ。

「待て!」

傷を負いながらも、レナスは剣を杖に立ち上がろうとした。アレンが肩越しにふり返る。ぴたりと足を止めたアレンの表情は、それまで彼がレナスに向けていたものより、

ずっと静かだった。なんの感情も映し出さない蒼瞳。

——無。

レナスはアレンを睨んだ。

「この、程度で……神が、破れると……!」

血が滲み、失血のせいで唇が震えた。それでもどうにか言葉を紡ぐレナスを——アレンは一瞬だけ、寂しそうに見据えた。

——ほんの、一瞬だけ。

「今のアンタじゃ無理だ。……剣を交えて分かった。アンタの剣は、軽すぎる。ひとの死を、ひとの心を縛るにしては、あまりにも」

アレンはレナスに向かって、一言だけ付け足した。

「……付いてこい」

そう言って、まっすぐに遺跡の外へと向かう。その背を忌々しげに見据えて、レナスもあとを追った。剣を杖代わりに、からだ 躰を引きずりながら。

「……、くっ!」

エイソフエリア 勇者の魂にかけた物質化が、マテリアライズ 知らぬ間に解けていた。徐々に透明になっていくアリュージェを見て、カシエルが目を剥き、叫んだ。

「アリュージェ!」

ふり返ったアリユーゼが口端を緩めるより先に、勇者の魂たちの姿は、カシエルの目の前から空中に、すう、と溶け消えていく。

まるで白昼夢にでもあつたように。

石室に、静寂が満ちる。

「……………一体……………、なんだってんだよ……………？」

取り残されたカシエルが、やり切れずにつぶやいた。セリアが、はた、とまばたきを落として、慌てて立ち上がる。

「カシエル！ 彼らのあとを追わないと！」

アレンが石像の少女を連れ去ったのを思い出して、思わず声を荒げると、カシエルも手を叩いて、その場から立ち上がった。

「そうだな！ 急ごうぜ！」

激戦のあとを物語るように、あちこちに巨大な傷跡を残した石室を出て、カシエルたちは村に向かった。ちょうど、アレンが村の中央で、兼定を水平に掲げていたところだ。

「俺は、俺の道を行く」

レナスに向かって、アレンは宣言した。あの無傷な石像の少女は、アレンの目の前に安置されている。

「お、お、お」

アレンに、カシエルが声をかけようとした所で、光の紋章陣まほうじんが、アレンを中心に描かれた。村全体を、すっぽりと覆い尽くすような、巨大な紋章陣だ。空気が晴れる。

ゆるやかな微風が起き、アレンの金髪がなびいた。

アレンが目を閉じる。

「フェアリーライト」

兼定を握る彼の右手に、淡い、蒼白の光が宿る。それはふわふわと彼の髪を撫でる風に乗って辺りに広がると、転瞬、アレンの右手を中心に、まばゆい輝きを放ち始めた。「な、なんだ!？」

目の前に広がる景色全体が輝きだし、カシエルが思わずあたりを見渡す。傍らにいたセリアが、かすれた声で言った。

「これは……! 凄い魔力!」

セリアの驚きの声は、カシエルの耳に途中から入ってこなかった。ぽかんとだらしなく口が開く。カシエルはぼうぜんと空を見上げていた。

そこから降るように現れた、美しい女性を見るように。

「……エイ、ル……?」

アレンの傍らで、女性を見上げたレナスがつぶやく。エイル——アース神族におい

て、治療を司る女神の名だ。

レナスをふり返った女神は、小さく微笑っただけで答えなかった。レナスが知っている癒しの女神より、よく見れば幼い。エイルは二十代後半の魅力を持った女神だが、アレンの呼び出した女神は、まだ十代後半の面影をわずかに残していた。

癒しの女神はまとった白衣から、波打つ亜麻色の髪から、優しい蒼白の光を放つ。

全身から己の姿を光の粒子に換えるように、女神が徐々に透けていく。

光が強くなり、一帯が白く染まった。

「っ、うわっ！」

思わずカシエルは目を閉じた。だがその間にも、蒼白の光は輝きを増し、カシエルの頬を、からだ 軀を、村全体を撫でていく。

波紋が、ゆらりと広がった。静寂という空気を、優しく波立たせるように。光の粒子が、一面に広がっていく。

そうして——……、光が晴れた。

恐る恐るカシエルが手を除ける。すると変わらぬ村の様子が、カシエルの目の前に広がっていた。彼は一瞬、首を傾げる。

「べつになにも……」

変わっていない、と言いかけて、口を噤んだ。

確かに変わっていない。

——破壊された村人の石像が、完全に修復されていること以外は。

「っ、奇跡……!」

うわごとのようなにつぶやくセリアに、アレンが小さく表情を和らげた。

「……………」

レナスは、そんなアレンを、じつと睨む。アレンが召喚した女神の慈悲は、平等にレナスにも降り注ぎ、彼女の傷をも完全に治していた。

閑散とした村には、青々とした草花が生い茂り、くたびれた家が、生き生きと元の姿を取り戻している。

「…………このひとたちを、もう一度殺すというのなら容赦しない」

完全に復元された村人の石像を見据え、アレンが言った。レナスを見据える蒼瞳に表情はなく、ラッセンで礼を言ってきた時とは、別人のようだ。

レナスは癒えた自分自身を抱きながら、口を開いた。

「石化した者は、草花と同じ存在だ。私が直接干渉することはなく、捨て置いたところで、不死者にもならない。…………この村人の石像を、私が今一度破壊したところで、石の破片が増えるだけ」

レナスはそこで、だが、と言い置いた。アレンがジツと見据えてくる。レナスは見返

し、ゆつくりと青瞳に、敵意の色を浮かび上がらせた。

「貴様が運命の輪を乱していることに、代わりはない」

淡々と告げるレナスに、迷いはない。アレンは一つ、うなずいた。

「……アンタの慈悲は、死者だけに向くものなのかと思つた」

小さく、つぶやくように言つて、アレンは一瞬だけふつと微笑つた。——ほんの、一瞬だけ。

「いつでもこい。受けて立つ」

兼定を掲げて、アレンが言い放つ。するとレナスは、唇を真一文字に引き結んだまま、空に消えていった。

「……良かったな！ アレン兄ちゃん！」

空を見上げ、レナスを見送つたロジャーが言つた。

ふり返つたアレンが、微笑のままうなずく。あの様子ならば、ベリナスたちは無事のようだ。安堵の息が、アレンの肩にのしかかるようにこぼれた。

「ああ……。本当に、良かった」

つぶやくと、緊張の糸が切れた。

『良かった』。

言葉の意味が、重くアレンにのしかかる。安堵の理由が、ベリナスたちの無事と、も

う一つ。

——レナスの、心。

女神の去った空を見上げて、アレンは小さく苦笑した。

それを満足そうに見上げて、ロジャーはカシエルたちに向き直り、けたけたと明るい笑い声を上げて言った。

「よ。兄ちゃんたち！ 石化を解く薬つての、間に合いそうかあ？」

問われて、カシエルは、ぽかん、と開いた口を、とりあえず閉じた。

——運命を、変える。

戦乙女が何度か言っていた言葉を思い出して、カシエルは心のうちでうなずいた。

確かに、彼ならば変えるかもしれない。この死に満ちた世界を、ひとの望む未来に。絶望を——希望に。

「いい、のかよ……。こんなことして……」

先ほど、神に命を狙われたばかりだというのに。

思わずつぶやくカシエルに、アレンは悪びれずにうなずいた。

「問題ない。俺はもともと軍人だ。民間人を守ることは、軍人の誇りおれたち。誰にも、邪魔はさせない」

アレンが空を見上げて、わずかに目を細める。

あそこに、なにがあるのかは分からない。レナスが——戦乙女がいつも降りてくる、上空。

ひとがひとを助けることをも否定する神。それは、ひとがひとに干渉することを認めない神だ。

有り得ない。

同じ世界ミッドガルドにいる限り、ひとがひとに干渉しないなど有り得ない。本当に神が運命を決めているのならば尚のこと、人間が起こす多少の揺らぎなど承知のはずだ。

(……なにかある)

恐らくアレンの行動を承知で、しかし、その行動が神にとって不都合な理由が。

それが、まだはつきりとは分からないが。

アレンは一種のきな臭さを感じていた。

「アンタ、軍人なのか? ……アルトリア軍が、ひとりでこんなトコに?」

首を傾げるカシエルに、アレンは首を横にふった。ここ、カミール村は、アルトリア領内にある村だ。カシエルの誤解は、妥当なものだった。

「俺の勤めていた軍は、もうないんだ。少し前の、大きな戦争で」

つぶやいたアレンが、わずかに目を伏せる。つられて表情を曇らせたセリアも、しかし、不思議そうに首を傾げた。

「大きな戦争？ ヴィルノアや、クレルモンフェランとは、また違うの？」

「ああ」

短くうなずいたアレンは、そこで話題を切るように、完全に復元された石像の村人たちに向き直った。

「さて」

アレンが再び兼定をかける。セリアたちにとって風変わりなアレンの魔法が展開されていく。彼の使う魔法陣はあまりにも独特で、最初、セリアには理解出来なかった。彼が放つ魔法そのものが、高位の僧侶でしか習得することの出来ない、状態異常回復の魔法——オーデイナリイ・シエイプであることを、彼女は魔法発動後に、気付いた。

それも、ひとりの石化された人間に対してではなく、村全体を一瞬で——。

「破呪」
デイスベル

彼はそう、呼んでいたが。

蒼白の光に飲まれた瞬間、村全体がひらひらと輝いた。

（やっぱり、なんて魔力なの……！）

魔法剣士として、魔法知識を有しているセリアが、ごくりと息を呑む。それを顔色一つ変えずに行ったアレンは、兼定を白い筒——居合い袋に納めるなり、肩に担いだ。

「……おや？」

宿の前に立っていた男が、夢から覚めたようにまばたきを落とす。男の前にある大通りに立っていた老人が、杖を手に首を傾げた。

「なんじゃあ？ ……今日は陽が暖かいのう」

それを契機に、他の村人たちもだんだんと、意識を取り戻していく。

「……………あら？ こんな所に、花が！」

「そうそう！ 買い物、買い物しなきゃ！」

「あれ？ でも、さっきまで……………朝じゃなかったっけ？」

誰かが、空を見上げてそう言った。朝にしては、昇りすぎた太陽に。

「……………あー！」

「ええ!？」

「確かに……………！」

村人たちが、不思議そうに互いを見合う。その彼らを嬉しそうに見据えて、アレンはカシエルをふり返った。

「そういえば、あなたはルシオ……………賞金稼ぎとして生計を立てているという金髪の少年のことをご存じだそうですね？ アルトリア騎士団のロウファさんからうかがいました。詳しくお話を聞いても？」

「え？ ……あ、ああ。なんか……………最近ギルドで名をあげてきてるやつだよ。たしか今

度は、あの不死者王ブラムスに挑むとかなんとか、噂で聞いたぜ」

「噂？ 彼と会ったわけではないのですか？」

「ん？ あ、ああ。ギルドでちよつと見かけるくらいはあるけど」

「そうですか。ありがとうございます」

アレンは深々と頭を下げると、ロジャーとルシオに言った。

「行こう。ロジャー、ルシオ」

「おう！」

「はい、アレンさん！」

応えるルシオとロジャーにうなずいて、アレンは最後に、セリアとカシエルに一礼だけして、村を去った。

まるで長い眠りから覚めたように、不思議そうに顔を見合わせる村人たちを、その場に残したまま——……。

カミール村に活気が戻るまで、長い時間は必要なかった。

chapter 2

9. ブラムス城編 浅葱の戦乙女

地上界ミッドガルドの西側に、巨大な島がある。緑豊かなこの無人島は陽の落ちた夜にだけ真の姿を現すと言われている。

不死者たちの王——ブラムスの城がそびえるのである。

アレンたちは島の丘に鎮座する白亜の城内に入りこみ、細長い廊下を延々と突き進んでいく。金刺繍の入った紅い絨毯は廊下のずっと奥まで伸び、紺色の大理石の床に道を示す。通路の左右は巨大な藍色の装飾布が天井から斜めに垂れさがっており、その奥で等間隔に並ぶランセット窓や枝つき燭台ジランドールをひとの視界から外させている。

侵入者をただ前に。この紅絨毯の示す先へと誘いこむ構造だった。

城内を横行する不死者——ウサギの頭蓋骨に似た頭を持つ人型の槍使い、デモン・サーヴァントが鋭く三方からロジャームがけて襲いかかってくる。「ほつ、よつ、とつ！」とロジャームが軽快に声をあげた。1つ目の槍を左足を引いてかわすや、二の槍は宙でくるりと回って跳び越え、三の槍を手斧ではじくと

「エクス・アーム！」

デモン・サーヴァント三体が、一か所にまとまった瞬間を狙って、気で巨大化させた爪を鋭く突きこんだ。ドリル状になった渦巻く爪に巻き込まれたデモン・サーヴァントたちがなすすべもなく空中で跳ね回ったあと浄化され、青い光の玉となって消えていく。苦もなく不死者を倒してみせた巫人の少年はしかし、丸い頬を震わせ、ごくりと唾を飲み込んだ。

「兄ちゃん……、なんかこの先に、すげえやばいやつが居る気がするじゃんよ」

「……ああ。この感じ、間違いない。気を引き締めていこう」

アレンがロジャーとルシオに呼びかける。ロジャーは自分の推測を否定されなかつたことで「ひえっ」と喉を鳴らした。ルシオも手許の短刀を握りしめて硬い顔でうなづく。アレンの脳裏をかすめるのは外から見た城の全体像だ。白亜城の巨大さもさることながら、建物自体が陽炎のようにほのかに揺らめていた。

(これほど巨大な建造物が、紋章力まりよくでできているのか)

城から感じる気配も相当な数である。いまロジャーが倒した不死者も、町の冒険者がおいそれと手を出せる相手ではない。

……たすけて……

ふと、少女の声が聞こえてアレンは目を丸くした。周りを見渡す。城内にあるのは不死者と蠟燭くらいだ。ロジャーとルシオが不思議そうにこちらを見上げてくる。

——……たすけて

聞き間違いではなかった。しかもこの声には聞き覚えがある。アレンが初めてこちら側の世界にくるとき——扉ゲートをくぐるまえに聞こえてきた声だ。

アレンは心のなかで問いかけた。

(きみはだれだ。どこにいる?)

「アレンさん！ 指輪が光ってます！」

ルシオの言葉にハツとし、自分の右人差し指を見下ろす。蒼石の指輪が明滅している。蛍のような小さな光だった。

「このさきに、なにかあるのか……?」

「またなんか見えたのか? アレン兄ちゃん?」

すかさずロジャーに問われ、アレンは首を横に振った。

「いや。だが……また『助けて』と声が聞こえたんだ。この城の奥から」

「アレンさんが言ってた、女の子の声ですか?」

「ああ」

ルシオの問いにさらに答えようと、アレンが指輪に意識を凝らしても、なにも見えてはこない。冥界の者たちと戦ったときのように、ここではないどこかの景色やひとの声は感じられない。

「てことは！ この先で、か弱い乙女が捕まつてるじゃんね！」

ロジャーが目を見開き、拳を握つて鼻息を荒くする。アレンは「わからない」とだけ答えた。

三人はブラムス城の奥をあらためて見つめる。この先に、王が待ち受けているはずなのだ。

アレンたちが城主の望むまま十数個目のアーチをくぐると、ひときわ目を惹く大きな壁彫刻の下——金の玉座にある男が、脚を組んで座っていた。扇形の階段を数段のぼつたさきで、男は燐光を放つ紅眼をまっすぐこちらに向けてくる。

「また命知らずの人間が死ににきたか」

低く張りのある声だった。不死者らしい土気色の肌、獣じみた鋭い顔貌、尖った耳、ハリネズミのごとく逆立ち伸びた黒いざんばら髪、引き締まった体躯。

これが不死者王ブラムス、とアレンが確信し、口を開きかけたそのとき、ロジャーが一同の前に出た。

「お前が、か弱い女の子を閉じ込めてる悪いやつだなっ！ このロジャーさまが成敗してやるぜ！」

「ロジャー、不用意だ！」

「バカダヌキ！ よせっ！」

二人の制止が飛ぶのと、ロジャーが自分の躰からだを気でロケットのように打ち上げ、頭から弾丸のごとく玉座の男に襲いかかるのは同時だった。

「ラスト・ディッチ！」

高速で飛ぶロジャーが扇形の階段に差し掛かるそのとき、男が玉座に影を残して消えた。またいたときにはロジャーの背後に回っている。ルシオが悲鳴に近い声で「バカダヌキ！」と叫ぶ間もなかった。男が飛行中のロジャーの腹に拳を突き刺している。ロジャーの小さな躰からだがくの字に折れた。

「カツ！」

「バカダヌキッ！」

ルシオの悲鳴が響く。ロジャーの躰からだが地面に落ち始めたとき、男はロジャーの首根っこを無造作につかむと目の前に掲げてみせた。

「あのロジャーを、一撃で気絶させた……？」

一瞬の出来事に、アレンはにわかに状況を理解することができない。

ロジャーはただの少年ではないのだ。FD事変SO3最終戦の総称を始め、数々の修羅場をくぐってきた歴戦の猛者。それを不死者王と思しき男は、正面から一撃で叩き伏せた。

空寒い現実に、アレンの頬に冷汗が伝う。

(この男から、ロジャーを取り返せるか……?)

瞬時に十数パターンの戦術を巡らせたそのとき、

「こんの野郎おとおお！」

ルシオが二振りの短刀を引き抜いていた。「ルシオっ！」とアレンが呼び止める間に、踏み込んだルシオを大きなものが遮った。男がロジャーを片手で投げ放ち、ルシオの氣勢を完全にくじいたのだ。ルシオが「うわっ」と悲鳴をあげ、とつさに降りかかってきたロジャーを抱きかかえる。

ルシオが、はた、とまたたいた。目の前に、いま取り返そうとしたロジャーがいる。

相手は不死者であるのに、ロジャーが素直に返ってきたのだ。しかもルシオの踏み込むタイミングを、この男は完全に見切っていた。

そこでようやく、自分の行動と相手との実力差に気づいたルシオが、蒼白になった顔でアレンに問いかけた。

「……アレンさん、勝てるよね？」

「さあな」

アレンが本心を告げると、ルシオの頬が引きつった。そのルシオを後ろに下げようようにアレンは前に出て、ブラムスと対峙する。

「あなたが、不死者王ブラムスか」

「いかにも。城の者を退ける程度には腕が立つらしいな、人間よ。だがその少年程度のレベルでは、私の相手にはならない。それでもなお挑むつもりか、この私に」

ブラムスは両腕を組み、横柄に構えている。人型の不死者は人間に似た服を着る習性があるのか、この王も例外ではない。紋様入りの緑色のミリタリーベスト調の服を土気色の素肌のうえから羽織り、腰回りはベストと同じ緑のレザーメイルで覆い、両手足に黒紫の籠手と具足を着けている。軽装ながらも実用的な姿だ。

燐光を放つブラムスの赤眼は、こちらの出方を待っている気配があった。

「あなたに聞きたいことがある」

アレンが問うと、ブラムスは鋭い顔貌を崩さず、聞いてきた。

「ほう？　なんだ」

「ここにルシオという名の金髪の少年が来たかということと、玉座のうえに浮かんでいるあの女性についてだ」

アレンが、ブラムスが座っていた玉座のうえ——天井近いところに浮かんでいる大きな水晶を指さす。青い水晶のなかで軽鎧をまとった妙齡の女性が眠っている。羽根兜こそかぶっていないものの女性の軽鎧はどこか戦乙女レナスに似ていた。

ブラムスが鼻を鳴らす。

「さあな。その少年とやらに關しては知らぬ。私に挑んできた命知らずなどそれこそ星の数ほどいる。そして彼女に關しては、貴様が知る必要はない」

「その先は力づくで、ということか」

アレンが白筒から兼定を解き放ち、その柄を握る。

ブラムスが満足そうに口端を広げると、組んでいた腕をほどいて拳を握った。

「ようやくか。火付けの悪い人間だな。……久しくなかつたぞ、この私の血をたぎらせてくれ！」

ブラムスがさらに拳を握り込んだ瞬間、強烈な魔気が室内に迸ほとほとった。

ルシオが後ろに撫でつけられる髪をかばいながらアレンに問う。

「アレンさん！ ちょっとやばいんじゃないかなー！」

「ロジャーを連れてさがっているろー！」

言葉を残すなり、アレンの躰からだが赤い炎に包まれる。室内が熱気でまたたく間にむせ返る。炎は勢いよく天井まで伸びあがり、鳥の声が高く鳴り響くとともにアレンの背に赤い朱雀が現れた。

ブラムスが片眉をつり上げる。

「ほう？ 思った通り、だが——それが全力か？」

「お互い様だ」

「ならば引き出してやろう」

互いに睨み合い、構えた瞬間。両者、同時に地を蹴った。

(やべえ！ 見えないっ、俺の目にも——！)

ルシオの頬を冷や汗が伝う。両者、踏み込むと同時にあらゆる方向でぶつかり合っている。強烈な風と激突音がルシオの目で追いきれないスピードであらゆる箇所から聞こえ、衝撃波がこちらにまで襲い掛かってくる。

「う、うう……」

何度目かの激突で、また衝撃波が起こる。ロジャーにかぶさるようにして頭をかばっていたルシオは、見えないながらもどうにか二人の姿を捉えんと目を見開いている。そのルシオの腕のなかで目覚めたロジャーは、決死の顔をした悪友を見上げて首を傾げた。

「おいアホネコ、なんでそんな間抜け面さらしてんだあ？」

「気が付いたのかバカダヌキ」

「いてててて、オイラなんでこんな腹が痛えんだ。アレン兄ちゃんはなにをやつてんだよ？」

ルシオから離れ、ロジャーが腹を押さえて丸くなる。

ルシオが深刻な顔のまま言った。

「目の前だよ」

「ん?」

地面をひきずる音がして、ロジャーが首を巡らせる。ちょうどアレンが足で大理石の床を後ろに掻きながら着地したところだった。

「おお、兄ちゃん! もうやつちまったかあ?」

ロジャーの気楽な声はそこまでだった。アレンの目の前にブラムスが迫っている。

激しい衝突音が立った。

ブラムスの正拳突きとアレンの上段から右袈裟懸けに振り下ろした斬閃が、ぶつかり合う。室内の空気が一瞬ぶつかり合った点に向かって集約し、二人の力の大きさに悲鳴を上げるように破裂する。床が巨大な円を描き、二人を中心にベコリとへこんだ。

ルシオとロジャーの小さなからだ軀も衝撃波に吹き飛ばされる。石壁に背中からしたたかに打ち付け、ロジャーが間延びした高い悲鳴をあげながら顔をしかめた。

「いつてええ! なんて傍迷惑なやつらじゃんかあ!」

ロジャーは眉をつり上げ、抗議するように拳を突き上げた。

「こら兄ちゃん! まだ決着つけてなかったのか!」

「うそだろ。アレンさんとここまでまともにやり合えるやつなんて初めて見たぞ……」

ルシオは壁に打った痛みさえも忘れて、ぼうぜんとしている。

ロジャーが丸い顎に手を当てた。

「こりや、フェイト兄ちゃんが相当本気じやなきや見れねえ闘いだな」

「え？ あのひとそんなに強かったの？」

「フェイト兄ちゃんSO3主人公はオイラたちの希望だぞ？ デカブツSO3の兄貴分

c.v.:東地宏樹よりアホだけど」

「それってお前よりアホってこと？」

「どういう意味だ、アホネコお！ デカブツやフェイト兄ちゃんがオイラより頭いい訳ねえだろうー！」

ひとときわ強烈な激突音とともに、不死者王とぶつかり合ったはずのアレンが後ろに吹き飛んだ。

「兄ちゃん!？」

「アレンさんが、打ち負けたっ？」

ルシオとロジャーが息を呑む。ロジャーはやれやれとため息を吐くと、笑顔のままブルブルと震える手で自慢のヘルメットを押し上げた。

「おいおい……冗談だろ？ 向こう素手だぜ、兄ちゃん」

アレンから遅れて、アレンの目の前に現れ、着地したブラムスが目を細める。

「ほう、この私の一撃を受けて刃^{はこぼ}毀れひとつせんとは。いい刀だな」

（どういふことじゃんか？ 真つ向勝負でアレン兄ちゃんがふっ飛ばされた？ こいつはもしや……旗色が悪い？）

ロジャーはたらたらと流れる冷や汗をそのままに、しゆたつ、と勢いよく右手を挙げた。

「兄ちゃん！ オイラちよつとこの城から出てっていいか？」

「お前え！ アレンさんを見捨てんのか!？」

ロジャーの極上の笑顔での提案を、ルシオが信じられないものを見る目で止めてくる。ロジャーはルシオの傍に寄つてその胸倉をつかむと、容赦なく平手打った。

「アホネコ！」

「な、なにすんだこの野郎！」

「いいか！ アレン兄ちゃんの朱雀が赤いうちに逃げるじゃんよ？」

「ど、どういふことだよ……」

戸惑うルシオに、ロジャーは目を伏せて首を横に振った。

「もうわかるだろ？ 赤い色の朱雀の時点で、二人がぶつかつた余波でオイラたちは死にそうになつたんだ。これで兄ちゃんに火が付いたら、メラやベえことになるじゃんよ」

「下手したら辺り一面……」

「荒野じゃん」

ルシオがこくりと息を呑み、震えだす。ロジャーがこくりとうなずいた。

「兄ちゃんの理性が残ってるうちに、オイラたちは逃げるじゃんよ！」

「ほう。やはり貴様、力を隠していたようだな。拍子抜けさせるな、久しぶりに私も全力を出せるような相手が現れたのだ。この闘いをつまらんものにだけはするなよ？」

ロジャーたちの会話が聞こえていたのか、ブラムスが興味深くアレンを見やる。

ロジャーが満面の笑みを浮かべた。

「兄ちゃん、オイラたちは出て行くからあとには楽しんでるじゃんよ？」

「アレンさん！ 俺たちは邪魔しないようになんとかします。だから思いっきりやっちゃってください！」

そそくさと去るロジャーの背を、ルシオも納得してついてくる。ロジャーの顔に堪えても堪えきれない笑みが浮かんだ。

（ふっ、さすがアホネコ。兄ちゃんのことに関しちやチヨレエもんだぜ！）

危機を察すれば即逃げる。数々の危険な戦場をくぐり抜けてきたロジャーたちの、唯一にして絶対の生存術だ。

だれが相手だろうと立ち向かっていく命知らずは、アレンや仲間の少数派に過ぎない。

アレンはロジャーたちが玉座の間から完全に去っていったのを見届けたあと、つぶやいた。

「そうだな」

「名を聞いておこう」

「アレン・ガード」

「ふっ。アレン、か。この不死王ブラムスをその気にさせたこと、冥府の女王ヘルにでも自慢するがいい！」

ブラムスの全身から、さらなる覇気が爆発する。アレンが身構えたそのとき、

——助けて……

少女の声が、アレンの気を一瞬反らした。「くっ」と低く呻きながら、アレンが余波で弾き飛ばされる。

一方のブラムスは、頭上の水晶で眠る女性の臉がわずかに開いたのを見た。

（なにっ？ シルメリアが……この人間に反応しているというのか）

ブラムスが口端を広げる。目の前の人間が、巧妙に隠そうとしても隠しきれない実力——ブラムスと圧倒的実力差がありながら、この人間の体捌きさばが更なる高みを知っているとブラムスに囁くのだ。

「どうだ？　これが俺の全力だ！　貴様も力を隠したまま俺に勝てると思うか？　それ

ともそれが限界か！」

ブラムスの挑発に乗ったのか、アレンが目を見開くや気を込めて金縛りを解く。踏み込んでくる速度スピードが格段に上がっている。青い風を巻いた、アレンの必殺技・疾風突ミソオチきでブラムスの鳩尾目掛けて跳び込んでくる。

強烈な激突音とともに、ブラムスの体軀を貫き衝撃が玉座を粉々に打ち壊した。

だが、ブラムスの見事な腹筋には、傷一つない。

アレンがさらに踏み込み、下段から刀を振り上げる。剣閃から弧を描く衝撃波が三つ巻き起こり、ブラムスを直撃する。だがブラムスの髪がなびくだけに過ぎなかった。

「それで終わりか？」

ブラムスの問いに、アレンが目を見開き、気を高める。

「受けてみる！」

アレンが振りかぶった剣尖に、巨大な蒼い気の龍が姿を現す。アレンが振り抜くとともに蒼龍は大口を開け、ブラムスに襲い掛かる——だけでなくアレンの背に従っていた朱雀も蒼龍のあとを追い、赤い炎をまとった巨大な龍の気砲がブラムスを、ブラムスの後ろの城ごと薙ぎ払っていく。

すべてが蒼い光と炎に包まれ、視界が暗れたそのとき、無傷のまま鎮座する不死者王と、ブラムスがいた方角の城が消し飛んだ荒野だけが残っていた。

「……我が魔力で作り上げたこの城をここまで完膚なきまでに破壊するとは。だが、いまので最大の一撃だというのならはこの俺に傷ひとつつけることはできんぞ」

ブラムスの言葉を、アレンは肩で息を切りながら聞いている。

「なるほど。俺ひとりの力では、あなたには勝てないか」

アレンがひとり言のようにつぶやき、ブラムスが首を傾げたそのとき、アレンの握る兼定の刀身が、黄金に輝き始めた。

「この光……！ 神、いや、まさか」

ブラムスがわずかに目をみはる。アレンはブラムスを見据えたまま、ゆっくりと下げていた兼定を正眼に構えた。

「すまない、我慢をさせたな兼定。だがここからは遠慮はいらん。思い切りやろう」

アレンの背に現れる朱雀がひととき大きく鳴き、その炎が赤から黄金色へと変わっていく。静かに、圧倒的にアレンを包む空気が変わる。

「まさか神獣……！ この男、神獣を従える人間だと？」

ブラムスが息を呑む。アレンが静かに言った。

「次はさきほどと同じように行かせてもらおう」

「むっ！」

「受けられるものなら受けてみる」

ブラムスが身構えたそのとき、強烈な気の塊がブラムスの鳩尾を貫いていた。「ぐおおおっ!」

今度は耐えられず、ブラムスの躰からだがくの字に曲がる。次いで追いつがる下段からの振りぬき『朧・弧月閃』と呼ばれる斬閃と、その斬閃から生じる影と疾風がブラムスの体軀を上空に弾き飛ばす。なす術なく、不死者王は両腕を交差させたまま歯を食いしばった。

（この力、この速さ！ さきほどまでの比ではない！ この男、一体!?）

まるで別人だった。同じ攻勢だろうと——いや同じだからこそ、その異常性が強く感じられる。

「破ああッ!」

アレンの気合声と同時に、振り上がった剣尖に宿った黄金の龍がさきほどの三倍の巨大さをもて黄金の朱雀と混じり、上空に飛んだままのブラムスに襲い掛かる。

城を苦もなく消滅させ、天まで上った龍は空を一瞬、夜の暗さから昼の明るさへと変えた。

もうもうたる煙が立ち込める。

アレンは刀をふり切った位置から動かず、煙に向かつて問いかけた。

「どうだ。俺と兼定はあなたの全力に見込むだけのことはあるか?」

地面からむくりと立ち上がった不死者王の上半身は、まどつていた羽織りものが消し飛び土気色の引き締まった筋肉があらわになっている。

不死者王はわずかにうつむいたまま、鋭い犬歯を剥いた。

「……貴様。さきの一撃、なぜ外した」

「手許が狂った」

「このブラムスを前に！ そのような理屈を並べ立てるかああ！」

ブラムスが目を見開き、猛々しく吼える。ブラムスの魔力はさらに強さを増し、紅い瘴オラ気がその全身をほとばしった。

「人間！ 命は要らんと見える！」

「始めよう、ここからが勝負だ」

「いいだろう！ 轟然たる我が魔力の胎動！」

ブラムスを中心に、同心円に魔力が波打ち、広がる。アレンもまた振り上げた剣尖に気が集まり、金の龍が形作り始めていた。

「奥義ブラッディ・カリス！」

「兼定よ、すべてを打ち貫けええッ！」

極限まで高め、振りかぶられた両者の力が同時に振り抜かれ、激突する。音、光、風——すべてを呑み込む衝撃の強さが、互いの最高の技を突き抜けて両者に襲い掛かつ

た。

受け太刀することも、受け身をとることもかなわない。

ともに互いの奥義をともに浴びた二人は、またたく間に全身血まみれとなり、それでもなお膝を屈さず互いを睨み据えた。

「貴様あああッ！」

「おのれえええ！」

ブラムスとアレンが、さらなる最強の一手を打ち交わさんとしたそのとき、

——シルメリアを、助けて！

これまでか細く聞こえていた少女の声が、はっきりとアレンの耳に届いた。同時に、ブラムスは目を見開いて頭上を見上げる。水晶のなかに閉じ込められていた女性——長き眠りについていた女神を。

「シル、メリア……っ！」

ブラムスの声とともに、上空にあつた水晶は全体の至るところがひび割れていき、大きな破裂音とともにパラパラと砕けていった。そのなかに眠っていた女性のからだが白く輝いている。浅葱色の鎧をまとった女神は背に白い翼を広げ、腰まで波打つ金髪を風にそよがせながらアレンのもとに降りてくる。

「ヴァルキリー……っ？」

水晶で眠っているときは見られなかった羽根兜が、いま目の前の女性の黄金色の頭の上に乗っている。シルメリアという名の女神はアレンと目が合うと、可憐な顔つきからは想像もつかない冷たい視線でアレンを射抜いた。

「アリーシャが導きし人間よ。私とともに歩むというなら、その先は茨の道だと知りなさい」

「アリーシャ？」

アレンが首を傾げている間に、女神はアレンの目の前をすり抜けて、空間に溶け消えていった。

アレンが周りを見渡せど、女神の姿はどこにもない。

ただ、これまで対峙していたブラムスが難しい顔で押し黙っていた。

「いったい、なにが……」

「彼女を頼んだぞ、アレン」

「どういう意味だ、ブラムス」

ブラムスもまた、もうすぐ朝を迎えるために、消えかからんとしている。それを追いつがるように問いかけると、ブラムスは燐光を放つ赤眼をアレンに向け、言った。

「シルメリアが永き封印をふり払い、お前のなかで眠ったのだ。彼女が本来の力を取り戻すまで、しばらくかかるだろう」

「俺のなかで眠る？」

「じきに分かる。彼女のことを知りたくば、ディパンに向かえ」

それだけを言い残し、不死者王は城の残骸とともにいずこかへと消えていった。

取り残されたアレンが自分自身を見下ろす。躰からだにも、感覚的にもなにも異常は感じられない。

（アリーシャが導いた？）

それがアレンの聞いた、アレンに助けを求めていた少女の名だろうか。

ふつつつと湧く疑問に思考が渦巻き始めたそのとき、丘のふもとから顔を出してきたロジャーとルシオが「おおおい！」と笑顔で手を振っているのが見えた。

——ディパンに向かえ。

ブラムスはそう言った。アレンが捜し求める金髪の少年・ルシオの安否はまだわからない。

（だが、まずは——）

アレンは視線を上げると兼定を納め、ロジャーたちのいるふもとへと歩み始めた。

10. アークダイン編 ひとと神の葛藤

「ひと、神、エルフ……」

膨大な書物に囲まれた薄暗い室の隅で、男は魔導書を慎重に読み上げる。灰色がかった栗色の前髪が頬の左右に垂れ、男の細く丸い顔を縁取る。文面をたどる手許は迂闊に呪を踏まぬよう防護符が織り込まれた分厚い手袋で覆われ、もう片方の手で握った輝石がゆっくりと明滅していた。青い輝石のまばたきにあわせて、男の丸眼鏡が白く光り、硝子奥の冷たい青瞳が見え隠れする。

二十半ばの若い男だ。二年ほど前、世界最高峰の研究機関フレンスブルグ魔術学院を放逐されたが、男の研究環境は在学中よりむしろ充実した。だれにも邪魔されぬ時間と空間を手に入れた男は、上等な紺碧の外套を羽織り、魔術師たちが着るローブではなく冒険者たちが好むジャケツトと狩猟ズボンを愛用している。

レザード・ヴァレス。

屍術界限に名を馳せ始めた稀代の天才は、何度も目を通したはずの紙面を睨み、左手に握った石を腹に押し付けて身を丸め、端正な顔をひきつらせた。

「……………ぐっ、なぜだ…………。なぜ、頭が割れんほど痛い…………」

以前は皮手袋^{グローブ}で防げた呪が、石の共鳴により強大化し、レザード自身を苦しめている。アルトリアで女神を見初めた瞬間から、レザードは手当たり次第に【戦乙女】に関する書を読み漁ってきた。単なる民間伝承や逸話でなく、古代文字で記された神の魂、ひとの輪廻につらなる貴重な知識は容赦なく【賢者の石】を反応させ、レザードを疲弊させる。

『これはこれは、レザード殿。ずいぶんとお疲れのご様子ですな』

低くこもった男の声が水晶球から届いてくる。ひどく芝居がかった声だ。レザードの鼻筋にしわが寄る。あからさまに舌打ちしたレザードが水晶球に映りこんだフードの男を睨む。顔立ちはわからない。フードを目深にかぶった男の声からして四十絡みだろうか。レザードが丸眼鏡を押し上げ、表情を隠した。

「カノンか……。なんの用だ？　ホムンクルスの件ならばすでに話がついている」

暗い笑い声が水晶球からこぼれる。向こうはずいぶんご機嫌のようだ。異様に発達した犬歯を光らせて、カノンという浅黒い肌の男が言う。

『なに。近々、研究を次の段階に推し進めるゆえ貴殿にもお伝えしておかねばと思いましてな』

「好きにしろ」

レザードが一言で切り捨てる。カノンは分厚い黒の法衣を着込んだ痩せた男だ。い

まはジェラベルンに拠点を置きギルドを仕切っているはずだが目立ちたがりの気性に反して、その行動は隠密である。ひとにしては犬歯と爪が異様に鋭く伸びた、他種族との混血を思わせる外見だが素性は知れていない。レザードには興味もなかった。

カノンはレザードの機嫌がすぐぶる悪いのを察すると、これからアークダインの魔水晶を手に入れると残し、伝信の呪を切った。術具の調達には非常に役立つ男ゆえレザードもホームンクルスを供したが、以来こちらの知力に心酔し、なにかと助力を求めるカノンの研究に時間を割く気はなかった。

「魂の、転生……。ひとと、神の狭間にある者……」

レザードはまた魔導書に視線を貼り付けると書から急速に流れこんでくる魔力の奔流に呻き、歯を食いしばりながらもページを繰っていく。

女神を迎える準備は整いつつあった。だが輝石を行使するたび起きるレザードの脳髓を、魂を、焼き切らなばかりの魔力の共鳴がなにに起因するのか、彼をしてまだ視えない。

——シルメリアのことを知りたくば、デイパンに向かえ。

大陸西部の孤島で、不死者王ブラムスから授かった助言をもとにアレンたちは大陸を

北上し、北西部にそびえる遺跡にたどりついた。もとは白かった青錆びた煉瓦が積み上げられた巨大遺跡群。急峻な崖に溶け込んだ広大な要塞は、岩山をくりぬいて居住区をつくるカミール村と構造が似ているが、規模は比べ物にならない。視界いっぱい広がる巨大建築は長い年月の重みを感じさせ、ひとの足跡もない。森のなかにそびえたつ巨大な鉄格子の門扉は来客を拒み、地面に太い根を生やしていた。

「アレン兄ちゃん、どうしたんだ？　こんなところに用なんかねえだろ？」

閉じた門扉を見つめて動かないアレンを、ロジャーとルシオが不思議そうに見上げた。ふと、ルシオが気付いた顔になってアレンの右手——人差し指にはまった指輪を見る。この世ならざる真理を読み解く「星界の指輪」。それが蒼く輝いている。

「バカダヌキつ、静かにしろ」

ロジャーの肩を引いて、ルシオが顎を突き出し指輪を示す。視線を追ったロジャーもまた異変を察して「ひゃあつ」とこぼしながらタヌキの耳をパタパタと振った。アレンは彼方を見ていた。沈黙したのも十数秒で、はた、とまたいたあとは焦点の合った顔をルシオとロジャーに向けてくる。

「行こう、二人とも」

「この遺跡のなかに、ですか？」

ルシオが問うと、うなずいてくる。小首をかしげたルシオはネコのしつぽをうねらせ

た。

「俺も、感覚的にしかつかめない。ただシルメリアが会いに行けと言っている……そんな気がする」

「この遺跡の奥にまただれかいるってことか、兄ちゃん？」

「おそらくは」

胸のあたりを押さえているアレンを、ルシオもロジャーも不思議そうに見上げてから互いの顔を合わせた。どちらも要を得ていない。もともとアレンは説明がうまい人間ではないが、指輪を嵌めて以降、感覚的な話をする機会が増えている。

なにが起こるのかはわからないが、「なにか起こる」ことだけを確実に言い当ててくるのだ。

ルシオが緊張して固唾を呑んだ。

天空に浮かぶレナス・ヴァルキュリアは長い銀髪を微風にそよがせ、瞼を軽く閉じていた。陽にきらめく彼女の銀髪が、時折、紫色に光る。蒼穹色の鎧から零れる白い肢体は、凜とした戦士の雰囲気やわらかい女の色香をただよわせ、もし人間が肉眼できたならば、幻想的と女神を称賛したことだろう。

——剣を交えて分かった。アンタの剣は、軽すぎる。

ひとの死を、ひとの心を縛るにしては、あまりにも。

ふと青年の言葉がレナスの脳裏をよぎった。唇を噛む。カミール村で受けた傷がうずいている。傷は癒えているのにレナスの胸が、心が、なぜかまだ痛むのだ。

「……アレン、といったか」

ずきんつ、とまた胸が痛んだ。黄金の朱雀を喰らったとき、アレンの兼定は、レナスの傍らを過ぎていった。——外されたのだ。外されてなお、衝撃波だけでレナスを戦闘不能にさせる驚異的な力。

「……………」

ぎりりと奥歯を噛みながらもレナスの表情は複雑だった。神界にほど近いこの場所で、今日はフレイからの定時連絡がある。

レナスは深呼吸をすると、目の前の空間に指でくると円を描いた。女神の指先に合わせて光が生じ、波紋が広がっていく。空間が波打ったびにさまざまな色が浮かんできては消え、やがて神界にいる第二級神フレイの顔が映し出されてくる。

レナスより少し年上の若い女の姿をした神である。蜂蜜色の髪は面長で白い頬の左右を過ぎて胸まで流れ、きゅつとつり上がった目尻に大きな青瞳がくると動く。はつきりとした顔立ちである。主神の腹心、フレイは感情を読ませないつんと澄ました顔でレナスを見るや、口火を切った。

「久しぶりね、レナス」

「……………ええ」

フレイに向かって、レナスはそれまで浮かべていた苦々しい表情をやわらげ、微笑んだ。エインフェリアやアレンと話すときは違う、親愛に満ちた、やわらかい表情だ。

対するフレイの表情はレナスと対峙しているにもかかわらず硬い。レナスが微笑を押し込めて、目を細めた。

「そちらの様子はどうか？」

「現在の状況としては、なにか手を打たないと厳しいわね。ヴァン神族の勢力が、我が方をわずかに上回っている」

「……………そう」

うなづくレナスに、フレイの毅然きげんとした眼差しが向けられる。

「レナス、これからの戦況は貴女にかかっているわ。私と離れてからこちら、貴女の働きぶりを見せてもらったけれど、もう少しがんばってもらわないと困るわね。貴女に与えられた時間は、無限ではないと言ったはずよ」

「……………」

レナスの視線が下がった。しばらくの間を置いて、うつむく戦乙女をなぐさめるようにフレイが眼を細め、笑う。細い顎をかすかに引いて、レナスを上目見るといたずら猫

を思わせる愛嬌が浮かんだ。

「——よもや、下界で会った人間のことを気にしているの？」

問いつつフレイの脳裡に浮かぶのは、ひとりの人間である。その身より長尺の刀を手にし、不死者の腕を両断——さらにはレナスにも知らせていないが、不死者王ブラムスと渡り合った異界の人間。

目を伏せていたレナスが、す、と顔を上げた。

「……あの人間は、私を感じ取った運命を変えたわ。それに不死者の討伐も。あの男は、なにか得体の知れないものを持っている。こちらの想像を上回る、なにかを」

「……………」

フレイはなにも言わず、レナスをただ観察していた。レナスの小さな表情の変化、そのひとつも見逃すまいとする真剣な眼差しだ。

レナスが気づいて首をかしげると、フレイがやわらかく微笑んでくる。

「確かに、それが本当なら由々しきことね。けれど所詮は人間、さまつ瑣末に過ぎないわ」

「……………」

うつむくレナスに、フレイが微笑む。美しく、どこか冷たい笑みだった。

「まあ、貴方が気にするというのなら、いいでしょう。私の方でも少し観察してみるわ。それじゃあがんばって。いい戦力を期待しているわ」

「ええ」

フレイと目を合わせて別れを惜しみあうはずが、レナスは視線をわずかに下げたままだった。空間にふわりと波紋が広がる。ゆらゆら揺れるたびフレイの顔がぼやけていき、やがてなにもない青空へと戻っていく。

静寂が、辺りを占めた。

——これもオーディーンとやらが仕組んだことなのか。

……俺に、ひとを見捨てろと！

レナスの表情がくもる。忌々しい相手のはずなのに、なぜ、あるとき彼を殺せなかったことにわずかでも安堵してしまったのか。

あのととき、彼が微笑ったことに——……。

「……」

途中で浮かんできた言葉を、首をふって追い払う。それでも面影が消えず、レナスは脳裡に浮かぶ青年に向かってつぶやいていた。

「お前が、運命にさえ関わらなければ……」

見上げた空があまりにも蒼く澄んでいて、レナスは寂しげに眉を寄せた。

◇

フレイが神界から寄越してきた情報は、ヴァン神族との神界戦争の状況ともうひとつ、ある魔女を人間界から解放せよという主神の命令だった。魔女はヴァン神族の始祖ユーミルの血を引くという。名をリセリア。予知能力を持つと噂の魔女は、死してなおその魂が消滅することを許されず、巨大な魔晶石の結晶のなかにいまも封じ込められているという。封印されている場所は、人間たちにアークダインの遺跡と呼ばれている場所だ。

人間界の大陸北西にある山脈に溶け込むようにして、その古びた遺跡は鎮座していた。

「こんなところに遺跡があったとはな」

身の丈の倍はありそうな大剣を背に担ぎ、額から左頬にかけて大きな刀傷のある黒髪の傭兵、アリュューゼは口笛を吹いて古城を見上げた。生前は傭兵として各地を渡り歩いたが、戦乙女レナスと大陸を渡るようになってから異国文化の多様さに驚くばかりである。傍らに行く細身の弓兵、ラウリイもまた物珍しさにため息を吐いている。

「ともあれ、我らの目的はここにおける魔女なのだろう？　ならばゆくぞ！　ヴァルキリーよ！」

宮廷暮らしがなじみ深いアルトリア王女、ジェラードにしてみれば古びた遺跡など興

味から外れるらしい。アリュューゼやラウリイがまじまじと城内を観察する一方、ジェラードはルビーが嵌めこまれた黄金杖を落ち着きなく振りたくり、レナスを先へ先へとうながしている。

「ええ」

レナスが短く答え、ふと一行の**マテリブライズ**を解いた。遺跡を歩いていたはずのアリュューゼが急に魂だけの存在となつて面食らつたようにレナスの裡で目を丸くする。

——どうしたのじゃ、ヴァルキリー？

——姫さま、あれを

反応より先に口が出るジェラードに答えたのは、ちようどレナスの視線の先を見ていたラウリイだった。

アークダイン遺跡のなかを、ひとり、青年がゆつくりと歩いていた。茶色がかつた短い金髪、冒険者らしき安物の赤い軽鎧、腰には一振り、片手剣を佩はいている。肌は白く、幼さが少し残るものの目鼻立ちがすつきりとした美青年だ。

彼はうつむきがちに暗闇を見つめ、淡々と奥に向かつていく。途中、ひとと動物の白骨死体に怨霊が宿つた不死者が剣をふりかぶつて彼に襲い掛かったが、不死者と同時に抜き打ち、相手の刃が頬をかすめたときには骸骨騎士の胴を両断していた。悲鳴をあげ消えいく不死者にさえ一瞥もくれず、頬に一筋、血が垂れようとぬぐうこともしない。

ただ一言も発さず、青年は奥へ奥へと進んでいく。
ジェラードが眉をひそめた。

——のう、ヴァルキリー。あれも魔女が目当てなのか？

レナスがかすかに首を横に振った。人間たちはこの遺跡に強大な力が眠っている
しか知らないはずだ。かつて多くの人間が魔水晶目当てに踏み入れ、生を終えた場所
である。

アリュージェが眉間にしわをきぎんで、ひとりごちた。

——フン、とんだ死にたがりがいたもんだな。

——アリュージェさん？

ラウリイが不思議そうに見上げる。アリュージェはもう青年を見ていなかった。

「きみ、は……」

かすれた新たな人間の声が聞こえて、ラウリイが首をめぐらせると通路の奥、遺跡の
最深部で、長刀を背にかついだ金髪の青年が、巫人の少年二人をともなつて、大きく目
を見開き固まっていた。ラウリイの傍らにいるアリュージェが口角をつり上げる。

——やつぱりまた出やがったか、アレン。

——あやつ、どこにでもおるのう。

アリュージェとジェラードが^{マテリアライズ}実体化をうながすようにレナスを見る。だがレナスは金

褐色の赤い軽鎧の青年を見つめたままだ。

遺跡奥にある巨大水晶のまえに立ったアレンが、緊張した面持ちで言った。

「きみは……まさか、ルシオ、なのか？ あるとき、あの森のなかにいた」

言葉の途中で剣戟音が響き、アレンの声はかき消されていった。代わりに、赤い軽鎧の青年が一足飛びに剣を打ち込み、アレンもまた長刀を抜き打って、神速の抜刀で止めている。苛烈に火花が散る。ためらいなく放たれた必殺剣を鏢競り合いに持ち込んだアレンの顔にはまだ動揺が浮かんでいた。

ルシオ——とアレンが呼んだ赤い軽鎧の青年の瞳にあるのは、明確な敵意。冷たい殺気だ。

「に、兄ちゃんっ！ 人違いじゃねえかっ?!」

「アレンさんっ！ 危ないっ！」

ロジャーとルシオがアレンの迷いを断ち切るように叫ぶ。瞬間、はつとまたいたアレンの視線に鋭いものが混じった。赤い軽鎧の青年が、雄々しく吼え声をあげ苛烈に切りたててくる。鋭く速い——だが激情のままの素直な剣だ。

ひととき甲高い音が響くと同時、赤い軽鎧の青年からうめき声があった。わずかに大振りになった彼の上段斬りをアレンが剣尖で受け流し、その柄頭で青年のみぞおちを鋭く打ったのである。くぐもった声とともに膝を折って崩れ落ちる青年をまえに、アレン

がわずかに剣尖を下げた。

「あな、どるなあつ！」

息も絶え絶えに怒鳴った青年ルシオが剣を払い切る。刃はアレンの一寸手前を過ぎ去り、わずかに躰からだをかたむけただけでかわしたアレンの動きが完全に青年ルシオの間合い、剣速を読んでいることを実感させる。

——格が違う。

アリュューゼがぼつりとこぼした。実体化マテリアライズをほどかれた勇者たちのなかでもジェラードはどこか上機嫌だ。

——当然じゃ。奴は我らエインフェリアと渡り合う男じゃぞ？ その辺の冒険者などに相手が務まってなるものか！

——だけど、あのふたりには面識がありそうですね。どちらも悲しそうだ。

——めんしきじやと？

心配そうなラウリイの言葉に、ジェラードが目を丸くしてまたいた。いつも騒がしい亜人の少年たちもこの成り行きを見守っているのか、かたく拳をにぎってひとこともしゃべらず、アレンと青年を見つめている。

アレンが言った。

「ルシオ……、教えてくれ。あの森できみと出会ってから五年が経った。この五年、きみ

にいったいなにがあったんだ」

「あんたに話すことなんかにもない。俺は強くなつた……、あのころの無力だった俺じゃない。あんたに、あんたなんかにもう助けを乞うこともない！」

「……プラチナはどうした」

青年^{ルンオ}の目が見開かれる。すさまじい気合声のアレンの言葉をなかば消し去り、横殴りの剣がアレンを襲う。半歩退がってかわすアレンの動きを青年^{ルンオ}も読んでいたのか、さらに踏み込み、雷のたうつ右手で殴りつけた。

「施術？」

「アレンさんっ！」

雷のたうつ音ともに乾いた若木が弾けるような音が響く。アレンはルシオの拳を右手でつかみとめていた。戦っているのにアレンの顔は青褪めていてどこか力ない。ロジャーが眉をひそめた。

（いったいどうしたつてんだ、アレン兄ちゃん。戦つてるときに兄ちゃんがそんな顔するなんて……その表情^{カオ}、まるでオイラに村に帰れつて言った、あのときみたいじゃんか）

ロジャーの脳裏をよぎるのはみなど旅をしていたあのころ、病気の女の子を助ける薬を探りに行くと言ってアレンとともに仲間の一団を抜け出したあのときだ。これから二国間で全面戦争が始まるというときに、アレンは薬の採取が終わつても仲間たちのも

とには戻らず、ロジャーに村に帰れと言った。これから起きるのは命の奪い合い、ひとが物のように消費され、ぼろぼろになって死んでいく世界。ロジャーにはその世界が過ぎたあとでみなが失ったものを思い出させる手伝いをしてくれと頼んできたことがあった。——本当は民間人のフェイトSO3主人公にも踏み入れさせるべき領域ではないのに、フェイトの力を狙う者たちと戦うために、力の本質を、ひとが死ぬ凄惨さをフェイトに味わわせてしまう負い目を語っていた、まさにそのときの表情だ。

（兄ちゃん、また苦しんでんのか？ アホネコと同じ名前の、兄ちゃんのために？）

青年は右手で剣をしっかりと握り、浅い呼吸をくり返しながら、アレンを睨んでいた。アレンが硬い表情のまま問う。

「いまのきみに、俺を倒せると思うのか」

「十分だ」

答えると同時に、ルシオが斬りかかった。鈍く弾ける金属音。ルシオが剣を払い切らんとしたその瞬間に、アレンの剛刀が真上から降り落ちていた。刃を重ねたルシオの躰が揺れ、膝が沈み込む。

「っ!？」

ルシオが息を呑む。同時。アレンの振り下ろしを剣で受け切れずにルシオが背中から地面に叩きつけられた。

アリユーズが固唾を呑む。アリユーズらしからぬ冷や汗が、いまの一合で流れた。――刀が、見えない。

――いよいよ真剣になってきやがったか、おいヴァルキリー！

――ど、どうしたのじゃアリユーズ!?

生者がいるままで実体化^{マテリアライズ}はできない。不死者がいる状況でもなく、レナスたちが連れ出そうとしている魔女は、いまアレンの後ろにある巨大魔水晶のなかで眠っている。

――ルシオとか言ったか……。あの小僧の剣は、普通じゃ止められねえほど鋭い。少なくとも、軽く剣をふって吹っ飛ばせるような生易しい代物じゃねえ。だがアレンと奴の剣ならそれができる。とんでもねえバケモンだぜ！ ヴァルキリー！ あいつを出し抜いて魔女を解放しようってんなら、いま挑むしかねえ！

――あの小僧の力も借りようというのか？ アリユーズが？

ジェラードが目丸くして、ぱちぱちと大きな瞳をまたたかせる。レナスはまったく取り付く島もなかった。

――アリユーズよ、大人しくしているろ。

――チツ。

実体化^{マテリアライズ}さえ為されれば自由に暴れまわる気にいる傭兵を、レナスが一語で黙らせる。

アレンと青年の実力差は明確だ。そこにレナスたちもそろって戦えばあるいは、という

指摘はアリユーゼの場合は煽りもあるだろうが的を射ている。それくらい青年ルシオの動きは悪くない。

苛烈な剣戟の火花を散らして、ルシオの切り立てを受けるアレン。迫りくる一刀を鰐迫り合いに持ち込んだアレンが、感情を見せない瞳で問いかけた。

「きみはいま、なんのために戦っている」

押ししても引いてもびくともしない鰐迫り合いに、ルシオが荒く肩で息を切らしながら声を絞り出した。

「俺は、俺はもう目のまえでだれかが傷つくのを見たくないんだ。……だから、俺は！俺は戦う！ あんたを超えたことを、あの日の俺じゃないことを証明するために！」

ルシオが息を吸うと同時、剣が払われる。瞬間。ルシオの剣が、アレンの刀と切り結んだ。右袈裟、唐竹、横薙ぎ、右切り上げ——。アレンから攻められると一合も介せなかった剣線に、ルシオがついていく。

ジェラードが思わず拳をふり上げた。

——おおつ！ あやつ、先ほどより動きが良くなっておるではないか！

——すごい！ あの人の動きに追いついてる！

戦いに消極的な弓闘士ラウリイでさえ身を乗り出すほどの見事な切り結びだ。アリユーゼだけは二人の興奮とは別に、鋭く観察する眼だった。

——死地を平気で潜り抜ける。死ぬかも知れないという危険を簡単に踏み越えやがるか。だが、迂闊だ。

——なんじやと？ よい雰囲気ではないか！ あの化け物と斬り合っておるのだ！ ジェラードが言った、そのとき。変化は起きた。

「か、ハッ！」

鈍い衝撃音を立てて、ルシオが背中から地面に叩き落ちる。空気の塊を吐いていた。アリュージェが舌打ちし、アレンを睨んだ。——やはり、強い。それも非常識なほどに。——並の相手には通じたかも知れねえが、今度ばかりは相手が悪い。いくら斬り合いについていけるようになったからって、あの剣技は神域だ。勢いに乗りや勝てるつてもんじゃねえ。

——むうっ！ それでも行くぞ！ あやつは！

——だろうな。

目を細めるアリュージェに続いて、ルシオが剣を握り締め、踏み込んだ。

「おおおっ！」

鋭く踏み込み。縦横無尽に剣をふる。

徐々に、

徐々に——。

切り合いの時間が長くなっていく。

だが、強烈な衝撃音がひとときわ高く聞こえると、ルシオが吹き飛ばされている。ここぞというタイミングで放たれる一撃の応酬に、ルシオの力が追い付いていないのだ。それでもルシオはからだ軀を壁に張りつけられても、一步も下がらない。

再び飛び込む。

剣が混じり合う。

切り結び――、

吹き飛ばされる。

三合ほどくり返したところで、立ち上がってくるルシオに、アレンが問いかけた。

「ルシオ……。きみはさつき、ひとが傷つくのがいやだと言ったな。だがきみの戦い方は、とてもひとを護る戦い方じゃない。ひとどこるか、自分さえも死なせてしまう戦い方だ。そんな戦い方で、だれを護る気にいる」

ルシオは荒い呼吸をくり返し――、すう、と息を吸い込んだ。青の瞳が、アレンを睨み据える。影と闇を背負う、ルシオの眼差しが。

「関係ない……。俺が死んだあとで、どこの誰が傷つこうと、俺の知ったことじゃない。俺は……ただ、俺の目のまえでひとが傷つくのがいやだ。自分の無力さが、ふたたび突きつけられるみたいでな！」

「……ルシオ」

「気安く呼ぶな！ お前に、なにがわかる……っ」

ルシオが地を蹴った。ふたたび、アレンと剣を切り結んでいく。

ジェラードの瞳が輝いた。

——すごいっ！　すごいぞ!?　さらにやつ劍速が上がったあああ！

エインフェリア勇者の魂の喝采などルシオには届いていないはずだが、ルシオが上段から鋭く踏み込

み、打ち込んだ。いままでで最高最速の一撃だ。それがまるで手品のようにするりと抜

けてきたアレンの横薙ぎに払い落とされていく。強烈な突きがルシオの腹に決まった。

あまりにも強烈な轟音が、石室に鳴り響く。

ジェラードとラウリイが悲鳴に近い息を呑んだ。

——防御しても、この威力か……! !

アリュューゼの指摘通り、アレンの突きが入る直前。ルシオは己の身と刃の間に、剣を挟んでいた。とっさの受け太刀。だがアレンの突きはそれごとルシオを吹き飛ばす。

ラウリイが、乾いた声で言った。

——……力が、違いすぎる……

アレンが刀を払う。息ひとつ、どころか服装ひとつ乱れていない。

「まだ、戦うのか」

納刀しながらつぶやくアレンに応じ、ルシオが再び立ち上がる。全身血に塗れた彼は、眼光だけが爛々と輝いていた。異様なほどに。

「当然だ。……倒してやる！ あんたは、この手で！」

——いくらなんでも無茶だ！ それ以上動いたら死んでしまう！ ヴアルキリーさまっ！

——ええいつ！ 見ておれん！ 妾も助太刀するぞ！ ヴアルキリー！

ルシオのただならぬ気配に、勇者の魂^{エイソフエリア}たちが色めき立つ。レナスはただ、内なる勇者たちの声も聞こえぬ風でルシオを見つめていた。

「なぜ……」

レナスはぼつりとつぶやいた。

悲鳴のような、悲痛な叫びを発して戦う、赤い軽鎧の青年。

ルシオは、——孤独だった。

彼はアレンを睨み、剣を握る。

「あんたは、俺が倒すっ！」

断言するルシオに、レナスは顔を強張らせたまま、つぶやいた。

「なぜだ？ なぜお前は、こんな勝ち目のない戦いにこだわる。孤独こそがまるで自分の居場所のようにふるまう……？」

レナスの問いに答える者はだれもいない。

「はあ、はあ、はあ……っ」

ルシオが荒れた呼吸を整えるために、すう、と息を吸い込む。

「おをつー！」

ルシオが鋭く踏み込んだ。更にルシオの動きは速くなっている。すでにレナスと並ぶか、それ以上の剣速で、アレンの刀と切り結ぶ。ふたたび打ち合い、吹き飛ばされる——そんな展開ではなかった。ここぞのタイミングで放たれる強烈なアレンの剣すらも、受け止めている。恐るべき成長速度、恐るべき潜在能力だ。

アレンの目が、鋭く光る。

そのときルシオと切り結んでいたアレンが、いつの間にかルシオをはるかに通り越し、その背後に着地した。静かな足音だった。無数の銀の斬線がルシオのからだにぱっと散ったのが見えた。

鏗鳴り音を立てて、アレンが刀を納める。

「カハツツ！」

ルシオの全身から血煙が噴く。アリュューゼが視認した斬線以上に刀傷が刻まれている。
らウリイがぼんやりとつぶやいた。

——いまのは、……どういう……？

——まだ手を抜いてやがったのか……！

アリュューゼが息を呑む。アリュューゼとラウリイの視線が、アレンを向いた。

ルシオを見据えるアレンは、動かぬルシオにゆつくりと目を閉じた。

「……すまない、ルシオ。……——ん？」

小さくつぶやき、アレンがきびすを返したその瞬間。ぴくりとも動かなかつたルシオが、拳を握り締めていた。

「おれ、は……」

ぼつりと、ルシオが声をこぼす。

アレンがふり返ると、ルシオは全身を震わせながら、ゆつくりと立ち上がった。剣を握り、影ある瞳で、アレンを睨んでくる。

「俺はプラチナを失ったあのときから……、俺に護る者なんてないんだよ！ ……護りたい者なんて、俺にはなにひとつない。それだけだ。俺は強くなった。自分が無力だなんてもう思わないぐらい、強くなったんだ。だから、俺はお前を倒す！ プラチナに、プラチナに会うためにだ！ うおおおあああつ！」

慟哭じみたルシオの叫びに、アレンとレナスが同時に目を見開いた。正確にはアレンではなく、彼の内で眠る戦乙女——シルメリアが、ルシオの激情に吞まれ魂の律動を感

じ取っている。

いま二柱の戦乙女に視えるのは——スズランの草原だ。五年前、アレンが光の渦のなかに消えていったあと、幼馴染の少女、プラチナとあてもなく森のなかをさまよい、たどりついた美しい草原。

——綺麗ねえ。まるで、天国みたい。

プラチナがルシオをふり返り、満面の笑顔で言ってきた。困窮した村で生まれ育ち、貧しさから両親に冷たくあたられていたプラチナがはじめて見せた、屈託のない笑顔だった。

「縁起でもない」と言うなよ」

幼いルシオがそう返すと、プラチナはすこし舌を見せて「ごめんなさい」と冗談っぽく笑う。風の強い日だった。山肌一面に咲いたスズランの花びらが、いつせいに舞いあがって散っていく。空は冴え冴えとして月明かりが煌々と降りそそぐ夜。

上機嫌に笑っていたプラチナが、突如物々しい音を立てて倒れ伏していった。ルシオが慌てて助け起こすも、プラチナはぐったりとしている。

「プラチナ！ 早くここを離れよう！ こんなところにいたら、スズランの毒で死んじゃまう！」

どうにかプラチナを抱えて歩き出そうとするルシオの腕を、プラチナはそつと押し止

めた。不思議に思ったルシオが幼馴染の顔を覗き込むと、少女がぼつりと言ってきた。

「ここで眠ったら、楽に死ぬる？」

「な、なにを」

「もう嫌なの……。私がどんなにがんばっても、お父様もお母様も優しくしてくれたことなんてなかった。私がこんなに好きでも、ふたりは……。死んだら、生まれ変わるかな？ 生まれ変わっても、一緒にいてくれる？」

ルシオはなにも答えられず、ただプラチナの肩をつかむ手に力を込める。プラチナの白い頬を透明な雫が伝っていく。ルシオといる間は楽しかった、と彼女は語る。でもそれ以上につらい思い出のほうが多すぎる、と。

——もうすべて、忘れて、しまい、たい……

そう言つて息を引き取つていく少女の疲れ果てた声が、アレンの心にふたたび響いた。

「こ、れは……っ！」

ウイルフレドとの戦いの最中、強制的に発動させられた星界の指輪が視せてきた、あの時点の数刻後の未来。

——落ち着きなさい、アレン。

アレンの心に、シルメリアの静かな声がそそぐ。人知れず荒れ狂う彼の動揺をなだめ

るような、やわらかな声だ。

——いま、追い詰められた彼を救えるのは、あなたしかない。ただ打ち負かすだけでは救えないわ。

アレンの蒼瞳が、力を帯びていく。同時。

——あれはっ!?

——すごい、なんて力だ!

ジェラードとラウリイの叫びが、レナスの意識をも現実に取り戻す。

レナスは息を呑んだ。

ルシオは、この状況でも退かない。だれも、必要としない。

空気が張り詰める。

アリュージェが目を細めた。

——あの野郎、とんでもねえ底力だ……。だが、それでも奴は——

つぶやくアリュージェのあとを引き取るように、アレンがただ静かにルシオを見据え、

「……俺も、全力で行く」

低くつぶやくアレンに、ルシオは地を蹴った。

己が放てる、最高の一撃を。

光を、剣に宿す。

ルシオの持つ剣が、蒼白に輝いていた。

「生死を分かつ、一撃を！……奥義、ラウンドリップセイバアア！」

圧倒的な光に包まれたルシオが、光の化身となってアレンに突っ込む。

瞬間、アレンの気配が変わった。全身から噴き出る黄金色の炎。そして彼のもつ長刀——兼定が、太陽のごとく強烈に輝く。

同時。

青い残光を散らして、両者が、飛び交った。

ザツ、と。

確かな足取りで、同時に着地する。

「ぐ、あ……」

ルシオの躰からだが揺れ、こと切れたように倒れていった。

レナスが駆け寄る。全身血塗れのルシオは、わずかに開いた瞳で、レナスを見上げていた。

「プラ、チナ……」

それきり、ぴくりとも動かない。

レナスは氣を失ったルシオを抱きしめた。

「……………」

ぼろぼろになった、ルシオの姿。
レナスは神妙に押し黙っている。

11. アークダイン編（完） 第二級神フレイ

ルシオ
青年が現れる数刻前。

「……ひとが眠っている……？」

「アレン兄ちゃん！　ともかく助けようぜ！」

シルメリアに導かれ、アレンたちはアークダインの遺跡最奥の石室にたどりついた。室半分を覆う巨大魔水晶のなかで若い女が眠っている。年恰好は二十前後といったところか。緑がかつた長い金髪が腰まで流れ、両手を胸のまえで重ねた体勢のまま水晶漬けとなった姿は、魔女の異名に反して聖女のごとき神聖性を感じさせる。

予言の魔女、リセリア

ヴァン神族の始祖ユーミルの血に連なる者とされる魔女は、上等な法衣のうえから麻のマントを羽織り、寂しげな表情で目を閉じている。その肌は陶器のごとくきめ細やかで、左右の横髪をそれぞれ赤い紐で結っている。

ロジャーがこの魔女を助けんと魔水晶めがけて手斧をふりかぶったとき、静かな声が巫人の少年を押し止めた。

——お待ちください。

驚いた三対の視線が、魔女を見上げる。

——わたしは、自分自身で制御できないおのれの力の強大さに絶望し、命を絶ち、その魂をここに封印しました。このけがれた魔女をみだりに解放してはなりません……。

「あなたの考え方の、どこが魔女なのですか？」

「姉ちゃん、すげえ寂しそうな顔してるぜ？ オイラたちと一緒にのほうが楽しいじゃんよー！」

「心配ねえよ。俺たちがついてるから」

——……え……？

リセリアが戸惑って言葉に窮した。力を求めてここを訪れる人間は数百年の間にくらかった。だが普通の人間に対するように声をかけられたのはリセリアにとって生まれて初めての経験だ。リセリアは沈黙する。予知はおのれの得意分野のはずが、彼ら三人の未来が視通せない。

——偉大なる魔女リセリア殿。お迎えに上がりました。

ふいに女の声が聞こえてきた。リセリアはまぶたを震わせる。目の前にいるのは青年と少年二人だけだ。だが、よくよく目を凝らすと青年の胸のあたりからわずかに浅葱色の光がこぼれているのがわかる。

——あなたは……魂の御使い、戦乙女ヴァルキュリアさま……？

——ゆえあつて、いまはこの人間のなかに身を隠しております。あなたさまのお力をお貸し願いたいのです。

「なに？」

「どうした、アレン兄ちゃん？」

シルメリアの語りかけにアレンが思わず目を丸めると、女神の声を聴けぬロジャーとルシオが首をかしげてアレンを見上げた。リセリアのまぶたが揺れる。

——浅葱の戦乙女さま……。わたしは、ここをお訪ねくださるのは蒼穹の戦乙女さまだと思っております。長き長き眠りのなかで、わたしは自分を止めてくれる者をいつしか待ち望んでいたのです。

あなたさまにそれができますか？ わたしの苦しみと悲しみを取り除くことが……
リセリアの眠る魔水晶が燐光を放つ。急速に魔力がリセリアに集っていく。シルメリアの『やりなさい、アレン』という冷たい声のアレンの耳を打った。アレンが眉をひそめ魔女を見上げる。

「自死してなお、あなたの願いは他人に斃たおされることなのですか」

——わたしは、世界に存在してはならないのです。

——アレン、剣を抜きなさい。

押し黙ったアレンがハッと背後をふり返った。物陰から猛烈に突進してくる青年ルシオ。

敵意に燃えた青年の青瞳がアレンの心をさらにえぐった。

レナスはとっさに掻き抱いたルシオの躰からだを室の隅に慎重に横たえた。血みどろになつたルシオの躰が淡い光に包まれ、見る間に傷が癒えていく。レナスには見慣れない方陣——異界の魔術アレンの治癒紋章術だ。

神である彼女が、なぜ生きている人間をとっさに抱き留めたのか。

なぜいま、安堵したのか。

そんな疑問は彼女のなかで広がる由もない。アレンをふり返り抜剣する。

「覚悟はいいか、人間よ」

背を向けて目を閉じていたアレンが、ゆっくりとレナスを見据えてきた。

「ヴァルキリー、プラチナという人間に覚えはないか」

「さきほどの人間の記憶を賢者の石で読み取ったのか。どこまでも人間の領分を超えた真似を」

「教えてほしい。プラチナについて知らないか」

アレンの目は真剣だった。レナスの表情の変化、彼女の左人差し指にはまつた指輪——

——主神ニールベルンゲンの指輪——がかすかに明滅しているさまをじつと見ている。

レナスはいま神族らしい冷めた表情だった。

「ひとの身で知る必要などない。私の任はお前を討滅し運命を平定することと、魔女リセリア殿を神界に導くことだ」

——レナス、目を覚ましなさい。あなたの記憶と能力を封印しているオーデインが、リセリア殿の力を求めるとはどうか。本来のあなたならわかるはずよ。

レナスの頬が震え、目を丸くしてアレンを見る。じつと目を凝らしても彼のなかにいる女神シルメリアの存在は見通せない。シルメリアの意識がまだ回復していないことと、アレンが念のためにほどこした霧の紋章術でシルメリアの存在を隠しているためだ。

だが声だけが聞こえる。知らない声のはずなのに、なぜか胸に染み入ってくる声。レナスが小さく呻き、頭を押さえる。

「どういうことだ、記憶を封印？ あの指輪か」

——そう。あれはオーデインに忠誠を誓わせるニールンゲンの指輪。そこに記憶封印の魔術がかけられている。

アレンの問いに、シルメリアがこともなく答えてくる。

——オーデインはレナスを人形にしてまで、リセリア殿の力を神界戦争に使うつもりよ。だからアレン、あなたが阻止しなければならぬ。

アレンは答えず、リセリアを見上げる。悲しげな魔女の顔。死してなおおのれの力におびえ、他者に斃されることを望む魔女。アレンの脳裡に二年前のおのれの姿が重なっ

た。

——殺してくれ……。俺が、俺でいられるうちに——兼定っ！

完全な神の代行者となるため自我が喰われいくなか、消えかける意識をどうにかたぐ

りよせて刀に請うたあのとき。

「俺は」

拳を握りしめる。指先が震えていた。あのとときの絶望、怒り、悔しさを魔女とのたまうリセリアは何百年も味わってきたのだ。

「俺は、このひとを戦火には巻き込まない」

——なんですすつて？

シルメリアの声が驚きに跳ねた。リセリアもまた、目を丸くしている。

レナスの冷たい瞳がアレンを射抜いてきた。

「人間よ、お前との戦いもここで終わりだ！ 我とともに生きるは冷厳なる勇者、出でよ！」

レナスが言い放ち、地を蹴って飛び上がった。空中で躰を丸めた女神の背中から光の翼が左右に広がっていく。翼がひるがえり羽音が立った。光の翼は粒子となって三つの光球を生み出し、それが勇者の魂を徐々に象^{かたど}っていく。黒髪短髪巨軀の傭兵、アリユーゼ。豪華な縦ロールをなびかせるドレス姿の王女、ジェラード。金茶髪の小柄な

弓兵、ラウリイ。

カミール村で対戦した面々である。

「ようやくだぜ」

光のなかから現れたアリユーゼが嬉しそうにこぼした。その隣で、ジェラードがルビーの宝玉がはまった杖をふりたくる。

「アレンよ、小僧との戦いぶりを見ておったがやりすぎじゃ！ そなた加減というものを知らんのか！ 小僧が可哀想であらうつ！」

「アンジェラに小僧呼びわりされんのも大概たいがいだな」

「姫さま、落ち着いてください。迂闊うかつに動くのは危険です！」

「黙れアリユーゼ、ラウリイ！ ゆくぞヴァルキリー！ わらわが代わりに成敗してくれる！」

ジェラードがまさに詠唱を始めようとしたそのとき、黙っていた少年たちの獣耳がびくりと震えた。

「んんっ!?!」

「アレンさん！ だれかくる！」

言葉とともに、金色の光の剣がアレンの背後にそびえる魔水晶めがけて走っている。

三本。レナスがハッと魔水晶で眠る女性を見上げた。

「リセリア殿っ!」

三方向から襲いくる光の剣がまばゆく光った。アレンが枯れ枝でも払うように刀で跳ね切り、金属がぶつかり合う音を立てて光の剣を払い落していく。

「戦闘モード。攻撃対象七名。長剣二名、剣一名、弓矢一名、魔杖一名、斧一名、短剣一名……」

舌足らずな少女の声が室内に響いた。人間味を感じさせない平らな声質。レナスがふり返ると、声にたがわぬ可憐な少女がひとり、室の入り口に立っている。少女の濡羽色の髪は腿までまっすぐに流れ、あどけない人形じみた白い顔がじつとレナスを見返してくる。

「こいつは……!」

アリュージェが驚くのも無理はなかった。少女がまどつているのは黒い鎧——レナスが着ている蒼穹色の鎧に酷似した、戦乙女の軽鎧だ。人間が、視認できぬはずの神の姿を模している。場の空気が一気に張り詰めた。

少女の赤い瞳がわずかに輝いて見えた。

『これはこれは。魔水晶の輝きに魅せられてきてみれば、このような宴が地上で行われていたとは!』

ぱち、ぱちとアークダインの石室に乾いた拍手がむなしく響く。興奮した男の声はど

こから聞こえているか、周りを見渡せどわからない。レナスの脳裡にアルトリアの街道で見かけた人間——丸眼鏡をかけた男魔術師——がよぎった。あのときよりはつきりとした術式の発動で察せられる。【遠見】だ。媒介を通して遠くの場所からこちらを覗き見ている。人間界で失伝したはずの魔術を少女の向こう側にいる人間が使っている。

「人間が、どこまでも領分をわきまえぬことを！」

レナスが剣を抜きはらい、少女に向かって踏み込む。勇者の魂たちもそれぞれ武器をかまえた。

「捕縛対象、確認しました。これより任務を開始します」

黒髪の少女がりセリアを見て、言った。

アレンは後ろに控えた少年二人に向き直る。

「ロジャー、ルシオ。あそこのルシオを頼む」

「兄ちゃん、大丈夫か？」

「アレンさん、加勢します」

突如現れた少女の危険性を察している二人の少年には緊張が走っていた。

アレンが口許をほころばせて首を振る。

「心配ない。任せておけ」

「わかった！」

「あいつは任せてください!」

「ありがとう」

言いおいて、アレンが兼定カタナを握った。アリユーゼを筆頭に散開し攻め込んでいく勇者の魂たち。少女と激突する寸前、

——力を求め、争い合う……。やはりひとは、変われぬものなのですな。

ふとりセリアの声を聴いて、アレンは背後を仰いだ。遺跡最奥部の壁一面を覆う巨大な魔水晶。結晶奥深くで眠る魔女が、寂しげにアレンを見下ろしている。

「……心配ない。あなたは俺が護る」

アレンが告げたその瞬間、鋭い剣戟音が石室に反響した。アリユーゼの驚いた声が上がった。

「なんだとっ!」

「これは……まさか不死者っ?」

「あの娘、屍術師ネクロマンサーかつ!」

ふり返れば、アリユーゼの大剣が紫色の全身甲冑を着たアンデッドに止められている。全部で三体、手に燃え盛る紫炎の剣を握っている。巨躯の紫騎士たちは型遅れの鎧だが、兜の天頂から伸びる赤い羽根飾りが瘴気の風でなびいている。もとは名のある騎士が不死者化したのだろう。対峙するだけで、言い知れぬカリスマ性がある。

「ちがう。わたしははずれヴァルクユリアになる者。われとともに生きるは冷厳なる勇者っ！」

少女が鋭く宣言するや紫騎士の空洞な目許が赤く光った。アリユーゼが「ちいっ！」とこぼしながら紫騎士の焰剣を切り払う。二体目、紫騎士が猛烈に突進してきた。正面から受けたアリユーゼが両脚で踏ん張り、低く呻く。アリユーゼをしてその巨軀が揺れるほどの衝撃だ。レナスがスライディングで割り込むもびくともしない。レナスの顔がゆがんだ。三体目、態勢がくずれたレナスとアリユーゼを上段から叩き切らんとふりかぶってくる。

「させないっ！」

ラウリイの矢が正確無比に三体目の紫騎士の眉間を穿^{うが}った。鈍い音とともにわずかにふり遅れた三体目に向かって

「ハッ！」

「オラアッ！」

レナスとアリユーゼの斬撃が同時に叩き込まれた。紫騎士の上半身が揺れる。剣を払い上げたレナス、横殴りに薙ぎ払ったアリユーゼの見事なコンビネーション。そこからさらに追い打ちかけんとしたとき、紫騎士が左に跳んだ。翻^{ひるがえ}って一体目の紫騎士がすれ違いざまに胴薙ぎを打ち込んでくる。

「ちいつ!」

「散れっ!」

レナスとアリユーゼがぱつと散開する。杖を突き出したジェラードがにやりと笑った。

「わらわに戦いを挑もうとは愚か者めっ! バーンストーム!」

王女の詠唱で石室の空気が圧縮していく。紫騎士たちがいた地面は真つ暗な空洞と化し、炎が空洞の奥から噴きあがったと見るや瞬時に半球状に膨れて石室全体を巻き込み爆発していった。

「やった!」

ラウリイが歓声を上げた。

「ヴァルキリー!」

「そこだっ!」

アリユーゼとレナスが、爆発のなかから突進してくる騎士たちの剣を真つ向から迎え撃つ。鈍い剣戟音とともに二人の顔がゆがんだ。それほど剣戟が重い。受け太刀した二人の腕がしびれている。宙に浮かんだ光の剣があらゆる角度から弓を引き絞るようについてたんだがったあと、二人の剣士に向かって鋭く走った。

「ヴァルキリーさまっ! アリユーゼさんっ!」

ラウリイが慌てて弓をつがえる。間に合わない。劍の檻に囚われた二人が光の劍を切り払う。だが二人の背後から迫る劍をとっさに払い損ねたそのとき、鋭い斬線が空間に横一文字を引いていった。硬く碎ける物音が立ち光の劍がひび割れ、壊れ散つていく。

自分たちの背後に音もなく現れたアレンを横目見て、アリューゼがやりと口端をつり上げた。

「おい、いいのかアレン？ 俺たちに背なんか向けてよ」

「アリューゼ、あの子が召喚した不死者は、どうやら普通じゃない。気をつけろ」

アリューゼが鼻を鳴らす。向かいくる紫騎士に上段から打ち込み返す。右にレナス、左にアレン、三者背中をあずけあう体制だ。三騎士が囲み、さらに外から光の劍が無数にレナスたちを狙い、浮かんでいる。

「人間よ、お前の罪が消えるわけではない」

「あとで相手になる」

「だつたら行くぞ！ オラアッ！」

アリューゼが長劍を振り下ろすと同時、三者が地を蹴る。紫騎士の目が光った。

レナスがアークダインの遺跡に向かう数刻前。

「人間風情が、ブラムスと対等に渡り合っただと」

獅子とヤドリギの意匠が彫り込まれた神の玉座で、まつすぐな銀の短髪を後ろに撫でつけた壮年姿の男神は眉をひそめた。つねに落ち着き払っている瓦顔が、腹心の報告を受けて鋭くかげる。最高神オーデイン。神々の頂点に立つ主神は薄い唇をひきしめ、切れ長の灰瞳で下界ミッドガルドを映す魔晶石を睨んだ。

傍らに控えた第二級神フレイもまた、魔晶石に映るレナスを見つめている。

「いかがなさいますか、オーデイン様。やはりこの男、いまのヴァルキュリアでは——」
ブラムスとの戦いぶりと、カミール村での一戦。神族でも最高峰の実力を持つ女神、フレイですら声を固くする事態だ。オーデインが眼球だけを動かしてフレイを横目見る。フレイは飴色の髪を腰まで流した、妙齡姿の女神である。作りものめいた陶器肌で、理知的で小ぶりな顔立ち、タイトなグリーンドレスで浮き彫りになる完璧な肢体を見せつけるように背筋をぴんと張ってたたずんでいる。

オーデインは口許に薄い笑みを浮かべると、魔晶石を見つめた。温度を感じさせない爬虫類じみた灰色の瞳は動かさず、頬杖をついたまま言い放つ。

「さしたる問題ではない。あの人間から、刀を奪えば良いだけの話だ」

「刀とは、やはり」

フレイが唇をひきしめる。オーデインが静かにうなずいた。

「兼定と言ったか。あの刀、恰好は違えど四宝にも匹敵する力だ。ラグナロクに備え、手中に収めて損はないだろう」

「ならばその任、私にお任せください」

「ほう？」

オーデインが興味を惹かれ、片眉をあげる。フレイは険しい表情のままだ。

「あの人間の持つ刀。ヴァルキュリアには荷が勝ち過ぎているようですので」

「……ふむ。成果を期待している」

「はっ」

フレイが恭しく膝を折り、空間に波紋を描いていずこかへと消えていく。それを視界の端に、オーデインは零れた笑声を口のなかに留め置いた。

「異界の四宝をも収めれば、我らアース神族の繁栄は必定だ。——首よ、恐れるがいい。我が全能を」

ユーミルの首と対話するとき、オーデインは必ずほかの者を傍に置かない。それはオーデインに対し、絶対の忠誠を誓うフレイとて例外ではない。

アリューズが長剣を薙ぎ、襲ってくる光の剣を粉碎する。剣そのものに意志が宿る少女の魔術。紫騎士単体の実力も一対一なら問題なく倒せるレベルだ。だがこれが三体に

なった途端、騎士全体の強さが格段に跳ね上がる。コンビネーションに隙がない。さらにあの少女が放ってくる光の剣が、アリュューゼたちに連携を許さない。

「ちっ。さっさと片付けてやりたいところだが、ちよこまかしやがって」

「……あの子の魔術は、どの世界こからきたんだろうな」

「余裕じゃねえか、アレン！」

紫騎士がアリュューゼとアレンに襲いかかった。一度ぐるんと剣を回し、突きこんでくる。二人がぱつと左右に分かれた。寸でのところで二人身をひるがえし紫騎士の左右からアリュューゼとアレンが刃を払い切る。鈍い金属音が弾け、火花が散る。紙一重、三体の焰の剣にさばかれている。

「……兼定を、止めた？」

「はいつら」

二人が驚きながらも着地する。紫騎士たちは徐々に、こちらの動きを覚え始めていく。一流の剣士が戦いのなかで急速に成長するさまを思わせた。言葉も交わせぬはずの低級不死者が。

騎士の一体がレナスに照準を定め、斬りかかってきた。

「ハアッ！」

レナスも上段から打ち込んで応戦する。剛剣と細身の剣が鏝迫り合う。そのとき、べ

つの一体が追い打ってきた。

「くっ！」

迫り合つた剣を素早く薙ぎ払い、新たな剣戟を受け太刀する。あまりの衝撃に震える両腕。だが、レナスは目を見開く。完全に止めたはずの騎士の剣。それがレナスの胴を跳ね切り、強烈な痛みと熱が走る。紫騎士が打ち込むと同時に薙ぎ払っていた、神速の十字斬。

「ヴァルキリーさまっ！」

さらに切り立てんとする紫騎士の頭をアレンが炎をまとつた拳で殴り倒した。けたたましい轟音が立ち、騎士が後ろに跳んで倒れ、なおもバウンドする騎士の胸にラウリーの黄金矢が三本、突き刺さる。その間にレナスが呻きながらも後ろにさがった。

「てめえっ！」

「痴れ者が、焼き払ってくれるっ！」

「退がっていてくれ。二人とも」

ふとアレンが剣尖をあげて、二人を制した。アリューゼとジェラードが眉をひそめる。背を向けるアレンの表情はわからないが抜きはらつた兼定の刀身が白く輝きアレンの全身から覇気がみなぎっている。

「な、なんじゃ？ アレン？」

「てめえひとりで片付けようってのか?」

「……この兼定に、斬れぬものはない」

アレンがつぶやき剛刀を強く握りこむ。この兼定カタナで『斬る』と決めて斬れなかったものは——口惜しくもフェイト・ラインゴッドの破壊ディストラクションの力をおいてほかにない。それ以上の例外は誇りプライドが許さない。

言葉以上に物語るアレンの背中を見て、アリュージェが眉をあげつつも皮肉な笑みをうかべた。

「まあいい。お手並み拝見といこうじゃねえか」

アレンがうなずく。少女が舌足らずに言った。

「攻撃対象、長剣一名。残存六名。これより各個撃破します」

「予告しておく。ひとりめで終わる」

少女がムツと眉を寄せた。紫騎士は動き始めている。一体目が体当たり。二体目が一体目の肩を踏み台にして跳躍し大上段からふり下ろしてくる。三体目が一体目の影に隠れ、すれ違いざまに回転突きを一閃してくる。

アレンの動きは最少だった。まず一体目の肩を跳び越え襲い掛かってくる二体目の大上段からのふり下ろしを剣尖で払いよけ、アレンの傍に着地した二体目をかばうような一体目の体当たりを半歩退がってかわす。とんでくる三体目の回転突き。苛烈に散

る火花すら両断して、下段から青白く輝く剛刀カタナの一閃が払いあげられる。凄まじい太刀風が三層の疾風となり、三体目の騎士甲冑が両断されていく。剣技【弧月閃】。

アリュージェたちが目を丸める間に、剣戟を流された二体目が斬りかかっていた。格段に速くなった紫騎士の打ち込みがふり抜かれるまえ、アレンが電光石火の速さで抜き打っている。石室を照らした銀の弧が横に一閃走ると二体目の胴が斬り離されていた。

「敵負傷者予測……〇名、任務達成率0.103%……？」

人形じみた少女の顔が不安と焦りにかける。光の剣が飛びかかっても、アレンは防御すらない。魔術障壁が無効化している。

「……そんな」

少女の絶望的な声とともに、残る一体目が焔の剣をたかぶらせ、右腕をぐるんと回した回転突きをアレンにくり出していった。鈍く激しい音のはじめアレンを通り越して突きこんでいった紫騎士の兜がゆっくりと左右に分かれ、最後の騎士甲冑が両断されていく。

「残るは、ひとり」

静かに底光る蒼瞳が少女を睨む。

「敵負傷者予測〇名、任務達成率0.09%……、敵負傷者予測〇名、任務達成率0.0

04%……」

少女は怒りと不安がないまぜになつたような顔だつた。何度も演算をくり返しては、結論が気に入らないとばかりに首を横にふる。

アレンが言った。

「ここで退くならよし。退かないなら……きみは痛い目にあう」

「……ひかない。絶対、ひかない……シャイロさまは、わたしが助けるっ！ だから！ われとともに生きるは——」

少女の詠唱が終わるまえにアレンは音もなく少女の背後にいた。少女の首許に手刀が決まると、幼い躰からだが力を失いがくりと沈んでいく。地面に倒れるまえアレンが左腕で少女を抱え、剣を向けてくるレナスを見た。

「人間よ、その娘をどうするつもりだ」

「事情を聴きだす。その必要があると判断した」

——アレン、逃げなさい。いますぐに！

脳に直接届いてくる女神シルメリアの声に、アレンがハッと周囲に気を散らした。透明な気配。レナスよりも高次元に澄んだ気配はシルメリアの警告がなければ気づかないほど空間になじんでいる。レナスの傍らがゆらりと揺れたかに見えるとき、空間は波打ちはじめ波紋の中心から光の球が生まれてくる。清らかな光はやがて強く大きくなっていった。

「……フレイ！」

レナスの驚きの声とともに、光球から、美貌の女神が迫り出してきた。豊かな薄茶色の髪をなびかせて、第二級神・フレイが降り立ったのだ。

「レナス。今日は加勢にきたわ。さつさとそこにいる人間もろとも魔女を選定しましょう」

フレイが笛の音を思わせる明瞭な声ではつきりと言い、アレンと、アレンがかついで戦乙女もどきの少女をじろりと見下してきた。

「けがらわしい。人間の被造物が、よもや神を名乗ろうだなんて」

フレイが細い眉をつり上げ、不快げに言い放つ。塵芥でも見るような瞳だ。燐光を放つフレイの高貴なオーラが、石室のかび臭い風を一掃し、神の威厳をひりひりと肌に伝えてくる。アレンは直感した。この女神は、レナスとはまったく違う。むしろアレンからすべてを奪った創造主、ルシファーを思い起こさせる。

——0と1との存在に過ぎない貴様らが、創造主に逆らおうなどと思い上がりもはなはだしいわ！

アレンの蒼瞳に鋭い光が走った。

「お前たち神は、ここで静かに眠っている女性を連れだし、無理やり戦火に巻き込むつもりか」

フレイが眉をひそめる。アレンの裡うちにいるシルメリアが、アークダインの遺跡最奥に魂を封印した魔女の存在を説いたことをフレイの瞳をもつてしても見通せない。アレンの紋章術ましゅつの精度が「星界の指輪」で極限まで高められた結果、フレイが意識を凝らせど違和感以上のものは感じ取れない事態が起きていた。

「人間が、神と対等に話せると思つて?」

「話す必要はない」

アレンの全身から黄金の焰がくゆり始める。握りしめた兼定。今度こそ消えゆく肉体ではない。アレンはそつと幼い少女を足許に横たえる。アレンの焰が急速に膨れ上がりフレイの神気を押し返さんと石室全体に広がった。

「うおっ!」

さかまく暴風にアリュウゼが頭を庇う。ジェラードとラウリイが悲鳴をあげ、飛ばされそうになる。強烈な気のぶつかり合い。レナスがジェラードとラウリイを見やつて勇者の魂たちの実体化をほどいた。

レナスの左人差し指にはまったニールンゲンの指輪が白く輝く。鈍い頭痛がレナスを襲う。呻き、またたいた戦乙女の瞳が、次に開いたときには迷いなき敵意がアレンを向いていた。

フレイが微笑む。

「レナス、力を貸してちょうだい。一気にカタをつけるわ」
「ええ」

アレンが兼定を青眼にかまえた。

——なにをしているの、アレン！ 逃げなさいっ！ 人間が、神と戦ったところで勝てないと分らないのっ!?

内なるシルメリアが、警鐘を鳴らしてくる。アレンはゆつくりと息を吐いた。

（ああ。たしかにそうだ。かつての俺は、神に反抗の意思を見せたが最期、かた躰が消えいく呪いにかかっていた……。だが、いまは）

兼定がわが身の自由を喜ぶように甲高く鳴いている。刃は黄金色に輝き、アレンの闘志をあますことなくみ取ってくれる。戦乙女もどきの少女の背後にまわった際、リセリアと対面する形になったアレンは、不安げにこちらを見つめてくる魔女と目が合った。

——アレンさま……、わたしは……

アレンが少し口端を広げてうなずいた。いまは観ている、と。

女神フレイにとつてみれば、繊細なりセリアの心の機微など塵芥にすぎないだろう。アレンにはわかる。いま目の前に現れた女神は、おのれの聖域以外すべてを消し去る者の瞳だ。レナスの指輪がさきほどからチラチラ光つては、こちらに向けてくる敵意を増

していることにも気づいている。

『逃げる』と警告してくるシルメリアに向かって、アレンははつきりと言った。

「いまの俺には、兼定がある。だれかに託さずとも、ひとを護る力が」

——なんて馬鹿げたことを……！

意識内でシルメリアが息を呑んだのがわかった。

「行くわよ、レナス！」

「ええ」

宙に浮かんでいたフレイが光に溶けこむや、レナスが腰を沈め鋭く抜き打ってきた。下段ぎみに払い切られた剣尖が、宙に銀色の弧を描いて火花を散らし震え止まる。レナスが目をみはった。刀の柄頭でレナスの剣尖を止められている。アレンの背後に現れたフレイがみぞおちめがけて蹴り穿った。つかんだのは空。左足をひいたアレンの前髪が揺れる。女神の躰からだが鋭く反転し、さらに上中下段に狙いを散らして刃のごとき蹴打を突きこむ。音速を切る分厚い空気の音が矢継ぎ早に起こった。息をもつかせぬ女神の追い打ちは、兼定がふれぬ接近戦だ。アレンの拳が焔を噴き、女神の蹴打を正確にさばき落としていく。

「あのフレイって女神サマ、戦い慣れてるじゃん……っ」

「アレンさんが防戦一方だ……！」

重い激突音ののち、火の粉が噴いた。ぶつかった反動で両者がのけ反る。わずかな距離が空いた。瞬間。アレンがふりかぶっている。フレイを完全に捉えていた。

「やったー！」

ルシオの歓声もつかの間、打ち込んだアレンが捉えたのはフレイの幻影。太刀風がフレイの影を断ち、後ろに控えたレナスを襲い、とつさに剣で止めた戦乙女の躰を石室の壁に張りつけた。

「かはっ！」

「——ヤアッ！」

パツと頭上に現れた女神フレイの左手から、光刃が無数の斬撃となつて降る。斬撃のきらめきが空間に光の檻をつくり無尽に走つた。アレンが腰を落とし抜き打つた。兼定を一閃、薙ぎ払つたのみだ。野太い銀弧が空間に横一文字を描くや光の檻が根こそぎ薙ぎ倒されていく。フレイが一瞬、驚きに頬をこわばらせた。

アレンがさらに跳びあがらんとした頭上の先で、女神フレイがたわめた両手のなかに光を集めていく。

「ならば、これでどう。浄化してあげるわ！」

言葉通りこの石室はおろか、アークダインの遺跡そのものを消し去るほどの神気がフレイの両手のなかで膨らんでいく。アレンの蒼瞳と兼定の刃が壮絶に光つた。

「おおおおおおおっ!」

アレンの背に、黄金の朱雀が派手な咆哮をあげて現れる。剣技【活人剣】。極限に高められたアレンの練気が神速の打ち込みとともに龍を放ち、朱雀と同化して巨大な黄金龍と化する。以前、レナスに放ったカミール村での一撃よりさらに強烈だ。神界最強クラス
の第二級神フレイもまた、究極に高めた神気をためらうことなくふり下ろした。

「神技! エーテルストライクっ!」

「これは……!」

「やべっ!」

レナスがつぶやき、ロジャーが短く悲鳴をあげる。壮絶な熱気と光のぶつかり合いが石室すべてを呑み込む。遺跡の天井、壁、床はまるで砂でできた城のごとく見る間にめくれ、はがれて壊れていく。両者のぶつかり合いで空が赤く、青く、虹色に染め上がつた。戦乙女レナスは自身の実体化をマテリアライズほどいた。ロジャーたちがあわあわ言いながら逃げ惑う。

——早く、わたしの後ろに!

「お、おう! あんがとな!」

ロジャーたちが魔水晶の裏に駆け込んだ。リセリアの魔力障壁をもつてしても力の激しさはびりびりと伝わってくる。視覚、聴覚、触覚——すべてを奪わんばかりの力の

競り合いのなか、アレンの気合声がひととき響いた。

「兼定あああああ！」

押し合っていた光が黄金龍の大口について呑み込まれ、天を貫きほとぼしっていく。

瞬間転移テレポルトで空に現れたフレイの顔がやや青褪め、驚きと怒りに震えている。

「私の神技を破った？ ……人間ゴとときが、生意気な！」

フレイの青瞳がぎりりと光る。主神の意向は絶対だ。やはりあの兼定という刀、人間などが持つていてはならない。

両者が同時に仕掛け、ぶつかり合った。フレイの全身に神気が宿り、蹴りでアレンの剣戟すら止めてみせている。対するアレンも、剛刀とは思えぬ神速の剣技でフレイを切り立てる。力、スピード——どちらもゆずらず、高次元に噛みあっている。

重力をまったく意に介さないフレイの戦い方は変幻自在だ。正面から攻めてきたと思えばパツと消えてあらぬ方向から蹴り穿ってくる。かと思えば神気の刃が無尽にふり下ろされ、人間が女神の攻撃パターンを読み切ることは不可能だった。

それなのに決められない。

これこそがアレン・ガードが生れ落ちてから磨き続けてきた闘いの勘だった。

どれほど斬り合ったのか。

陽が傾き始めたころ、アレンの後ろに寝かされていた黒髪の戦乙女を模した少女——

アリスは気絶から目覚めた。まるでおのれを護るように一歩も動かず、第二級神と斬り合う人間が、目の前にいる。

「……………え……………?」

アリスは状況が理解できずにまたたく。

「どうして、わたしをまもってくれるの……………?」

問いに答えてくる者はおらず、ただ至高の一撃をもつて最終局面を迎えんとする神と人間の戦いがぶつかう。

黄金色の焔をまき散らすアレンが最後に選ぶのは、渾身の右袈裟懸け。おのれの全身全霊を込めた一撃がまさに電光石火の踏み込みから放たれんとしたそのとき——

「っー!」

「塵となりなさい!」

フレイがいまいたその場所に、パツとレナス・ヴァルキュリアが現れた。マテリアライズ 実体化まで

されている。アレンの手許が緩んだわずかな隙、エーテルストライク フレイの神技が超至近距離から撃

ち込まれる。巨大な神の光球はアレンの全身を呑み込み、さらにその後ろにいるアリスにも襲いくる——はずだった。

「ぐ、おお、あああああ!」

とつさに受け太刀したアレンが、しぶとく神技を受け止め、跳ね返さんと悲鳴混じり

に吼え声をあげる。フレイの唇が震え、眉がっすりあがる。アレンの背中には執念と——
かつてアリスに『必ず神を屠ほぶってみせる』と語った主君の姿が重なって見えた。

「けがらわしい……！　消え去りなさいっ！」

「させない……、このひとはわたしが、まもるっ！」

アリスが人形めいた整った顔をきゅつと引き締め、光の剣をフレイ目掛けて無数に放つ。だが至高の力のぶつかり合いのまえにアリスの剣はなすすべなく蒸発した。何度撃つても牽制すらできない。フレイの瞳に冷酷な光が宿った。

「レナスー！」

蒼穹の鎧をまとった戦乙女が、アリスに鋭く打ち込む。呻き、アリスが魔術まぎゅの剣で応戦するも、一対一では本物の戦乙女には勝てない。魔術師らしく距離を取らんとするアリスを蒼穹の戦乙女が追いかけて、がむしゃらに切り立ててくる。

「く、ううっ！」

防ぎきれない。アリスが確信したそのとき、すべてを断ち切らんとする黄金色の太刀風が彼女のすぐ傍らを過ぎていった。アリスの長い黒髪が太刀風の余波でなびく。光速に地面を疾駆した「空破斬」が、受け太刀したレナスごと三メートルほど後方に吹き飛ばした。

アレンの全身からは煙が上がっている。血まみれだった。

「あ、あなた……」

「心配ない」

アレンが頬に流れてきた血を肩で拭い、フレイを睨み据える。

「貴様」

「ブラムスと渡り合つたとは聞いていたけれど、まさかここまでだけがれていたとはね。人間ごときが我が神技を受け止めたこと、現世の誉れとするがいいわ」

フレイは微笑み、宙に浮かんで長い脚を組んでいる。勝敗は決した。そう言いたげな顔だった。

兼定の刀身とアレンの蒼瞳、さらに彼が右人差し指に嵌めている「星界の指輪」が蒼く輝き始める。アレンの血が焔の勢いにのり、くゆり、蒸発していく。黄金色の焔に包まれた青年の背中を見て、アリスは場違いな感想を抱いていた。

「きれいな、ひかり……」

「ア、アレンにいちちゃん！ やべえなら逃げるのもアリじゃんよっ!」

「……かっつけえ……!」

ロジャーがあわあわ言いながらフレイを横目見ては撤退を促す傍らで、少年がほうけた顔でつぶやく。

アレンが抜刀姿勢を取る。フレイから微笑みが消えた。

——アレンっ！

「上下の真理は変わらないのよ」

シルメリアの叱責のなかフレイが光に消えた。鋭い蹴打がアレンの背後を捉えている。瞬間、フレイは人間の^{アレン}手許がかすかに閃いたのを見た。神気で高硬度と化した蹴打が剛刀の刃と切り結び、甲高い音を立てる。風が通り抜けていった。フレイのはちみつ色の長い髪がさつと広がり波打っていく。

「なに……？」

フレイの全身から血が噴いた。おびただしい刀傷が全身に刻まれる。剛刀の刃はフレイの蹴りを止めているはずだ。刃に思われたものが太刀風と気づくまで、フレイはしばらく時間を要していた。

アレンの右袈裟懸けがフレイの左肩から右腰までを正確に両断する。黄金の刃を刻みつけられた女神は^{マテリアライズ}実体化がほどけレナスとともに光の粒子となって神界に^{消え}戻りいくなかで現実をまったく理解できずに目を見開いていた。

「ばかな、にんげん、が……？ そんな、こんなはずは……」

言葉は最後まで続かず、光が散っていく。平地と化したアークダインの跡地に人間と亜人、戦乙女もどきの少女と魔女が残った。

アレンが兼定を一閃し、納刀する。黄金色の焰はまたたく間に風とともに散り消えて

いった。

「大丈夫か、みんな」

アレンがふり返る。魔水晶の影に避難していたロジャーがへなへなと地面に座り込んでいた。

「にいちやくん。暴れるなら暴れるって合図くんねえと心臓に悪いじゃんよお……っ
！」

「すまない。余裕がなかった」

アレンが言つて、アリスを助け起こそうと手を差しのべる。アリスはその手を取ろうとしたところで、またたいた。顔色がさつと青褪める。

「わたし、いかなきや」

「行くとは？ きみはどこからきたんだ？」

「ごめんなさい」

アリスが悲しげに眉をひそめた。その足許に赤黒い光が走っている。

(五芒星?)

アレンが方陣の中身を読み解こうとしたときには、戦乙女を模した黒髪の少女は光のなかに消えていった。

——あれは……移送方陣。

リセリアのつぶやきに視線をあげる。魔女は魔水晶に肉体を残して魂だけでこちらに降りてこようとしていた。

「いそほうじん？」

——方陣内にいるものを遠くの場所へと転移させる魔術です。私が生きていた時代でも、使える者は数えるほどの貴重な魔術でした。

——アレン、両手をかざしなさい。リセリア殿に向かって。

リセリアとシルメリアの言葉が同時にきて、アレンは目を白黒させながらも言われた通りに両手をかかげる。シルメリアは少し押し黙ったあと、声音を落とした。

——フレイを地上界から退けたあなたなら、できるかもしれない。

「なにを？」

問いに答えが与えられるまえに、アレンはすぐ目のまえに降りてきたリセリアがおだやかに微笑んでいるのを見た。どこかでみた光景だ、とブラムス城での一件を思い返す間もなく、アレンの胸のあたりから白い光がほとばしりリセリアを包み込んでいく。

——アレンさま、あなたなら、きつと……

光のなかでリセリアの声が聴こえてきた。両手をかかげるアレンに事態を把握するのは困難だったが、その両手が、つと細く白いやわらかな手に握られる。

傍で見ていたロジャーと少年^{ルシオ}から驚きの声が上がった。

「いい、いいいい!?!」

「すっげえ……!?!」

アレンは目を丸くしてまたたく。目のまえに、魂だけの存在となつたはずのリセリアが肉体をともなつて立ち、微笑んでいる。

「アレンさま、あなたの旅にわたしも一緒にさせていただきます!」

「水晶の封印が、解けた……?!」

——マテリアライズ実体化よ。リセリア殿には魂と肉体の両方が揃っていた。ならばそのふたつをつなぐ銀の鎖をつむげば、現世するのは当然でしょう。

「蘇生魔術のようなものか……?!」

シルメリアが神の理屈を並べてくるが、アレンにはさっぱりわからなかつた。ただ自分の胸許から生まれた光はアレンの紋章力ではない——シルメリアの神気だ。

視線の合つたりセリアがゆっくりとうなずいてくる。

「……そうか。無事でよかつた。こちらこそ、よろしく頼みます!」

「はい」

アレンが微笑んで言うのと、リセリアははにかんで笑つた。

「それでアレン兄ちゃん。アホネコと同じ名前のこの兄ちゃん、どうすんだ? 置いてくかあ?」

ロジャーの間延びした声でアレンはハッと我に返り、青年ルシオに駆け寄った。おだやかな呼吸をくり返す青年ルシオは普段あまり眠っていないらしい。治癒紋章術ヒーリングの影響で躰からだを癒すため意識がまだ醒めずにいる。

「ともかく近くの町まで行こう。プラチナの話もある」

「おうっ！」

アレンが青年ルシオを担ぎ、歩き出す。それにびよんびよんについて回る二人の少年たちに続いて、リセリアもゆつくりと歩み始めた。数百年前の現世ではありえなかった、おだやかな光のなかを歩める——そんな予感が予言の魔女の胸に広がっていた。

12. 神界転送 ラウリイ①

光満ちた神界宮殿。吹き抜け窓から差しこむ光を一身に浴びる黄金の女神像は、神界でも最も格調高い玉座の真上に鎮座している。

「フレイ、変わりないか」

「オーデインさま……！」

主神オーデインの傍らに立つ第二級神フレイは、そつとわが手を取った主神をふり返つて眉根を寄せた。オーデインは黄金の玉座に深く腰かけたまま、灰色の瞳でフレイを見上げてくる。銀髪を後ろに撫でつけた壮年神の瓦顔には心配や気遣いの色がにじんでいた。

「はい。かの人間を勇者の魂とするエインフェリアことはかないませんがオーデインさまのお引き立てにより、人形ひとがたとアーティファクトの回収はとどこおりなく。しかし、あれは——」
能力を封印されているいまのレナスには感知不能だろうが高位神たるフレイにははつきりと認識できた。

突如、時の次元が曲がった。

腹心の言いたいことを察して、オーデインが満足げに口端を広げ、うなづく。

「上下の真理は変わらんのだ。永久にな」

オーデインが言い、フレイに重ねた手をどけて上向けると空間から水時計がひねり出されてきた。黄金でできた長方形の箱のなかに細く透明な管がうねりながらも縦列をなし、その管を通る水の流れが複雑にかみ合った歯車を動している。悠久を生きる神にとつて時の概念は忘れがちだが、水管と歯車に埋もれるようにして蔓に四肢をつながれた女神がフレイの目に留まった。フレイですらなじみのない顔だ。

「オーデインさま、そちらは？」

「神々の目覚まし時計、原初の記憶……呼び名はさまざまあるが、ひとつ、これの名を挙げるとするならばグルヴェイグ。太古の神だ」

「グルヴェイグ……？」

「正確にはその魂を水時計に封じたものだ。これを傾けることで時の移送をずらしておいた。人間が神を超えようなどと思い上がりも甚だしい。はなは私が統治する世にいかなる脅威も不要だ。この世の平定こそが主神たる我が務めなのだからな」

オーデインが目を細めたとき、水時計に囚われた女神の瞳が開いていく。映し出されてくるのは、フレイも気になっていた「あのとき」だ。下界アークダインの遺跡で人間と戦ったあの瞬間――

.....

「けがらわしい！ 消え去りなさい！」

「させない……、このひとはわたしが、まもるっ！」

アリスが人形めいた顔をきゅつと引き締め、光の剣をフレイ目掛けて無数に放つ。だがアレンとフレイの強力なぶつかり合いをまえに戦闘用ホムンクルスの魔法の剣はすべからく蒸発するだけだ。何度撃つても牽制すらできない。フレイの瞳に冷酷な光が宿った。

「レナスー！」

蒼穹の鎧をまとった戦乙女が、アリスに鋭く抜き打ってくる。呻き、アリスが身を屈め光の剣で応戦するも、一対一では本物の戦乙女には歯が立たない。魔術師らしく距離を取らんとするアリスを蒼穹の戦乙女が追いかけて、がむしゃらに切り立ててくる。

「く、ううっ！」

防ぎきれない。アリスが確信したそのとき、『声』がアリスの脳内に響いた。

『……お前はいつまで茶番を演じている？ 思い出すがいい。偉大なる己の使命を、神殺しの槍よ！』

低く重厚な男の声だった。アリスの唇が震える。戦乙女の猛攻に堪えきれない。アリスが魔術で創った光の剣は四方に碎け散り、戦乙女の白刃が頭上に迫った。アリス――戦闘用ホムンクルスA―11号C Editionの赤瞳が涙を散らしながらも淡く光ったそのとき、すべてを断ち切らんとする黄金色の太刀風が彼女のすぐ傍らを過ぎていった。

アリスの長い黒髪が太刀風の余波でなびく。光速に地面を疾駆した【空破斬】が、受け太刀したレナスごと三メートルほど後方に吹き飛ばしたのだ。

アレンの全身からは煙が上がっている。血まみれだった。

「あ、あ……っ」

「心配ない」

アレンが頬に流れてきた血を肩で拭い、フレイを睨み据える。

アリスのつぶやらかな瞳から大粒の涙があふれ、こぼれていく。『逃げる』と言いたいの喉がまつたく動かない。戦闘用ホムンクルスの赤瞳がさらに赤く光るや、その表情からはすべての感情が抜け落ちていった。

アリスの変化に気づくことなく、アレンはフレイを睨み据えていた。

「貴様」

「ブラムスと渡り合ったとは聞いていたけれど、まさかここまでけがれていたとはね。

人間ごときが我が神技を受け止めたこと、現世の誉れとするがいいわ」

フレイは微笑み、宙に浮かんで長い脚を組んでいる。勝敗は決した。そう言いたげな顔だ。

兼定の刀身とアレンの蒼瞳、さらに右人差し指に嵌められている【星界の指輪】が蒼く輝き始める。アレンの血が黄金色の焰の勢いにのり、くゆり、蒸発していく。

「ア、アレンにいちちゃん！ やべえなら逃げるのもアリじゃんよっ!」

「……かつつけえ……!」

ロジャーがあわあわ言いながらフレイを横目見ては撤退を促す傍らで、少年ルシオがほうけた顔でつぶやいた。

アレンが抜刀姿勢を取る。フレイから微笑みが消えた。

そのときだ。

戦闘用ホムンクルスがアレンの背中でぼつりと言った。

「……対象を捕捉、これより任務を遂行します」

両手を突き出した戦闘用ホムンクルスの矛先がアレンに向いている。瞬間、水時計のうねる水管の模様がアレンの胸もとに描かれるや時間が止まった。

——アレンっ!

「上下の真理は変わらないのよ」

シルメリアの叱責のなかフレイが光に消えていた。鋭い蹴打がアレンの背後を捉える。抜き打たと止まったままのアレンの手許から兼定カタナが消えた。背後のホムンクルスが瞳を光らせ兼定を両手で抱いたままいずこかへ消えていく。そのとき。神気で高硬度化した蹴打がアレンの胸にあざやかに決まった。右肩から左腰にかけてアレンの胸板から真つ赤な血が噴く。時間がようやくやく正常に流れ始めると、突如大怪我を食らったアレンがよろめきながらも目を白黒させた。手許に兼定がない。察するや蒼瞳アザトがぎらつき、その拳に焰が宿った。

フレイが猫目をほそめて微笑んでいる。

「まだ足りないみたいね」

フレイの神気が両腕にやどり、野太い光の砲撃が至近距離からアレンを襲う。アレンが歯を食いしばり、黄金の焰の拳を神技の核に叩き込む。右人差し指にはめられた【星界の指輪】とアレンの蒼瞳が壮絶に光り、砲撃を引き裂いた。フレイの鋭い気合からたが背後で湧き、神の蹴打が背中に突き刺さる。槍で貫かれたかのごとく、アレンの躰からだが震えた。

「ぐ、あ、あ……………っ！」

——アレン！

『よせっ！』とシルメリアを引き留めるには一步遅かった。フレイが息を呑み、目をみは

る。とどめを刺さんと睨みつけた人間の内側から、不死者王に捕らえられているはずの戦乙女が迫り出し、ろくな実体化もできずに両腕を広げ立ちはだかったのだ。

「馬鹿なっ……！ シルメリア!？」

アレンが呻きながらも急速に紋章力を高めていく。フレイの顔がさらに鋭くなった。「人間が、ここまで咎を重ねてくるとは!」

第二級神の両腕に神気が集まっていく。みたび砲撃がアレンを襲った。ロジャーやルシオたちが叫んでいる。だが朦朧としたアレンの脳裏をよぎるのはリセリアの言葉だ。

——移送方陣。方陣内にいるものを遠くの場所へと転移させる魔術です。

この時間軸では聞けるはずのない言葉を、術を、アレンは「星界の指輪」を通し再現しようとしている。フレイの気合声走り、光がすべてを消し去っていくのが視えた。アレンの紋章陣がレナスとフレイを除くすべてのものを遠く転移させたのは、同時のことだった。

.....

水時計より一連の流れを読み取ったフレイは、ほう、と息を吐いた。世界樹ユグドラシルの根元、精霊の森の奥深くに兼定を奪い、逃げたホムンクルスは捕らえている。あれをいくら痛めつけようとホムンクルスの出どころはわからぬままだが、いまの一幕でフレイは完全に理解できた。

「冥界とつながる異端者ども。屍術師ヘルの尖兵があの人形ひとがたに関わっていたとは」

「この私が神々の目覚まし時計ヴェイを用いたことでやつらも動き出したのだろう。いずれニフルヘイム霧の国も我が統治下とするがいまは女王ヘルの動向に目を光らせておかねばな」

近々、神界にいる勇者エインフェリアの魂たちには妖精アールヘイムの国の光弓シルヴァンボウを入手せよと命を下す。うまくいけば神槍グンニグル、竜珠ドラゴンオーブに続いて三つめの四宝がオーデインの手中に収まるのだ。

「今世、ロキを野放しにするなどあり得ぬが、うまく遣ってやるのも我が務めか」

「オーデインさま……?」

主神のひとりごとにフレイが首をかしげてふり返る。もとより全知全能の第一級神は微笑むだけで、フレイの問いには答えなかった。

「にいちゃん、全然目を覚まさねえじゃんよ」

ロジャーが神妙な面持ちでつぶやいたのは、ゼノンと名乗る貴族の屋敷に身を寄せて三日過ぎたころだった。

「シルメリアさまも深く眠っておられるようです。あのようなことがあれば、致し方ないことですが……」

「……心配ねえよ。アレンさんになう奴なんか、この世にいるわけねえんだから」

アレンが横たわる寝台で、つきつきりの看病を続けてやつれたりセリアの表情は暗い。肉体よりも精神が参っている。猫耳少年のルシオが気を遣って軽口をたたいても、リセリアの視線はアレンの顔に貼りついたまま剥がれない。

客室の壁に寄りかかって腕を組んでいる金髪の青年、ルシオは目を覚ましてからこちら、重傷のアレンをまえに一瞬青褪めた顔を見せ、戦うわけでも去るわけでもなくとどまり、なにも語らない。

三日前、アレンの転移魔術でアークダインから遠く離れた都市郊外に飛ばされたロジャーたちは、重傷のアレンをまえに騒然とし、彼が気を失う寸前で魔女リセリアは^{マテリアライズ}実体化された。

そんな一行の傍らを通りがかつたのが、東国の湿地帯・ネルソフ遠征から戻ったばかりの宮廷魔術師ゼノンだった。二十半ばの青白い顔をした陰気な金髪青年は、金刺繍がほどこされた白い法衣のフードをはずし、気絶したアレンを見るや三白眼を丸めて「す

ぐに俺の屋敷へ！」と従者に命じ、ロジャーたちを屋敷にうながした。

屋敷についてから治療にあたったのはおもにリセリアだが、ゼノンの魔術はたしかなものでも薬や食事の手配にも余念がない。いまはエントランスで「これから城に向かう」と話している屋敷の主人は、執事に呼び止められ、眉をひそめていた。

「花が足りない？　いまさら言つてどうする！　今年の夏が寒いことぐらい、みなわかつていただろう！」

「し、しかし……ぼっちゃま。梶子くちなしは温かい環境でなければ育たず、農家の見込みより遙かに収穫量が少ない状況なのです……」

「ならばアルトリアからでも取り寄せろ！　本番は三日後だ。いまさら国の判断を取り下げることはできない！」

「かしこまりました」

執事が一礼し、駆け去っていく。ゼノンがため息を吐いた。

「まったく。あいつなら、こんな不手際はないぞ」

「くちなし？　なんだ、それ？」

エントランスの喧騒に気づいたロジャーが素早く駆け寄り、ゼノンの足もとでぴよんぴよんと跳ねる。ゼノンの鋭い表情がわずかにやわらいだ。タヌキの耳としつぽをもつ不思議な少年は、愛嬌たっぷりどこか憎めない。

ゼノン是人差し指をぴんと立てる。いまは亡き厩舎の少年がそういえば軍馬たちにこうやって話しかけていたことを思い出しながら。

「死後、ひとびとが朽ちることなく生き続けてくれと願う祈りの花だ。三日後、国をあげて英霊たちを弔う儀式が執り行われるんだ。その関係で俺はしばらく屋敷をあけるが、お前たちはゆつくりしているといい」

「おうー、あんがとなー！」

ロジャーがヘルメットを押し上げて屈託なく笑う。ゼノンはうなずき、支度が済むや屋敷をあとにした。

——徴兵なんてみんな行ってるし、『負けるはずのない戦いだ』ってみんな言っていたから……

——だから、ぼくは……

大陸東側を制する宗教大国クレルモンフェラン。山脈と森に囲まれた巨大都市は、もとは温暖な気候に恵まれた大規模農業によって栄えた。だが近年、相次ぐ異常気象により主要品目の麦と葡萄は不作の年が続いている。

国が『捧神戦争』をうたい始めたのは、はたして大陸中央を統べていたアルトリアが弱体化してからだったか、それとも大雪に悩まされ始めたころだったのか——正確な時

の流れを識る民はいない。

すべての民を睥睨するかのごとくクレルモンフェラン城は急峻な丘のうえに鎮座している。周りは高い尖塔に囲まれ、霧がかつた空をせまく切り取っていた。今夕の月は大きく白く丸い。城門前の石畳の広場に、黒い棺が所狭しと並んでいる。民衆は喪服姿で、胸元に手をやりうつむいていた。くすんだ茶法衣を着た祭司が分厚い聖書を片手に、手許の鐘をちりんちりと響かせた。

「戦乙女よ、どうか我らの勇敢なる友の新たな旅路に光を灯したまえ！ その御霊、決して朽ちることなく！」

朗々と鎮魂句が述べられていく。祭侍の合図で集められた民衆のなかから代表数人が、棺に柩くちなし子がたむけていく。強い風が吹いた。柩くちなし子の白い花卉が風にあおられ、天に舞いあがる。強力無比とうたわれるクレルモンフェラン海軍の戦没者たちをなぐさめる鐘の音は、城下のあらゆる生活音を吸い込み太く長く響いたようにミリアには感じられた。

(……空っぽの、棺……)

黒いベール越しに、街娘のミリアは棺の群れを眺める。手前から三つ目がラウリイのものだと国葬の準備を手伝っているとき祭侍から聞いた。

(変よ……。だってラウリイは『待っていて』って……。そう、言ってくれたんだから……)

母のすすり泣きが左から聞こえてくる。ミリアの瞳に涙は浮かばなかった。怒り、悲しみ、寂しさ——明確な感情が湧いてくるほど、心に力はない。ただうつろで重苦しい気持ち胸に渦巻いて、考えるのも億劫だった。

——戻ってきたら、結婚しよう。

引つ込み思案なラウリイが、ようやく口にしたプロポーズの言葉。ミリアを安心させようとまつすぐこちらを見る愛しいひとの顔。帰りを待つ間、あれほど思い返した瞬間をなぜかうまく思い出せない。あのときラウリイは笑ったのか、それとも寂しげに微笑んだのか、困ったのだったか……。

国の音楽隊が管楽器を高らかに響かせた。ヴィルノア属領国との戦いで、クレルモンフェラン海軍はすべて船ごと海に沈められている。国葬の壮麗さに反して、棺で眠る戦没者はひとりもない。

戦乙女の蒼銀の長い髪が天空の風につなびく。青い軽鎧、金刺繍の入った白いロングスカートが波打ち、しなやかな肢体を時折ほんの少しだけあらわにする。神妙に目を閉じた戦乙女は、数刻前に受けた第二級神フレイの言葉を反芻していた。

「レナス、あなたにお願いがあるのだけれど……弓兵が足りないの。後方援護に優れた

者を送ってちょうだい」

つんと澄ました第二級神フレイは、水鏡のなかから感情を読ませない硝子の瞳でこちらを見据えてきた。神界戦争は、いまだヴァン神族が有利な状況が続いている。急務にレナスはうなずき、フレイとの通信を終えた。レナスがいま抱えている勇者の魂は大剣使いアリュエ、魔術師ジェラード、弓兵ラウリーの三名である。

「本当に、行ってしまうのか？」

アルトリア人らしい目鼻立ちのくつきりした白皙をくしゃくしゃにして、金髪縦口ールのわがまま王女ジェラードは唇をすぼめた。黙っていれば人形のように愛らしい顔が、いまは仲間との初めての別れをまえにくもっている。

呼び止められたラウリーは、眉をさげて笑った。

「はい。こんな僕でも、ヴァルキリー様のお役に立たないと」

戦には縁遠い温和な笑みだ。ラウリーは金褐色の髪をシヨートボブにしたたれ目の青年で、瞳は茶色く、左目尻のそばに泣きぼくろがある。弓兵としては並で、アリュエのような戦歴もなければ、ジェラードのように優れた才能もない。

そんなラウリーの言葉に、ジェラードは金色の眉を寄せて押し黙った。彼らの足許にいま、大国クレルモンフェランが広がっている。

「ヴァルキリーさま……。でも、本当にいいんですか？　僕なんかのために……」

ラウリイの根底にひそむ願いは、婚約者だったミリアを神界に行くまえに一目見たい、というものだった。戦乙女エイソフエリアがふり返ってきて、凜とした青瞳をラウリイに向けてくる。相変わらず勇者の魂たちとは一線を画すような、ぶつきらぼうな言葉が返ってきた。

「お前が気にすることではない。叶えられない望みであれば、私がここに来ることもない」

「……あ、すみません」

レナスの声に鋭いものはなかったが、ラウリイは思わず謝っていた。

「お前には、やり残していることがある」

続く戦乙女の言葉に、ラウリイの喉がひきつった。

彼女の手引きによって地上に降りたラウリイは、霊体のまま、王都にほど近い森のなかにいるミリアを見つけた。生前最後に、ミリアと結婚しようとして約束した因縁の場所だ。

ミリアは十代後半の少女である。丘の頂にある城に向かって坂道を登っていく王都構造の中腹にラウリイ家とミリア家は並んで居を構えている。少女の艶やかな栗色の髪は腰まで流れ、額から頬の左右に垂れる前髪は肩にかかる。長い横髪を左右黒いリボンでまとめるのが彼女お気に入りの髪型だ。ふんわりした襟つきシャツのうえから青

いひとつなぎのサロペットスカートをはいた姿も生前、ラウリイが見慣れたものだった。

ただし、憔悴しきつたミリアの顔だけは初めて見る。

「ラウリイ。今日ね、お母さまがお見合いの話を持ってきたの」

よく晴れた日だった木漏れ日がミリアの顔に斑点をつける。ミリアは遠くを見やり、明るくも感情を押し込めたくぐもつた声で語った。

「もちろん断つたわ。身分とか家柄とかそんなことばかり延々と私に言つて聞かせるの。馬鹿みたいに……」

ミリアが眉を寄せて吐き捨てる。声に籠もる悲しみ、つらさ、怒り、むなしさ——さまざまな感情がないまぜになった苦しみの言葉だ。ラウリイの口許も震え、こらえきれず顔全体がわななき、言葉にならない息をこぼす。

この森は、ミリアにとって特別の場所だ。

——ラウリイ。ほら、木の葉が揺れる音を聞いてみて

——森全体で鳴っている、まるでさざ波の音みたいでしょ？

——海に、行くんだよね？ 兵士として、戦争に。

——待つてるから……。ここに来ればあなたの居場所を感じられるもの。ううん。居場所だけじゃないわ。ラウリイのことだつて感じられるから。まるで一緒にいるみ

たいに……。

風が吹いた。多くの木々がこすれおだやかで心地よい音の連鎖が森全体に広がっていく。彼女が愛した、さざなみの音だ。

「嫌！ こんな音聞きたくない！」

ミリアが両手で耳をふさいでうずくまる。顔をくしゃくしゃにして首を振るさまは幼子を思わせた。

「止めて！ だれか止めてよお……っ！」

ミリアの悲鳴混じりの嘆願は届かない。ラウリイは霊体のまま、思わず駆けだしていった。震えるミリアの細い肩に触れようとしたそのとき

「空っぽの棺……。あなたが死んだなんて信じられない……」

ぼつりとつぶやかれた言葉がラウリイの胸をえぐる。伸ばしかけた手をラウリイはだらりと垂らすと、震える唇をかみしめて後ずさった。

「ひとの死は、残された者にとってその絆が強ければ強いほど、残された者が弱ければ弱いほど、痛いほどに心を縛り付けるもの」

ラウリイのすぐ傍で戦乙女が、恋人を亡くし涙する少女をそう称した。ラウリイが顔を跳ねあげて、レナスを見る。レナスはいつもの毅然とした顔だった。

「わからないのか？ あの娘の時間が止まっているということが」

「だからと言って……!」

ラウリーの頬が震える。涙をこらえる青年は、かける言葉を見つけられず悲しみに満ちている。『戦争で、死ぬかもしれない』そんなことはわかっていた。それでも愛する少女の願いを叶えたくて、約束した。果たせなかった。

ラウリーの視界がにじんでいく。頬を伝う涙が冷めて肌にはりつく感触が、余計にその無力を思い知らせる。

結局決心がつかず、ラウリーは一度、森を離れることにした。戦乙女たちが去ったあともミリアの嗚咽は続いている。

「大切なひとなのですか?」

ふと森の奥から声を掛けられ、ミリアは息を呑み込んだ。

「だれかいるの?……!」

草むらを踏み分けて、女が現れてくる。喪服の女だ。髪も黒く、白く小さな顔を黒いベールで鼻先まで隠している。ミリアより少し年上か。陰気な女だった。上等な黒皮の手袋をはめた手で、小さな茶器らしきものを握っている。

黒ベールの奥から、女が琥珀色の丸い瞳を細めて言った。

「私はない調香師。『ダリネ』と申せば、少しは通るかしら」

「……………あ……………」

ミリアは思わず後ずさった。国葬が行われるまえから、このクレルモンフェランではひそやかに噂が飛び交っている。長きにわたる戦乱で、身内を失った者のまえに必ず現れるという、救済者の名だ。亡くしたはずの愛しい者をふたたび今世に蘇らせる蘇生士、または死人使いとも言われている。

香炉を握る女の雰囲気は海中の深い闇を思わせた。

ミリアは胸に手を置いたまま動けない。

——ラウリイは、死んでなんか！

反論は唇を震わすだけだった。ダリネが笑う。妖艶で残酷に。

「ああ、でも残念。あなたの恋人は遺骨さえも残っていないのですね」

風が吹いた。森全体が揺れる。ミリアは頭を鈍器で殴られたかに錯覚した。「さざ波みたい」と感じた森全体の木の葉の揺れる音が風に乗って流れていく。

ミリアは指先が白くなるまで拳を握りしめた。葬儀では一度も泣けなかったのに、涙があふれてくる。ダリネが「さあ」と語りかけてきたとき、ふと森の奥から元気な歌声が風に乗ってきた。ミリアの悲しみを優しく包み込む、不思議な歌だ。ラウリイが馬の世話をしながらよく口ずさんでいた鼻歌だった。

「これって……！」

ミリアが顔をあげて辺りを見渡す。一瞬、ダリネが鬱陶しげに鼻筋にしわを刻んだ

が、ミリアを見るなり微笑み「また会いましょう」と残していずこかへと消えていった。
ミリアは指で涙をぬぐう。ダリネが現れた右手方向ではなく、左手へ、立ち上がって
森の奥に向かっていた。